

遊戯王 G X 自分の夢 物語

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

転生しますか？ その声を聞いた時。気の迷いで返事をした自分に、天使が笑いながら返事をした。気が付くと舞台は別世界へ。プレゼントなるものも送られた自分は別人としてその世界を生きる事になる。幸せで、苦しくて、でも良い夢だったと思える。そんな話。

目次

番外編	トラゴさん	1
第1話	初めまして	36
第2話	可愛い人達	67
第3話	予想外れの	90
第4話	束縛されて	112
第5話	慢心はダメ	150
第6話	制裁の門番	179
第7話	決闘の世界	218
第8話	大人な子供	245
第9話	演るやる気	291
第10話	不安と不満	324
第11話	遊びと決闘	356

第12話	ふしぎ大地	408
第13話	呪う貴婦人	433
第14話	最悪な予感	481
第15話	大地の怒り	508
第16話	私のご主人	529
第17話	学園の危機	570
第18話	ナンバー1	600

番外編 トラゴさん

「おっとこれは……」

引き上げる為に掴んだ手がむしろ引き込まれているこの瞬間。自分の身体は容易く闇の中へと飲まれた。

闇のデュエル（インチキ）によって敗北したタイタンさんとかいう不審者を十代君が倒し、捕まって倒れていた自分と明日香さんを起こしてくれてから数十秒後の出来事である。インチキ闇デュエルで怒りを買ったのかは知らないがこの廃寮は曰く付きの場所。謎の儀式やら闇のゲームやらをするには持つてこいの特殊空間なのである。なので闇とかいう謎の物体が居ても不思議じゃないし、現地の闇に飲み込まれるタイタンさんが居るのも不思議じゃ無い。問題は、それに手を伸ばした自分。なんとなく、引き上げられると思った仕方ないじゃないか。助けてって言ってたし。自分を飲み込む為に闇が広がる。すぐ近くに居た十代君達には先に行つてと声をかけたのが最後。視界は黒に覆われた。

飲み込まれて、落ちていく感覚だけがして、気がついた時には両の足が地面を踏みし

めた。

「…………あれ？」

周囲は完全に飲み込まれる前の場所そのまま。違う事と言えば窓や天井に空いた穴の先にも黒しか見えない光ない空間なのに視界が良好という不思議状態なのと、手を掴んだはずの人が居ない事だ。それだけじゃない。

『呼んだのは、お前だな？』

声。人の声だろうか。だがそれを聞いた時に自分が感じたのは確かな恐怖だった。恐ろしい物が後ろに居る……そんな雰囲気。しかし振り返る他無い。その先に居たのは明らかな人外。人の言葉を喋る悪魔。しかもどつかで見た事ある奴だった。呼んだ。とかなんかほざいている悪魔一体。トラゴエディアの名を持つ。精霊とでも言うのかこれは。

「…………人違いでは？」

『おいおいつれないなあ。お前がやったのは知ってるんだよ。儀式に必要な場所。カード。デュエルによる力。全てお前が用意したんだ。デュエルはとんだインチキクソ野郎のつまらんやつだった』

「…………はっ？」

理解するのには時間がかかった。場所。確かにここは儀式なんかするのに持ってこ

いではある。タイタン飲み込んだ闇とか居るしそもそもここで行方不明になった奴居るし謎めいた儀式する為に存在してると言っても過言では無い。デュエルによる力もギリギリ分かる。おそらく十代君とタイタンのデュエルでデュエルエナジーとかいう謎エネルギーが発生したんだそれでオッケーだったんだ。しかしカードは知らん。確かにこの人が持つてなさそうなカードだけでも。えっ？……えっ？

一つだけ思い付いた可能性。ここに来る前気絶させられて記憶無い。自身のカードが入っているポーチを確認するとなんと開いているではないか。中身をすぐさま確認する。一つ一つのデッキ枚数がちゃんとしている中で最後のデッキ。……なんとなく見つけて急いでた故に適当に入れていた悪魔族デッキ。その枚数が一枚足りないのだ。

『返してやるよ。大切に扱え』

化け物からカードが発射され自分の足元に突き刺さる。地面に刺さるカードに恐怖しつつも引き抜くが、傷一つないのはこの世界の謎のカード耐久による物だ。引き抜いたトラゴエディアのカードを見てまあ色々察しはする。

何となく。状況は分かった。保護者すらで飛び出した自分はあつさりとタイタンに捕まり、運ばれてる途中にカードが落ちて、それを偶然ここに居る謎の闇が拾い、近くでデュエルしちゃった事により呼び出す儀式をしたやろ判定になった。と。と？

『あんなデュエルで呼び出したんだ。生け贄は何十人じゃあ済まないぞ?』

補足。ここの精霊とやらは割と誰でも呼べる。現にここの生徒に居るオカルト部とか言う奴らも儀式をしてサイコシヨッカーを呼び出していた。因みにその時サイコシヨッカーが求めたのは3人の生け贄。……人の命3個だ。カードの生け贄とかそんなじゃない。理解した。危険だ。まず間違いない命を狙われている。

「あの、クーリング・オフとか……」

『残念ながら不可能だ』

「呼ぶ気は全く無かった」

『現に呼ばれた。チェンジは不可能だ』

この悪魔意外と喋る。とか考えてる場合じゃない。突然の事過ぎて止まりそうになる脳みそを必死に動かしてどうするべきか模索する。そんな自分を見て悪魔はクスクスと笑った。

『なあ小娘。一つ提案があるんだ』

「待ってホントに……って?」

てつきり某ハゲの如く問答無用で生け贄よこせアタックが来ると思っていた所に、まさかの提案が来た。

悪魔は言う。確かにお前は偶然により俺を呼び寄せたんだろうと。最上級悪魔であ

るトラゴエディアさん？ を呼ぶ奴らは大抵大きな目的の元に動いてる人達だし生け贄なんて腐る程用意されてるらしい。つまり廃寮に来ていた人数程度で呼ぶ様な悪魔じゃ無いって事だそうだ。

『お前は不幸にも……いや、幸運にも俺を呼べてしまった。だが幸運故に、万全な準備も無いまま。そのせいでお前は俺に食われるって事だ』

「幸運のこの字も無いが」

『だが俺は優しい。1人ぼっちの生け贄なんて貰っても仕方が無い。だから帰る事にする』

「幸運の字が光ってる。よつ、トラゴエディアさん。流石。悪魔の中の悪魔！」

『が、仮に意図せずともあんな下衆なデュエルを見せられて気分が最悪だ。これは一口直しに人でも喰らいたい気分になってしまふ』

「なるほど。なるほど？ つまり——」

自分の言葉を遮るように、悪魔は言った。その言葉は人間でも言う言葉だ。そう、この世界では人も悪魔も皆平等らしい。一つの物で繋がっている。

『俺とデュエルしろ。勝った上で、この俺の退屈を紛らわせるデュエルが出来たなら帰ってやる。もし負けたり、退屈させたりするなら——』

おい、デュエルしろよ。そう、デュエルは全てを繋ぐのだ。

「ああ分かったよ！ 分かってますよ！ やるしかないんでしようやるしか！ 直ぐに――」

終わらせる。と思ったが、ここで、今一番聞きたくない声が聞こえてきて。脳に直接、「楽しくないじゃん」と笑う声。その直後、デツキが光る。これが普通なら覚醒的な奴だろうがあの声付きなら話は別だ。言葉を止め、デツキを確認する。

「なっ、なんだとお!!」

驚愕。念の為と言って持ち歩いては居たが怖くて使ってなかった融合より先の召喚法に関わる全てのカードがシミ一つない真っ白に。アリエールですか。いや、まてクソ天使の野郎。何しやがった！ 驚きの白さで戸惑う。他のデツキを見る。バーンデツキ、白い。あのデツキも、このデツキも白い白い白い！

『さあ、用意しな』

どうする。自分が使えるようなデツキは最早、悪魔族デツキしか残されてなかった。これラスボスのカードあるんだぞ？ てかトラゴエディアさんラスボスぞ？ なんてこれ良くてバーンだめなんだよ！

葛藤するも相手がもう待てないと態度で示す。逆らえば……考えたくは無い。心を決める。選択肢は一つ。デツキをセツトしてトラゴエディアさんの方へ。

「……お手柔らかに」

自分はディスクからカードを引き抜く。トラゴエディアさんは空中に出現させたカードを5枚展開した。先攻は向こう。相手のドロー宣言と共にまた、そこに元々あったかのようにカードの姿が浮かび上がる。

『俺のターン。ターンエンドだ』

「……」

『……』

「……」

『聞こえなかったか。ターンエンドだ』

「……………」

『おい!!』

「はっ!?!」

突然キレた声のトラゴエディアさんのお陰で現実に戻れた。ドロー、ターンエンド。その所業電光石火の如し。ドローゴーか。ドローゴーなのか。それともトラゴエディア握ってるのか。どちらにせよ予想外の事で固まってしまう。

「じゃあ、自分のターン。取り敢えず、魔界発現世行きデスガイドを召喚」

暗闇から現れる不気味なデザインのバス。それから降りてきたのは赤い髪の女性モンスター。ニヤツと笑い一礼をする。

デスガイド 攻撃力1000

なんでこんな事にだとかそんな事を考えない様に。目の前のデュエルに入り込む。

「デスガイドはその名の通り、現世行きの案内人。今回お連れ致したのは、忠実にして可愛らしいお客様。魔犬オクトロス！」

デスガイドの指示によってバスから降りてきたのは真つ赤なデザインの魔界に住む犬。尻尾を振って可愛い仕草をしているが悪魔族だ。

魔犬オクトロス 攻撃力800

「更に魔法カード、トランススターン！ 魔犬オクトロスを墓地に送って発動。送ったモンスターと同じ種族、属性でレベルが1つ高いモンスターをデッキから特殊召喚する。よってレベル4、呪いの力操る呪術師、仮面呪術師カースド・ギュラを特殊召喚！」

カースド・ギュラ 攻撃力1500

「墓地に送られた時に魔犬オクトロスはデッキからレベル8悪魔族モンスターを手札に加える。これで、仮面魔獣デス・ガーディウスを手札に！」

このカードは、フィールドのカースド・ギュラを含む2体のモンスターを生け贄に特殊召喚出来る。自分フィールドのモンスター2体を生け贄に、今降臨せよ、第1のモンスター。仮面魔獣・デス・ガーディウス！」

明らかに人ならざる3つの仮面を付けた化け物。だが目の前にいるトラゴエディア

さんのせいかな少しだけ霞んで見えた。

デス・ガーディウス 攻撃力3300

『ほう。最初から攻撃力3000以上のモンスターを呼び出したか』

「その通り。青眼の白龍にも打ち勝つ事が出来る恐ろしい攻撃力。果たして突破出来るか？ バトルフェイズ！ デス・ガーディウスでダイレクトアタック！」

デス・ガーディウス、素早い動きからその鋭く研がれた様な鉤爪でトラゴエディアを引つ掻く！ 3300点！ 見事命中してご満悦なデス・ガーディウスは不気味な声を響かせる。が、それをかき消す笑い声。

『くはっ。かははは……面白い。だがそれだけではつまらん』

「ライフポイント変動無し。って事は」

『その直接攻撃を受ける前に、俺は手札のバトルフェーダーの能力を発動していた。相手の直接攻撃宣言を受けた時にこのカードは特殊召喚され、バトルフェイズは終わる。お前のモンスターが切り裂いたのは只の残像だ』

バトルフェーダー 守備力0

「様子見って感じですね。カードを2枚セットし魔法カード、一時休戦を発動。互いに1枚ずつのカードをドローしますが、次のターン終了時までプレイヤーはダメージを受けなくなります」

デス・ガーディウスだけだと心許な——こほんつ。デス・ガーディウスが万が一突破された時のために安全策。

「自分も様子見つて事で。貴方のターン開始ですよ。盛大に、圧倒的に、楽しくお願いします」

このターンは負けないし、地味に相手のデッキも気になるので軽く挑発すると、乗ったと言わんばかりの笑みを浮かべた。

『それが望みか。なら望み通りにしてやろう！ 俺のターン！ 速攻魔法、帝王の列旋！ このカードの発動により相手モンスターを生贄に出来る』

クロスソウルでは無いのか!? と心の中でツツコミながら。相手は超強力カードを発動。単純なサポートカードにも見えるが、除去としても有効なカード。生贄に耐性を持つているカードなんてほぼ無い。

『俺のモンスターと、お前のデス・ガーディウスを生贄に……現れる！
The ^{ザ・}sup^スre^{プレ}ma^マcy^{シー}! SUN^サ!』

暗いフィールドを照らす、鈍い光。不思議で神秘的な光に思わず見とれてしまうほどだ。

The supremacy SUN 攻撃力3000

その出現と同時に、身体から力が抜ける感覚。一気に襲ってくる気だるさが全てを

奪っていく感覚。それが恐怖だなんて気がついたのは大分後の話で。体力を削られている感覚。ともとれるのか。

『さあ小娘。耐えられるか』

ここで薄々気がついてた事が確信に変わった。これは、闇のゲームとか言う奴だ。そう、ダメーじがお互いの精神を削りなんなら物理で来る何でもありのゲーム。それを始めてしまった事を。そしてそれを楽しんでいる奴を相手にしてるって事を。いや、ぶっちゃけデュエルを楽しんでるだけな気もするが。

「どうでしょうか。けど、その前に第1のモンスター討伐おめでとう。プレゼントです。受け取ってください。デッキから魔法カード、遺言の仮面を発動！ それを貴方のThe supremacy SUNに装備です」

『なにっ!? 俺のターンに通常魔法をデッキから発動だど』

正確には発動ではないと思うけど。ノリノリである。なんだ、トラゴエディアさん良人じゃん。奇妙な形の仮面が相手モンスターに装備される——前に竜巻がそれを阻んで壊した。

『まあ、サイクロンだ』

「まあ、でしょうね」

遺言の仮面はデス・ガーディウスの効果で装備すると装備モンスターのコントロール

を奪う事が出来ます。ダメ元で発動してみました。が案の定失敗で。遺言も残せず墓地へ眠るデス・ガーディウスに済まないと謝りながらデュエルを続ける。

『The supremacy SUNは、只の攻撃力3000。だが分かっているな。このゲームではお前もこいつの攻撃のダメージを受けてもらう』

一応初耳ですけどツツコまない。最初からクライマックス宣言。城之内君がゴットフェニックスを受ける直前までの気持ち。わざわざ宣言された。つまり、あれはきつとダイレクトアタックを食らうとゲーム以前にこつちが終わる可能性を秘めているという事。

「お休み中ですが、攻撃する意味あるんですか」

『それは、食らってからのお楽しみだ。バトル！ The supremacy SUN！ 奴をけちらせ！』

相手モンスターが動く。その時、自分は相手モンスターが放つ力を感じ取った。それだけで、目の前の全てが一気に遅くなって見える。スロー再生された世界にいる様だ。あ、これは死ぬなど身体が考えよりも先に理解してるのか。と気がついた。思考だけは通常よりも早く回転している。走馬灯でも流すための加速だろう。実際何故か昔の事を少し思い出してしまっている。が、そんなものを見ていたら本当に死ぬ。無理矢理でも生き残る為に思考を回す。抗わないと。はやくはやくはやく——自分の動きすら

ゆつくりな世界で1人。セットされたカードを発動する手に早く動けと必死に願う。その手が届くまで、僅か数秒の事がとても長く感じた。

「と、トラップ！ デモンズ・チエーン！」

長い長い数秒がやっと終わり、通常の時間感覚に戻る。発動した罠から放たれた鎖が相手モンスターを縛る。

『ふんっ。攻撃を止めるだけの罠か』

心拍数が上がったまままだ。呼吸が不規則になり落ち着かせるのに咳き込む。体が正常に動くのを確認した後、また相手に向き直る。ダメージを受けないから大丈夫……なんて思考をすることすら出来なかった。一瞬で考えが止まり、掻き乱され、ただ恐怖で止めなきやと動くのに精一杯だ。こんなんじゃないいけない。ビビって不利になるなんて。気を取り直してデュエルを続ける。せめてと声と表情を明るくして。

「ふう。攻撃だけでは無いですよ。効果も封印してます」

軽口を叩きながら笑う。それが出来るのに自分でも驚きだ。やつぱりこの世界に来てからメンタル強くなったか。っていうか切り替えが異様に速くなったのか。

『なら次だ。俺は永続魔法、補給部隊を発動する。カードを1枚伏せてターンを終える』

1枚の伏せカード。やっとターンが終わりこちらのターン。相手のターン中の事を思い出すと、今気になるのは伏せカードでも何でもない。このデュエルの敗北条件だ。

あのフィールドにいるモンスターがこちらに攻撃の意識を向けただけで、自分の身体は走馬灯を流そうとまでした。一度経験した分、次はそうはならないと思いたいが、あれの直接攻撃を食らえば多分ライフが残っていようが終わるだろう。直感だけど、これは間違っていない。勝つには、相手の直接攻撃や大ダメージを完璧に回避しつつ勝利だ。たとえ食らった後に耐えて意識が残ったとしても、その方が辛そうだ。もしくは、自分の神経が逝かれるか。どっちにせよだ。

「さてそれでは。破壊された第1のモンスター。このカードが墓地に眠った時点で、墓地の悪魔族は3体になります。そしてそれが、第2のモンスターの召喚条件を満たす」
『ほう。第2のモンスター……』

「積まれた犠牲が縁を繋ぐ。死した悪魔達の魂3枚を除外し、この場に現れる第2のモンスター。ダーク・ネクロフィアを特殊召喚！」

壊れた女性のマネキンが、頭の壊れた赤ん坊のマネキンを抱えている。不気味に光るその瞳。しかし美しさを感じさせる容姿のモンスターは相手を見て、持ち主と同じく笑みを見せる。

ダーク・ネクロフィア 守備力2800

『先ほどのモンスターより攻撃力も下がっている所か、守備表示か』

「素直にダメージ受けたくありません！ 痛そうですから！」

『……』

本心を告げると黙られるのは現実でもよくある。けど、今のタイミングでのカミングアウトは完璧だった筈なのに無言は酷いのでは無いか。

「そのままターンを終了します。折角出したのに追加のセットカードで守りを固くできないのが残念ですが」

『残念か。本心かは知らんが、ならばこちらは好きにやらせてもらう。お前のターンが終わるその瞬間、罠カード。暗黒の謀略！ 互いのプレイヤーは手札を2枚捨てて2枚カードをドローする。が、お前が手札を1枚捨てれば発動を無効に出来るが、どうする』
「謀略ですか。なかなか良いカードを使いますね。当然、入れ替えましょう。自分も貴方も入れ替えたい手札のようです。お互いに得ですね」

お互いに手札を入れ替えた。このタイミングの入れ替えだ。きつとまだカード効果は続くだろう。予想通りフィールドに変化が起こる。The supremacy
SUNが苦しみだした。それは、下から現れた自らの身体を喰らう獣のせいだ。

『お前のエンドフェイズ。墓地に存在するデーモン・イーターの効果を発動する。俺のフィールドに居るモンスター体を破壊し、墓地のデーモン・イーターをフィールドに特殊召喚する効果だ』

その小さな小動物の様な姿からは想像もできないほどの牙を向き、自分より遥かに強

い存在を砕き、可愛らしく体を震わせフィールドに降りた。

デーモン・イーター 攻撃力1500

「折角の攻撃力3000を捨てるんですか？」

『くくつ、本気で言っている訳ではあるまい？』

「ふふつ。そうですね。知ってますよ」

『俺のモンスターが破壊されたこの瞬間、補給部隊の効果が発動する。カードを1枚ドロード。そして、俺のターン。沈んだ太陽が再び昇る。フィールドを照らせ、The supremacy SUN!』

破壊された筈のモンスターが、さも当然の様にフィールドに蘇る。これが、The supremacy SUNの特殊召喚なのは知っている。あのカードは、破壊しても無限に復活するカードだ。

『このカードはフィールドで破壊された時、次のスタンバイフェイズに手札を1枚コストに復活出来る』

「おつ、そつちですか……」

なんか知ってる側だった。少し驚く。

『さあ、バトルだ。The supremacy SUNよ、あのモンスターを破壊しろ』

相手モンスターから溢れた光。それに触れたダーク・ネクロフィアは蒸発して消える水の様に、すぐさま破壊された。その時に衝撃が来るかと身構えたが一気に身体が重くなる感覚以外の異常は無いのでセーフ。ならば、問題は次だ。

『デーモン・イーターでダイレクトアタック！』

そう、モンスターの直接攻撃だ。どんなモンスターにせよ痛いのは確実だろう。デーモン・イーターが鋭い爪でこちらに迫り、引つ搔かれる。そのまま、自然に攻撃を受けた。刃物で刺されたような感覚が受けた肩から、そのまま腹部まで。服もそれに沿って裂ける。僅か数秒後には。

「っ!!」

驚きと痛みで声が出て、思わず膝をついた。そのショックから立ち直った後、確認したのは攻撃された場所だ。どうやら肌にまで傷は出来ていない。が、服は結構裂けている。不思議だと笑いたい。けど痛みで苦笑いにしかない。

自分 LP2500

完璧に切れてはいない。けどこの損傷は女生徒なら隠そうとするぐらいだろう。サービスシーンの為に肌は裂けなかったのか。と下らない事を考える事で闇のゲームを続ける気力を持ち続ける。

『この程度のダメージで音を上げてはまだまだだな、小娘』

「につ、人間様は、これぐらい、柔らかいんです——加減ぐらいしてくださいよ」

『随分辛そうだが、それは無理な話だ。バトルはこれで終わりだ。が、その第2のモンスターとやらは破壊された時に効果があるんだろう？ 今はまだ見えないだけで、俺のフィールドに魂がウロチョロとしているからな』

魂がウロチョロとしていたのか。こっちは見えないから初めて知った。確かに、ダーク・ネクロフィアは破壊されて初めて効果が発動できるモンスター。ターンエンドと同時に相手モンスターの装備カードとなり、装備モンスターをコチラのコントロールに移すことの出来る効果。隠すつもりも無いが、気が付かれていますので、説明せずに頷くだけでそのまま黙る。

『なら。これだ。フィールド魔法、オレイカルコスの結果！』

「うえっ!？」

フィールドの中心から広がる円。それは全体を囲み、その中心に合わせて不思議な六芒星の印が描かれる。それだけではない。その円が広がると同時に相手フィールドのモンスターが消滅した。SUNが消えた事によりフィールドの光と、こちらが受けるプレッシャーが消える。

『このカードは発動した時、自分フィールドの特殊召喚されたモンスターを破壊しなければならぬ』

「簡単に自分の攻撃力3000を破壊するのを見ると、少し怖いですね」

自分のモンスターを破壊しただけ。なら安心なんですがあれ次のターンも復活しますからね。ちよつと面白いと思ったりしましたが。

でもSUNの復活はシンドイ。破壊以外で3000処理はやっぱデッキによっては相当苦戦します。何より問題はリアルダメージを一番与えてくるカードって所。あれの攻撃だけでこっちはプレッシャーが倍々でかけられて辛い。居るだけで削られるのに。

『さあ、俺のモンスターが破壊された。補給部隊の効果でカードを1枚ドロースせてもらう。ターンエンドだ』

「……ダーク・ネクロフィアの効果は、モンスターが相手に存在しない為不発」

第2の切り札が悲しそうな雰囲気を出しながら墓地で泣いてる気がしてならない。済まない。次頑張る。なんならワンチャンこのデュエルで2回目の召喚するから。本当に。

「自分のターン」

『沈んだ太陽が昇る』

再び光と共に身体の力を持つていかれる感覚。これが一番辛い。これに慣れる前にはアイツは消えて、また復活するのだ。身体を鍛えておけば大丈夫なのか。なら鍛え

る。本当に鍛える。

「けど、利用はしますよ。特殊召喚に合わせて増殖するGを手札から捨てて発動。The supremacy SUNの特殊召喚でカードを1枚ドロ―！ ……モンスターをセットして終了」

『前のターンと変わらん』

「変えたいです。助けて下さい」

『ふつ、ならば助けてやろう！ デモン・イーターよ、The supremacy SUNを喰らい再び姿を見せろ！』

再び出てきた獣。牙とか爪とか見せなければ十分に愛嬌ある姿の筈なのに、悪魔の使いにしか見えない。いや、悪魔喰らいなんだけど悪魔の方が死なないだけか。

『俺は補給部隊の効果でドロ―だ。お前もドロ―出来る。そうだろう』

「ええ、増殖するGの効果でドロ―します」

『くくつ。そうではなくてはな。一方的なのはつまらん。俺のターン！ The supremacy SUNが3度目の復活を遂げる。そして、言い忘れていたがこのフィールド魔法は俺の全てのモンスターの攻撃力を500ポイントアップさせる！』

The supremacy SUN 攻撃力3500

デモン・イーター 攻撃力2500

オレイカルコスの全体強化は当然強力だ。種類問わずあらゆるモンスターの強化。その代わりのデメリットも相手にとつては大したデメリットにならない所かデツキの回転を早めている現状がある。まあSUNは手札コストを要求する為そこまで回転が速いだけで増えてないのが救いだけど。

『そして、お前が増やしたなら俺も増やさないとなあ。墓地のキラ・スネークは俺のスタンバイフェイズに手札に戻る。まあ、これだけでは終わらんさ。2枚目の補給部隊を発動する』

「なん……だとお!？」

その驚きは、羨ましさからもある。割るカードを引いてない自分もあれだが補給部隊が2枚フィールドに残っている状況というのが極めて珍しいものだからだ。流石に2枚あったら無視は出来ない。あのデツキはSUNを爆破するカードが多く入ってる。早くあれを破壊しないと確実に負ける！

『俺は手札から、昇霊術師ジョウゲンを召喚!』

「ジョウゲン!?! ジョウゲンなんで!!」

追加で出てきたのは、予想外。特殊召喚絶対ダメモンスター。ついでに手札をランダムに捨てる事で特殊召喚されたモンスター全てを破壊する鬼畜モンスターでもある。

『オレイカルコスの効果で攻撃力上昇!』

ジョウゲン 攻撃力700

『バトルだ！ デーモン・イーターでセットモンスターを攻撃！』

「くつ、本当にそれは……」

『そして次はダイレクトアタックだ。バトルフェーダー等では防げない攻撃。前のター
ンから伏せられていたそのカードは、俺のモンスターをどうにも出来ないだろう！』

デーモン・イーターの牙がセットモンスターに突き刺さる。それを見て高笑いしながら次のモンスター、The supremacy SUNのダイレクトアタックを宣言
——しようとしたが。

『……んっ？ どうした、デーモン・イーター。早く碎け』

「ふふっ。碎けないんですよ」

『なに？』

「攻撃されたカードは、方界^{ほうかい}胤^{いん}ヴィジャム！」

牙を突き立てられた黒い球体は、その牙が離れた後、元通りに再生する。その中心に、
1つ瞳が開く。

『ちっ……まさか、戦闘で破壊されないモンスターか』

「正解。本当なら効果があるのですが。それが見たいならジョウゲンで攻撃してみると
良いですよ？」

ヴィジャム 守備力0

『ふつ。つまりするとお前が有利になるんだろう。厄介そうなモンスターだ。バトルを終える。カードを伏せ、ジョウゲンの効果を発動する。俺の手札は1枚のみ。よって手札のキラ・スネークは墓地に行く。効果発動。特殊召喚されたデーモン・イーターと The supremacy SUNは破壊される』

攻撃力700の魔法で3500と2000が破壊されるのはおかしいものだが。そこまでしても新しい手札が欲しいのかとも思ってしまう。

『補給部隊2枚の効果で俺は2枚ドロー。ここで、セットしてあるカード。ワンダー・ワンドだ。これをジョウゲンに装備。ワンダー・ワンドの効果で、装備モンスターとこのカードを墓地に送り俺はカードを2枚ドローする。カードを新たに1枚セット。ターンエンドだ』

「はは。なるほど！ そんな使い方ですか。でも維持した方が強そうですが」

『確かにそうだな。この結界もある。これがある間、お前は俺のフィールドの一番攻撃力の低いモンスターには攻撃出来ないからな。だが、それではつまらんだろう』

「つまらんだろうって。まあ、確かに。あくまでも、The supremacy SUNをサポートするカード。ですか」

『お前が望むなら、そういう戦いをしてやってもいいがな。だが今のお前にはこのカー

ドよりも、The supremacy SUNの方が効くらしいからな』

「ええ、リアルダメージ蓄積ですよ本当に」

あのカードあるとわざわざ破壊した The supremacy SUNが復活できませんし、あのループは補給部隊がある今、墓地と手札を潤すカードですからね。それに、墓地にいるからと言って安心も出来ない。蘇生系カードがあれば任意のタイミングで特殊召喚を無効に出来る。厄介極まりない。ターンの終わりに、キラ・スネークの除外効果が適応され、こちらの番。ダーク・ネクロフィア辺りから防戦一方。攻めないともっと不味い状況になる。

「自分の、ターン！」

スタンバイフェイズ。もう若干慣れ始めたSUNの復活。実は何故か足に来ていて、気合入れないと倒れてしまいそうなので出来れば復活しないで頂きたい。こういう時に限って奈落が入っていないデッキなのも残念。今破壊すると2枚ドローされてしまうけど。

『どうした、早く動いて見せろ。ずっと守りだと飽きる』

墓地のジョウゲン、フィールドのセットカードとThe supremacy SUN。手札誘発の可能性も大いにある。動けない。解決するカードが無いわけじゃない。引いてないだけだ。ヴィジャムでどこまで耐えられるかも分からない。

「カードを、2枚伏せて、終了です」

攻めない。自分のターン終了宣言に、つまらなそうにトラゴエディアさんはこれまでかなんて口にしながら、デーモン・イーターの効果を使用しSUNは破壊。手札を増やす。

『俺のターン。今この瞬間、罨を発動する。トラップスタンだ。これでお前は罨カードを使えない』

無効化される罨。セットされた3枚のカードもこのターンは使えない。そして、破壊された太陽が何度目かの復活。

『まあ。暇つぶし程度にはなったか。このデュエル。太陽が何度昇ったか覚えてるか。昇る事に日が終わり、始まったに等しい。その長い長い時間をかけて見てやったが。どうやらここまでの様だな』

そう言つて、相手はモンスターを召喚する。ランサー・デーモン。自分のモンスター1体に貫通能力を与えるモンスター。

ランサー・デーモン 攻撃力2100

『The supremacy SUN。方界胤ヴィジャムに攻撃……SOLAR FLARE!』

再び、自分の時間の流れが遅くなる感覚。

『終わったか』

光が自分へ降り注ぐ。だが光があれば、当然。闇がある。このフィールドは別の力によつて侵食された。その闇は時には渦を巻き、霧のように広がり、光を防ぐ。

『っ、なんだ』

その闇は、生きているかのように。静まり返る廃寮で、深く深く深く。高まる闇に瞳が集まる。部屋を中心、集まる物がソレを形作つた。赤い長髪。黒い身体に黒い翼。だが右の翼だけが真つ白な羽で出来ている異形の人形モンスター。その顔に瞳は無い。だが左胸と右肩の辺りに大きな、大きな瞳。その剥き出しの目はじろつと相手を見つめる。

『……ちつ、なんだと。まさか、俺の攻撃がコイツを』

「っははは!! そうですよ……この瞬間を待ってました。第3のモンスター。真の切り札は取っておくべきですよ。このモンスターは悪魔族モンスターが攻撃された時に、手札とフィールドの悪魔族モンスターを墓地に送る事で特殊召喚出来る。ダークネス・ネオスファイア!」

出した瞬間、身体が軽くなるのを感じた。最高にハイって奴なのか。何かにあてられてしまったのか。危険なカード。こいつが使えない理由は1つ——今デュエルしている相手と同じ立場のカードだからだ。

ダークネス・ネオスファイア 守備力4000

当然これは自分の世界の効果を持つカード。これに限って言えば、その方が使いやすい。

『攻撃力と守備力が4000か。だが――』

「おおっと。先に言っておきますよ。ダークネス・ネオスファイアは戦闘では破壊されない。効果では破壊されますが」

『なっ。そんなデカイ癖に戦闘破壊耐性だ』

それはこちらが一番言いたい。

『つい先程までの、弱々しい動きは演技だったというわけか。安易な攻撃を誘う罠だった』

「さあ。そんな事する度胸があつた記憶は無いですし、そもそも安易な攻撃でもありませんでした。むしろ、貫通効果で数枚の手札誘発の発動機会を消して倒そうとするその一手は実に素晴らしかった。けど、運が悪かった。ここからはようやく自分の番なんですよ。もうトラゴエディアさんは十分暴れたでしょう」

『舐めるなよ小娘！ たかが1体。デカイだけのモンスターが出た所で貴様の不利には変わりない！ お前がカードを1枚ドローするのと同じ速さで、俺はカードを最大5枚もドロー出来る』

「へえ。でも知ってました。このゲームって手札の数で勝負するゲームじゃあ無いんですよ」

『……何が言いたい』

「不利が変わらない。とは言えませんか？」

自分の言葉に、しかめ面をしながら。カードを2枚セットされターンエンド宣言を頂いた。こちらのターン。ドローしてからが本番だ。

「自分のターン！ スタンバイフェイズに、罠カード発動！ 閼次元の解放！ 自分の除外されている閼属性モンスター1体を特殊召喚。魔犬オクトロス！」

魔界の忠犬が次元の裂け目から。

「更にトラップ！ リビングデットの呼び声！ これにより墓地からモンスターを呼び出す。今度は活躍させて上げましょう。ダーク・ネクロフィア！」

狂気の愛好家が墓場から蘇った。

『何をするつもりかは知らんが。纏めて消え去るがいい！ 罠、激流葬だ！』

その展開に危険を感じたのか、罠カード。全体除去なのは想定外だが。

「なら、3枚目！ デイメンション・ガーディアン！ このカードに守られたモンスターは戦闘効果で破壊されない。ダークネス・ネオスファイアを守る」

フィールドの全てのモンスターを破壊する罠。守られたダークネス・ネオスファイア以

外は全滅した。けど。

「破壊されたモンスターの効果。オクトロスはデツキからレベル8悪魔を。デス・ガーディウスを手札に」

『俺は、補給部隊でカードを2枚ドロウする！』

けどまだ。まだ足りない。

「魔法カード、闇の誘惑！ このカードの効果でカードを2枚ドロウして、手札の闇属性モンスター1枚をゲームから除外する！」

まだ楽しめる。そんなカードが欲しいだろう。と闇からの誘惑には逆らえず。デツキからカードを2枚引く。

「除外するのはデス・ガーディウス！ ……まあ、一旦バトルと行きましょうか。ダークネス・ネオスフィアを攻撃表示に。その力。その身に受けて行ってくださいよ！」

『通すわけないだろう!! 舐めるなよ!! 俺は、罠カード。レインボー・ライフを発動する。貴様の力は頂くぞ』

ネオスフィアの攻撃を吸収し、自らのライフを回復させる。レインボー・ライフが発動しているターンはダメージが回復になる。

トラゴエディア LP8000

まさかの回復カードに驚きを隠せない。ライフの差が酷いことになっている。

『面白い、面白いぞ。そんなものを隠し持つて居たとはな』

「おやおや……お味は如何でした」

『虫けらにしては、上等な味だ』

「お褒めいただき光栄です。では、バトル終了。本当なら、このモンスターは効果があるんですが……激流葬のせいで動かせませんので。墓地の魔法カード、シャッフル・リボーンの効果！ このカードを除外し、フィールドのカードをデッキに戻した後にカードを1枚ドロロー出来ます。まあ、なんとかなる。と思ってる。カードを3枚セット！ ターンエンド」

『俺のターン！ 甦れ！ The supremacy SUN』

さんさん苦勞させられたモンスターだが、それも今は。ダークネス・ネオスファイアを超えられないモンスター。

『あそこからここまで、良くやった小娘。それがお前の切り札か。死なないならば、その上からお前を葬つてやろう！ 魔法カード、フォース！』

発動された魔法。それにより力を奪われたダークネス・ネオスファイア。その力はSUNに。

『お前のモンスターの攻撃力を半分にし、その数値を俺のThe supremacy SUNに加える』

ダークネス・ネオスファイア 攻撃力2000

The supremacy SUN 攻撃力5500

「フォース。シンプルですね。良いカードです」

『ふんっ。これを今から受けるというのに呑気なやつだ。さあ、覚悟は良いか』

「ならば、足掻こうとも！ 罨、デイメンション・スフィックス！ このカードに選ばれたモンスターが、自分より攻撃力の高い相手に攻撃されると、そのバトル中に1度、攻撃力の差分相手にダメージを与えます」

『最後の足掻きがそれか？ それだけでは無いだろう。この攻撃も凄いでみろ、バトルだ！ The supremacy SUNの攻撃、ダークネス・ソーラー・フレア！』
ダークネス・ネオスファイアに届く光。その一部をスフィックスが吸収し、跳ね返す準備をしながら。

「凄いでみろ。ですか。ええ、凄ききって見せましょう。そういうのは、得意ですよ。けど、その攻撃は警戒するべきでしたね」

体に満ち溢れる快感。これがあるから、このゲームは止められない。

「デイメンション・スフィックスの効果発動に合わせて罨、スピリット・バリア！ このカードの効果で、自分のモンスターが存在する限り、自分が受けるダメージは0！」

『なっ。俺だけダメージを——』

「それだけなら、他でもいいでしょう。最後の罠。デイメンション・ミラージュ！ この効果で選ぶ対象は、貴方のThe supremacy SUN！ これで、準備は完了です。さあ、今この瞬間、デイメンション・スフィックスが貴方の力を跳ね返す。その強大な力。恐ろしさは、貴方が一番知っているでしょう？」

自分の力が、自分自身に降りかかるその瞬間。どういう気分なのだろうか。The supremacy SUNの攻撃を自ら受けたトラゴエディアは初めて、痛みで苦しむ声を上げる。

『ぐおおっ……お、おのれえ!!』

トラゴエディア LP4500

トラゴエディアの怒り。それに呼応して強まるSUNの攻撃も、バリアによってこちらに届く事は無い。その攻撃で感じる恐怖が薄れる訳では無い。先程よりも強く強くなっている思いと攻撃に、震え上がるけれど、喜びの震えの方が大きい。

『流石におイタが過ぎたな小娘。この俺を——』

「過ぎたならばそれ以上は無いという事！ ではとことんやりましょう。攻撃が終了しても、自分のダークネス・ネオスフィアは破壊されていない。この時、デイメンション・ミラージュは自分墓地のモンスター1枚を除外し効果を発動できる。オクトロスを除外して、発動！」

攻撃を終えたSUNが、再び動き出す。持ち主の意思とは反する動きにどういふ事だと声を荒らげる。

「デイメンション・ミラージュは、対象モンスターが攻撃したモンスターを破壊できなかったダメージステップ終了時に効果を発動できる。それは、相手のモンスターの攻撃回数を1回増やし、続けて攻撃を強制する」

『強制……まさか！』

「そのまさか」

SUNの攻撃はスフィックスに蓄えられ、こちらに来る攻撃はバリアが弾く。

「お強い人へ。自分からの更なる力のプレゼント。こちらが泣くまで殴るのを続けてもらいましょうか」

スフィックスからまた、力が放たれる。

『ぐおおおお!!』

トラゴエディア LP1000

「墓地のダーク・ネクロフィアを除外して、3回目！」

きつとこうなる事は予想できなかったのだろう。けれど、そういう事は大抵の場合。気がついた時にはもう遅いのだ。3度放たれる力と共に。相手ライフポイントは全ては削り切られた。

デュエルが終わり、奥の方で意識を失ったのか動かないトラゴエディアさんを見ながら。やりきった。次はこうはならないだろう。けど。このコンボが決まった時の達成感というのは実に美味しいもので。

「や、やった……」

それ以外にも。倒れそうになる身体に力を入れながら、デュエルに勝てた事、恐怖からの解放。様々な思いから来る喜び。それを味わう。楽しかった。なんて思える自分がどうかしてる。帰ったら笑い話にでもなるだろうか。とか思いながら帰ろうと歩き出す。

「これで、帰っ——つと？ えつと、あれ？」

けど、踏み出した足から、踏ん張る事が出来ずに膝をついてしまう。

「おかしいなあ……つとと?」

立ち上がろうと力を入れたはずの身体は糸の切れた操り人形のように崩れ、地面に倒れてしまった。突然の事だ。つい数秒前までは自由に動かしていたのに。不思議だ。心は満たされて元気なのに。動かない。本気で動かそうと思っても動かないから怖い。

「……あー。あれ。なんで力が入らんのだ」

唯一動かせるのは目だけ。それも今、自然にまぶたが落ちてきている。

「ちよ、ちよは。まずいつ——つて、早く……」

視界が黒になる前の一瞬、向こう側で傷を受けて入るが平気そうにこちらに近づいてくる化け物の姿。けど、どれだけ頑張っても、いや。頑張るなんて気持ち起きる前に、自分の意識はコンセントを抜かれた機械の如く一瞬で、落ちた。

第1話 初めまして

「で、次は誰を召喚するの？」

足元すらぼやけた灰色に覆われた四角の箱の様な部屋。部屋の中央に置かれたテーブル以外何も無い。テーブルの上に置かれている1つの物。それに向けて僕は質問した。

「……はいはい」

僕は何も返ってこない空間で一人で返事をする。その瞬間にこの空間は消え去って、僕は元居た場所に返された。返された時に丁度通りかかった人物は僕の顔を見てフレンドリーに話しかけてくる。

「ようござ苦労さん。次の仕事決まった？」

「まあね。僕は優秀だから多めに呼ばれて困っちゃう」

「はっ、全員召喚した先から逃げられてる奴が何言ってるんだ」

「呼ぶまでが仕事だし。逃げられるのは仕方ないよね」

「はいはい。言い訳乙。次は逃げられない様なやつ選べよ。ってかいっぱい居るだろ。なんなら……っておい！ 話まだだろ！」

「またね！」

そう僕の事は召喚だ。僕は天使。神の使い。そう、神。多くの人を呼び寄せて、何がしたいんだか無数に広がる世界を作った神の使い。神が欲しがる身体を探して繋げる役目。

「めんどくさいね。さてと、誰にしようか」

呑気に街を歩く人物を、映し出された映像の中から見つける。言われた人材なのを確認してから、映像に向かって僕はまた質問した。

「転生しますか？」

返事があればコイツでいいや。



人が変わるにはきっかけが必要だ。大きな変化に対応して変わるには、大きなきっかけが必要なのだ。

晴天。太陽が眩しい。何もない日常。普通。平和。何もなくて良い。こんな日の散歩は気分がいい。上を見上げれば遮る雲さえない空から見える太陽の光で目を閉じて

しまう。

「つ……すごい晴れて、て？」

そんな時に異変が。そう、頭がおかしくなった訳では無いが。光に目を奪われたその時。その瞬間に、心というか、脳内に声が響くのだ。

「転生しますか？」と。

だがここで考える。こんないい日だ、くだらない事を真面目に考えるのも悪くない。ええ、悪くないですとも。考えた結論から言えば。

「うーん……出来るなら、してみたいかも」

なんて、独り言を呟く。してみたいだろう。そりやみたいでしょう。その独り言にナニカが笑った気がした。

「今、誰か。つてか何か空に？」

運命というものは面白いもので、帰って来ないはずのものが帰ってくる時がある。青春やあの時の煌めき、お母さんなどはどう頑張っても無理だが。いや、これらと同じレベル。ただの幻聴に答えが返って来た。

「わかりました」と。

返事が聞こえた。はつきりと。おお神様。どういう事だ。まるで意味がわからんぞ。

「は？」

慣れた目が上空の異物を捉えた。不自然な音を出しながら、平和な空を汚す物。こちらから見たら墜落しているヘリともいう。問題は、それが一直線にここに来て居るという事。物凄く速くて、きつと最後は一言叫ぶのが精一杯という事。目の前にはヘリが墜落してきていた。ヘリかあ……トラックが近くに居なかったのかな？　っていうか、えっ？　いや、でもなにか違うくない？

最後に聞こえたのは、聞いたことのない爆発の音。意識はここで、途絶えた。



「という夢を見たんだ」

なんて一人呟いては見るも現実是非常である。いや、非現実的なアレだけでも起きている今は凄い現実感だからね。夢じゃなかったからね。ある日、街の中、ヘリさんが、こつち来た！　で爆殺された後。天使を名乗る奴から真つ白空間で説明を受け、今度目が覚めると、説明なしで街のど真ん中。問題はこれがいつてらつしやい頑張つて！　色々用意はしたよ！　では無く、十中八九その天使の嫌がらせで説明無しに放り出された事だが……それは置いておこう。

景色も住む世界も変わった。らしい。実感ないが。他に変わった所は無いかと確認

すると、まず違和感があつたのが体だ。妙に軽い感じがして自身に注目し始めてからすぐ気がついた。なんだろうか、少しスマートになった気がする。声も幾らか高い気も。と言う事は……歳が戻った？ 目線も低くなってるし、今はどう考えても子供の身長だ。

「んんっ。あー、あー……よし。分かんないけど大人しそうな声してそうだから、基本的には、この話し方で行ったほうが良さそう。ですね。ですますね。……です」

自身の声の感じから話し方を変える事にした。まあ、丁寧な話し方というのは大切なのです。ファンサービスはもつとーですから。的な感じで。何があるかも分からないし。という事で、まあ色々あつて、訳あつて転生者になりました。限りなく自然なテンションを装った自然な歩き方で、その辺りを散策して状況を確認。遊戯王のニュースが流れてたりするのでやっぱり転生したと実感。遊戯王。カードゲームの一種。それで命のやり取りとかする物騒な世界だけど、この世界でなにか起こるのかは知っている。アニメという形で見ているから。つまり相当チートって感じで来たわけだ。チート転生ですよ噂の。噂と違うのは神様側のおもちやとして呼ばれた気がしてならないってだけ。そうほんともうそれだけ。

でもやっぱり嬉しいし？ 調子に乗ってスキップしたり？ 腕いつもより振ったり？ ぜんぜんテンション高くないけど実感するにつれて最っ高にハイって奴だ！

「ママ、あの人……」

「見ちゃだめよ」

まさか本当だとはこの目で確認するまで信じられ無かったです。ここまで確認したら、夢っていう可能性すら無い。喜びもそこそこに、ふと考えが浮かぶ。つまりもう2度と、今までの日常に戻れない訳で……と考え始めると色々と怖くて動けなくなりそうなを感じた。素直に好奇心でその気持ちを押しつぶす。

ただ1度浮かんだものは中々消えない。消す為にもなにか、無いかななんて考えていると、ズボンの右ポケットから着信音。馬鹿な、軽すぎる。何が入ってるんだ？ とポケットに手をつ込んで中にあるそれを取りだす。それは遊戯王のアニメで見たPDA（古いスマホ的なやつ、多分そんなもん）が入っていた。

「軽い。軽くない？」

見た目からは想像出来ない軽さ。驚きはそれだけではなく、連絡相手を映し出す画面に映っていたのはあの天使。何故電話？ お前なんで電話？ ていうか普通に電話として使える感じだけど、これってそんな機能ついてたわけ？ 入学前に持ってた良いの？

疑問も尽きぬが。やる事も無いので電話に出る。出て見れば酷い事を聞いた。ざっくり纏めるところである。

無事いく？ よかったねえ。所でこんな所で油売って良いのかな受験番号111番君？ 急がないともう試験時間ぎりぎりだぞ（笑）

殺意的なのが心から構築されたのは言うまでもない。声だけでも伝わる仮面のような、顔文字の様なペラッペラな笑いと、こつちが苦しんでるのを見て楽しんでいるのがダイレクトに、声だけで馬鹿にした表情まで伝えるその素晴らしさに「お前自身にダイレクトアタック！」したい気分である。

「クソが……はあ。もういいや。んー。良いですよもう。うん。こんな感じ……です。はい。とりあえず移動しよう。ましよう？ 移動しましょう。移動しましょうか。よしよし」

あれの記憶に蓋をして、自分の言葉を丁寧丁寧丁寧に確認し、大きく背伸びをした後、張り切って試験会場に移動した。

大勢の人がいる観客席。完全室内の大きなドーム中心に広がるのは、デュエリングと呼ばれるデュエル専用のスペース。らしい。1つのデュエリング内でサッカーは行き過ぎだとしてもフットサルが出来るぐらいには広い。デュエルってこんなにスペース居るんだね。

「デュエルの為だけにあるドーム……うーん。新鮮」

ここに来るまでに、場所を調べる等々から周囲の人物に話しかけまくった。言葉遣い

の変更も功を奏してか初めましての人達全員親切に場所を教えてくれて助かった。それにしてはやけに親切だった気もするが、皆優しい人だったのだろう。そして、目的地に着いたのだが……そう、会場についたのが十代と同じ時間。つまりギリギリである。受付の人に、「うわっ」って声に出したみたいなの、リアルな反応された。

十代。遊城十代。GXの主人公である。アニメでしか見てない顔を現実として見ると違和感を覚えるかと思っていたが。そんな事は無かった。多分こちら辺はそういう風にしてくれたんだろうな神様が。してくれないと酷い事になりそうだからね。地味だが有難い。……まあ、自分は神様とやらに会ってないけど。十代とは顔を合わせただけで、声をかけずにそのまま会場に入った。いざ声かけようと思ったけど少し恥ずかしくて止めたとかではないんだよ。ただ緊張しただけなんですよ。でもまあ、せっかく来たんならお近づきになるのは当然狙うべき事。まあ後からしれっと話しかけられればいいなとか思ったりしますが。

「……おっと、心の中で葛藤している場合ではない。さてと」

心の中での口調も徐々に丁寧に侵食されているのを感じつつ入った会場内部。周囲を見渡してベストポジション発見し移動。後から会うであろうメンバーが固まっている辺りに座り、今から始まるであろう十代の試合を観戦することになった。

試験を行う場所を見ると、めだぐつ金髪オカッパの試験官。相変わらずだ。最初から

濃い。対する十代君も現れ、オカッパ試験官が声を張り上げた。

「ボンジョオールノッ！」

「あつ……遊城 十代です！」

ボンジョールノッて挨拶はどうなのか。普通に挨拶する十代のスルースキル高いかも。

「シニョーオル十代。私（わたくし）はクロノス・デ・メデイチ。学園での実技担当最高責任者やってルノデース」

「光荣だな。実技の責任者が対戦してくれるなんて。きつと俺、それだけ期待されてるってことかなへへへっ」

嬉しそうにする十代君すごい前向き！ 当のクロノスさんは凄い呆れた顔してるけどね。心の中で（呆れて物も言えませーん）とか言ってるんだけどね！ 凄い鮮明に心の声聞こえたけどね！

「クロノス教諭が直々なんて」

「あの十代って、相当大物なのか？」

自分の丁度前にいる3人の内、左右の2人がそう話しているのが聞こえる。真ん中の黙ってるトサカみたいな頭の人は実は焦ってるんですが。（そんな筈は無い……！）と心の中で葛藤していた筈だ。

「デュエルコートツ。オ〜ンツ！」

トサカの心の声を思い出すのもすぐ辞めて、再び注目を十代達に戻す。独特な掛け声と、鼻歌と共にクロノスさんのコートに装備されているデュエルディスクが起動し、5枚の手札がディスクから飛び出た。

デュエルコートといって、そのまんまデュエルディスクと洋服のコートを合体させた商品。意味は分らないですが、もし学園に入って成績優秀なら貰えるらしいです。アニメで付けている人はあのクロノスさん以外いません。つまりそんな感じの時代を先取りしたファッショナブルなコートです。カッコいい。付けるのは嫌ですけど。十代君にも凄くカッコ良く映ったらしく、楽しそうなおもちやを見た様な様子です。

「うわぁー。すっげえカッコいいい。せんせ。そのコートって、俺も買えるの?」

「成績の優秀な生徒なら、皆持つてルーノ（貴方のようなドロップアウトボーイには、関係ないーノデスケドネ。永久に）」

「よぉーし。頑張るぞー!!」

デュエルコートで気合も十分な十代。クロノスさんは実は怒っていて、案外観客席からでも分かるぐらいにはイライラが伝わりますね。そんな息も揃わない2人が一緒に、同じ掛け声を叫んだ。

「デュエル!!」

「デュエル!!」

互いのデュエル! の掛け声。そう、これがデュエル開始の合図だったのだ。

そして終わった。十代君の決めポーズも決まって、デュエルに幕がとじた。独り言だと分かっているけど、結構な大きな声で言葉が漏れる。

「かつこいい……ソリッドヴィジョンのデュエル。迫力が違う。まさにモンスター同士
のぶつかり合い。ですか!」

やっぱり生で見るソリッドヴィジョンを使ったデュエルは新鮮で、とても見応えのある物でした。いやゝ。良いね。遊戯王だね! これから自分もデュエルか。ソリッドヴィジョンが見れるのかと思うとテンションが今から上がる。

「試験番号……番」

なんて、考えていると。男の声が会場に響く。思ったより直ぐに呼ばれた。クロノスさんがデュエルリングから出る気配が無いのですけど。同じリングに誘導されてるんですけど。マジですか。まあいいですけどね。さあ行こうと思ったが。

デッキを持ってない。持ち歩いてるわけ無いだろう。ま、まあ。試験用のデッキありますかと聞こうか……ん? 腰の辺りに何かある?

「いつの間に」

あら不思議、いざデュエルとなると先程まで無かった謎の少し大きめなウエストポー

チが腰に巻かれているではありませんか。じゃあ問題なし。デツキもあるしデュエルリングに上がる……うとする前に止められる。職員さんかな？

「待ちたまえ」

「えっ？」

「デュエルディスクはどうした」

当たり前のように言われて「はっ？」とか言いそうになった。危ない。ここでは普通にあるものですよね。

デュエルディスク。オーバーテクノロジーの塊。ある意味非科学的なオカルトグッズ。けど科学的根拠を絶対信頼してる社長設計だからきつと現代科学で作るれるんだろう。当然持つてない。

「わ、わすれ、いや、急いでる時に落としちゃって。故障してて。貸し出しとか……どうですか？」

「どうですか？ ……はあ。本番だと言うのに。時間も惜しい。今回だけ貸し出すから。次は気をつけるように」

「あ、ありがとです」

取り敢えず借りる事に成功した。その後数分、嫌な顔をされながらディスクの付け方や運用方法を教えてもらい。計10分ほど教官を待たせ、いざ舞台へ。

待ち構えていたのは。未来へ直行しているおカップパヘアで金髪のエセ外人。その髪型は時代を抜き去っているらしい。まあ先ほど見たので分かるとは思いますが。

「貴方も特別に私が試験官をするノーネ」

クロノス・デ・メディチ。まあ、クロノスでいい。なノーネ。おカップパ。金髪。なノーネ。これをつければクロノスだ。先生であり偉いのだが、エリート主義の大人。こんな思考の人は割とよく居る。ここまで露骨なのは……誰でもわかるようにという、そういう仕様です。

「はい。よろしくお願いします」

「(デュエルディスクの付け方すら分からないようなレベルでこの学園に入ろうとは……それに時間もギリギリ。まさにドロップアウト。世間知らずの子供はお家にとつとと返すゝノデース) それではデュエル開始なのゝネ!」

教えられた通りにすると、ディスクが起動する。ウィーン、カシャン。と機械音がなり動く。初代ディスクはやっぱりカツコイイな。どんな仕組みだろうか。どつかに指挟むと痛そう。とか余計な事を考えていると目の前のクロノスさんに怒られた。すいませんと謝り改めてディスクを構える。その重さに強く強く現実を感じて。

「宜しくお願いします! (先攻押収だけはホントに無理!)」

「いくノーネ!」

デュエル開始の音がする。初めての「デュエル！」と声を大にして宣言した。

「自分のターンドロ―！」

良くわからんが先攻は貰った。若干ディスクからカードを引き抜く時に力が必要だった。結構しつかり力を入れないとカードを引けず、最初は、こんな力を入れたらカード曲がるんじゃないかと思いきやそんな事はなかった。普通の紙なら曲がってた筈だけど、カードの触り心地がいつもと違う。この世界のカード素材になったという事か。ディスクによって引く時の力加減とか変わるのかな。もう少し軽い力でも引けるとありがたいのだが。

「まずは、コレっ！」

何のためらいもなく、普通に差し込んだカード。差し込んだ後に存在しないカードだと気が付いた。もしかしたらエラーが起こるか心配したが、しっかりと目を写した通常魔法が発動される。

そういえば、未知のカードとか、存在していないカードとか、たった今創造したカードとかも普通に映すからこの心配は要らん心配でしたね。作ったばかりのレインボードラゴンとかもスッと映されたし。

「フムッ。ま、どう…シヨ？ ナンナノーネ？」

本が描かれた魔法カード。魔導書シリーズの1枚。当然、この世界からすれば未来

？のカードなので、分からないのも無理はない。

「魔導書庫クレッセンはデッキから魔導書を3種類選んで相手に見せ、その後、その中からランダムに1枚選ばせて、選んだカードは自分の手札に、それ以外はデッキに戻すってカードです。見せるのはこの3枚」

魔導書院ラメイソン

セフェルの魔導書

アルマの魔導書

「つて言っても分からないでしょうから、サクッとランダムで選んでください」

3枚の裏向きのソリッドヴィジョンが現れる。クロノスさんはビシッと真ん中を宣言。それを加えて確認。どれが来ても一緒だけど。

「そのままグリモの魔導書を発動っ！ デッキからグリモ以外の魔導書を手札に。おいでバテル君。そのまま召喚」

グリモでサーチしたモンスターを即座に召喚する。青い服装の魔術師。

魔導書士バテル 攻撃力500

「ふんっ。攻撃力500のザコモンスターを攻撃表示で？ 基礎すらなつて無いんじや

ナイデスーノ？」

鼻で笑うクロノスさんに、クスクスと笑う周囲の観客達。ああ、そうでした。

「おっと、つい癖で攻撃表示で。ここでは表側守備もあるのか」

「ここでは？ 田舎ではルールすらおざなりだった様デスネエ。そんなレベルでは我がデュエルアカデミアの門をくぐることは愚か、叩く事すら100年早いノーネ」

「あはは……悪かったですね。でも先生？ ザコにはザコの仕事があるんですよ。バトルは召喚成功時、デツキから「魔導書」魔法カードを1枚手札に加えるのですよ。デツキからセフェルの魔導書を手札に。そのまま発動です！

このカードはフィールドに魔法使い族が存在する時、手札の魔導書を見せ、墓地の通常魔法の魔導書を選択し発動。選択した魔導書の効果を発動します。手札の魔導書院ラメイソンを見せて墓地のグリモを選んで効果。ゲートの魔導書を手札に」

ここら辺はいつもの魔導の流れ。発動する本はこれで最後！ 本……というよりはそれを保管する場所。

「では最後に、魔導書院ラメイソンを発動！」

ソリッドヴィジョンが現実の様に世界を変える。辺りはすぐ様、巨大な塔がシンボルの魔法都市の中心部へと姿を変える。後ろを振り向くと天まで続く塔。これが、魔導のフィールド。

「魔導書閲覧は実際に自分が発動してお見せしましょう。と言つても、見て楽しめるような派手なのは有りませんのでご了承ください。じつくりと、丁寧にお読みになって下

さいませ。と、このターンはカードを2枚伏せて終了です」

自分 LP4000

手札：3枚

フィールド：バテル

魔法、罠：セット2枚、ラメイソン

「私のターン」

自身の芝居がかった口調に自分で驚く。テンションおかしくなったか自分。でも、もう止められない！

こちらは魔導テンプレの動きを終えて準備万端。相手のターンに入り独特のドロウを無言で行うクロノスさん。そして満面のドヤ顔である。面白いのである。さあさあ、どんなカードを見せてくれますか？ 自分、気になります。押収以外で！

「教えて上げますー！ー番。デュエルアカデミアのデュエルを。私は手札から装備魔法、強奪を発動。相手のモンスターのコントロールを得るノーネ」

「強奪!?!」

まさかの汚いカード発動に驚きを隠せない。

「ふふん。そのザコモンスター。責めて有意義に使ってあげマース。魔導書士バテルのコントロールを得るノーネ！」

「それは出来ない相談ですね。リバースカードオープン！ ゲーテの魔導書！」
「ゲーテ？」

魔導書の1冊。最強の魔導書が開かれる。

「色々効果が隠れていますが、今回は2番目の効果。墓地の魔導書を2枚ゲームから除外して発動。フィールド上のモンスターを表側攻撃表示か裏側守備に変更します。今回はグリモとセフェルを除外！ 魔導書士バテルを裏側守備へ！」

地味な効果だが、色々と便利。強奪されない様にバテルはサッツとカードに隠れた。

「ふむ。逃げるのは速い様だスネ。構いませエーソ。元よりそんなカードは必要無いデスカラネ」

「ですよね」

「……」

「あれ？ どうぞ。続けて下さい」

思った反応と違ったのか何故か気に入らなさそうな顔をするクロノス先生に続きを促す。ああいうのはスルー。どうせ後から言わなくなるし。

「……おほんつ。続けるノーネ。私は古代機械の歯車を召喚。更に魔法カード、二重召喚。これにより通常召喚が出来るノーネ」

あれ、2体目の歯車が出ない？ 確か歯車は展開関係の能力あった筈だけど、事故つ

たのかな……なんか親近感わきます。あるよね。別にこんな展開求めてなかったけど良い。心が暖かくなった。歯車1体ではアレの召喚無理だから……ああ、だから強奪で。って、いま二重召喚しても。あれ？

「古代の歯車を生け贄に、古代の機械獣を召喚するゝノデース！」

歯車が光となつて消え、同じ場所に機械仕掛けの獣。猫とかチーターみたいな奴がガシャン、と足音を立てて登場。わあい、意外と小さくて可愛い……ってマジか。

古代の機械獣 攻撃力2000

自分とはつきり違うモンスターが出てくると思つていたのに。出てきたのが機械獣だと？ 強奪した時点で絶対に手札にある筈だろアレが。ぐぬぬ。いや、深読みしすぎか。獣しかいなくて、とりあえず……な筈。

「（古代機械の巨人を召喚するまでもないノーネ）古代の機械獣で逃げたセットモンスターに攻撃！ プレシヤスファング！」

「くつ。ですが、攻撃されてバテルは表になる。リバース時にもバテルは効果を発動できます！ デッキから魔導書を1枚手札に加え——」

「やはり、小賢しい効果があるようデスネエ」

「えっ？」

「ふん。やすやすと効果は使わせないノデース！」

表になる前、カードの状態のソリッドヴィジョンを機械獣は踏み抜いて粉々にした。

「古代の機械獣は、破壊したモンスターの効果を無効化するノーネー！」

「おっと!？」

忘れてた！　そうか、十代君のハネクリボーから分からない低ステータスモンスターを警戒して……って、ええ。まじですか。

「ニヨホホ」。手札に魔導書を加える効果でしたか。だが、所詮発動できていたとしても、いくら魔導書とやらが増えた所で肝心の魔法使い族が居なければ只の紙なノーネ。それに、次のターン出せる魔法使い族も、レベル4以下の下級モンスターデシヨウ？

古代の機械獣を突破できる下級魔法使い族は居ないノーネ」

「ほう。流石に魔導書の特徴は分かりましたか。が、まだまだ閲覧可能な本はありますよ？　きつと見つかる素敵な知識。先生がターンを渡してくれれば、嫌という程お見せしましょう」

「まだ弊がるだけの体力は、辛うじて残ってる見たいデスネエ。それも、次のターンまでなノーネ。私はコレでターンエンド」

クロノス　LP4000

手札：2枚

フィールド：古代の機械獣

罨、魔法：無し

今の所、クロノス先生に防御札なし。思えばアニメで使った罨も重力解除ぐらいだった気がする。とことん殺意に満ちてますね。ふふつ、やはり攻撃的なデツキのようだ。見てみたい。

「自分のターン！ スタンバイフェイズにラメイソンの効果が発動します。自分の墓地かフィールドに魔法使い族モンスターが存在する場合。墓地の魔導書1枚をデツキの一番下に置き、カードを1枚ドローします」

「また手札補充……いくら手札が増えても痛くもないノーネー！」

「ええ。そう言ってくれると、やりやすいですよ。続いて手札交換でもしましょうか。アルマの魔導書を発動！ 除外されている魔導書1枚を手札に加えます。セフェルの魔導書を手札に」

さて。やる事はあと少しだけ。このデュエルで切り札を出すかと思いましたが……まだ私の動く時では無い。ですかね、この手札は。けど、こつちも十分に強い。このデュエルの最後に向けて、今回の主役を召喚する。

「下級魔法使いですが、舐めてると火傷どころか蒸発するかも。8番目のカード。力を表す魔法使いのご登場。思う存分、ぶん殴られて下さい。魔導戦士フォルスを召喚！」

現れるは赤毛の女魔術師。見に纏うのも赤い服。黒い胸当てにはためくマントと魔

術が書かれた帯。手に持つ獅子の斧は正に力の象徴。

フォルス 攻撃力1500

「攻撃力1500。ブラララ。ぶん殴るところか返り討ち——」

「に出来るものなら是非お試しを。フォルスさんの効果発動！ 墓地の魔導書をデッキに戻し、フィールド上の魔法使いモンスターを選択して発動！ 選択するのは勿論フォルス。選択したモンスターの攻撃力は500ポイントアップし、レベルが1つ上がります」

フォルス ☆5 攻撃力2000

驚いた顔でフォルスを見るクロノスさん。まだまだ終わらないですよ。

「並んだ程度じゃ終わりません。手札から魔法カード、ヒュグロの魔導書！ プレイヤーを強化するエンチャント魔法って言うのは、定番だと思いませんか？ これもその類。対象の魔法使い族の攻撃力を1000ポイントアップします！」

「1000ポイント!? こ、攻撃力が古代機械の巨人と並んだノーネ!?」

フォルス 攻撃力3000

古代機械の巨人。かの有名な青眼の白龍とも並びました。が、全力はまだ先です。

「先生には本気で行かないと失礼ですよ。さきほど加えたセフェルの魔導書を、手札のゲーテの魔導書を見せて発動！ 覚えてますよね？」

「た、確か墓地の通常魔法の魔導書と同じ効果を得たような……得ちゃったらダメデスーノ!？」

「そうかもですーの。当然選ぶのはヒュグロの魔導書！ 更に攻撃力がアップ！」

フォルス 攻撃力4000

「攻撃力、4000……」

「下級もここまで行くのです。かの有名なサイバー・エンドと並びましたね。まあ、これぐらいなら結構見た事あると思いますが。仕上げです。手札から魔法カード、ゲートの魔導書」

先程も発動したが、今度は様子が違う。本から溢れる魔力はまるで現実を侵食し、古代の機械獣の姿が歪み出した。

「さっきの逃げカード？」

「それは2枚除外のお話。3枚除外だと効果が変わります。絶対必殺と言ってもいいかもしれません。ゲートの魔導書、3番目の効果。墓地の魔導書を3枚除外する事で発動。相手フィールド上のカードを除外します」

「じよ、除外。つまり、私の古代の機械獣は……」

「そう。つまりそういう事」

歪みは古代の機械獣を飲み込み、ソレごと消滅させる。最強状態で発動したゲートは

対象を取らない除外。除去としては破格の性能だ。

障害は取り除いた。残るは本体。さあ自分の出番だと、指をパキパキつとフォルスが鳴らす。どうやらやる気は十分な様子。

「これにて本日を読み聞かせは終了。閲覧如何でしたか？ 読んだ本の感想などがあれば是非とも。さあバトルフェイズと参りましょう。フォルスでダイレクトアタック！」轟く一撃。斧を手放し目にも止まらぬ速度で突進したフォルスの拳は地面をえぐり、辺りに土煙を巻き起こす。

煙が晴れると同時にライフが0になる合図が響く。腰を抜かして座り込むクロノスを他所に、満足げな顔をしてこちらを振り返ったフォルスはニカツと笑って姿を消した。

クロノス L P O

自分 L P 4 0 0 0

「ふう。終わりですよ。有難うございました」

デュエルが終了し、デュエルデイスクを閉じる。うん。普通の回り方だった。特にこれと無く魔導って感じだったけど……ライフ4000だとワンシヨットになっちゃったのか。まあ伏せなかったし。あつたら二回重ねずにトーラヒュグロにしたかもしれない。

デュエルの結果は勝ったのだからもういいや。しかしフォルスの笑顔は良かった。これもソリッドヴィジョン様様だ。カードへの愛がより深まる……みたいな。気持ち悪いと言われようが、好きなものは好きなのだ。初のデイスクでのデュエルに満足しながらリングを降りる。「まじかよ」って顔の職員さんがいる場所に向かい、デツキをサツと抜き取って借りたデュエルデイスクを返して完了。さて、取り敢えずアカデミアには行けますよね。と安心する自分をよそにクロノス先生は重たそうに頭を抱えています。楽しかったけどなんかごめん。

とりあえず終わったし。今後どうするか、考えようかなと試験が終わり、行く宛なしに会場を出ようとした時、「おーい」と後ろから声を掛けられる。誰だと振り返ったら一瞬思考が止まった。

「おーい！ お前、さっきの面白いやつじゃん。お前もクロノス先生に勝ったんだな！」
「さっきのデュエル凄かったよ。クロノス教諭を倒すなんて」

おお。十代。目的達成。

凄く近い距離感のクラ：オカツパの人と、付属品のメガネ。普通に紹介すると目の前に現れたこの2人が、オカツパ頭が遊城十代。と、えつとメガネ人が、丸藤。そう。丸藤翔。

「は、初めまして」

でもこちらとしては絡みづらいというか、圧倒されると言うか。でも関わっておいて損はないとか関わりたいたので軽くお話することにしましょう。

そうして軽い世間話を始めたつもりだったが、なぜかデュエルの話に。アレやアレやという間にデュエルしよう！ という話になっていた。でも、正直今は疲れてる。心の準備が出来てないとかじゃないよ。けどね。

「すいません。今のデュエルで疲れてるから、デュエルするのはまた今度にしません？ 多分、皆受かつてますよ」

「ええ。でもさ——」

すぐにお話を終わってくれると思いきや、あの手この手で会話の回路をデュエルと直列繋ぎしてくる十代。なんて奴だ……。

説得するのに5分は掛かった。隣の眼鏡は苦笑いしかしてなかった。

「ちえー」

デュエルを断られシヨボーンとなる十代。その姿を見るとちよつと罪悪感を感じる。

「まつ。いいや。約束だぜ」

「はい。じゃあ、デュエルアカデミアで。十代君に翔君。ですね。よろしく願いします」

「おう！ じゃあ、アカデミアでな」

こうして、無事パーフェクトな会話でなんとか2人と別れました。あんまり話す事は得意じゃなかったが……深夜テンション並のテンションがあれば案外余裕だな。と自身の会話にいけるじやんと勘違いしつつも満足しながら立ち去った。

……が、その時。少し引つかかることを十代の隣にいる翔が口に。少しどころじゃない事を。

「でも彼女かわいかったつすね」

「うー、はやくアイツとデュエルしたいぜ」

「デュエル以外も興味を持ちましょうよ」

……ええつ？

解散直後に聞こえたセリフだけど聞き捨てならんセリフだったような……ええつ。ええ？

まず1つ。自分は男である。2つ、別に男の娘ではない。もうこれだけであのメガネの一言が謎を呼び過ぎるんだが。今思えば声も、あれ。「あー、あー」と適当に声を出してみる。うん。違和感あるぞ。……いや、なぜ今まで気が付かな——いやいや、考えすぎだよ。そうだと言ってくれ。

突然浮かんだ疑問。答えてくれる人は居たようで。呼ぶポケットから着信音。少し落ち着かない気持ちのまま取り敢えずうるさいPDAをとる。声からしてだが、すごい

天使だった。即座にピンときた。説明しよう。この天使という奴。相当なクソ野郎である。この時の会話だけでこれがどんな奴か分かるだろう。

……いやいや。ねえ、ないない。そんな事わざわざする訳ないよね。でもコイツ以外居ないだろ!!

「その前に自分の体について説明して貰おうか」

「ああ、気が付いたんだ。違和感消したはずだったんだけど。いやゝ偶然（笑）ほら、せっかく転生するからイケメンに改造してあげるといふ優しさ……が、どう間違つてか、女の子の身体にしちやったのかなー（*ゝωゝ）てへぺろー」

「笑つてる時点で偶然じゃないだろ teme エ!!」

あまりの軽さに、面白おかしく笑っているコイツに怒る。こちらからすれば笑えない。い。

このクソ天使。ただでさえ人を殺しておきながら、身体を改造しやがっただど!?

……女の子?

「はっ!!」

すぐに動こうとした自分の体を辛うじて止める。生命の危機に急いで確認しようにも、周りには人が居る。実際問題、今叫んでしまったことで注目を集めてしまったのに、おおっぴろげにアレを確認する動作をしてみる。今の見た目がどうなのかは知らんが

良くない。凄く良くないが冷や汗が止まらない。

「あつはは。大丈夫。付いてる付いてる。男の子だよ」

「ほっ……えっ?」

男か、なら眼鏡の発言は? えっ、まさかつ。○モオ?

「いや、男の子ならぬ男の娘かなあ(笑)」

その方が面白いじゃん。普通にするより、男の娘にした方が良いつて良いつて♪ 流
行りだよ?」

ああ良かった。疑つてごめんよ。つてどこに人体改造で男の娘になる流行りがある
んだよ。望んでないし。片足の指から一本ずつ焼くぞ。

言うこと言うこと全てがイラツとする上に、何度も言うがこの上ないぐらい話し方が
ウザい。あからさまに馬鹿にした顔をしているのが、見ていないけど伝わる。ほんと
に、伝わるのがウザ過ぎる!

「詳しく説明すると、只の男の娘じゃない。パーツはもう女の子のパーツ。完全なる女の
子さ! 男子より軽い身体に丸みのある……以下割愛。女の子の肌だし、女の子の筋力
だよ。君自身のパーツを女のパーツに限りなく近く変化させただけだから。つても筋
肉量は大して変わらなかつたね。とまあ僕の頑張りで極限まで女の子に近いんだか
ら、どんな男の娘よりも男の娘だよね。」

アレ以外ね。あと胸かな。その他にもホルモンバランスとか色々あるけど。じつは狙った所を残して後を変える調整がすごく面倒だったとか裏話もあるけど、興味無いよね」

面倒だったのか。よし、なら何故やった外道。戻せ本気で。どんな文句を浴びせようかと思つたが、不自然な感じで天使の言葉がピタリと止んだ。

「急に黙つてどうした」

「いや、今気がついたんだけどさ……いや。いや。いいや。何でもない何でもないや」

「ちゃんと、言えよ！」

「ほぼ女の子って事は、逆に最強の男の娘から離れ……」

「やっぱり黙れ。どうでもいいわ。自分の体でやれよ」

「嫌だね。まあ、なつたんだし。戻せるけど戻してやらないし。この設定はもう変更できません。つてね。楽しめばいいんじゃないかな（▽、▽）ププツ

ホテルは取つてあるから休んでアカデミアまで過ごしてね。じゃあ、第2の人生。お楽しみに！ 僕も凄く見ながら笑うからね！」

そう言い捨て、あざ笑ひ。連絡を切られた。再びかけ直してもこの番号は使用されておられません。だ。

ああ、言いたい事は山ほどある。遊戯王の世界だヤッターよりも沢山ほかの事でだ。

でも、今一番言いたいのは。

「……なんか、違うかい？」

遊戯王の世界に転生しました。これから先が楽しみです。と、強く強く思う事で不安を打ち消したい。そんな最初の日だった。

第2話 可愛い人達

さて、現在の話を……したくない。のでここに行き着いた経緯を話そうと思う。それは結局、行き着いた今をすこしだけ話さないと行けないのは分かってます。なぜ、なぜこんなことに。今思うことは1つ。

「あの天使絶対に許さん」

今は夜。窓からは大きな満月が覗き、豪華な建物の中にはこれまた豪華な料理の数々。普通に考えて学校で出るレベルの物では無い。どこぞのお城に住むお坊ちやまお嬢様が集まってパーティーでも開いたみたいだ。いや、パーティーというか、歓迎会。アカデミアの新入生歓迎会の途中。お城の中で歓迎会している気分になる場所なんて1つしかない。オベリスク・ブルーの生徒のみだ。

デュエルで全てを決めるデュエル専門学校なデュエル・アカデミアでは、3つのクラスなので別れている。簡単に言えばオベリスク・ブルー。ラー・イエロー。オシリス・レッドという順に分かれている。で、上から順に特進クラス、普通クラス、落ちこぼれクラスという感じ。待遇も上に行くにつれ豪華に。古き良き伝統からか露骨な差別が各階級の間にあります。

ブルーは露骨なエリート集団で下をえらくホントに容赦なく見下す凄い奴ら。学校の外だと大変そうだなと思う。

イエロー。普通。それ以上でも以下でもない。故に一番大変かもしれない中間管理職。分かるよ、辛いよな。

レッド。ヤンキーとかの素行不良つてよりは「どうせ何やっても無理だし」つていう感じの人達が集まってる感じです。他もあそこに落ちたら終わりだよ的な。

ブルーになる条件は主に2つ。中等部からの成績優秀者のエスカレーターな感じ。まあ高等部からの自分がどう頑張ってもなれませんね。もう1つある。それなんだけど。その、あれだ。

女子である事……なんだよねえ。

「あなた。クロノス教諭に勝った子よね。遠慮しないでこっちに来なさいよ」

「い、いえ、お構いなく……」

端っこで鎮座していたが、女生徒に声をかけられる。同級生の男子ならどれだけやりやすい事か。だが当然周りは女子。女子だけとか落ち着かない。冗談じゃなくヤバイって。

女子はブルーに強制配属なので実力は関係ない。問題は自分が女子ではないということ。思い出すのも忌々しい転生初日に体の変化に気がついた瞬間。あろう事か転生

させた側から来る人生変えるレベルの嫌がらせ。わあ。さすが人外が施した改造だ。本当に周りから見れば女の子なんだね。自分で言うのもなんだがまあ可愛いし、疑う人が1人として居ない。と感心した自分を思いつきぶん殴りたい。随分とまあ、可愛らしい顔になっており、身長も150ぐらいにまで小さく、肩まである黒髪。長い。邪魔すぎたので適当に後ろの方で束ねた。転生初日も髪は纏められていたから、気がついたのは風呂に入った時だった。正直うざったくてロングの人は苦勞してそうだなと思った。

当然前の自分とは別人で、鏡を見る度に、「誰それ↓俺か」状態。自分の顔って認識するのに時間が掛かる。更に服装。短過ぎるしスースーするし。普通に歩くのも一人部屋で意味もなく歩き回って慣らすまで出られなかった。歩き回っている間、自分は何をしているんだろうなんて考えて絶望し止まったり。ぜんぶひっくるめて慣れるまではびっくりする生活が続きそうです。

因みに当然女子として入学するのになんの抵抗もしなかった訳じゃ無い。ただ、全て、徒勞に終わったただけだ。力を持った馬鹿の恐ろしさを全身で味わった。今では天使と聞く度に虫唾が走る。

居心地が悪くてトイレに行く。当然だが、普通のトイレは使わないし使えない。どっちに行っても変態になってしまう。ので、トイレは自らの部屋に付けてもらった。トイ

レとシャワー付きの部屋だ。良いだろう！……正直、そんな部屋があると思わなかったし、あるって聞いて凄く感謝してる。無理やり校長に頼んでその部屋にしてもらった。取り敢えず。トイレから元の席に戻る間に、気持ちの整理をするためになぜこうなってしまったかを思い出してクソ天使に対する憎しみを高めたいと思う。そう、無事合格の通知が来て、制服が手に入った日に遡る。

□□□□□□□□

さて、制服が手元にあるにはある。が……

「なんで女子用なんだー！ 真っ青で！ 露出多めの！ 凄い制服が届いたよ！ 趣味丸出しか！ どういう事なの！」

手続きとかどうなってるんだ。ってかそもそも……まさか、あの野郎……！」

くく確認中くく

終わった。書類上でも女になっていたらしい。天使のせいで外見と声が女なので疑われなかったようだ。その他の問題もすべてあのクソ天使がやつちやつたらしい。さすが改造人間の自分。よっぽどの事情が無い限り性別ごまかすなんてやらないし、やろうと思ってもかなり難しいはずだけど、そんなありえない事がこんな事もお手軽に……

出来てどうすんだああ!!

「まじか……」

訂正しに行こう。そうしよう。

ダメもとで天使に連絡をしたら、繋がりがりましたが「校長室にでも乗り込めばいいんじゃないね」って感じで切られた。おい、こいつ。ほんとさ。

時は流れ、時間になったのでアカデミアに船に乗って移動。そのまま長い入学式だ。まあ入学式は、普通の入学式でした。どことなく歩いてる時にもぞもぞしたり周りを気にしてしまうのは、仕方が無い。そんな趣味でもあれば興奮でもするのだろうか恥ずかしさしかない上に興奮なんてすると色々和不味い。服的な意味で。まあ平和に式は進行し長い校長のお話を聞き終わったので、校長の所にいって事情を説明しなければと行動を決定。校長室は何処だ。取り敢えず校長に会えばなんとかなる。そう考えていると、あの2人に再び出会う事になった。

「おーい、俺だ。十代だ〜」

「ちよつと待つてくさいよ〜」

おつと十代と翔……十代君と翔君ですね。見た目が見た目だ。万が一があつたら困る。一応、丁寧丁寧に行こう。ごめん、すぐにデュエルは無理そうだ。なんだ、その。いつも以上に丁寧に話して誤魔化してすぐに行かなきゃ。

「十代君と翔君。久しぶり」

「久しぶりだな！　なあ、約束覚えてるだろ？」

「またデュエルの誘いからっすか。他に言うことないんっすか？　一応、会ったばかりっすよ。他人とあんまり変わらないっす」

「他に何かあるんだよ？　初めて会ったから、仲良くなるためにデュエルするんじゃないか。なあ！」

「そ、そう……ですな」

少し戸惑いながら声を返したので翔が苦笑してる。なんか、大変そうだな翔君。

「嫌なら嫌って言っていいいんっすよ」

「うん、大丈夫……です。けど、用事があるから、また後からにしませんか？」

「ええ」

「それは仕方ないっす」

偉い。偉いぞ翔君。このまま引き下がってください。その後の流れは計画通り翔君のフォロワーで引き下がってくれる感じ。ありがとう。

「じゃあ僕たちはレッドなんでまたあとでっすな」

「じゃあ、荷物おいたらデュエルしような」

「向こうの用事が終わってからっす」

「わ、分かってるよ。じゃあ後でなー!」

「はい、じゃあ後で」

で、十代達と別れたあとすぐに校長室に向かったのだが。

「……はて? もう一度」

「性別が違います」

「……なんのですかな?」

「自分の」

「……はて? もう一度」

「性別が違います」

「……なんの事で……」

「もういいわ! 何回同じ事聞き直すんですか!!」

Q・なぜテキストが同じなのに処理が違うんですか。

A・カードが違います。

つてな感じで繰り返しすることももう5回ほど。校長室に直行し、性別が違うのだと言ってこれだ。まあ、うん。分からんでもない。見た目も声も抜かりないからなこんちくしよ
う。

「もう、見れば分かります?」

「年寄りをからかうものでは無いですよ」

割と本気な反応されたので自分でも自重しようと思った。と同時に上手く使えば……なんて。ダメだ。そんな事をすれば影でクソ野郎が笑うに決まってる。

「じゃあ、取り敢えず男子って信じてもらえます。嘘でもいいんで。嘘でもいいんで寮を移動させて下さい」

「ですが、どちらにせよ信じられませんか、急に移動というのも手続きがですね……」

この瞬間。この世界に来てから元々壊れかけていたが何かが完全に切れたのは。自分の心が言う。大丈夫、どうせ慣れると。その通りだと自分に返事をして。

……分かった。負けだよ。これに関しては負けだよ。もう、普通考えたらやらないことをします。

「……じゃあ」

普通じゃない考え。それは割といくつも思い付くもので。思いの外自分は度胸のある人だと感じた。

〳〳交渉中〳〳

数分後。

「わ、分かりました……その要件飲みます。ですから」

「ふふつ。では校長また。出来るだけ、早急に。ですよ」

わざとらしく微笑みながら校長室の扉をあけ、広い廊下へ出ていく。何をしたかはもう思い出したくない。まあやつちやつたから使うけど。だが、完璧には出来なかった。寮を移動が終わるまでは隠れながら女子寮に行くしか無い……らしい。まあ色々条件付きで。一応男子だつてことに無理矢理したので。だから今は、女子寮とやらに行くしかない……のか。それ以外の選択肢が無いってのは辛いな。これ見てアレが笑つてると思うとホントムカつく。

□
□
□
□
□

という訳で、今の歓迎会なんです。あの腐れ天使が。絶対助けないし。この状態をどうしてくれる。悩みながらも、トイレから戻った自分は再び席に着く。この先の事で頭が痛い、今は料理を楽しもう。ああ、でもお腹に優しいのがいいな。お粥とか。まあ一応高そうなお肉には触れておこうと手を伸ばそうとした所で、それを止めるように声が。

「貴方、なんで一人で隅っこにいるの？」

「……えっ？」

金髪のロング。青いグローブを着用したデュエリストといえば一人しかいない。

「あ、明日香さん？」

天上院 明日香。ヒロインでありかつこいい。とてもかつこいい人。やはり近くで見ると綺麗で、どこか近寄り難い印象を受けます。

因みに、試験会場で2階の方に居た女子で十代君のデュエル見ながら「あの子かわいそう」とか「気の毒に。アカデミアの鉄の扉が閉まる音が、私には聞こえたわ」とか言ってた人。自分の時にも言ってたのか気になります。

「あれ？ 自己紹介はまだと思うけど」

「……いや。あ、明日香さん人気ですから。オペリスク・ブルーの女王。ですよね？」

自分の言葉に少しため息をつく明日香さん。ああ、そっか。この人超強いひとでしたね。周りから持ち上げられるタイプの。

中等部の時からなのか、オペリスク・ブルーの女王。って2つ名を持っているらしいです。凄いいね。実をいうと、知ってる人の情報を集めてました。集まった情報から、若干キヤラ混ざってるっぽいですよね……どれぐらいかは分かりませんが。明日香さんは周りから近寄り難いイメージを持たれていて、それを気にしている様子。

「周りが勝手に言っているだけよ。気にしないで普通にしてくれろと嬉しいわ」

「こちらこそよろしくお願いしますね。知り合いが1人も居なくて、少し心細かったですよね……明日香さんは、思ったよりも話しやすくって」

「……私って、そんなに近寄りづらいの？」

「雰囲気というか、すごく綺麗ですから。なんか、声を掛けるのに遠慮しちゃいます」

この言葉に深く深くため息。隠して言えば……良かったのかな？ と余計な言葉を

言おうとしたが、それを言う前に向こうで手を振る人が気になった。それはブルーの制服を着た先生で、明らかにコチラに手を振っているのだ。心当たりがない。つまり明日香さんへ？

「明日香さん、後ろ。先生が呼んでますよ」

「え、本当？」

後ろの先生の方へ行つた明日香さんは、直ぐにこちらに戻つて来た。

「呼よばれているのは、貴方の方よ」

「……えっ？」

先生が自分に伝えた事。寮の前で自分の名前を呼んでいる男子生徒が居るので今すぐ帰らせろという事。だれだ。

ささつと門の前に行くと、聞き覚えのある声がある。

「おーい！」

「アニキ。このままここに居たらやばいっすよ」

おう。十代君ですね。えらいハリキリボーイつてきつとあんな感じじゃないですか

ね。いや、蟹のイメージじゃないですけどね。

「十代君！ ……と翔……さん」

「あ。やっと出てきた。遅いぞ」

「ねえ、今の間はなんつすか？ なんで僕だけ他人行儀なんつすか！」

「……何のようですか十代君？」

「ちよつ——」

「何って、デュエルに決まってるじゃん」

「そのっ——」

「ああ。なるほど。何処でデュエルします？」

「あ、あの……」

「そうだな。そう言えば、デュエル場が合ったよな。そこに行つてデュエルしようぜ！」

「了解です」

「……………」

「じゃあ直ぐにでも行こうぜ」

「ですな」

「なあ、お前どんなデッキ使うんだ？ やっぱリテストの時に使ったやつ？」

「うーん。気分です。デッキいっぱい持つてるんで」

「いっぱい!？」

「そこまで驚きますか……? 後からいくつか見てみます?」

「良いのか?」

「ええ。その代わり十代君もデツキを見せてくださいね」

「ああ!」

十代君とだけ話を進めると、もはや翔君が屍のような顔をしている。やりすぎたかも。屍状態は流石にアレなので復活させておきましょう。

「……翔君も一緒に。ね?」

「っ!？」

「それとも、見たくない?」

「み、見たいっす!! 僕のデツキもぜんぜん見せるっす!!」

よし復活。翔君いい感じ。

「なら良かったです。じゃあ……先生にバレないうちにさっさと行きますか」

「ん? なんか不味いのか?」

「一応、色々まずいっすよ」

「だってさ、デュエルするだけだろ? そんなに騒ぐ事かよ。デュエルアカデミアだぜ?」

そこじゃないよ十代君……まあ、自分からしてもどうでも良いですが。

そんな訳で歓迎会を抜け出してデュエル場に急ぐ事にした。面白い事にもなりそうだし。

はい。移動しました。やはり観客席の中心にはデュエル場。端の方に2人のブルー生徒が居るのが目に入ったが一旦スルー。来た瞬間に目を輝かせる十代君は可愛いと思える所があるな。なんて思い。違和感。……あれ、見た目が本意にもそうだから、話し方も意識してそうしてるからか、思考も寄つてきてるのかな……いや、そんな事は無い。誰が見ても十代君は可愛い。うん。漫画版の十代君だつて凄かったつてヤフー知恵袋に書いてあつた。十代は可愛いんだろう。

「すげえ。なあ、ここでデュエルしようぜ!!」

元氣いっぱいと言つた十代君。やはりどこか子供に感じる可愛さがあるのでは無からうか。そう、子供を見たは微笑ましくなるだろうそうだろう。うむ。で、十代君はデュエルしたいという事です……

「悪いが、そういう訳には行かないんだな」

やつぱり声をかけてきたモブ顔2人。坊主頭をA。つんつん頭をBつて感じ。の内、Aが見下したようなニュアンスでそう言つてきた。

「このオベリスクの紋章が見えねえのか! ここはオベリスクスブルー専用だ。レッドが

使える場所じゃない！」

坊主が叫ぶ。凄いきつい言葉を使うなモブAよ。思わずクスツと笑ってしまふ。十代君はポカーンとしており、翔君は少し怖がつてる感じ。いや普通なら翔君みたいな反応してたかみだけど。もう色々壊れかけて慣れ始めてる自分からすると笑える事です。怖い感じのモブからの暴言が更に続いて、そろそろ顔も保てなくなりそうな時。

「ビー・クワイエット」

微妙な英語がモブ2人の台詞を遮った。それは不意打ちで腹筋にダイレクトアタックだったがりぎりライフは残った。その声の持ち主は、最初からモブ2人の後ろにいた。黒で、まさにトサカ頭とでも言うべき髪型。どこか人とは違うと感じさせるカリスマ的雰囲気。あの髪型は1人だけ。原作キャラにしてライバルからギャグキャラまでこなす万能選手。万丈目さんだ。

観客席にいた時の、3人組の中心。心底嬉しそうにクロノス教諭は十代を潰す気だつて言ってた人。察するにこの頃は典型的な悪役？ ですかね。今それよりも目の前の坊主が悪役ですけど。

「なあ、アイツだれだ？」

万丈目さんを見て一言。アイツは駄目だよ。初対面なんだから。しかし当然知らない。二人の反応にありえねえぜ！ と言う表情のモブAB。

「お前ら、万丈目さんを知らないのか!? 同じ1年でも中等部からの生え抜き。超エリートクラスのナンバーワン」

「アカデミア最強!! 未来のデュエルキングとも呼ばれる万丈目 準様だぞ?」

滅茶苦茶スムーズにヨイショするじやんと感心してしまう。ただ十代君はそれにすぐさま言葉を返す。

「おかしいな……デュエルキングって、1番って事だろ? この学園の1番は俺だからさ」

なんだと!? ふざけやがって!! な雰囲気のモブA。はっはっは。身の程をしれどロップアウト! って感じのB。流石十代君男の子だな。自分は津波のように押し寄せる展開に思わず。

「ぷっ」

思わず笑い声を漏らしてしまった。

「何笑ってんだ女子!」

流石に聞こえたらしくモブA絡んでくる。がとりあえず目をそらして無視しておく。無視してもしつこくしつこく来るし。そろそろ面倒だなくと思っていた所で助け舟が。

「諸君。はしゃぐな」

万丈目さんの一言。その一言にどこかシユンとなるモブA、B。その2人と、自分を

含めた十代君達を見下ろしながら話を続ける。

「ソイツら、お前達よりやる。入学試験デュエルで手抜きしたとはいえ、一応。あのクロノス教諭を破った奴らだ」

さりげなく酷いなおい。と言いたくなつた。だって、ブルー男子はエスカレータで上がってきたⅡ中等部も成績トップクラス。な筈。それが、たった1度のデュエルで既にレッドより下かもしれないと格付けされているのだから。まあ、それ程までにデュエル1回の勝敗が重いという事。それに加えてエリート意識がとても強い事が分かりますね。上のクロノスさんを倒したという事がとてもないステータスになっているらしいですから。

「実力さ」

キリツと返した十代君。自信が無限なのだろうか。果てしなく光。なるほど反動で落ちるときはすごい落ちるわけだな。

「ふふっ。その実力。ここで見せて欲しい物だな」

「いいぜ」

十代君は一步も引かず、両者の間で火花が散る。さあもう始まるぞつていう時にキリツとしたかっこいい女性の声がデュエル場に響き渡った。

「貴方達、何してるの!!」

思わず全員が声の方へ振り向く。両手を越しに当てて、怒った顔で立っているのは明日香さんですね。

「天上院君。やあ。この新入りが余りに世間知らずなんでねえ。学園の厳しさを少々教えて差しあげようと思って」

サラッとそう返す万丈目さん流石つすよ。学園の厳しさ。それはひしひしと伝わってます。本当に笑えない事も知ってますけど……まあ自分はもう変人なので。心の余裕があつて楽。

「新入生歓迎会の途中なのよ？ 速く自分の寮に戻りなさい」

それにあくまでも冷たく返す明日香さん。強そう。

「……チツ、引き上げるぞ」

素直に万丈目&モブ2人は足早にこの場を去つて行つた。非常に微妙な顔で万丈目さんが出ていくのを見た後、こちらの方に向いた明日香さんは言った。

「貴方達。万丈目君達の挑発に乗らない事ね。あいつら……ロクでも無い連中なんだから」

明日香さん。敵意全開ですね。

あ、そういうばここで初めて十代君と会ったんですね。これから楽しみです。十代君の初めての絡みは結構すごくて。って、今から目の前で見えるんですけど。

「へえ。わざわざそんな事を教えてくれるなんて。ひよっとして俺に一目惚れか」
「アニキ。そんな有り得ない事」

この一言です。流石十代君。底なしに前向き。

キョトン。とする明日香さん。しばらくすると軽く笑った。可愛い。

「オシリスレッドでも、歓迎会が始まつてるわよ」

「あ、そうか！」

「忘れてたんつすかアニキ。てつきりサボるのかと……」

「そんな訳あるかよ。寮に戻るぞ！ デュエルはその後だ！」

「あつ、待つてよアニキ！」

忘れてたのか。いや、来た時ブルーで歓迎会してたんだから、何となく……いや、良
いんですが。

走り出した十代君は、思い出した様に明日香の方へ振り返る。

「そうだ。お前、なんて名前だ？」

「天上院、明日香」

少し楽しげな、明るい感じの声で明日香さんが返す。その感じで行けばいつでも可愛
いんですけどね。いや、いつも可愛いけどね。

「俺。遊戯 十代。よろしくな」

とつとと自己紹介すると、かなりの速さで走り去ってしまいました。見えなくなつた後、また明るい声で明日香さんが十代の名前を呟いた。なんだか、うん。この時から既になのか。いや、まだ興味あるぐらいなのか。今まで黙っていた自分も我慢出来ずについ話しかけてしまう。

「十代君。気になりますか?」

「えっ? ……ええ。彼。なかなか面白いデュエルをするでしょう?」

「あゝ。分かります」

そうだ。今の明日香さんはデュエルに恋してる状態。ガチガチのデュエル脳です。で、さつきまで明るかった顔が一転。すこし厳しい顔になりました。ま、まあ。理由は心当たりあるかも知れませんが。

「全く。貴方が出ていったつて言うから、私が先生に頼まれて探しに来たのよ?」

「そ、そうなんですか。すいません。ご迷惑をおかけしてこの度は誠に申し訳ございません……」

「ちよつと。そんなにかしこまらなくても」

「いや、だつて。その……言いにくいんですが、怖いですから」

その言葉に顔が凍りついた明日香さん。ダイレクトアタックを決めてしまったようだ。

本人は凄く可愛らしい人なんですが、その、自分にも他人にもビシッ！ としているので怖い感じ。で、それを気にしてる感じ。更にいえば、それを気にするように自分が会話を振った感じ。何とか流れを変えようと足掻こうとしてついウツカリ口を滑らせる。

「嘘ですよ。素直にありがとうございます！」

「……嘘？」

「なんか、怖がられてるの気にしてるようだったので。怖いって言ってみました」

「……………」

「やっぱり気にしてるんだなって言うのが、顔色見て分かりましたよ。凄く、なんと言うか。弄りたくなる顔？ でした。可愛いですね」

言った後にしまったと思うのは何でだろうね。いや、違うんだよ。心の中でそう思っただけだ。たとえ漏れてしまってもそれは言っていないのと同じような事。そう、ノーカウントという奴だ。

「……そう」

短い返事の後には腕で頭をロックされた!?

その後ゆっくりながら首が締まっているのが実感出来る！ やばい！ 技が全然可愛くないよ！ 落とす気だよ！

「ありがとね。でも、人が気にしている事を無闇に弄るものじゃ無いわよ?」

「痛たたたた! 首! 明日香さん首締まってる!」

「でも、ある意味良かったのかも。クロノス教諭を倒した1年。興味があつて声をかけたけどやっぱり他の人とは違った。少し酷いことも平気で出来そうな性格をしてるから遠慮しなくても大丈夫ね。私、体育も得意なの。女子の中じゃ1番だったんだから」

「わあお。優等生。だから……くるっ……しい……」

も、もう。む、無理……死ぬ。

あつ、でも柔らかい……そんな変態的な、だがしかし密着状態なので男ならば必然的な事を考えながら、そのまま首を絞める罰を受け、ついに至った。

「……………」

もう無理だよ、と自然に首がしたに落ちる。相手の攻撃力高すぎて守備力が全然足りなかった。

「……ちよ、ちよつと?」

「……………」

「もしかしてやり過ぎた……の? だ、大丈夫?」

「……………」

「お、起きて! ごめんなさい、そこまでやる気は——」

遠のく意識の中、凄く心配顔の明日香さんが見えた。次に目が覚めたのはベットの
上。隣に座っていた明日香さんがある程度見てくれた様子。いや、女子に落とされ
るってどれだけひ弱なんだよ。と自分が悲しくなる。

他から見れば、すこしラッキースケベに近いものを感じて羨ましいと思う人も……
いるかも知れませんが。幸せ？　って聞かれると、こちらも女子って認識されてるの
で、先を考えると当然ながら幸せじゃない感じだった。

第3話 予想外れの

111番君。この前はどうも。

ドロップアウトのレッドだけでも良いとは万丈目さんが言ったが、そうはいかない。所詮女子。入試テストもギリギリ合格だったのが見なくてもわかる顔をしていたよ。格の違いを教えてやる。今日の深夜、デツキを持ってデュエル場に来い。ドロップアウト共々ねじ伏せてやる

「どこから、連絡先を仕入れたのかこの人」

事の始まりはこのメール文章。いや、すごく強そうな一通頂きました。

昨日の事だ。万丈目さんと十代君の初絡みを見に行った時に隣にいたモブAに目をつけられたのは。そして直ぐにこのメールである。普段なら逃げるけどデュエルなので逃げる必要はなさそうだ。

「まあ。酷いデツキじゃないと思うけど。万丈目さんとならともかく多分モブAとだし。よし。念のために3つ程デツキを持っていきますか」

デツキを選び終えた所で、意気揚々と深夜のデュエルへ！ と一歩外に踏み込むと冷たい風が吹く。

「……寒い」

数分後レッド寮で十代達と合流。その後、そんなこんなで今現在はデュエル場。待ち構えていたのは万丈目軍団。万丈目さんが上から目線で十代君をみる。

「よく来たな。110番」

「へへっ。デュエルと聞いて、来ない理由は無いぜ」

「見せてもらうぜ？ クロノス教諭を破ったのが、まぐれなのか実力か」

「ああ。俺も知りたかった所さ。デュエルアカデミアのエリートって奴らが、どれぐらいの実力かさ」

「ふふっ。良いか。互いのベストカードを賭けてのアンティールルールだ！」

「ああ！ なんでも来やがれ」

デュエルデイスクを展開した2人。もはや他の事など眼中にも無いって感じです。集中してるんですね。どれぐらいしているかと言うと。

「貴方達？ 校則違反よ」

いつの間にやら、デュエル場の入口に立っている明日香さんの声を無視するほどにだ。つけられたのか。自分もびっくりした。いつも通りの厳しいお言葉がデュエル場に響いて、翔君びくっ!! っとなったけれど。

「デュエル!!」

「デユエル!!」

やっぱり十代君達には無視されてますね。さて、自分も、呼ばれていたな……

「111番！ お前の相手は俺だ」

ちよつと別方向をみると、ハゲ頭のモブAがディスクを展開した状態でこつちを見ている。……なぜ自分を狙う？ むしろ女子だから狙われた？ 流石に邪推というものか。

「貴方は、モブA ……違う、取り巻きの人？」

「このブルーの俺様をモブだとい？ ドロップアウトの癖に口の聞き方も知らないのか」

「失礼なことを言いましたが、そちらも負けず劣らずで真つ青ですね」

軽く言葉を返せるぐらいには冷静でメンタルが強くなった。しかし、同じブルーにドロップアウト発言とは。思った以上に女子は舐められてるのか。やはりレッドと関わるのは少なからず良い印象は受けないだけなのか……

「お前もアンティールだ。俺が勝ったら試験の時に使っていたデッキからカードを貰うー」

「嫌です。アンティールがそもそも嫌です」

「なっ——」

「せめて勝ってから言ってください」

「はっ、分かってねえようだな。レッドと絡んでる女子なんてブルー男子にかなうわけないだろ。ドロップアウトはドロップアウト、力の差なんて天と地ほどにあるんだよ！」

きつついエリート選民思考に頭が痛くなるが、今日の自分は気分がいい。いつも以上に言葉を流せる。それだけではないのだよ。怒られようと、何されようと。デュエルで何とかなるかもしれない世界。変なテンションと妙に冷静さを保てる今はきつと普通じゃない。まあ、なら普通じゃやらない事を好き勝手やろう。そうだ、デュエルだ。こんな時こそきつとデュエルで何とかなる。

「じゃ、まあ。受けますよ。そっちはもう準備万端みたいですし。こっちも何だかんだ準備始めますから」

ディスクの使用方法を改めて再確認しながら、デツキを選んでディスクにセットする。ここの人達は慣れてるから良いかもしれないけどこちらから見ればまだ数回しか触つてない未知のテクノロジーを使ったスパーマシーン。確認で5分ぐらいは余裕で使う。

「さっさと準備しろノロマ!!」

「ゆっくりした人は嫌いですか」

こちらに言葉を飛ばす様子はまるで母親だけに強気の子供が今日は美味しい晩御飯

だから早く食わせろよババア状態。いや、そんな状態あるのか知らないけど。動作確認なども終わってようやくデュエルディスクをデュエル状態に変形させる。

「さあ始めましょう。地面さんとして、じいーつと。見上げさせてもらいます。天にいる貴方を」

おかしい事を言ったかな。相手はこちらを見る目がどんどん変人を見る目に変わっていく。この芝居がかった自分がどんどん元の自分と入れ替わっていくような気がする。

「それでは始めましょう!」

「後悔させてやるぜ!」

デュエル。の掛け声でディスクにライフポイント4000が表示される。少しイライラしている顔のモブAは自分のターンだとデッキの上に指を乗せた。

「先攻は俺! ドロー! ゴブリン突撃部隊を召喚!」

基本的にどの世界でも弱い敵、やられ役として扱われるゴブリン達の武装集団が現れた。いつものやつ。ブルー生徒と言えばゴブリン。1にも2にもゴブリン。3度のデュエルもゴブリンだ(強い偏見)。当然だが弱いカードではない。むしろライフが4000しかない世界でなら強くなっている。当然8000ライフよりは強くなっているだけで声を大にして超強い。とまでは言えないが。

「更に、デーモンの斧を装備！ 攻撃力を1000ポイントアップさせる！」

ゴブリン突撃部隊 攻撃力3300

持つだけで命でも吸い取られそうな斧を平気で手に取るゴブリン達。力が漲って早く敵を倒したいようだ。

「こ、攻撃力3300……クロノス先生の古代機械の巨人を超えた!？」

「ははは！ そうだ。あの青眼すらこのゴブリンには勝てない！ なんだ、もう戦意喪失か？ そうだろうな。更にカードを2枚伏せて、ターンエンド！」

モブA LP4000

手札：2枚

フィールド：ゴブリン突撃部隊

罨、魔法：デーモンの斧（ゴブリン）、セット2枚

相手に合わせて驚いてみるが、ここまで調子に乗るものと微笑ましくなる。実際に戦意喪失するほど強力かと言われれば状況によるが今はそこまでの驚異ではない。

けれど、ここでふと自分の考えに疑問を持った。流石にあそこまで余裕そうに言われているのはおかしいのではないか。実は手加減されているのかも。と。考えてしまつたが最後それが本当か嘘かはどうでも良く、デュエル中なのを忘れて自分の考えに引きこもる。ドロウしたカードを見もせず数秒程たった頃痺れを切らしてモブAが声を上

げる。

「早くやれよー」

その声に反応すらない。気がついていないわけでは無いが「ちよつと待ってモブAさん。考え事してる」と心の中で断りをいれつつスルー。

「おいー」

心の中で「少し待ってモブAさん。これからの未来について凄く考えてる」と断りをいれ考えを再開。二度ある事は三度あるというがモブAからすれば三度目の正直。三度も無視される訳には行かない大きく強く声を出す。

「聞いてるか!? いい加減にターンを進めろ!!」

「もう少し待ってモブAさん。今人類のこれからについて思考中」

「はあ!! わけわかんねえこと言うな!!」

「ああ。今と言うのは、現在進行形で流れているこの時を表してます。で、人類ってのは人ですね。合わせていうと今この時間に人の事について……」

「そこじゃねえよ!! それ分かんないのかーみたいな顔しながら言うな分かるわ!!」

「分かるんだ……」

「なんで驚いた顔してんだ? 馬鹿にすんな!」

「やだなあ。モブAさんが馬鹿な事を言っていないのに馬鹿にはできませんよ」

「つちが……つてもういい。まともに話せないのかよ！」

「ええ。まあ。ちよつとおかしくなってるんです。すいませんでした。モンスターをセット。カードを2枚セット。ターンエンドです」

自分 LP4000

手札：3枚

フィールド：セット1枚

罨、魔法：セット2枚

「はあ？ 逃げるだけかよ」

「逃げ足には自信アリです」

「ちつ。舐めやがって。俺のターン！ 伏せてある罨カード、スキルドレインを発動！」

モブA LP3000

それ1枚でかなりの数のデッキを殺すメタカード、スキルドレインが発動された。効果は、フィールド上のモンスター効果をすべて無効。TCG次元では制限にされる程に強力。「げつ、スキドレビート」なんて嫌そうな声を出してしまう程には好きじゃない。「様子見でバトルだ！ 行けゴ布林！」

斧持った蛮族共がセットカードを集団で圧殺されるが分かりきっていた事だと素直にカードを墓地に送る。

「ちつ。壁かよ。このままターンエンドだ！」

モブA LP3000

手札：3枚

フィールド：ゴ布林突撃部隊

罨、魔法：デーモンの斧（ゴ布林）、スキルドレイン、セッター枚

ピンチだ。どれぐらいピンチかと言えば今すぐ々々召喚をしたいぐらいにはピンチだ。だが打開策があるかもしれないし、取り敢えずドローしてから考えるか。とドローを行い手札を見た。何とは言わないが使えば戦えるだろう。

だが、その必要はあるのかという事だ。ドローしてからもしばらく動けずに居た。そんな時。

「いちいち悩んでんじゃねえよ!! 悩んだって意味ねえんだよ!!」

痺れを切らしたらしい。先程から長考をすく挟んでいるためイラつくのも無理はない。誰だつてデュエル中に何度も止まられるとイライラぐらいはする。つい言葉がキツくなったりする事もある。

ただ、その言葉を受けている自身の顔が段々嬉しそうな顔になっているのが相手には異様な風景に見えただろう。表情はありがとうでも言っている風かもしれない。

「なんで嬉しそうにしてんだ！」

「いや。なんでも。こつちには事情があつてですね。まあ、全部自分の気持ち事情ですが。貴方のお陰で吹つ切れました。お返しにサクサクしますよ」

長考を終えカードをディスクに差し込む。迷いもなくなったからか動きが軽い。

「笛吹き男が呼んでくるのは一体何なのか？ 子供以外でお願いしたいですね。ミスティック・パイパーを召喚！」

ポンツと跳ねるように現れた青髪のマジシャン。綺麗な音色を笛で奏でる。

「……くつ。ははは！ おいおい冗談だろ？ スキルドレインがある中、そんな超低レベルザコモンスターを攻撃表示？」

「お気に召さないようなので、すぐさま退却退却」

楽しい音楽を奏でる笛の音が、まるで踊るように動き回る裏側のカードを何処からともなく連れてきた。音の終わりと共にピタツとカードが止まり、ミスティック・パイパーは煙に包まれ消える。

「ミスティック・パイパーは、生け贄に捧げる事でデッキからカードを1枚ドロ―出来るんです。そして、そのカードをお互いに確認する。レベル1モンスターなら追加ドロ―ですよ」

「ちつ。フィールドから居なくなりやがるからスキルドレインの対象外か」

「（あれ。馬鹿め、スキルドレインが……発動しない？ って反応を期待していた気持ち

を返せ!!) まあそうですね。ではドロー」

裏側のカードが表側に。天使の羽が生えた、可愛らしいネズミがドーナツを持っている。

「なんだそりや」

「可愛いネズミさんでしょ? ドローしたカードはファーマル・マウス。レベル1モンスターなのでドロー! ……っワンペア!」

「……は?」

「こつちの話です。はあ」

「はは。攻撃力100? 何が可愛いだ。そんなんで勝てるかよ。だからザコなんだ女子は」

相手の言葉よりも自分の手札にいるネズミさんを見て少し心に来るものがある。何が起こったのかはお察しだ。割とよくある事故が起こってしまった。

「致し方なく。このままターンエンド!」

自分 LP4000

手札:5枚(1枚はファーマル・マウス)

フィールド:無し

罨、魔法:セット2枚

「とうとう壁すら居なくなつたかよ。俺のターン！　へっ。更にデーモンの斧をゴブリン突撃部隊に装備！」

ゴブリン突撃部隊　攻撃力4300

追加の武器を手にして斧二刀流だが相変わらず斧モーションのゴブリン達。しかし攻撃力はあの究極竜にも届きそうな勢い。サイバーエンドなら普通に倒せるレベル。元のライフを考えるとやはり攻撃力が高いだけで結構なプレッシャーだ。

「これで一撃だ。手こずらせやがって！　ゴブリン突撃部隊でダイレクトアタック！」

「くっ。使いたくなかつたけど、罨カード。聖なるバリアーミラーフォース！」

「ちっ。やっぱりか」

その圧に耐えきれず温存予定のミラフォを打つもやっぱりとか言われる。本当に求める反応とは違う様子を見せるモブAのゴブリン突撃部隊が爆殺。気に求めずモブAはメイン2に入る。

「俺は、可変機獣　ガンナードラゴンを妥協召喚！　スキルドレインが適応される！」

ガンナードラゴン　攻撃力2800

「げ……残してた。意外と慎重派かこの人」

「ターンエンドだ」

モブA　LP3000

手札：2枚

フィールド：ガンナードドラゴン

罨、魔法：セット1枚

絶体絶命大ピンチ。貧弱なレベル1モンスターのデッキなんてスキドレビートにはこんなもの。ただの、レベル1デッキなら終わったかもしれない。だが。

「自分のターン……」

負けそう。それだけで恐怖感が募るばかり。引けないと負け、引けないと負け。自然とデッキの上に置く指に力が入る。願いを込める程に強く強く。強く願いカードを引く。今この場に相応しい。切り札を願って。

「ドロー!!」

ゆつくりと、運命のカードを確認する。それは、墓の下からまだ生きているとも言わんばかりに突き出された手が、少し大きめのスコップを持っている魔法カード。

「魔法カード、愚かな埋葬を発動! デッキから、モンスターカードを墓地に送る!」

「愚かな埋葬……? ぷつ。ははは!! よりにもよって、今更そんなカードでっははは!!」

「ええ、笑いが止まりませんよね。では、モンスターを墓地に送りました。このターンで動きます! サイクロンを発動!」

「なつ。スキルドレインが」

「忌まわしき永続罟を粉々に砕いたサイクロン。もう邪魔なものはない。おかしくなった自分を強く受け入れて、楽しむ事にしよう。」

「さあ。天と地ほどの差がある自分と貴方。だが、上と下は似るもので……そんな感じの事、聞いたことありませんか」

「はあ？ 急に何言ってるんだ」

「弱い立場の気持ちって、どうだと思えますか。高い所からみても、あんまり分からないでしょう？」

「これまでに無いほどに、満面の笑み。ただ、目は笑っていない。真剣で、だから不気味で、そんな笑顔で問いかけられても答えられないだろう。カードから感情が流れ込んでくる様な錯覚が、自分の台詞を作っていく。」

（ああそうだ。弱い人の気持ちなんて、上の人は分からない。自分たちの作る影で、こっちの形すら、曖昧なんだ）

感情を込めて、真剣に考えて、その世界に入る。深く深く深く。その目はまるで得体の知れない何かを見る目。人様に向けていい目ではない気がした。ただ、それをしている自身さえ何がそうさせたのかは分からない。

「力の無い魔術師は道化になる事を選んだ。ジェスターコンフィーを手札から特殊召喚

！」

サーカスでみるような、大きなボールにのったピエロが礼をする。

ジェスターコンフィー 攻撃力0

「し、性懲りもなく、攻撃力0レベル1！ 最低級を攻撃表示か。ザコのくせに戦いにでてくんなよ！」

「そう。力がないが故に、戦う事は出来ない。だからある者は力あるものにさらなる恵みを与えた。自らの出来ないことを、希望として託す道を選んだ。リバーズカード、リビングデットの呼び声！ ミステック・パイパーを特殊召喚！」

2度フィールドに現れた笛を吹く魔術師。その奏でる音色は明るい曲調からどんどん強く、どんどん不気味な音楽へと変わる。

「だがいつかは悟る。希望を託すしかないのだと。希望そのものにはなり得ないのだと！ 願いを託し、託したものが達成するのを見るだけ……希望の願いはいつしか変わり、それを知らせる猫が鳴く。手札から金華猫を召喚！」

まるで、その魂そのものが身体を作っているような、黒で塗りつぶしたような、不気味な黒猫が短く鳴く。

金華猫 攻撃力400

「金華猫は、墓地のレベル1モンスターを特殊召喚出来ます」

「攻撃力があっても400かよ。しかもまたレベル1。ザコがザコ呼んでどうするんだよ？　ほんつとに底辺だな！」

「ああそうですよ。地の底です。だから上を目指した。ふふっ」

「な、なんで笑ってんだ、ふつう、笑わねえだろ？　なんで馬鹿にされて笑ってんだよ！」
「そして気がついた。希望の願いは、その真逆にもなり得ると。醜くも確かな心を鏡が写し出す。希望を写して綺麗に笑う！　モノまね幻想師を特殊召喚！」

手鏡を持った魔術師。写らなくなった鏡が、光を写し。影が自らを彩る。

モノまね幻想師　攻撃力0

「さあ、天にいるものに希望を託した地にいる者達よ！　笑え！　今自らが、その希望を超える力となることを！」

ボールから転げ落ちる道化師。幸福を呼んでいた笛は折れ、黒猫が不気味に鳴く。割れた鏡がゲラゲラ笑い、いつしかそれらは黒い塊となりフィールドを覆った。

「何が起こつて……」

「希望の願いが集まったんですよ。大きな願いを抱く小さなもの。最低級レベル1モンスター。最低の底辺だからこそ最高を打ち消す力になる！」

塊が弾けた。黒い風が吹き髪をなびかせる。その存在感はソリッドヴィジョンのそれでは無い。その中心に現れたのは巨大な、まるで深い暗闇を表したようなモンスター

だった。

「皆の思いから生まれた者。思いの結晶……絶望神、アンチホープ」

絶望神。神は生まれたことを喜び、力強く雄叫びを上げる。

『ゴアアアア!!』

その声は力となって辺りに響き、地面を揺らす。相手はまさに絶望したような顔を見せながら後ずさる。

「な、なんだそいつは!! レベル12。こ、攻撃力5000だとお?」

アンチホープ ☆12 攻撃力5000

「底辺の神ですよ、天の上のブルー殿」

アンチホープが動く。ただそれだけでも関わらず、どんどん後ずさりしていく相手。ニヤニヤけたけたと笑う異常な目のデュエリスト。それに従う異様なモンスター。

「アンチホープでガンナードラゴンに攻撃」

「な、なめるなよ!! デカいだけだろうが!! そんなん、対策してるに決まってる。罠カード、魔法の筒!!」

「ほう。大逆転の罠カード。まさにしてやったり! みたいな感じですね」

「言ってる場合かよ、お前がその神の攻撃を喰らえ!!」

「神に、小細工は通じませんよ」

「なにっ!？」

魔法の筒を無い物の様に蹴散らしながら、その拳をガンナードドラゴンに近づける。

「アンチホープは、バトルステップに墓地のレベル1モンスターを除外する事で、あらゆる効果を受けず、戦闘で破壊されない」

「ふ、ふざけんな!!」

「そして、もう伏せカード有りませんよね?」

天空からガンナードドラゴンに1つ。槍が突き刺さった。それは美しく、触れる事すら躊躇う槍。

「魔法カードを発動させました。今、刺さったのは禁じられた聖槍。神の宝であるその槍は退魔の槍。対象をあらゆる魔法、罠から守ります。代わりに攻撃力を下げちゃうんですけどね」

ガンナードドラゴン 攻撃力2000

「800ポイント下がって、ガンナードドラゴンの攻撃力は2000。アンチホープが5000。じゃあ、終わりです」

機械の竜は槍が突き刺さった部分から火花を散らす。全体の動きも悪くなる。もう逃げられない。上からは、絶望が降り注ぐ。

「や、やめろお。死にたくない!!」

「いやですね死ぬだなんて。踏みつぶすだけじゃないですか。いつもやってるでしょう？ 下を踏みつぶすことは。ね、エリート殿」

「うわああああ!!!」

ガンナードラゴンを押しつぶし、そのプレイヤーまで絶望神の攻撃は、全てを飲み込んだ。

デュエルが終わり、ふう。と一息。終わって考えればサイクロン我慢しなくても良かった……まあ、結果勝てばいいですよ。それにしても、死にたくないだとか。別に殺すつもりでやって無いですよ。妙に芝居がかった事を言ってたから怖かったのかな？

向こうの方で腰が抜けているモブAが見える。自分を見てそうなったなんてのは有り得ない。なら有り得るのはアンチホープを見てびくくりした可能性。アンチホープの迫力だけ見れば確かに相当な物だったが、そこまでなのか。

「おーい。大丈夫ですかー？」

ソリッドヴィジョンだとわかっているくせにガクガクと震える体。どうしたんでしょ……うか？

考えている内に気がついてしまった。モブAさんの視線は、自分の後ろ。そう、丁度アンチホープが先程まで居た場所。ゆっくり振り返ってみると、やっぱり消えてなかった

た。ディスクを閉じなくてもカードを抜かなくてもデュエルモードが終われば消える筈なのに。ソリッドヴィジョンも不調とかあるのかな？

更に変なところに気がついた。あれ、ホープくん泣いてない？ うつすら涙浮かべてない？ そんなゴツいの、気がついたら可愛いと思えるレベルにはうるうるしてない？

『ゴアア……』

少しだけ、また声を出した後。気のせいかもしれないけど小さく右腕を、拳を作りながら上げ下げ。えっ、ガッツポーズ？ よっしやつ！ みたいな動きしたよね？

幻覚見えてきたかと思いながらもディスクからアンチホープのカードを抜くと、なにやら満足げな、やってやったぜ。みたいな顔をして消えたように見えた。

「活躍できて嬉しかったのかな……止めを決めたモンスターは基本笑うのかも」

まあ。原作のアンチホープならまだしも、これOCG版だから。でも頑張ってそれっぽくしたから、モブAさんには凶悪な最凶の神に見えた……はず。

《絶望神アンチホープ》

特殊召喚・効果モンスター

星12／闇属性／悪魔族／攻5000／守5000

このカードは通常召喚できない。

自分・フィールドの表側表示のレベル1モンスター4体を墓地へ送った場合』のみ』手札・墓地から特殊召喚できる

(1)：このカードがモンスターゾーンに存在する限り、

他の自分のモンスターは攻撃できない。

(2)：このカードが戦闘を行うバトルステップ中に1度、

自分の墓地のレベル1モンスター1体を除外して発動できる。

このカードはそのダメージステップ終了時まで、他のカードの効果を受けず、戦闘では破壊されない。

何があれかつて、まあ作られた段階からかな。何の恨みがあつてここまで意味の無い耐性が付けられたのか。いつでも使えるフリチェでいいじゃん。それぐらい良いじゃん。覇王の十代君なら使ってくれる(ダークガイア)。もしかして、OCG版アンチホープの精霊とか居るんですかね。だとしたら、焼かれもしないし神として見てくれてたはずの今のデュエルは凄くやりがいがあったと……えっ。いやいや、うん。ないな。だって、ハネクリボーも見えないし。

とりあえず、知ってる人同士なら笑顔を届けるアンチホープさん。多分もう使わない。ごめんよアンチホープ。そして一つ。間違えた事がある。そう、それはモブAとのデュエルが終わって、目線を人が居る方に移した時だ。デュエルが終わっていたらしい

十代君や翔君。万丈目さんやモブB、明日香さんまでもが驚愕の表情で自分を見ていた事。

「……ああ。最凶の神に見えるのも問題ありでした」

押し黙る皆さんに笑いながら一言。

「なにも見なかった。良いですね？」

快く頷いてくれた皆さんは凄く優しい。うん。やっぱりもう使わないよアンチホープ。だって、目立つから。

解散後、寮に戻る為にデュエル場をあとにする時にやばい顔しているガードマン達を廊下で見た。ホープくんまじ最凶だったらしい。あとから言われて気がついたけどリアルに地面が揺れてたとか何とか。OCGホープ君でも力的なのがあるのか。ガードマン達だけ無視するのも出来ず、見た事内緒にしないと——と口封じもしておいた。少しご満悦で帰る自分の後で、黙りながら付いてきた明日香さんが怖かった。これはなんとか誤魔化さねば。十代は楽、翔は黙らせる事が出来るけど明日香さんはある程度説明しないと色々と疑われてしまう。モブA含め万丈目グループは思い出したくもないって顔をしていたからきつと大丈夫。その日の最後。アンチホープのデッキを封印して寝た。

第4話 束縛されて

「デュエルモンスターズのカードには、モンスターカード。融合モンスターカード。儀式モンスターカード。効果モンスターカード。そして、罨カードと魔法カードがあります。更に罨カードには通常罨。カウンター罨。永続罨。そして魔法カードには通常魔法。永続魔法。装備魔法。速攻魔法。儀式魔法。そして、フィールド魔法と別けることが出来ます」

席を立ち、明日香さんがすらすらと話している事はカードの種類についての説明。仲間はずれは誰かな？

今。授業中。高校というより大学みたいな教室に座ってクロノスさんの顔を見る時間。物凄く眠りたいんですけど頑張ってます。こんなの、確認しなくても……ほら、タイミングを逃すとかさ、高等部だからやりましょうよ。とか言ってもあれですけど。

「非常によろしくンヌツ。オベリスクブルーのシニョーラ明日香には、優しすぎる質問でしたーネツ」
「基本ですから」

ご満悦のクロノスさんとは違い、あんまり良い表情をせず座った明日香さん。隣に座るジユンコさんとももえさんが流石です〜みたいな感じ。ジユンコさんとももえさんというのはジユンコさんが、茶髪の……短めの……うーん。なんて言えば良いのかあの髪。まあ強気のお姉さ……ん？ ももえさんは上品で、長い黒髪を後ろで丁寧に纏めます。纏めた先の髪は良い感じで左右に跳ねてます。それはもういい感じで。お姉さんですね。2人合わせて明日香さんの取り巻きみたいな感じです。特にジユンコさんが。

「ふわあぁ……つと」

眠い。凄く眠い。睡魔さんが隣にいるよ。実をいうと、寝ている系男子だった訳で。ここでは一応頑張ってみようかなって思ってるんですけど……カードの種類についてとか、装備魔法の説明しろ。とか。いや、中等部に組み込めよって感じで。暇なんです。まあ実際、中等部の習った事の復習らしいんですけどね。寝ないように頑張ります。えつと……そうだ。起きたくなる事考えようか。

理由あつて女の姿なのだが、それこそもう女装とかじゃなく骨格から変えられたらしいんだが……ともかく、男が突然、女子の中に混ざって生きていけるのかと言われたら答えは一応 yes だ。人は慣れという最強の能力を持つているため時間さえかかれば慣れる。それに深く関わらなければ男女にも大した違いは無い……と今は思ってる。

女の方がドロドロしてる。なんて聞くがドロドロとか関係なく、男も大概ドロドロしてるのは腐るほど居る。タイプとか見る所が違っただけで慣れれば両方総じて面倒つていうだけだ。

という風に、どうでもいい事を考えて授業時間を潰すのが起きている時の常だったんですけど……暇だ。……もう考えることも無いや。睡魔が……睡魔が……ああ、心地よい……目を閉じて、顔を机に伏せて……。

意識がなくなるのにそこまで時間は掛からなかった。

「ではー。この問題ラー、答えるノーネ」

「……」

「シニョーラー……なんで寝てるノーネ!？」

「……」

「わ、私の授業で居眠りとは恥を、ぐぬぬ……あ、頭が上がらないーヌツ」

起きた時。クロノスさんが疲れてました。何でも居眠りした自分の顔を上げようと頑張つて引つ張り上げてたらしい。気が付かなかった事を考えると睡眠時防御力アップする特殊能力でも備わつたらしい。便利か不便かと言えば当然不便だけど、眠つたら絶対に起きないという鉄の意志と鋼の強さを持てた事を誇りにでも思っておこう。なんて考えていた自分はきつとまだ眠い。

さて。お風呂の時間というものがある。一応。まあその時間内に風呂に入れと。当然ながら自分はその時間帯に入らない。入れない。なので部屋に籠るわけだ。そしてみんなが寝静まったのを確認した後一応隠しながらコソコソと入る。

校長先生に男である件は相談して協力させた筈なのに何かに呪われているのか全く持ってそういう連絡も来ない。速くも憂鬱でくたばりそうな生活。気分はもう完全に素に近い。部屋にも行っていないのに。

「いつまでこんなのか……はあ」

部屋へと向かう廊下を歩きながらポツリ。と呟いた。その少し後に「どうかしたの？」と突然声をかけられ、ビクツと体を震わせつつ振り返る。キョトン。とした顔でこちらを見下ろすのは身長の高い明日香さん。ああ、こちらが小さくなっているのもあいまって凄く高い。見下ろすというか、自然に視線を下に向けないと自分はみられないんだなと気がついて少し何かに傷がつく。

「明日香さんいたんですね。なんでもないです。独り言なので」

「そう？　ならいいけど」

「気配遮断能力でも付いたんですか。ぜんぜん気が付きませんでしたよ」

「私にそんな事を言うのは貴方ぐらいよ。貴方が他人を自分の認識から外す能力でも使っているんじゃない？　眠っていたとはいえ大人に引っ張られてもビクともしない

んだから。……そもそも、授業はしっかり受けるものよ。仮にも学園トップ。模範となるべきオベリスクブルーとしての自覚を持ちなさい。デュエルにしてもそう。貴方には真面目さが足りないわ」

「明日香さんが言った能力デメリットだけじゃないですか。使えても使いません。というか、明日香さんは先生か何かですか。真面目さとか、模範となるべきなんて学生が早々口にしませんよ。そうやって硬いから近寄り難い雰囲気に見えるんですよ」

サラツと言った言葉に明日香さんの肩が少し動いた。何か触れてしまったかもしれない。そう思った後に自分の口を少しだけ呪った。ああ、ダメだって。気分的に今は取り繕うのが面倒だから。

「ま、まあ。クラスに数人はそんな人はいますよ。うん。それにほら、ジュンコさんやかもえさんも居ますし」

「なんで気を使われてるか説明願える？」

「……チョット、ニホンゴ、ムズカシネ。ワーオ」

「私と一緒に今日の授業の分も合わせて勉強しましょうか」

「あー。持病の腹痛が発生する予定を考えたので無理です」

「その言い訳が一番無理」

凄く真面目な明日香さんに話の流れで勉強させられる事になったらしく、もう本人は

やる気らしく、他人にそうやって出来るのは珍しいですしやつぱり人として良い人ではあるんだけどもブルー2割のアリ代表からすると面倒。いややるけどね。

ここでふと思った。こんな出来ている人でもやつぱり今の自分の事がバレたら殺意でも向けるんだらうかと。

「突然ですけど、仮にですよ。女の人が男装して男子校に潜り込んでとかどう思いますか？」

「何よ急に」

「取り敢えず。そんなフィクションが実際にあったとしたらです」

「あったとしたら、その女の子を止めるとか。でも、やつぱり無いわよそんな事」

「女の子を止める……ですよ。これが男が女装して女子寮にとかなら」

「警察」

「ですよー。はあ。それって男の方にどんな理由があれですよ。まだ何もしてないとしても、する気がなくても。信じられませんかね」

「……」

そんな話をしている間にもうお風呂の時間だと言いたげに明日香さんがPDAを確認し始めた。不味いな、取り敢えず離脱する事にする。

「そろそろお風呂にでも行ってきたらどうですか明日香さん」

「そうね。貴方は？」

「自分は少し部屋に用事です」

「気のせいかしら、お風呂で貴方に会ってないのよね」

「気のせいですね。影薄いので気が付かないだけです。じゃあ、これで自分は……」

「ちよつと！ どこにいくのよ」

「どこ行くのつてだから部屋……えっ？」

つい明日香さんだと思つて口にした言葉を何言つてゐるの顔の本人を見て飲み込んだ。どうやら第3の人物が後ろから声をかけて来たらしい。嫌な予感がするけど取り敢えず振り返る。そこには第4の人物まで居た。ジュンコとももえ。明日香さんの取り巻きのポジション。言い方悪いけど。大きな響く声で自分に話しかけてきたのはジュンコさん。

「アンタ。知つてゐるわよ。クロノ……」

「自分は貴方を知らないです。では」

「つてちよつと！ 話は最後まで聞くのが普通でしょ！」

「じゃあこれから自分が1時間にも及ぶ人生に全く意味の無い話をしますけど聞きますか」

「聞くわけないでしょ！」

「強烈な手のひら返し感があります。けど普通そうですね。そういうば今日の授業はどうでした。復習だったから簡単でした？」

「えっ？ 授業。えつと。そ、それは当然よ！ 私は中等部からのエリート！ あんなの余裕よ、よ・ゆ・う！」

「そうなんですネ。凄いですよ。自分は全然分からなくて……」

「分からないって、これだから編入組は。せいぜいしつかり勉強する事ね！」

「はい。じゃあ、少しでも差を埋めるために勉強してきます！ ではこれで。ジュンコ先輩——」

「せんぱつ……ふ、ふん。勝手にしなさいよ」

「では」

物凄く微妙な顔をする明日香さんの横を通り過ぎさつさと帰ろうと歩き出した。何か言いたげな顔だけど、自分からコメントするならジュンコさん割と楽だった。けれど、隣にいる笑顔のももえさんは別だった。

「ジュンコさん。話をはぐらかされてますわよ」

その一言でジュンコさんの関心が一気に自分に戻ってしまった。なるほどいいコンビだ。ちくしょう。

自分の考えに気がついたジュンコさんが怒涛の言葉責め文句連打アしている中、サ

ラッとした笑顔のももえさん。これはジュンコさんよりコッチをどうにかせねばなるまい。逃げる為には。でも相手さんは逃がす気が全くないらしい。

「お勉強もいいですけど、もうお風呂の時間ですわよ?」

「初めましてのももえさん。自分少し部屋に用事が」

「まあ。そうでしたか。どのぐらいかかりますの?」

さり気なく用事がウソかホントか探りに来てますよね。ですよね。

「ちよつとです」

「でしたら、お待ち致しますのでご一緒にいかがですか?」

そう来たか。ええ。

「ももえ!? どういうつもりよ!」

そうだそうだ!。言ってやれジュンコさん。

「どうもこうも。聞きたい事も御座いますし、明日香様と親しげですし。前のお風呂の時間は途中から居ませんでしたわね……」

言葉が途切れる。何を考えているのか。それは次の瞬間、感じた強い気で分かった。良く殺気が飛んでくるだの聞くけれど、それに近い。

「ちよつと!?!」

思わず声が出ている頃には素早い動きでももえさんが自分の後ろに移動し終えた頃

で、そのまま慣れた手つきで胸の方に手を入れられた。くっ、こいつ出来る。

「そ、その手は何故に、つてか早く退かして下さいよ!」

自分の声も、明日香さんやジュンコさんの反応もなんのその。全部無視して動く手に大ピンチ。不味いこれは。「あら?」なんて声を出した時に悟った。この人もしかして……

「なにか、変な気はしたんですけど、もしかして」

「ももえさん。ちよつと離れてくださ……」

「えい!」

「なあ!」

可愛い掛け声とともに女子ならなにも無いはずの所を結構思いつきりいかれた。冷や汗をかく? 走馬灯のようなものが流れる? 多分両方が一気に体を駆け抜ける感覚。ああ、まさかそんなバレ方ある?

「あらあら……おかしいですね。柔らかい」

何も……言えないよ。あー。これも全て、諸悪の根源。クソ天使。奴のせいである。流行り? 興味無いから普通の体で生きる事をさせろよ。

次に起こるのは、察したジュンコさんの怒声が響く瞬間。それから強烈なボディーブロー。現実逃避をしたい今、簡単に意識は落ちた。

目が覚めると、暗い夜の景色。目の前にはいつもの3人と、手を縄で縛られた翔君。ああ、ラブレター事件なんてものがあつたなそう言えばと思い出す。確か……クロノス先生が、入試の時に負けた十代君が気に入らないのであの手この手で退学させようとするイベントの一つ。偽のラブレターで女子寮に誘う計画だけれど間違つてラブレターを翔君のロッカーに入れてしまい、それはそれは大きな、啞えることすら難しい針だけみたいな針に引っかかった翔君が釣られたつて事です。それを明日香さんが利用して十代君釣つてデュエルしようつて魂胆ですね。自分も外に連れ出されている所を見ると餌として使われたと思います。

まあ、翔君と違つて自分はどつから持つてきたか分からない十字架に貼り付けですけどね！

気絶して起きても普通に立っている時と同じ景色が見える筈だ！……はあ。まだ社会的なアレも物理的なアレも大丈夫一応。両方抹殺されていてても可笑しくないよね。なんで貼り付け程度で済んでるんだろうか。1人後悔の気持ちやらに浸る中、目の前では十代君が到着し、翔君が情けない声を出す。こちらをチラツと見た十代君の顔に悲しく笑い返す事しか出来ない。

「アニキ」

「翔、これはどういう事なんだよ」

「それが……話せば長いような、長くないような」

「コイツがね、女子寮のお風呂を覗いたのよ」

「なんだって」

「覗いて無いって！ んっ！」

「それが学校にバレたら、きつと退学ですわ」

この会話。少し懐かしい。そんな事思っている場合ではないけれど。っていうかコッチには触れないの？ 人が貼り付けだよ？ 十字架だよ？ 結構インパクトあると思うけどな。

「……なあ」

「なに？」

「その、そっちは何をしたんだ？」

と思つていたらちゃんと見てくれていた様子。何をしたんだって何もしては居ないけど。その言葉、自分よりも先に待つてましたとジュンコさんがキツイ声を発する。

「こいつは絶対に返さない。こんなやつ最低よ！」

「最低って、本当に何があつたんだよ」

「ありえないわ！」

「だから、何があつたんだよ！」

深夜テンションなのか、神秘でも見えるのか最高にハイでおい、会話しろよ状態。まあ普通に考えたら、女子寮に男が混ざったのに誰にも言わずに隠している状態なんておかしすぎるし発狂して理性と一緒に8割体力持っていかれても不思議じゃないけれど。話を進めたのはももえさんの一言で。

「まさか男とは思いませんでしたわね」

まさかとか暴いた本人がサラツと言う事なのか。

「はあ!」

「え!? どういうことですか!」

衝撃の真実うろって程でも……あるかなイカナ。翔と十代達には結構驚きらしい。

「隠してるわけじゃ……いや、隠してましたけど。深い深い事情があって校長先生にも話は通してるんですよ一応」

嘘はつかずに話してみるも、信じられるはずもないのは重々承知。大切なのは嘘をつかないで話したっていう事。まあそんなはずが無いってジュンコさんがまた騒ぐけれど、結構話すと止まらないタイプで少し驚きです。けど、その驚きなんて次に明日香さんが、十代君に言った言葉で吹き飛びました。

「ねえ貴方。私とデュエルしない? もし私に勝ったら、風呂場覗きの件は大目に見

て上げるわ。それと……もう一つの件も黙っていてあげる」

もう一つの件とはきつと自分の事。まじか、ここまでガチガチの貼り付けされて未来なんてねえよ。と思つたらあつた。明らかに十代君は自分を助ける必要無いし関係ないのに。でも、これはまたとないチャンスでは!?

「本気ですか!?! こんなやつ返す必要ないですよ!!」

「いいのよジュンコ。……理由があるみたいだし」

「ええ〜!?!」

言葉一つ一つに力強い感情を込めて講義するジュンコさんにあつさり系一言で終わらせる明日香さん流石。でも笑顔を絶やさず見つめるももえさんが裏ボスの気がしてならないのは何故。

「何だかよく分かんないけど、まあいいや。そのデュエル、受けてたつぜ」

十代君は話を聞いたつていうか最後のデュエルしろだけ聞き取つてOKした感じ。まあいいや、ついでに助けてもらえるなら。デュエルはノリで湖の上で行うらしく、足場件移動手段のボートへ互いが乗り込み始める。十代と翔が同じボートに乗っているんだけど、どうしてそのまま逃げないんだ。僕が漕ぐつすよとオールを持っているが翔君。そのまま逃げないのか。なお自分は貼り付けのまま放置。趣味じゃないし制服だから夜風が痛い。

「ジュンコ。彼女……彼も動ける様にしてあげて」

完全放置で始まるかと思いきやちゃんと開放してくれた。やった。これで何かあれば逃げ切れる。超嫌々ジュンコさんといつもニコニコなもえさんが開放してくれた。縛られた後が残る手首あたりがヒリヒリする。強めに縛られていた模様。足首も同様に。この十字架の木はどこから持ってきたんだなんて気にしたら負け。

「んっ。」と

軽く体を動かししたり、背伸びをしたり。体の異状がないか確認しつつ、明日香さん達が居るボートに乗った。向こうに行けよな空気のジュンコさんも向こうに乗ったらすぐに逃げ切れると言った自分の言葉で手のひら返し。明日香さんと自分の間に入るジュンコさんはまるで番犬のよう。よしよしとかしてみたい。

当然の如く自分に渡ってきたオールを使ってボートを指定位置まで漕いだら、デュエルが始まった。相変わらずただけどドゥーブルパッセは難しすぎるカード。さくさくつと十代君が勝って終わり、晴れて自由……な訳もなく。

「自分も戻って……」

「いいわけないでしょ!」

ジュンコさんしつこい。当たり前だけど。何から何まで納得いかないらしい。いくら明日香さんが言ったとしても。色々お話で誤魔化すことも考えたけれど、ここはこの世界らしい解決でもしてみようと思う。

「じゃあジュンコ先輩、自分がデュエルして勝ったら見逃してくれませんか？ 負けたらなんでもしますから。お願いです」

言葉にまあ負けないけどねと挑発的な雰囲気も滲ませつつ言ってみる。一秒もかからずにやる気になったらしい。十代達ボートに向かつて2秒で来いと命令するジュンコさんに逆らえる訳もない翔君は二つ返事でボートをこちらに寄せてきた。向こうのボートに乗り移った後、また指定位置まで戻り、十代君からデイスクを借りてデッキを入れる。相手側は既に5枚の手札まで引いて今にもターンを始めそうだ。

「今なんでもするって言ったわよね！」

「ん？ ……はい、まあ」

何させる気だコイツ強調してきたぞ。これは負けられないですね。気合を入れながら、デッキからカードを引いた。デュエルスタートだ。

「レディーファースト。という事で先攻はお譲りします」

「なによ変態の癖に。私のターン！」

「一応貫いはするんですね……」

「永続魔法、レベル制限B地区を発動よ！」

発動された永続魔法はエクシーズが出るまでかなり強力だったロックカード。レベル4以上のモンスターを守備表示で固定するカードでその頃は当然強い。大体のモン

スターが守備になるのだから。鬱陶しかった。制限にまでなる程度には強いカード。あと一つのグラヴィティバインド……だったかな。そんな名前の罠と一緒によく見かけましたね。子供の頃なんて禁止制限も守ってませんでしたから両方3枚あつてゲム止まるとかザラでした。

「そして、海神の巫女を召喚！ レベル制限B地区の効果で守備になるわ」

「……」

海神の巫女 守備力2000

「このカードが存在する限り、フィールドカードが無いならフィールドを「海」として扱う！ カードをセットしてターンエンドよ。」

って何よ。急に黙っちゃって。もしかして突破できないのかしら。そうよね。アンタが入試で使ったデッキも、結局はレベル4以上のモンスターを使ってビートダウンするデッキ。攻撃すら出来ないんだから！」

黙ってしまったのはつい考えてしまうほどに、ある感情が溢れてしまったから。それは艶のある表情になって、嬉しそうな声になって。

「……これは、これはこれは!! イイじゃないですか!!」

それを見たジュンコさんは「へっ?」という言葉が似合うような表情をする。期待していた反応と違ったからというよりは、純粋に自分の反応が変に見えるのだろう。

いや、楽しそうじゃないですか。海神の巫女入った海デッキなんて久しぶりですよ。海神の巫女は海は広い〜な大きい〜な〜ってイメージしかありません。海神さまそんな事を巫女に言わせて何を伝えたかったんだ。

「面白そうなデッキですね！ 良いと思います！」

「……そ、そう。ありがと」

「では自分のターン。ドロー！」

B地区と海ですか。確かジュンコさんのデュエルシーンアニメだとマーメイド・ナイトぐらいしか見た事無いんですね……アトランティスとか来てもおかしくない。というか来ますよね。海神の巫女は入らないと思いますが、入ってるって事は普通とは違う構築なんでしょう。やっぱり楽しそうなデッキです。さて、もう少し動いてもらいましょうか。

「永続魔法、補給部隊を発動。自分のモンスターが破壊されると自分がカードを1枚ドロー出来ます。それでもってカードを2枚セットして終わり。どうぞ」

勢い良くガン伏せエンドで笑顔な自分に拍子抜けというか、それだけみたいなの顔をほぼ全員が向けてくるのが少し辛い。仕方ないじゃないか。地味なデッキだから。もう今は補給部隊頼りです。運命力があれば、補給部隊が割られなかったりしますが大抵すぐにパリんするのが辛いなんの。サイクロン打たれても仕事してる？ はっ。そー

だね。仕事してるね。そのまま押されて負けるけど。依存するのが悪い？　しなくていいなら無くてそのデッキは勝てると思うの。

「それなら遠慮なく終わらせて上げるわよ！　私のターン。手札からアトランティスの戦士を捨てて効果発動。デッキから伝説の都　アトランティスを手札に加え発動。このフィールドはルール上「海」として扱い、効果で互いのフィールドの水属性モンスターは攻守が200ポイントアップ！　更に手札も含めてレベルが1つ下がるのよ。私は手札からレベル3になっているマーメイド・ナイトを攻撃表示で召喚。フィールドの効果でパワーアップ！　海神の巫女も攻撃表示に変更よ」

マーメイド・ナイト　攻撃力1700

海神の巫女

攻撃力900

思わず涙が出る程に懐かしい動きが目の前で展開されていく。ああ、あの頃はこれでも結構強かった。ホントに。っていうかB地区が強かった。なんて昔の思い出に浸っていたが、目の前に迫る女戦士の剣先が意識をデュエルに引きずり戻す。どうやらバトルフェイズに入ってマーメイド・ナイトがダイレクトアタックして来たようだ。全然気が付かなかった。

「直接攻撃は待った！　攻撃してきた時に速攻魔法、スケープ・ゴートを発動です。羊トークンを守備で4体特殊召喚します」

羊トークン 守備力0

正に生贄の羊達。明らかに向こうの方が上なのに壁として召喚されるのは少し可哀想。なんて思いはするけどそんな物。

「なら、羊トークンに攻撃！ このモンスターはフィールドが「海」なら2回攻撃出来る。その時に私は手札から速攻魔法サイクロン！ 対象は補給部隊よ！」

「なっ!? と、隣の罨カードとか如何ですか！」

「1枚の罨より2枚目3枚目の罨やモンスターになるそのカードの方が面倒に決まっているでしょ！」

「くっ、罨にかかってから後悔しますよ……」

まあ罨無いんだけどね。無慈悲にも補給部隊のゴブリン達は爆発四散。わーい。仕事したあ……

マーメイド・ナイトは素早い動きで羊に2体を切り裂いた。それだけでは終わらない。もう1体の羊トークンの中には出来た水の球体に包まれ、中で悶え苦しんで破壊される。

「ついでに海神の巫女でも攻撃したわ。これで壁モンスターも残り1体ね。まさか、それっぽっちで耐えられるなんて思っていないわよね。ターンエンドよ」

耐えられるなんて思っていないですよ。ただ、耐えられたら良いなとは思ってました。

ええ。

「自分のターンドロー。っと……ああ。モンスターをセットして終了です」

「……信じられない。逃げるだけ。また壁モンスター。その場しのぎその場しのぎで生きていけるほど世の中甘くは無いのよ変態!」

「その場しのぎで生きていけないのは良く分かる。でも、うだうだいう前に逃がさないように倒しきって文句は言ってください」

「上等よ! 私の特ターン。手札からレベル3になった水陸両用バグロスMK-3を召喚! フィールドの効果適応で攻撃力は1700よ!」

水陸両用バグロス MK-3 攻撃力1700

とてもハイテクノロジーな飛行機。ってかストラク? ほんとに懐かしいんですが。

まあ、普通に今は不味いモンスターですけどね!

「バグロスは「海」がフィールドだと直接攻撃が出来るモンスター、つまり」

「そう。壁を用意するだけじゃライフは守れない! バトルよ。水陸両用バグロス MK-3 でダイレクトアタック!」

水陸両用ミサイルが壁モンスターをすり抜けて自分の周囲を爆撃する。思わず目を閉じてしまうほどの迫力に、驚きと快感が体を満たす。

自分 LP2300

ああ、ビックリした。驚きのあまり少し後ずさっていた様で。それはつまり脳があの映像を本物だと認識していたという事。正に、デュエルは全身を使つて遊ぶエンターテインメントなのですね、ここでは。

「つはは。これがデュエルですよ！ やっぱり素晴らしい！」

「笑つてられるのも今の内よ！ 海神の巫女で羊トークンを攻撃！」

巫女は羊トークンに向かいロッドを振り下ろす。その時だ。突如煙に包まれる羊。それでも構わず振り下ろされた攻撃を太く逞しい、人らしき腕が受け止めた。煙が晴れるにつれ巫女の表情は青くなつていく。自身の攻撃を受け止めていたのは、何故か全裸のムキムキ男性が頭に羊トークンの被り物をしているような変態だったからだ。それを見て「うおっ」と変な声を出す程。その衝撃は初めて壺魔人をみたそれと同じぐらいだった。

「な、何したのよ！」

「……速攻魔法、ドロ・マッスルを発動させていました。なんて。守備力1000以下の守備モンスターを対象に発動して、自分はカードを1枚ドロ。更に対象モンスターがそのターンだけ戦闘破壊されません」

「また時間稼ぎじゃないの！ なら、そのセットモンスターをマーメイド・ナイトで攻撃よ！」

「残念ですが、セットモンスターは幻獣機ハムストラット。このカードはフィールドにトークンが居ると戦闘効果で破壊されません」

攻撃も虚しく、相手を破壊できなかった事に苛立っているのか見かけによらず可愛らしい仕草で手に持つ剣をブンブンと振ってマーメイド・ナイトは自分の意思を訴える。

「ついでに言えばリバーズした時に攻守0レベル3機械族風属性の幻獣機トークンを2体特殊召喚します」

幻獣機ハムストラット 守備力1600

幻獣機トークン

守備力0

「つ……またそのトークンにも変な効果があるんじゃないでしょうね」

「攻撃すれば分かるなんて言いたいですけれど、何も無い通常モンスターですよ。別に効果は付与されてるけれどトークンは通常モンスター扱いだ。なんて屁理屈は言いません。そうですね、ただのデコイ。罠です。1体でも多く残してくれると嬉しいですよ」

「残すわけ無いでしょ！ 1体でも多く破壊よ破壊。2回目の攻撃で幻獣機トークンを破壊！」

マーメイド・ナイトさん素晴らしい跳躍力で中に舞い、空へ逃げる幻獣機トークンを爆殺。トビウオでもここまでは飛ばない。そして破壊できた事に満足したらしい。と

でもいい表情。なんというか……そう。満足顔だ。

バトルフェイズがこれにて終了。モンスターの数は減らず、こちらが有利と言いたいですが、こちらにも壁が居るだけなのでB地区どうにかしないとバグロスビートで死にます。ライフ、直接、狙う、ひきよう。レベルの無いモンスター？ そんなものは無い。卑怯なのでこちらも卑怯に行きましょう。

「私はこのままターンエンドよ。まあモンスターぐらいなら幾らでも出させてあげるわよ」

「それは有り難いですが……次のターン死にそうですね自分。その手札のカード使わなかったのは罠だったら損だし、ここで無理する必要も無いと温存した。って事ですか」

「そうよ。良くわかつ——つて!？」

「そうですかそうですか。よく分かりました。では自分のターン」

「ちよつと!!」

ドローしながら考える。やはりあったか温存されたカード。それが団結かデーモンの斧みたいな攻撃上昇カードなら怖いですが、少なくとも盤面取り返すブラホとかのカードでは無いでしょう。こういう事はしちやいけない？ 乗った方がアレですし、この世界では心理フェイズがOKなのです。

「ドロー……おっ」

手札に來たカードはお世話になつてゐるカード。サイクロンも1枚使われた後だし良いタイミング。

「カードを伏せて、終了」

特に何も出来ないのでもそのまま終わり。小さく舌打ちするジュンコさん。怖い怖い。「私のターン！ うざりたい！ トークン特殊召喚されるのはもうゴメンよ！ 豪雨の結果像を召喚！ フィールドパワーにより攻撃力アップ」

豪雨の結果像 攻撃力1200

蛙の姿をした石像。召喚されたと同時にフィールド上に雨が降る。ソリッドヴィジョンはプレイヤーにそれを本物と誤認させ、本当に雨でも降っているように感じる。じとじとして、でも濡れてはおらず、なんだか気味が悪い。

この瞬間、この世界にOCG次元が侵略でもしに來ていたのかと思う程に困惑。ソリッドヴィジョンのお仕事にはない。結果像に。特殊召喚メタカード。環境が遅ければ遅いほど先に出るため強く、この頃のスピードなら確かに強い。が。この頃のカードプールとか見れば明らかに注目されないであろうカード。まあアトランティスとB地区のビートは殴るモンスター何でもいって……

「結果像!!」

思わず声を出してしまう程。結果像とは何ていう選択。マジですか。パキケファロ

とかもいる中でこれって事は殴る要員でもあるんでしょうか。

「ふん。知ってるみたいね。このカードが存在する間、お互いに水属性以外のモンスターを特殊召喚出来ないわ!」

「出ましたわ! ジュンコさんの融合メタカード! 別名明日香様対策ですわ!」

隣のももえさんが心底楽しそうに声を発する。どうやら明日香メタ。ああ、サイバー・ブレイダー封じられるね。でも素材の2体には負ける。だからアトランティスとB地区……なのか、アトランティスデッキを使っけていて水属性見てたら見つけたのか。優秀な人でも融合を止めるなら魔法カードを止めればと封魔の呪印なイメージ。普通のこの時代の人を使いそうな融合禁止エリアとか如何にもなはず。だがそれらのカードをスルーして融合を止めるなら特殊召喚を纏めて止めればいいじゃない思考なのはやはり貴様……

「くつ、貴様もOCG次元か。なら自分が相手だ!」

「急に何よ!」

「非道ロック系ジュンコさん、かかって来い!」

「なんか分からないけどムカつくわね。そんなに負けたきや行つてやるわよ! 水陸両用バグロス MK-3 にデーモンの斧を装備して攻撃力を1000ポイントアップ。これで止めよ!」

水陸両用バグロス MK-3 攻撃力2700

「その瞬間！ こちらもロックです！ 永続罫、強制終了を発動！」

発動された強制終了のカード。ソリッドヴィジョンが光り目の前のハムストラットが光となって消えて行く。

「モンスターが消えた？」

「強制終了は、このカード以外の自分フィールドに存在するカードを1枚墓地に送る事で効果が使えます。名前の通りバトルフェイズを終わらせます」

効果を聞いてぽかんとするジュンコさんにニツコリ笑顔。その後ジュンコさんは勢いよく片足でボートの底を踏みつけた。大きく揺れるボートに慌てる明日香さんだがジュンコさんはそれに気が付かない。

「それでも男!? こそこそこそこ逃げ回って！」

「女ならこそこそ逃げ回って良いんですか？ まあ今回はこのデッキだったから仕方ない。大目に見てください。そろそろ動きたいのも本音ですけど……動けないのはジュンコさんのフィールドにあるB地区と結界像のせいですからね。自分がガチガチに固めておいて、動けよとかあがけなんて無理です。DSですか？」

「うるさい！ ターンエンドよ！」

「では、自分のターン」

ドローしたカード。びつくりドキリ面白カード。とりあえず。

「やつと引いたサイクロンで邪魔なB地区とはおさらばです！」

先程は自分の補給部隊を破壊したサイクロンがB地区を木っ端微塵にしてくれた。これでようやく、よくよく動ける。動けると言ってもかなり地味だけど。

「それでは、動くので墓地に送るカードが決まった愚かな埋葬を発動！ このカードはデッキからモンスターを墓地に送るカード。レベルスティーラーを墓地に。そして、フィールドの幻獣機トークン1体を生贄に、鳳凰を生贄召喚！」

鳳凰。その燃え盛る翼を広げ空を赤く彩る伝説の生き物。朱雀。なんて言われ方もする。それをモチーフにしたモンスター。

「スピリットモンスター……な、なんでアンタがそんなの持つてるのよー」

「お、スピリットモンスターって分かりましたか」

「見れば分かるわよ！ スピリットモンスターは幻のレアカードじゃない！ そんなあからさまな見た目してれば見たこと無くても——って、普通見れないのよそんなカード！」

まさか驚かれるとは思っておらず、ああ。そんな設定もあつたなスピリットモンスターとは思ひ出す。たしかペガサスさんが東洋の神秘を見て作つたのかなんとか。鳳凰は確かにそれっぽい見た目ですしすぐ分かるのかな。いや、初めて見たのに分かる程

なのか。それともデュエリストの感とでも言うのか。

「では伝説の効果。相手の伏せられている罠、魔法カードを全て破壊します！」

「伏せられている……なら、罠カード。グラヴィティ・バインド―超重力の網―を発動」
「またそんなカードですか！」

鳳凰の破壊効果は効果解決時にセットされた罠、魔法カードを全て破壊。相手はこれにチェーンして永続罠を発動。発動すれば当然表になり、逆順処理でこちらの効果が発動できる頃には既に表側なので破壊されない。慣れてない人だと分かんないらしい。このカードの効果が発動した時は裏でも解決時に表だから無理。意味が分からん。

あくまでも鳳凰の場合ですが。と言うのも似たような文章でも違う場合や、全く同じ文章でも処理が違ったりする物もあります。挙句の果てには調整中ですからね。作った本人も分からないような効果を持つカード。あ、それ遊戯王じゃん。神のカードとか確かそんな感じ。怖いね。

「グラヴィティ・バインドはレベル4以上のモンスター攻撃を封じるわ。貴方に攻撃の権利は無い！」

「逃げるな攻撃するな潔くやられろですか」

「そうよ」

「うわあ……」

迷い無い。でもホントに、懐かしいけど強いってかうザイなレベル4以上縛るの……
 レベル&ランク対応してるB地区とグラヴィティ・バインドでたらどうなりますかね。
 きつとこの頃のB地区思い出して歴戦のデュエリスト達はやっぱりB地区とグラヴィ
 ティはウザかったわってなるのか。所詮永続罨魔法だから割ればいいってなるのか。
 当然自分は前者。

鳳凰の攻撃が出来ないから結界像も倒せない。更に言えば墓地のステイラーも出
 せない。ごめんよ、過労死させられなくて。

「このままターンエンドすると負けてしまうので、素直に手札から月の書を発動して豪
 雨の結界像を裏側守備に」

雨降らし蛙は神祕の書物の効力でひっくりかえって効果を失った。本当は防御用で
 欲しかったカードだけれど仕方ない。もう頼みの綱は強制終了のみ。

「豪雨の結界像が裏側になったので水属性以外の特殊召喚が可能です。墓地に存在する
 レベルステイラーは自分フィールド上のレベル5以上のモンスターを対象に効果を
 発動できます。対象モンスターのレベルを1つ下げてこのカードを特殊召喚出来ます」

レベルステイラー ☆1 守備力 0

鳳凰

200

☆5 攻撃力 2

「また壁モンスターね」

「この壁モンスターはちよつと特別で、壁にもなれますが……普通これが入ってるデツキなら壁として使う前にこいつが墓地にいるとデュエルが満足し始めたり、なんだかなだ。まあ今は壁って認識で問題ないです。ターンエンド。エンドフェイズ時に鳳凰は手札に戻ります」

全然後悔してないし。砂塵だったら結界像も破壊できたけど鳳凰で良かったし。

鳳凰さん羽根帚効果で良くないかな……

「私のターン。なによ。あんたのデツキ。何も出来てないじゃない」

「何もさせてくれないジュンコさんに拍手ですよ。こればかりは本当に」

「それ負け惜しみ？」

「負けてないのでなんとも。ただですね……いうほど絶望って訳では無いです。むしろ、楽しいぐらいですよ」

「ふん。その口も、強制終了のコストもいつまで確保できるのか見ものよ。反転召喚、豪雨の結界像。バトル。バグロスでダイレクトアタック」

「強制終了でいつもお世話になってますステイラーさん墓地へ」

「さあ、ターンエンドよ」

「では……ドロー。おっ」

ドローカードは結構いいカード。色んな意味で。

「和魂を召喚」
にきたま

ポッ。と現れた薄ら笑いが浮かぶ青い炎の玉。スピリットモンスターだが今度は何も言われない。まあ、ただの色違い火の玉ですからね。

和魂 守備力1800

「和魂が存在する限り、1ターンに1度。通常召喚に加えて1回スピリットモンスターを召喚できます。そのまま和魂を生贄に鳳凰を召喚！」

再び現れた伝説。鳳凰のかぜおこし。効果はないようだ……

「ふん。攻撃も効果も使えないのに召喚？」

「はい。鳳凰つてより墓地に送られた和魂の効果使いたいですね。和魂は墓地に送られた時、自分フィールドにスピリットモンスターが居るとカードを1枚ドロー出来ます。ドロー」

割とこのドローは大切。と少し気合を入れて引いたカード。切り札とも言えるカードを引いて思わずほくそ笑む。ああ。モンスターで戦うデッキは素晴らしい。生憎と切り札つてモンスターが出てませんが次奪えれば良いです。

「羊トークンを攻撃表示に変更！」

羊トークン 攻撃力0

「さあ、交換しましょうか。手札から魔法カード、強制転移！」

「そのカード……」

「互いに自分のモンスターを選んで相手に渡す効果です。等価交換です。自分からは可愛い羊をプレゼントですよ」

「どこまでも……私は、海神の巫女を渡す！」

「毎度あり。では、貰ったので使いましょうか。魔法カード、ミニマムガッツを発動！
鳳凰を生贄に捧げます」

「えっ」

伝説は光になった。仕方がない。攻撃できないから。

「そして、相手の水陸両用バグロス MK-3を選ぶ。選んだモンスタアの攻撃力が0になります。さて、ではバトルに入りましょう。海神の巫女で羊トークンに攻撃！」

ここまでの流れで周りの人は十代君を除いてポカーンとしている。いや、正確に言えばジュンコさんは怒ってる。海神の巫女はきっちり羊トークンを破壊してダメージを与えるけれど自分がダメージを受けたというのにリアクションもせずにコチラを睨み続けるぐらいには怒っている。

ジュンコ LP3100

「ホントに馬鹿にするのもいい加減にしなさいよ!! これでアンタの攻撃は終わったの

よ？ 攻撃モンスターも居ない、私のバグロスと結界像も残ってる。次のターンにダイレクトアタックで——」

「……えっ。まだですよ？」

「——はっ？」

「あつ。それっぽく言うタイミングを逃した……けど良いです。まだ、俺のバトルフェイズは終了して無いぜ！ 速攻魔法発動！ エネミー・コントローラー！」

お怒りの言葉を沈める速攻魔法。伝説のコントローラーが起動する。

「エネミー・コントローラー……？」

「自分のモンスターを生け贄に捧げ、効果発動！ 相手のモンスターをこのターンのみ自分の物にする！ 海神の巫女を生贄に、今度はマーメイド・ナイトを頂きましょうか！」

巫女と変わるようにマーメイド・ナイトがこちらのフィールドに移る。剣先は空中で待機している機械に。

「バトルフェイズは終わってません。攻撃宣言を行っていないマーメイド・ナイトは攻撃できます。では」

ビシッとバグロスに攻撃宣言。マーメイド・ナイトはもう1度飛んでくれると思っていたけど、手に持った剣をぶん投げた。クルクルと回転しながらバグロスに直撃し爆

発。剣はそのままブーメランの様に手元に戻り、綺麗にキャッチ。思わず「おー」と声を出して拍手。

ジュンコ LP1400

またしてもダメージを無視してコチラを睨む。怖い。何故か胃薬をあげたい。そんな顔をしている。

「もうここままでやられたら、何も言わないわ。けど、悪足掻きよ！ 二回目の攻撃で結果像を破壊しても私のライフは残る。貴方の手札はもう無い」

「ジュンコさん。上」

「上？ 何のことよ」

ジュンコさんの上方向。丁度バグロスが爆発四散した場所から、パーツの破片が下へ降り注いでいる。

「ミニマムガッツのもう一つの効果。この効果で攻撃力を0にしたモンスターを戦闘破壊した時に、破壊したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを相手に与えます」

「……」

「バグロスの元々の攻撃力、1500ポイントのダメージを受けてもらいましょうか！」

次の瞬間、響いたのは大きな声。

「いやああああ!!」

そして静かにライフホントが0になる音。満面の笑みな自分とは違い、なにか酷い悪夢でも見ているようなジュンコさんは、ガクツと膝を落とした。

ボートから地上へ戻る。その途中でもしつこくジュンコさんは突っかかってきて。

「なによ最後！ ぜんつぶ私のモンスターじゃない！」

「あゝ。強かったですよ」

「当たり前で——って違う！ そんな反応は求めてない！」

「求めた行動をしろとですか。人生は上手く行かないものですよ。プログラムじゃないんですから」

「色々と納得出来ないのよ！ 私のモンスターが居なかったら勝てなかったのよ。つまり私の勝ちみたいなものじゃない！」

「機械判定でこつちが勝ちですからどうにも。まあジュンコさんのお陰で勝てたのは本当ですから、素直にありがとうございます。気持ちだけなら勝ちを譲りましょう。おめでとー。重ねておめでとー」

「やっぱり私を馬鹿にしてるのよね。はいそうですって言いなさいよ。言え」

「命令形!？」

「その瞬間ボートごと落としてあげるわ」

「怖い怖い……」

途中からいいから沈めと遠回しに言ってくるジュンコさんの言葉を聞き流しながらブルー女子寮に到着。この際だからと、そのままボートに乗ったまま帰ろうとしていた十代と翔も下ろして事情を説明することにした。よく分からんが何かの手違いで女子として入学させられた事。男だつて事を校長が知っていること。その上で女子寮で誤魔化せと本人に言われたこと。等々。

正直な話。信じるという方が無理。けど、頑張つて説得した。ジュンコさんはやれ「性別間違えるとかあり得ないでしょ変態。わざとに決まつてる」とか「校長先生まで変態にしないでくれる？」アンタが男だつて知つた上で女子寮で誤魔化せなんて言うわけないでしょ」とか。ごもつともでございます。返す言葉ありません。だが無理やり押し通した。それは隣の明日香さんやもえさんのフォローがあつたからで。

「良いじゃないの。私は悪い人には見えない——わけじゃないけど。大丈夫よ。そんな気がするわ」

「明日香さん!？」

「着替えが必要な体育は全て休んでましたし、お風呂も時間をずらしていたわけですし、いちやダメな時には居なかつたですわね。それに、女子寮で誤魔化せと言われて一番困つたのは彼本人ですわ」

「ももえまでコイツの味方するわけ!？」

こつちも味方してくれるなんて思つて無かつた。何故だろうか。

「ふふふ」

ずつと笑つてるももえさんが氣になつて仕方ない。なんで味方？ 明日香さんが自分側なのも多分、この人と話をしたからじゃないか……と思うんだが。余計に何故、ももえさんはこちらの味方なんだ。初めましてだよ今日。

結局、秘密は秘密にしてもらい、社会的にも生きる事が出来た。部屋に歸つた時には疲労からそのままベツトに。次の朝、ドンドンドン。とドアを叩く音が。というか次の朝から毎朝だ。しぶしぶ開けるとジュンコさんとももえさんが居る。どうやら変な事をしないように見張つてくれるらしい。とてもじゃないが、これが毎日続くとすると面倒だ。全ての元凶を強く強く、ぶん殴りたかつた。

第5話 慢心はダメ

「うう、眠い。やっぱり学校の授業は寝むりますかね」

今日も今日とて授業を受ける。まあ、学生の時間の大半は勉強だ。最初の頃こそ懐かしい感じだったけど今となってはあの頃の気持ちに蘇る。そう、面倒だ。元の世界で学生の頃は割とよく寝ていたし2回目という事で、ちよつと気を抜くと直ぐに飽きが来て睡眠魔が襲う。

「というわけでしゅて……なに寝てるのーネー！」

何故かクロノス先生の授業だと眠りに落ちるのが早く、授業の大半記憶が無い。今はあるけど軽い復習だし、クロノス先生からの評価は入試の時から悪いのでそのまま眠る事に。

「無視ですか、聞こえてますか!?　ぐぬぬっ、本当になんでブルーがこんななのーネー……！」

「ちよつと、ブルーなのに居眠りよ」

「しかもテスト前にとは」

周囲の声も既に聞こえず、次に意識が戻ったのは授業終了の合図があった時。何もか

もが懐かしいなんて感情も薄れて学生の気分そのもの。授業も受けとけばよかったゝなんて思い出してた筈の自分は消えてしまったらしい。

「あゝよく寝ねました」

起きた後にだらけた声を漏らして睡眠の心地よさに浸る程に。なるほどな、授業中の睡眠はこれまた違った何かがある。今なら分かるぞ。休みに眠るのは違う。なんてあの頃とは少し違う事も一応感じたり。身体は戻っても心は……いや、でも心なしか学生の頃に考え方とか戻っている気がする。人は環境によつて変わるって言うけどこういう事ですか。そんな事を思いながら机の上でぼーっとして自分の後ろに人の気配が近づいてくる。振り返ると何やら良くない顔をした明日香さんが。

「……テスト前に居眠りね。大丈夫なの？」

あ、きつと怒ってる。

「明日香さん？ おはようございます」

「おはようじゃない。テスト前に眠っているのは貴方ぐらいよ。もう少ししっかりして！」

「おー……明日香さん、あちらの方は？」

さつと十代の方を指差した。十代は終わったあとで寝ている。しかもまぶたに目を書いてるので相当眠りたかつたんだろう。明日香さんはため息を強く吐く。そして今

は貴方の話。と話を戻された。

「十代はともかく、貴方はブルーなのよ？ 何度も言うけど、常に上にいる自覚を持つてちょうだい。私達オベリスクブルーは皆の模範になるようにしなきゃいけないわ」

「上にいる意識……ですか」

まあオベリスクが一番上で成績優秀だ。って分かるように色分けされているわけですし言葉は何一つ間違つて無い。しかしだ。言い訳なんてした方が不味い展開になるとは知つていたけれど我慢出来ずに口が開く。

「でも、基本女生徒は実力関係無くブルーですよ。上になりたくてなつてる訳じゃ——いや、何でもないです」

途中で会話をやめたのは明らかに明日香さんが不機嫌になったからで。

「そうよ。あなたの言う通り。間違つているなんて言わないわ。でも、だからなに？ だから、だらけても良い。そういう事かしら」

「あつ、いえ、それは……」

「ただでさえブルー女子は甘く見られてるのに、貴方みたいに居眠りなんてする人が増えたらまた男子達に所詮ブルーでも女子は女子。遊びに来てるだけ。なんて言われるのよ。……ええそうね。貴方には関係ないかもしれないけど、『女子』がどう見られたって、関係無いわよね！」

「あ、明日香さん怒らないで下さいよ!」

「怒ってない」

怒ってない。と静かに言ったけれど、顔と雰囲気明らかに怒っている上に最後の方は男の貴方には関係ないんでしょって遠回しに言われている。相当怒っている。それでもって100%こっちが悪い。やはり黙って謝っておくべきだった。けど言ってしまった言葉は取り消せない。それによつて怒ってしまった明日香さんの考えも当然消せない。

「居眠りなんて出来るんだから、相当余裕なんでしょうね。なら、良い考えがあるのよ。次のテストで、成績優秀者に入らなかつたらあの事を話すわ」

「なあっ!」

思わず立ち上がってしまうほどに驚く。さっきの自分を恨む程に。それだけはお勘弁をと言つては見たけれど、「なら頑張ることね。じゃあ」と返され明日香さんは教室から姿を消した。

「……そうだ、テスト勉強をしよう」

多分、前の世界も含めて。生まれて初めてテスト勉強を頑張ろうと思った瞬間でもある。

部屋に帰り、机に向かい、テスト勉強と称してデツキを広げてもなんら問題ないとは

本当にいい世界だ。と嘯み締めながらカードとにらみ合う。普通の勉強なんて教科書でも読んでいれば中ぐらいには行ける。基本的には暗記なのだから。まず筆記は普通レベルで取れるだろう。だが問題は成績優秀者まで行かねばならないと言う事実。まあ月1つという頻度でやっているテストなので結構評価の付け方が緩く、デュエルに凄く凄く点数がつく。勝つのは当然として出来る限りライフを減らさずに倒したい所だ。って言いながら足元救われて負けは恥ずかしい。とか考えながら1人回しもしつつ最終的にはデツキ候補がいくつか上がった。

「……これぐらいで、きつと大丈夫。うん」

時計をちらつと見ると夜の10時。まだ3時間ぐらいしか弄っていないけれどこれ以上カードをいじり始めると普通に朝日が昇ったりして怖い。まだテストまでは数日ある。今日の所はこれぐらいで終わろうと大きく伸びをする。そして後ろのベットの方へ視線をやると何とも心地よさそうにジュンコさんが寝ているではないか。ベットから少し離れた所では椅子に座りながら優雅に紅茶を飲んでいるもえさん。こちらに気がついて、終わりましたか? と言っている様に首をかしげる仕草で訴えてきた。

実はとある日を境に見張り役という事でブルー女子寮内にいる時はこの2人が自分について来るのだ。いや、こちらとしては有難いけど有り難くない。部屋にまで入ってきたのは最初は驚いた。五月蠅い人曰く「カメラでもあるんじゃないでしょうね? 調

べてあげるわ！」だそうな。

ももえさんに終わつたと手を振つて合図を送る。お疲れ様と差し出されたティーカップを手に取りひとくち。詳しくはないけど美味しいってことだけは分かる。とても美味しい。コンビニのお茶がいつもである庶民の感覚では未だにそれ以外の感想は浮かばないが。香りはいいい香りで味はいいい味だ。

「とても美味しいです」

「それは良かったですわ。ジュンコさんの飲み掛けですけど」

「それでも美味しいのは変わりませんよ」

「……」

自分の一言で何故か黙つてしまわれたので、どうせ嘘でしょ。と軽く言うとはレましたか。なんて笑つて返してくれた。なんにせよ美味しいお茶で水分を補給したら後は脳にエネルギーを入れたい。結構考えた後は欲しくなるのだ。

「ほう……あー、甘いもの食べたいよ……」

考えなしに言葉を吐いてしまうとダメだとわかつていたのに気が抜けたような言葉が出る。

「甘いもの、ですか。今部屋から——」

「あー！ 違います、そんな意味じゃないです！ このお茶だけで十二分ですから！」

「——遠慮しなくても宜しいですわよ？」

「遠慮します。見張りなんて面倒な事をさせてるだけでもこっちが迷惑かけてるのに。それに、ほら。変に良くされると色々と疑うタイプですから自分が。適当に見張るだけで疑われている方が、逆に楽です」

「あらあら、それなら大丈夫。変に良くするつもりはありません事よ。きっちり何かは貰うつもりですわ」

「なおさら遠慮させてください。……ホントに、あそこで寝てる人みたいな対応でいいというか、アレで正解ですから」

「先程もそうでしたけど、そう言う考えは口にしない方が宜しいのでは？」

「……あ」

全く持つてその通りだ。話してしまうと色々台無しだろう。前の世界ならば今この瞬間に終わりを感じたかもしれない。けれど、今は感じない。何故だろうか、特別ミスしたとも思わないのだ。思い返せばこれだけじゃない。この世界に来てから完璧にキャラを作れてない。最初の2、3戦のデュエルは本当にヤバかった。抑えられるようにはなつて来たがデュエルをする度おかしくなつてる気がする。こう、謎の何かを感じて芝居がかった台詞を言ってしまうのだ。身体の変化もあつて変化した自分を無理やり受け入れられるけど。むしろ、このまま、この調子でいっても良いかもしれないとか

思うけど。本音が漏れていつてるのは、普通に考えてダメなんだけどね。

「自分のお部屋で、疲れもあつて気が抜けているのですわね。思えば、一人でゆっくり出来ていた空間はここだけですよ。自分の部屋。出来るだけ早く……本当の意味で自分だけの空間を持てると良いですね」

「……それだけ？」

「それだけ。とは？」

「いいえ、なんでも。確かに今のままだと寝る時しかくつろげませんからね。お陰様で疲労からか6時間しか眠れてませんよ」

「あらあら、それは大変ですよ」

「やつぱりももえさんは強そうだな。なんて思いながら、笑った。この後少し小話をしているとすっかり時間は就寝時間に。相変わらず自分のベットは占拠されているのだが。」

「もうこんな時間ですわね。ジュンコさんは……添い寝します？」

「御免こうむります。連れて帰ってくださいな」

「殿方はこういうのに興味があるものでは」

「今この時では絶対に無い」

「……失礼でしてよ」

「無い」

「……」

「無い」

「即答は——」

「無い」

大事な事なので3回。そこから無言の視線で軽いデュエルを数分。面白くないと拗ねたももえさんは仕方なさそうにジュンコさんを起こした。そして、うとうとして目を擦るジュンコさんを連れて部屋を出ていく。一応、部屋の外までは見送りに。廊下まで出て、少し歩いてすぐにももえさんが振り返った。それから何処からともなく取り出した小さな袋を一つ渡された。これは。

「飴玉？」

「甘いものですわ。少しの間ですけれどゆっくりして下さい」

「……ありがとです」

「ではまた明日。ごきげんよう」

レモン味の喉飴。甘い…か？ いや、そんな問題じゃない。そこに文句なんて言わないし言えないし。これをくれたって事に意味がある。大いに。さっそく袋から出した飴玉を口に放り込む。飴玉自体久しぶりだ。

「んっ、甘い」

気分も良くなつて頭もまた回るように。今の調子なら大丈夫。最後に1回ぐらいは調整するか。と再びデツキを広げた。

デツキを弄ると気がついた時、太陽が昇つていたなんていうのは、良くある事だ。

□□□□□□

「あっ」

時間は流れ今日はテスト当日。時間を見るとあら不思議。これってテスト始まつてる時間。今現在自分の部屋。これはつまり。

「……最近眠れてなかったから、うん」

自業自得だし、誰に言ったかも分からない言い訳を零しつつも、ゆっくりと準備を始めた。途中十代君と一緒に、教室についたのは試験時間を半分過ぎようかという頃。恥ずかしさや後悔でヤバかった。

最初は色々だったものの、無事に筆記が終了。流石に一度やった事ある筆記達は簡単だった。ただし錬金術。てめえはダメだ。一応科学みたいなもので暗記暗記で楽だったけど。けど、やっぱり悩んだ。答えあつてたかなこれってなる。

「ちよつと、遅れてくるなんてやる気あるの？」

終了後の休憩時間。怒られている今。誰につて言われたら明日香さんですよはい。

「いやゝ。デツキ調整してると睡眠時間が削れて削れて」

「貴方は自分の状況を考えて行動出来ないのかしら」

「なんとかなるかなゝ、的な」

かるゝい感じで返すと、なにやら意味深な視線を向けられた。

「簡単に行くと思わない方がいいわ」

そう言葉を残して明日香は去っていく。どうにも引つかかる。そう、なんとなく予想ですけど実技の相手が分かりました。なんて、なんて面倒な。会場に向かいながらデツキの最終選考。用意した三つのデツキ。どれで挑むかと考えてたら会場について、ようやくデュエルの時間だ。対戦相手の前に立ち、深々と一礼。相手さんはとてゝも怖い顔。

「自分から気合入れ直しに来たって事ですか」

「そういうこと。貴方のやる気のなさがなければこんなことしなかったわ。諦めてちようだい」

「ほう。諦める。何をですか？」

「……言っておくけど。私は強いわよ」

「それは、願ったり叶ったりです。では、先攻ですがお譲り致します」

「……」

「舐めてるとかでは無いです。自分がそうしたいだけで。当然断れますよ」

「やる気は、あるのよね」

「はい」

「……なら、行くわよ。私のターン！」

明日香さんのデツキ。油断出来ない。この世界に来て自分が生んだであろう歪みも含めてだ。例えばそう。

「サイバー・プチ・エンジェルを守備表示で召喚」

サイバー・プチ・エンジェル 守備力200

「召喚された時、サイバー・プチ・エンジェルの効果が発動するわ。デツキから「機械天使の儀式」か「サイバー・エンジェル」と名のついたモンスターを手札に加える。私は機械天使の儀式を選択」

これだ。カード効果が変わっている。侵食されたとしても言うべきか。侵食させてしまったと言うべきか。こんなカードがちらほらある。それ以外にも多少カードプールの変化がある。一番に驚いたのは強欲な泡男が侵食されていた事で。まあ十代君はベスタタイミングで引くからさほど影響は無かったですが。

「カードを2枚伏せる。さあ、貴方の番よ」

控えめの展開。様子見か。コチラもドローしたカードを含め様子見した方がいいか。

「自分はエッジインプ・チェーンを召喚!」

エッジインプ・チェーン 攻撃力1200

「このままバトル。エッジインプ・チェーンは攻撃した時にデッキから同名カードを手札に加える効果があります。よって、2枚目のエッジインプ・チェーンをデッキから手札に加えます。このままカードを2枚セットして終了」

「私のターン」

今伏せてあるセットカードの1枚はツインツイスター。手札1枚をコストに罠魔法カードを2枚破壊するカード。あのセットカードがなんであれさっさと発動しておきましようか。どうせバックは全部剥がさないと動きにくいし。

「明日香さんのターンが始まった時、セットしてある速攻魔法ツインツイスターを発動します。手札を1枚捨てる事でフィールドの罠、魔法カードを2枚まで選んで破壊! 当然、セットされた2枚のカードを破壊します」

表向きになり破壊されて行くカード達。まあこれでこつち有利。なんて思っていたが。

「破壊されたのは、エンジェル・ウィングと機械天使の儀式よ」

「……機械天使の儀式、だと」

「私は破壊されたエンジェル・ウイングの効果。フィールドからこのカードが墓地に送られた時、デッキからカードを1枚ドローする」

カードをドローして、得意げな笑みを浮かべる明日香さん。ブラフとは……くつ、地味に面倒だ。

「手札から魔法カード、儀式の準備を発動。このカードはデッキからレベル7以下の儀式モンスターを手札に加える。その後、墓地に儀式魔法カードがあるなら1枚を選択し手札に。私はデッキからサイバー・エンジェル―弁天―、墓地から機械天使の儀式を手札に」

ただのブラフじゃなくて成功したら少し強い感じの……いや普通に強いんですけど。あのブラフに釣られたのは痛いっていうか不味い気が。ツイツイ打って損した気分になるのは久しぶりだ。やはり我慢するべきだったと結果論。

「続けるわ。私は手札の魔法カード、テラフォーミング。フィールド魔法をデッキから手札に加える。そして加えたフィールド魔法。祝福の協会―リチュアル・チャーチを発動」

模範解答の様なカード捌きで次々に新たなカードが展開されていく。フィールド魔法の発動により辺りは協会の内部へと姿を変えた。

「祝福の協会―リチュアル・チャーチの効果。墓地に存在する魔法カードを任意の枚数デッキに戻し、戻した数と同じレベルの墓地にある天使族・光属性モンスターを選んで発動。そのモンスターを特殊召喚する。私は墓地の儀式の準備とテラフォーミングの2枚を戻す。特殊召喚出来るモンスターはレベル2。再びサイバー・プチ・エンジェルを特殊召喚」

「その時、手札からモンスター効果発動！ 増殖するGです。このカードは手札から捨てたターン、相手が特殊召喚する度にカードを1枚ドロウ出来るカード。今、サイバー・プチ・エンジェルが特殊召喚されたのでカードを1枚ドロウします」

「続けるわ。その効果でサイバー・エンジェル―茶枳尼―を手札に加える」

ひしひしと伝わってくる感覚。ああ、なんだこれ。めっちゃ楽しい。全然手札減つてないような気がします。本当に明日香さんのデッキ？ 融合しないの？

「機械天使の儀式を発動！ フィールドのサイバー・プチ・エンジェルと手札の弁天を生け贄に、サイバー・エンジェル―茶枳尼―を儀式召喚！」

4本の腕で巧みに武器を扱うサイバーガールモンスターの1体。記憶が正しければ一番強いカード。

サイバー・エンジェル―茶枳尼― 攻撃力2700

「ドロウします。で、それ。儀式の中で一番強いカードですよ」

「どうかしら。サイバー・エンジェル―茶枳尼―が儀式召喚に成功した時、相手はモンスター―体を墓地に送らなければならない。更に生け贄になった弃天の効果発動。デツキから光属性・天使族のモンスターを手札に加える。私はデツキから紫^{ヴァイオレット}光の宣告者を手札に」

覚えてないが嫌な事しかないのだけは覚えているデクレアラ―のカードを加えられた挙句にエツジインプ・チエーンが墓地に送られた。壁モンスターもいない。けど。「エツジインプ・チエーンのもう一つの効果。このカードが手札、フィールドから墓地に送られた場合に「デストロイ」カードを手札に加えます」

「サイバー・エンジェル―茶枳尼―がいる限り私の儀式モンスターは貫通効果を得る。もっとも今は関係無いけど。バトルよ。茶枳尼でプレイヤーにダイレクトアタック!」

自分 LP1300

「私はターンエンド。エンドフェイズに茶枳尼の効果で墓地のサイバー・エンジェル―弃天―を手札に加えるわ」

明日香さんはそう言いながら2枚のカードを伏せてこちらのターンに。長引かせたら絶対に負ける。……ライフ4000なら、行けるか。テストだし速攻で行こう。

「さて。それでは今回の主役をご登場させたいと思いますよ。役者は揃いましたし。魔法カード、シャッフル・リボーン!」

その効力により地面から這いずり出てくる歪な人形。継ぎ接ぎだらけのパーツ。紙や便、鉛筆などを無理やりにくっ付けて出来ている体。

「さあ、現れでちやえ。エッジインプ・DTモドキ！」

DTモドキ 守備力1300

エッジインプモンスターの中でも特殊なそのモンスター。周りからの声は悲鳴だろう。

「なっ……なに、そのモンスター」

「可愛いぬいぐるみですよ。それが更にっ！ 追加です。地獄の暴走召喚！」

続けて発動した速攻魔法の効果でデッキから更に2体のDTモドキがフィールドへ。

「そして、融合」

3体のDTモドキが神秘の渦の中で一つの新たな命に変わる。世にも恐ろしい化け物に姿を変える。

「DTモドキは、デストロイモンスターとして扱う！ 3体のデストロイモンスターを素材に、現れでちやえ。全ての玩具の結合魔獣。デストロイ・マッド・キマイラあ!!」

そのモンスターの巨大さを見るものを怯えさせた。破れ綿が漏れているような人形が3体合体した趣味の悪い姿。元の人形が可愛らしいだけに一層の事不気味で悪趣味に見える。

デストーイ・マッド・キマイラ 攻撃力2800

「なんなのよ、それ！」

「あー。人形？　ぬいぐるみです。悪魔を宿したぬいぐるみ。子供心に宿った悪魔。残酷って言葉をイマイチ理解出来ない子供は残酷な事をしてても気が付かないし気にもとめない。無邪気って事です。いろいろな意味で可愛いカードでしょ？　当然ながらに、効果だけは超強力ですよ」

効果だけ。と心で呟く。ほんとにね。

「まあぬいぐるみですから、1体だけとは限りませんね。手札から魔法カード、デストーイ・サンクチュアリ！　このカードは手札を1枚捨て、融合デッキから「デストーイ」融合モンスターを2枚墓地に送って発動できる永続魔法。送るカードは手札からエッジインプ・チェーン。融合デッキからデストーイ・シザー・タイガーとデストーイ・チェーンシープ」

マッドキマイラ専用のカード。デストーイ・サンクチュアリのお陰で助かったではあるが、同時にマッドキマイラの生きる道はファーマニマルでは無いとも思わせてくれたカード。

「墓地に送られたエッジインプ・チェーンの効果で、デッキから魔玩具融合を手札に加えます！」

デッキが回る。これ程心地いいことは無い。

「まだまだ！ 手札から魔玩具融合を発動！ このカードは墓地のモンスターを除外する事で融合出来る。墓地に存在するデストロイ・シザー・タイガーと、エッジインプ・チェーン2体で融合！ 全てに牙向く魔界の猛獣。デストロイ・サーベル・タイガー！ サーベル・タイガーが融合召喚に成功した時に墓地の「デストロイ」モンスターを特殊召喚出来る。再び、エッジインプ・DTモドキを特殊召喚！」

連続融合で合計3体のデストロイがフィールドに。周囲の悲鳴はもはや無く、皆が押し黙る中、1人だけ笑っていた。

「エッジインプ・DTモドキは1ターンに1度、フィールドか墓地の「デストロイ」モンスターの元々の数値になる。当然、マッド・キマイラをコピー。更に、サーベル・タイガーが存在する限り「デストロイ」モンスターの攻撃力は400ポイントアップする！」

マッド・キマイラ 攻撃力3200

サーベル・タイガー 攻撃力2800

DTモドキ 攻撃力2800

「攻撃開始ですよ！ マッド・キマイラでサイバー・エンジェル―茶枳尼―を攻撃！」
「くつ、でも。伏せカードを無視するなんて――」

「マッド・キマイラが攻撃する時。ダメージステップ終了時まで相手はモンスター、魔

法、罨カードの効果を発動出来ない！」

「そんな！」

「ペしやんこになっちゃえ！」

マッド・キマイラから発射されたミサイルが茶枳尼を襲う。爆発で土煙の様なものが発生して明日香さんのフィールドは見えなくなつた。気分が最高だ。マッド・キマイラを出せた事。そして攻撃して効果を発動したこと。さらに加えて相手の切り札である事！

「ははは！ 茶枳尼撃破です。その瞬間——つて!？」

思わず漏らした笑みが消える。フィールドを覆う煙をかき消したのは、サイバー・エンジンジェル—茶枳尼—。つまり。

「破壊されてない？ 馬鹿な、カードの効果は発動出来ないはず、守るカードなんてないはず！」

「墓地の機械天使の儀式は自分フィールド上の光属性モンスターが破壊される代わりにゲームから取り除く事が出来るわ。これは大丈夫みたいね」

「あつ……」

「ダメージは受けるけれど、茶枳尼は破壊されない」

明日香 LP3300

「ま、まだ攻撃は終わってないですよ！ DTモドキで茶枳尼に攻撃！」

「焦って攻撃なんて……伏せカードを忘れてるなんて言わせないわよ！ 罨発動。ドゥーブルパッセ！」

「しまった!!」

当然攻撃は止まらない。DTモドキは果敢に特攻していく。

「攻撃表示モンスターが攻撃対象にされた時、そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与え、相手モンスターの攻撃を直接攻撃に変更する」

明日香さんの目の前にはDTモドキ、そして自分の目の前には茶枳尼が投げた剣が迫ってきて。

負ける。その未来がはつきりと見えた。それ以外が考えられなくなる程に。

「とっ……罨！ ホーリーライフバリアー！」

ヤケクソだった。最後までデュエルを続けるなんて考えじゃない。現実を否定するように発動した。けど、次の一瞬で、攻撃が弾かれたのを認識する。ライフポイントの減少がない。この事で自分が生きていることを知る。疑問だった。いや、この際どうでもいい。続けるにしてもドゥーブルパッセの効果が残ってる。ほぼ負けが決定した状態。なのか。

「攻撃対象にされたモンスターは次のターン、プレイヤーにダイレクトアタック出来る。」

自由なタイミングで使える罠を伏せていたのね。でも、それで凄いでもドゥーブルパツセの効果で茶枳尼が直接攻撃をする。このまま私の勝ちよ」

「……なんで、明日香さんのライフが減ってないんですか」

「分からない？」

その言葉と共に指さされた方を見ると、なんと罠カードがオープンしているではないか。

「私はドゥーブルパツセと一緒に貴方も発動したこの罠カード、ホーリーライフバリアーも発動していたのよ。このカードは手札を1枚捨てる事で私が受ける全てのダメージをこのターン0にする」

発動されたカードは自分も発動したカード。全てのダメージを防ぐそのカードはモンスターとのダメージも防ぐ。言い方を変えれば、モンスターの戦闘破壊も防ぐ発動すれば必ずと言っていいほど生き残るカード。ライフポイントが少ないこのデュエルでバスターダメージからも戦闘ダメージからも守るこのカードは頼もしい。明日香さんはこれでドゥーブルパツセの弱点を防ぎながら後列の攻撃も防いだ。そして、このカードが自分の生き残っていた理由だろう。手札コストに紫光の宣告者か、それに必要な天使族……回収した弃天を使ったのか。

何を思っただろう。攻撃反応か、召喚反応。どちらにせよ妨害罠だと読んでいたの

か。どうなんだ、分からない。ただただ無駄な考えが膨らむ。焦っている。自分は。もしかしたら。

「ターンエンドで良いかしら」

鋭い目付きで目の前に立つデュエリストは、間違いなく強い。本来なら、自分は……「……墓地に存在するシャッフル・リボーンはゲームから除外し、自分の表側表示のカード1枚をデッキに戻す事でカードを1枚ドロウ出来る。デストーイ・サンクチュアリを戻してドロウ」

発動できていたはずなのに、しなかった効果。忘れてたのか、無くても勝てると思っ
て思い出しもしなかったのか。その効果でドロウしたカードを見て……

「……カードを伏せて、終了。この瞬間、DTモドキの攻撃力は下がる」

DTモドキ 攻撃力1700

「私のターン。荒野の女戦士を召喚」

荒野の女戦士 攻撃力1100

「バトル！ 終わりよ！ サイバー・エンジェル―茶枳尼―でダイレクトアタック！」

勇敢な女神の一撃が最後の攻撃を加えて来た。甘かった。浮かれてたから、発動が遅れたカードに手をかける。心の中で思っていたんだ。どうにかなるって。どうにかなるの過程の中。明日香さんを見ていなかった。デュエルに持ち込めばどうにかなる。

自然に勝てると思って。やる前から差をつけるとか、どう勝つとか。そんな意味の無いことばかり考えて。

やっとの事で、手が動く。

「終わった……わけじゃないみたいね」

発動した魔法カードの力で茶枳尼は守備表示になっていた。

「速攻魔法、エネミー・コントローラー。効果で守備表示に。運良く、本当に。運良く罠以外の防御手段を用意できた」

「ドゥーブルパッセのコンボを躲されたのは久しぶりよ」

「それはどうも……はあ。殺気全開で死ぬかと思いましたが。けど、目が覚めました」

「……」

「すいませんでした。なんて今更ですが。それに、本気でやっていなかった理由でも無いです。けど、なんというかその……言葉にしずらいです。改めて。デュエルを続けましょう」

「改めて、ね。もう遅いと思うけど。荒野の女戦士でデストロイ・DTモドキに攻撃。これにより私のモンスターは破壊されて、ダメージを受ける」

明日香 LP2700

「けど、破壊された荒野の女戦士はその効果により、デッキから攻撃力1500以下の地

属性、戦士族モンスターを特殊召喚出来る。サイバー・チュチュを特殊召喚!」

サイバー・チュチュ 攻撃力1000

「サイバー・チュチュは、相手フィールド上にいる全てのモンスター攻撃力がこのカードより高い時にダイレクトアタック出来る」

自分 LP300

「……そして、手札から魔法カード、一時休戦を発動。互いにカードを1枚ドローする。その後、貴方のターン終了時まで互いのプレイヤーはダメージを受けない。カードを2枚伏せてターンエンド。私は茶枳尼の効果で弃天を手札に」

低攻撃力のチュチュを自爆特攻までして出したから何かあるとは思っていたけど一時休戦か。隙がないな。回収したのは弃天。つまりホーリーライフバリアで捨てていたのは弃天だったという事。手札は2枚。確実にデクレアラと弃天。つまり再び、罠カードは無効に出来る。

「自分のターン」

お気に入りのカード。でもこれだけじゃまだ足りない。

「魔法カード、強欲で貪欲な壺! デッキトップからカードを10枚、裏側で除外して2枚ドロー」

「10枚!」

驚くのも無理は無い。デッキの1/4を消し飛ばすカードだ。ただ全体的にパワーの無いデッキならば、無理にでも使うカードでもある。2枚ドロ。引いたカードは、2枚とも罠カード。もう1度、デクレアラが発動できないような行動をしてくれる可能性は無いだろう。それにこの罠は発動したら最後自分のライフを削り切って終わる。けど。

「最後までこんな感じか……」

これ使わないと勝てない。ってカードを使ったからと言って本当に勝てるかは別。この手札。最悪勝たなくていい。けど負ける気は無い。

「魔法カード、強制転移！」

「強制転移ね。ジュンコの時も使っていたけど、まさか私が茶枳尼を渡すと思ってるの？」

「まさか。ありがたくそのサイバー・チュチュと、デストロイ・サーベル・タイガーを交換しましょう」

まさに、ありえない。そんな顔をしている明日香さんをよそにサイバー・チュチュとサーベル・タイガーのコントロールが入れ替わる。

「サーベル・タイガーは融合素材を3体以上使用した場合は効果で破壊されないので、安心して使ってください。しかし明日香さんのカードはサイバー・チュチュですか。ダ

メージを与えられない今、効果が無意味なのが残念ですが、面白いデッキですね。では、カードを2枚セットして終了です」

言いたい事がありそうな顔だ。当然だろう。けど何も言わずに明日香さんはターンを進める。

「私のターン。このまま、終わるつもり？」

「茶枳尼で攻撃すれば終わりですね」

「……サイバー・エンジェル―茶枳尼―を攻撃表示に変更！ そのままエッジインプ・D Tモドキを攻撃！」

「当然、無抵抗では無いですよ！ 罨カード。デモンズ・チェーン！ 対象モンスターの攻撃を無効に」

「また同じミスなんて言う事は無いでしょうね！ 手札の紫光の宣告者は、このカードと手札の天使族モンスターを墓地に送る事で罨カードの発動を無効にして破壊する！」
大丈夫。焦って攻撃してその存在を忘れていたわけじゃない。放たれた鎖をかき消す光。その瞬間。

「それを、待ってましたよ！ 罨カード、発動！」

茶枳尼を喰らうサーベル・タイガーの姿があった。

「なっ……私のモンスターが」

「発動したカードは、融合死円舞曲。このカードは互いのフィールドに融合モンスター

フュージョン・デス・ワルツ

が存在する時に、お互いの融合モンスター1体ずつを選んで発動します。選んだ融合モンスター以外の、特殊召喚されたお互いのモンスターを全て破壊！」

融合モンスターはマッド・キマイラとシザー・タイガーのみ。こちらのDTモドキも、明日香さんのフィールドから移されたサイバー・チュチュも破壊される。

「そして、モンスターが破壊されたプレイヤーは、破壊されたモンスターの攻撃力分のダメージを受けます」

ゆつくりと、効果を宣言した。明日香さんは一瞬の間を置いた後にまた、驚きの眼差しをこちらに向ける。

「それって、貴方も」

「当然」

次の瞬間、モンスターの破壊と共に両者に強い衝撃。互いのライフがゼロになる音が重なって、このデュエルの終了を知らせた。

テストが終わった後、不機嫌そうな明日香さんから一言。「決着をつけるまで、あの事は後回しにしてあげる」と。そして。

「次は、本気でやって頂戴」

その目つきの鋭さや、威圧する声に、自分はまさに蛇に睨まれたカエルのように動け

なくなつた。本気出してたなんて言おうとしたけど流石に学習している。實際出していたけど、まあ出してたつもりになつてしまつていたけど。そういう意味じゃないって事ぐらいも知つてる。それに、あのデュエルには色々気づかされた。

「明日香さん強かつたなあ……でもそれより、自分のミスが痛い。デュエルはやつてみないと分からない。分かつてたつもり。ホントに。つもりだっただけか」

自問自答を繰り返す中で、ふと頭の中に謎の声が混ざつた気がした。

「ん？」

それは、自身が持ち歩いてるデッキの中から聞こえた。気がした。けど直ぐに勘違いだろうとその時は気にも止めなかつた。聞こえた声は『情けない』と吐き捨てる様な声だったから。あまりの事に自分でそう思つただけだろうと。

「いやほんと、情けない」

帰りにこちらのデュエルを見ていたらしい十代君から氣にすんなと声を掛けられた。引き分けでも励ましてくれるのか。なんて思いながらもこの場を後にした。

この時は思いもしなかつた。異変の始まりは既に現れていたのに。別れ際に、十代君の方に薄っすらと見えた小さな羽が教えてくれたのに。今まで見えていなかった何かを見ていたはずなのに。余りにも落ち込んでいた自分は見ていたはずなのに気が付かなかつた。

第6話 制裁の門番

時は早朝。だかしかし、自分の身体はボロボロだった。

ここに来てから随分な事があつた。タイタンという闇のデュエリストなる者が色々あつて明日香さんといひでに自分を攫つて十代君をおびき寄せるなんて事件があつた。まあ闇のゲーム（自称）なのでインチキだと言うのが分かるんだけど。そんなタイタンが絡んだ事件で十代達がエセ闇のゲームとやらをしている時に、自分は別件でリアル闇のゲーム初体験したりトラゴつてるエディアとかに絡まれたりして普通に死にかけてきた所。

闇のゲームというのは、なんか凄いいふつーに攻撃とかが現実として当たる体験が出来るデュエルです。いや実際多少の傷は受けますけど基本精神を削るらしい。死ぬ事もある。そんなゲーム。因みにこの世界では割とよくあるらしい。怖いね。怖いよ。怖かったよ。

体験した事全ては長すぎるので省略するが新事実が判明した。当然の様に自分はカードを多分全ての種類持つていて無いときは頼めば勝手に出現するという便利生活を送っていたのだが、融合より先の召喚法及び特定の相手に対するワンキルデッキが漂

白されるという事だ。そう、闇のゲームを体験する上でびびって取り出したカードがエラーを吐き出す様になるって事だ。なら何故あるのか理解できないが兎も角使えないものは使えないので諦めた。

今日は休もう。寝る。12時間は寝る。決意をしてベットに入ろうとした時だ。ガングガン！ まさにこういう表現がピッタリな勢いで、部屋の扉を叩く音。何か。

「おい、ここを開けろ！ 開けなければ、このドアを爆破する！」

何事なんだ本当に。けど変質者なこの台詞で、思い出した。ボンバーマンか。

査問委員会の女性。よく分からないけどクロノス先生の手下？ 1話きりの人なので詳しい事も覚えていない。が、ご覧の通り爆破するなんて物騒な言葉を学生の部屋の前で叫ぶ存在。もし中の人が開けようとした時に爆破したら届けないと行けない人が別の場所に届いてしまうが良いのだろうか。たしか廃寮に忍び込んでいた人達を集め回るんですが、ブルーの明日香さんは免除されていたはず。何故同じブルーの自分が免除されないのだ。なんて一瞬考えたが成績普通で居眠り常習犯の自分が先生側から守られる事なんて無いかと思いついた。特にクロノス先生の授業はモンスターBOXが当たるのと同じ確率で寝ているからな。明日香さんに怒られるのなんの。他の授業では頑張れるようになったというのに。おのれクロノス先生。

現状、対処せざる負えまい。適当に考えたものを即座に実行した。

「……よし。爆破どうぞ。こっちは離れてますから」

「よし！　なら爆破——つておい!!」

ドアの向こうから勢いよくツツコミが帰ってくる。朝から元気ですね。

「良いのか!?　爆破だぞ」

「自分の部屋ですが自分の物じゃないんで」

「おまえっ、部屋を借りておいてそれは無いだろう!」

「部屋を爆破する方が無いです。速く爆破して下さい。アップするんで」

「アップ?　動画投稿か?　ネタにする気かお前!」

「部屋のドアが爆破したんだけど(笑)。的な」

「笑い事じゃないだろー!!」

凄い元気。朝からああいう風にシャキッと返事出来れば朝一の授業で指名された時に先生に相変わらず眠そうとかたるんできるとか言われないうな。なんて思いながら。もう限界たつたのでベットに入った。

「おい！　聞してるのか！　開けろ!」

「勝手にどうぞ」

「開いてないから言っている!」

「開いてたら勝手に入ってたのかよ」

思わず素が出てしまった。凄いなアンタ。そんな素直な変人久しぶりだ。

結局の所だ。その女の人が引き連れたガチムチ黒グラサン連中に連行されたとき。絶対動かない自分に対して本当に鍵爆破。スマートに鍵の部分だけ爆発物で壊したらしい思ったよりも音は出なかった。ここまでは、ある意味予想通りだけど。そこから眠る自分を見て、担架を取り出しそこに移されて運ばれた時は楽だなんて思った。無理やり起こされてたら怒ってたけど。いや一応、グラサンに起こされそうになったから「痛い。引つ張らないで。怖いよ……」って頑張ってた素直に下がってくれた。当然隣の女性はゴミを見る目でこつちを見てきたがそれは想定内。自分だってそうする。けど肝心の野郎が下がってくれたから良いや。クソ天使。ここだけ助かった。まあ何はともあれ連行はされど、担架の上で眠れたから許す。……この体に感謝した自分に危機感を抱いたのは別の話。

呼び出された部屋では、タイタン事件の時に攫われた場所が立入禁止区域の廃寮で、廃寮に入ったものは退学にするぜという宣告が下された所である。原因であるタイタンけしかけたのはこの宣言を自分達に言い渡したクロノス・デ・メディチその人なのだが由緒正しきメディチ家のプライドをどこか落つこととして来たらしい。当然この決まりに文句を言う自分達に、クロノス先生が、ならば負けたら退学制裁タッグデュエルを持ちかけ、それに応じる事に。十代と翔のタッグペア。この時点で対戦相手は私が用意

するとクロノス先生からの言葉もあった。結構早い段階から相手まで探していたのかクロノス先生。流石メデイチ家。落とし物に気がつけば完璧だ。

まあ結局の所なったもんは仕方ない。世界は理不尽なのである。十代と翔ペアが成立で話は進むのだが、問題は余ってる自分。一応どうなるかと思ったら説明があつて、自分で相手を探せとクロノス先生から。まさかだろう。探せつて丸投げか。

「くふふ。こんな不名誉なデュエルのタッグパートナー。加えて退学のリスクまで背負つてパートナーを受ける生徒なんて居ないノーネ。ドロップアウトボーイより先に、確実に落としてあげますよドロップアウトガール」

シニョーラには自分でタッグパートナーを探してもらいマース。なお、期間内にパートナーが見つからなかった場合は失格。または1対2のデュエルを行つてもらいましょう」

この一言に周囲の誰もが反応した。つまりそういう発言だったんだけど。「はい。良いですよ」

自分の即答によつて、周囲は黙り込んでしまい、クロノス先生1人だけが笑いを堪えていた。まあ、2体1頑張ろう。合わせてライフ8000だろ。大丈夫。火力高いデッキでワンチャンか制圧しよう。と前向きに。この話の後、部屋にいる全員に深く頭を下げて挨拶した後退出した。後から不満そうな十代君と翔君が追いかけてくる。

「おい、良いのかよ。あんな条件で」

「良くないけど。眠いですし」

「お前な……俺が言うのもなんだけど、危機感とか無いのか？」

「んー。本当に十代君に言われるとですね。けどほら。2人も特別に用意されたデュエリストと戦えるんです。ちよつとお得じやないですか」

「なるほどな。そういう事か！」

「どういう事つすかアニキ……」

十代君もしかしてデュエル絡めればチョロいのか。なんて考えてしまった。ダメだ。考えたら遊びたくなるからダメだ。因みにこの後、翔君が脱走してお兄さんとデュエルするイベントまで起きました。翔君。タッグパートナーが居なくなったら十代君も自分と同じ条件になってしまうと予想できなかったのかな。していたら逃げちゃダメだつてなったかもしれないのに。まあ、良いけど。

あの後、保健室に行った。思えば闇ゲしてから身体を見て貰ってないな。一応見てもらった方が良いのか。まあそれが良いだろう。なら行っておくかと。そして、ギリギリの所で見てもらうとまずいような気がするのに気がついた。結局行つたのだが、普通に具合が悪いですとアピールして休みを貰った。全て微熱のお陰だった。休めたぜちよつとラッキー。と学生感を味わいながら部屋にたどり着いて、寝た。ぐっすりだ。

受けたダメージを癒す程では無いが楽になる。何よりふかふかのベットに沈むと安らぐ。気持ち的なのとか色々。まあこの平穩はつかの間で。

ボンバーマンの爆破と大差ない勢いで開いたドア。一応直されたばかりなのに、何かの部品が弾けたらしく固いものが床に叩きつけられ音を出す。びっくりしてベットから起き上がると目の前には拳が迫って。

「アンタあ!!」

「うおっ!」

顔面一直線の攻撃を間一髪避けたが巻き込まれてその攻撃に掠った髪の毛が数本持っていた。敵襲敵襲。

「アンタあ!! 昨日はどこほつき歩いてたのよ!!」

ジュンコさん、顔面パンチで意思疎通は測れない。その趣味でも無いし。

「……お、おはようございます」

「はあ!」

「な、なんかすいません」

バーサーカーかと思う程に意思疎通が取れないジュンコさん。その後の方にチラッと視線を向けると溜息をついている明日香さん。そして、慣れた手つきで床に落ちた部品を拾って直しているももえさん。えっ、直せるの。ってか本当にドア壊して入ってき

たのかこのバーサーカー。

《バーサーカー》

通常モンスター

星4／閻属性／悪魔族／攻1500／守1000

狂った力を使い攻撃する。

その暴走は誰にも止められない。

自分は早退したなんて伝えた覚えすらない。けど来てるのは多分、ももえさんが怪しい。レスキューキャットかと思ったらラビットだった……って、それじゃあ明日香さんに失礼ですね。

「なんかムカつくから殴られろ！」

「殴りながら言うっ!？」

言葉の割には確定攻撃を叩き込まれた。殴られろってか殴るからだろそれは。一応ジユンコさんからすれば、自身の言葉を放った後にコンマ一秒ぐらい待ったのかもしれないパンチを腹に貰う。くの字に折れる自分に後ろから慌てた様子で明日香さんが割って入ってくれた。あの人はころころと笑ってた。

改めて。なんと追加の一撃でマトモに立てなくなってしまった情けない身体。笑えるぜ本当に。なので自分はベツトの上で座りながら、取り敢えず落ち着こう。ゆつくり

話そうじゃないかという事になった。した。頑張った。

「……で、お3人方。なんの用で瀕死の自分にトドメを？」

「あら、トドメを刺したのはジュンコさんですわ」

「な、なによ！ 私だけ悪いっての？」

「今回はどう見てもそうよジュンコ」

今回はどう考えてもバーサーカーに止めを刺されました。一応こちらも見えた瞬間防御策を考えてましたが、一回休みもデモンズチエーンもバーサーカーには無力なので素通りされた訳です。話そうともしてなかったし。

「まあ……女性なので手を出すのは控えた方が良いでしょう。色々と」

「ふんつ。なによ。止められなかったアンタが悪いでしょ」

「すげえ暴論。自分はプロでも何でも無いんです。変に止めてジュンコさん怪我させたらダメじゃないですか。だから避けられなかったら貰うしか無いですよ」

「……えっ？」

「えっ？ って、殴った方も怪我するんですよ。場合によっては、殴った側の方がひどい怪我になります。人のお腹なんかは柔らかいので比較的大丈夫ですが。硬いの骨がある場所なんかは危ないです」

「え、そ、そう……なの」

「それに、万が一でも怪我をする可能性があるのはデュエリストからすれば避けたいものじゃないですか。デュエリストは手を怪我したらドローも手札を持つのも困難になります。デツキ構築だつてなんだつてお世話になるんです。大切にすべきです」

「……わ、分かったわよ。悪かった。私が悪かったわよ!」

「それ以前に暴力はいけません。ジュンコさんは女性ですし。人前でやると何かとつつく人も居るんですから。それから……つと。あれ。なんでこんな話に」

自分の疑問にすぐさま答えてくれるももえさん。

「デュエリストなら意思疎通はデュエルで。というお話でしたわ」

「なるほどももえさん。そんな話……だったのか?」

「ええ」

「……まあいいや。とにかく! 自分の為にも拳は控えること。殴るとしても、人と場所を選んでください」

(選べば……良いのかしら?)

「この話はもう良いです。本題に入りましょう。なんでここに?」

「アンタが……」

「ジュンコさんが心配だと言って聞かないので」

「えっ!」

「……私も。ジュンコに付いてきただけ」

「明日香さん!？」

「ももえさん。面白半分に空気を作るのは止めましょうか。話が進みません。明日香さん、否定して下さい。可哀想ですよ」

なんだかんだ話を聞いた。ジュンコさん曰く「そんな時間まで居ないなんてきつと変態的な事をしているに決まってる! だから、確認の（ry）疑ってる線は妥当。ももえさん曰く「うふふふ」だそうで。一応心配されていたらしく、就寝時間を過ぎて1時間ぐらいまでは自分の部屋でこちらの事を待っていたらしい。なんか本当に済まない。

「あれ、明日香さんは」

「……ええ。あの後。十代達から話は聞いたわ。貴方だけがタイタンと一緒に、黒いなにかに飲み込まれたって。助けに行こうとしたみたいだけど、その黒いのが溢れてきて」

「ああ。危険だつて下がったら、廃寮ごとその黒いのが覆い尽くした。ですよね」

現実捻じ曲がつて自分だけあの黒いのに巻き込まれて色々あったんです。結果これから起こる闇のゲームに対しての恐怖が増したけども。

「皆が助けに行こうとした。けど、それを止めたのは……私よ」

「なるほど。助かりました」

巻き込まずに助かった。他を巻き込んでいたら何を言われるかたまったものではない。現に後ろのジュンコさんは「あんた、明日香さんと一緒にいたわけ!?」なるほどね。明日香さんが急に意味不明な事を言い出したのはアンタが原因でしょ!」と騒いでる。まあ意味不明な事が起こったのは事実。それを分かるように説明なんて無理な話ではたから聞いたら意味不明に聞こえるのは当たり前。見た人にしか通じない。けど領いているのもえさんは一体なんなんだ。

後は妙に悲しそうな顔をしていた明日香さんが気になりましたが、気が付かないフリをして話を進める。こちら側は止めてくれて感謝しかないし。

「まあ、ご覧の通り大丈夫です。っていうか、今って授業してる時間ですけど、御三方は……」

この言葉に、身体を硬直させ動かなくなるジュンコさん。別の方を向く明日香さん。まあ、それならばいつもニコニコしてる人に聞くだけで。

「ももえさん?」

「授業はパスして来ましたわ」

「そんな制度ありましたっけ」

「代償は自分の負担になりますわね」

「……ああ。なんか、皆さんすいません。お礼も何も出来ませんが」

この後のジュンコさんの反応はツンデレと言われている類に見えた。まあ好きな人は好きなんじゃないかな。明日香さんは大人な受け答えだった。流石。ももえさんは「面白そうでしたし」の一文から後は聞き流しました。一旦話も終わったので、そのまま解散の流れかと思ったら。ももえさんがわざわざお茶を入れてくれたのでせっかくだから頂く事に。頂きながら適当な話でもして時間を潰していました。

「あ、そういえば聞いた？　なんでもオシリスレッドの遊戯　十代が退学を掛けたタツグデュエルするらしいわよ」

「あー。自分もしますよ」

「へえー。そう。で、それが……って、アンタ。今なんて言った？」

「自分も退学を掛けたデュエルしますよ。そこに居ました。捕まって縛られただけでした。しかもタツグパートナー居ないんで1対2ですけど。負けた時はお疲れ様ですね。ここに居られるのももう少しかも」

「あらあら。頑張らないといけませんわね」

「そうですね。適当に頑張ります。あ、おかわりもらって良いですか？　美味しいですねこのお茶」

「宜しいですわよ。せっかくですから別のお茶もいかがでしょう」

「おー。まあ詳しくないんでリアクションは取れませんよ？　美味しい以外の感想は捻

れませんよ」

新たなお茶を入れてもらったと同時にぐらいに。ガンっ！ と強くティーカップを打ち付けた音。それを持つジュンコさんは震えていた。

「それ、大変な事でしょう!？」

「……あ、ももえさん出来ました?」

「出来ましたわ」

「話を反らすなあ!! ももえ、アンタも何か思わないの。なに呑気にお茶入れてるのよ」
「呑気も何も、当人が落ち着いて居られますし。私達がどうこう言う事でも無いかと」

「そうですよ。ゆっくり行きましょう。せつかくですから。お茶でも飲んで、話でもしようや」

「一番あんたが焦らないと行けないでしょうが! 明日香さんからも何か言って下さいよー」

「……えっ。ああ。ごめんなさい。ちよつとびっくりして。もう一回言ってくれるかしら?」

「どこにびっくり要素があつたんですか明日香さん」

「アンタとももえによ!」

「だそうですが」

「存じ上げませんわ」

この人ここに来てから怒ってばかりだ。後から胃薬でもあげようか。本当に。ここから話は制裁デュエルの話に。まあ、パートナーのお話ですが。

「早くパートナーを探さないよ!」

「制裁デュエルですよ。それに出るって事は何かしらの事をやってしまった人と一緒に見られるわけです。何もやってないのに悪者扱いされてくれって事です。なんとなく分かりますよね」

「うっ……」

「しかも。負けたら退学ですからね。多分、パートナーも」

「ううっ……」

「探さなくても、受ける人が居ないのは分かりきってるんですよ。っていうか、受けてくれるって言われても自分から断ります。巻き込んで退学なんて笑えませんから」

まあパートナーも退学かは分からないけど。その可能性も捨てきれないなら警戒しておくだろう。こちらとしては負けても最悪他の道があるかなと2度目の人生ゆえの余裕と根拠の無い自信があるので挫折はしません。けど、他の人は違います。この人生が全てで、がんばって入ったデュエルアカデミア。一度きりの学生生活。親元から離れての寮生活。これが途中退学で高校中退になり家に帰る事になったら……本当に、人生

潰すまで有り得そうですからね。

どちらかと言えば、パートナーを受ける人の事を思つてでは無く、その人のフォローができない自分。というのが分かつているからです。

「断るつて。じゃあ、本当に2人相手に挑むわけ？」

「はい」

「勝てるわけないじゃないの！ 2人よ？ 手札が2倍、ライフが2倍の相手にどうやって勝つよ！」

「どうやってでも勝たないとですね。まあ安心して下さい。なんとかします」

「安心できるわけ無いでしょ！」

「むう。じゃあ、いや。やっぱいいや。うん。一人で頑張ります」

この話が結構長引いて、ジュンコさんや明日香さんがパートナーをやるつて言つたりしてくれましたが、ご丁寧にお断り。不満げに出ていくジュンコさん。その後を追う明日香さんはやっぱり悲しげ。ももえさんはいつも通り。

「……どうしてパートナーを頼みませんでしたの？」

「えつ。ももえさんまで」

「いいえ。ただ、気が付いてると思つておりましたから」

「ああ……明日香さんですか。すいませんね。十代君のパートナーはやりたくても無

理。自分のパートナーは拒否されて無理にした。でもそれでいいと思ってます」

あの場にいた者の罰なのに、自分だけ許されてるのが納得行かないって所ですかね。あの人の正義感は一倍感ありますからね。気持ちだけ組み取れば、あるいは。明日香さんを巻き込んで絶対には勝てる。と自分が思えば、その気持ちを晴らす事が出来たかもしれません。勝てる！ いや、勝つ！ と、言いきれない自分が悲しいけど。勝つと言いつつ切れなくなったキツカケは明日香さんがくれた物だ。油断するな死ぬ。自分の事は一番自分が知ってる。この選択は間違っているとも正しいと言える。

「やっぱこっちとしては巻き込めないうすよ。退学して、デカイですから。人生を決めるレベルです。明日香さんは良い場所に行けると思ってますし、こんな事で詰ませるのは惜しいでしょう」

「ここでお別れなんて嫌ですわよ？」

「まさか。終わった後にまた一杯。頂きましょう」

「ふふつ。先程からの言葉は、負けると言っている様に聞こえますのに、今は勝った後のお話ですか。ちぐはぐですわね」

「負けるかもしれない。かもしれないから警戒する。かもしれない運転ならぬ、かもしれない選択です。かもしれない選択は事故を未然に防ぎ自分と相手を救うのです。と今適当に作ってみました。結構気に入っているんでこれで頑張っていきますよ」

不利な条件のデュエル。今でも何故受けたか分からない。本来なら、もっと楽な道があったかもしれないのに。けど今は何故だかテンションが高い。わくわくと言うやつか。それがどうしても止まらない。

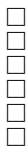
「新しいデュエル……結構楽しみにしてますよ」

これから先、きつと危ないデュエルが有るだろう。不利なデュエルが有るだろう。その練習の練習と思えば丁度いい。けど、本当の本当は。やっぱりただの興味本位かもしれない。ただの興味だからこそ。理由もなく、危ない橋を渡る。なにか得られるかもしれない。そう、美味しそうな何かに。まだ見ぬデュエルに期待しながら深夜、カードを広げた。

「久しぶりに、デツキ。作りましようか」

楽しく、自分らしく。そして、殺意を持つて。ここに来て教わった。やるまで分からないと。ならば、確実に殺れるデツキにするべきだ。制裁デュエルのその日まで、デツキ調整は続いた。特殊ルールに対応できるデツキをと。

殺意殺意し過ぎた思考でフルバーンを組んだ瞬間、漂白されました。タイタン事件で発覚したこの事実さじ加減が分からん。色んなカードが真っ白になって使えなくなる。アンチホープOKで仕込みマシンガンダメとか……全く、全然予想の範囲内だったぜ。驚きの白さ。アリエールでしょ。クソツタレが。



「ユーフォロイド・ファイターで——」

時間は進み、今し方、十代と翔君のタッグデュエルが終わった。見事パワーボンドを使いこなしたユーフォロイド・ファイターで止めた。そして校長からデュエル戦略に關するレポートを30枚提出する様にといい渡されがっかりしている十代達が見える。30枚……桁を間違えてませんか。手書きですよ。30枚ですよ。どう考えても鬼畜ですけど。

まあ次は自分の番だ。へなへなしていたクロノス先生も次があると気合を入れ直したのか立ち上がった。うむ、良いことだ。デュエル場に入りながら十代達とハイタッチ。お前も頑張れよと応援も頂いて準備万端です。殺意高めに強いロックやバーンを絡めるとクソ天使に漂白されるし。畜生め、なら忌わしきあのカードを入れた魔導で——と思つたらあらのカードが漂白されて何故か安心したりと色々あったけど、デツキがなにであれ、明日香さんの時の様にヘマはしない。やれる事は全部やる。出来ることをすべて使う。テンション上がろうとも勝負だけは真剣にやろう。後は……楽しめばいい。やっぱり楽しんでやるものだよデュエルは。

「続きまして、シニョーラですーガ。どうやらパートナーは見つけられなかったみたい
なノーネ。残念ですーノ」

「残念ですね。で、相手は？」

「んんっ。何を言ってるノーネ。パートナーが見つからなかった場合は……」

「失格か2対1ですよ。どっちか選択肢を出したという事は当然、選ばせてくれる
でしょう？ やりましょうよ」

クロノス先生から見れば2対1を選択するとは思っても見なかったらしく、やれ可哀
想だからいつその事退学をなんて言っていました、本人やる気ですしと校長のゴリ押し
によつてデュエル出来る事に。まあ、これで校長味方につかなかつたら後から乗り込ん
でましたけど。ふわぁ。と長い欠伸をしてデュエルリングに登ると、なんかまだ迷宮
兄弟が居た。迷宮兄弟。両方ハゲコンビ。

「今度こそ、我らがコンビネーションで仕留める」

「先程は油断したが、同じ失敗は二度はせぬ」

「何の失敗したんですか。同じ失敗って、話を通じませんけど。まあ良いです」

どうやらリベンジ！らしい。リベンジ相手はもう遠くに行ったというに。自分に
勝つてもリベンジにはならない気がします。そういう事じゃないのは知ってますが。
面子とかの問題ですかね。因みに、やる気満々の迷宮兄弟を他所にクロノス先生が「べ、

別の相手を……とか呟いてましたがスルー。ここは、やる気の迷宮兄弟を倒して、退学を退けた後にしよう。正直他の人より迷宮兄弟の方がやりやすい。

「クロノス先生。迷宮兄弟さん達に勝ったら退学免除ですからね」

一応釘を刺す。しょうがないと言うようにクロノス先生も、無言で頷き了承はした。どちらかといえばうなだれた感じ。よし、これでいいんだ。

「話は聞いていた。我らに一人で挑むとは」

「ふつ。責めて早く楽にしてやるのが情けというもの」

「自分はゆつくり派です。早く楽にしませんよ。ゆつくり楽しませよう」

しかも挑むとはってそっちがまた出番欲しがっただけですからね？ 少しだけ笑った後に、デツキをセットし、いざデュエル。迷宮兄弟とのデュエルは予想外でした。さてと。試そう試そう。複数だろうと多分大丈夫。このデツキなら粘れるし。なにより今日の気分が入ってるカードは懐かしの初代カード達だから。……混舞の魔改造だけどね。

両者の準備が終わった。恒例なのか迷宮兄弟、背中合わせのポーズをとる。

「我らを倒さずして」

「道は開けぬ」

「ごやー」

「うー」

かっこいい決めポーズと共に、門番さん達が立ちはだかった。門の向こうは天国か地獄か。通つても通らなくても大概同じなんて言つても、どうせなら向こう側が良い。よく考えたら一度は通れた門だけど。

「通らせてもらいますよ」

こちらはボーシングの代わりに深く一礼して、笑顔を見せる。楽しい楽しいデュエルの時間。ワクワクとドキドキと時々殺意でお送りする大人も子供も大好きな時間。改めてデュエルの世界に入らせてもらえるかの時間だ。覚悟を決めて。今、デュエルの幕が上がった。

ライフはこちらが8000。相手が共有で8000。フィールド及び墓地は各プレイヤー個別だが、罨や魔法、モンスター効果を使つてタッグパートナーを守るのはあり。相手プレイヤーっていうテキストをタッグパートナーに適応するのも出来る。例えば相手がカードを2枚ドロウする。という効果のカードを発動すると本来ならば、自分の敵であるプレイヤーがドロウする訳だが、その相手をパートナーに出来る。ターンは自分↓兄↓弟。各プレイヤーの先攻ターンが終了するまでは攻撃不可。

「さあ、自分の先攻です。モンスターとカードを3枚セットして終了です」

果てしなく地味な絵面から始まった。拍子抜けだ。と思つていいのか迷宮兄弟は驚

異のシンクロ率で肩をすくめる。

「全てセットカードとは」

「余程に臆病と見える」

「そう、全てセットカード。けれど表にならない方がいいかも知れませんね。開けてからのお楽しみです。ここから攻めるかどうかとも全て、迷宮兄弟さん達次第で決めましよう」

「要は様子見という事か」

「我等2人相手に随分と余裕では無いか。だが、見ている間に勝負は終わる。私のターン！ 私は魔法カード、闇の指名者を発動。宣言するカードはゲート・ガーディアン！」

高らかに宣言しながら弟を指さす兄者。闇の指名者の効果を適応するプレイヤーに、当然の様に弟を指定。

「確かに、私のデッキにはゲート・ガーディアンが存在している。感謝する兄者」

「いや、当然の事だ。更にカードを3枚伏せターンエンド」

言うまでもないが不利だなホントに。笑ってしまいう程に辛い。

「続けて私のターンだ。闇の指名者を発動！ 宣言するのはゲート・ガーディアン！」

「確かに、ゲート・ガーディアンはデッキの中にある。礼をいうぞ弟よ」

「なんの。当たり前前の事だ気にしなくていい」

「いいや、兄としてもこのままでは示しがつかない。罨カード、強欲な贈り物！ 弟よ、カードを2枚ドロ―だ」

「これは。ありがたい」

8枚の手札。先攻1ターン目にしてその手札は何でも出来る。これはゲート・ガーディアンが来るかと少し期待して待つが。

「では、カードを1枚伏せ魔法カード。手札抹殺！ 兄者よ」

「承知した」

「……」

「きつたねえぞ！」「インチキ効果もいい加減にしろ！」と叫びたかった。闇の指名者からそうだがタツグデュエル専用のルールとやらが厄介すぎる。今使用したカードはお互いの手札をすべて捨て、同じ枚数ドロ―する手札抹殺。わざわざサーチしたゲート・ガーディアンを巻き込んでの抹殺だ。これ狙ってる絶対……

「そして、セットした魔法カードを発動する。ダーク・エレメント！」

「くつ、やつぱりですか！」

ダーク・エレメント。その魔法カードは墓地にゲート・ガーディアンが存在する時にライフを支払う事でデッキから、闇の守護神 ダーク・ガーディアンを呼び出す専用カードだ。迷宮兄弟曰く最強の守護神。そう、ゲート・ガーディアンを超える守護神。

ゲート・ガーディアンは墓地でいい。魔神達？ 知らんなあと云わんばかりにその魔法カードを発動した弟。予想するに、あのデッキには。ゲート・ガーディアンただ墓地に送るために1枚入ってるだけっぽい。まてよ、そんなんでいいのか！ ロマンの欠片も無いじゃないか！ 最強の守護神1ターン目から登場とか！ くそつ……その構築なら神縛りの塚を入れてガチガチに——って。考えている場合じゃない。

「このカードは、ライフを半分支払う事でデッキから、闇の守護神 ダーク・ガーディアンを特殊召喚する！」

迷宮兄弟 LP4000

ダーク・ガーディアン 攻撃力3800

最強の守護神降臨。だが、それが始まりに過ぎない。

「カードを3枚セットしターンエンドだ。さあ、どうする」

「ちよつと驚きでしたが、それはそれで楽しいですね。では。自分のターン、ドロロー。そのままエンドまで」

デッキに手をかけた時には既にエンド宣言。と言えるほどには早かった。ドロールたカードを見てすらない。

「ふつ。どうやら諦めたようだな」

「とんでもない。これで凌げなかったらどのみち負けてるのでこうしました。この

「フィールドのカードでどうにかするつもりですよ」

「面白い。私のターン！ 魔法カード、ダーク・エレメント！」

2枚目。正確に言えば兄の1枚目のダーク・エレメントの発動。周囲は攻撃力3800のモンスターが、ライフを犠牲にしているとはいえ一枚のカードで立て続けに出てくる状況に声を上げている。

「ライフを半分支払い、ダーク・ガーディアンを特殊召喚！」

迷宮兄弟 LP2000

ダーク・ガーディアン 攻撃力3800

「我らのダーク・ガーディアン之力。味わうといい！」

ダーク・ガーディアン。斧でセットモンスターを叩き割る。そのモンスターはあっけなく潰れ、文字通り真つ二つになった。

「様子見の一撃には、様子見の防御で対応しましょう」

「ふんっ。何を言うか。見えなかったのか。貴様のモンスターは真つ二つに……ぬっ？」

真つ二つになったのはピンク色の物体。それは、別れたそれぞれがまた1個体として復活していた。

「マシユマカロンです。効果は見ての通り、破壊されると2体のマシユマカロンを呼び

ます」

マシユマカロン 守備力200

マシユマカロン 守備力200

「くっ、壁モンスターか」

「しかも、マシユマカロンの名前指定ですが1ターンに1度破壊されると復活です。つまりは、3回破壊しないと死なないですよ」

分裂したマシユマカロン達と、そのプレイヤーは残念でしたと言わんばかりにケラケラと笑う。

「仕留め損なったか……カードを1枚伏せ、ターンを終了する。任せたぞ弟よ」

「勿論だとも兄者。私のターン。ドローした後。罠カードを発動する。生命吸収装置！」

「……これはまた。変なカードを」

「どうやら知っているようだな。このカードの効果を。自分のスタンバイフェイズ。直前の自分ターンに支払ったライフコストの半分を回復するカードだ。私が支払ったコストは、ダーク・エレメント使用時の4000ライフ。よって2000ポイントのライフを回復する」

迷宮兄弟 LP4000

面白い……で終わらせてると負ける。考えるべきだ。特徴的な罠。タイミングの遅さ、ライフを結局取り戻せない回復。魔力節約術の方が遥かに良い。なんて思ったがこれは違うか。あのカードが生命吸収装置である必要がある。もしくは、その方が都合のいいデッキ構築にされている可能性。ダーク・ガーディアンを絶対無敵の守護神とか言っていた割には、しっかりケアを考えている。ライフコストの半分回復。節約術では無い。考えて妥当な線はライフコストを何度も払う戦術。加えて魔法以外にもライフを払うカードがある。

「さあ挑戦者よ、いつまで耐えていられるかな？ バトルだ！」

ガン伏せ。まあ、あの罠ですよね。普通にダーク・ガーディアンデッキを組むなら、墓地に落とす手間。サーチ不可能な魔法を持つてくる手間。加えて守りやライフケアまで枠が足りない気がしますがそこはタッグパートナーに助けてもらう前提だから出るのか。

珍しいデュエル、珍しいカード、珍しい戦術。どれもこれもが楽しい。だからこそ、負けられない。負けてその戦術戦略が全て見れない。なんて事があつたら自分は……

「ダーク・ガーディアンで攻撃！」

「おや。忘れたんですか。マシユマカロンは破壊されても分裂できますよ？」

ダーク・ガーディアンがマシユマカロンを叩き潰す。不思議そうな自分に、得意げな

笑みで弟は言った。

「百も承知よ」

その言葉と余裕の意味は、次の瞬間受けたダメージで気がついた。

「……ライフが」

自分 LP 4600

3600のライフポイント減少。それはダーク・ガーディアンは攻撃力からマシユマカロンの守備力を引いた数値と同じ。

「ふふっ。そのモンスターは、ダーク・ガーディアンは攻撃ではなかなか倒れぬ様だが、お前自身は違う。装備魔法、メテオ・ストライク！これを発動していた。これで、私のフィールドに居るダーク・ガーディアンは貫通効果を得る！」

「ほほう！ 戦闘破壊耐性に対する答えはそれですか」

プレイヤーのライフを削れば関係ない。見事な回答だ。シンプルながらも侮れない。

「二応、マシユマカロンの効果で墓地のマシユマカロンを特殊召喚しておきます」

潰されたマシユマカロンがまた元通りに。結果攻撃前と変わらず2体のマシユマカロンがフィールドに存在していた。

「私はカードを伏せ、ターンエンドだ。さあ。ダーク・ガーディアンをどう超える」

「……考え中です。自分のターン」

セツトカードは2人合わせて合計5枚。迂闊に動けない。場にあるカード、状況からきつとあるカードの事を頭においてカードを選ばざる負えない。無いと踏んで動いて死んでは笑えない。今悩んでいるのは手札にある超強力魔法カードを発動するか否かだ。マシユマカロンと巻き込めて美味しい。ただ、これを通した方がいいのか、それとも他を通す為に使うのか。悩む……超重力の渦は何でも呑み込む最強カードだ。けど。

普通の考えでは勝てない。普段の考えは1対1の感覚であつて2対1の考えでは無い。理不尽なデュエルだが、相手を見て動きを変えられないと。

「よし。早めに動きますよ。魔法カード、ブラックホール！ 全部纏めて吹き飛んで下さい」

「させぬわ。罨カード、神の宣告！」

弟が発動させた罨によってブラック・ホールは発動すら出来ず消える。

迷宮兄弟 LP2000

「次はサイクロン！ お兄さんの方から1枚破壊させてもらいましょうか！」

「……くつ」

竜巻に巻き込まれたのは奈落の落とし穴。

「これは美味しくないけど。まあ、これ通らなかつたら知りません！ 大盤振舞侍を召喚！」

大盤振舞侍 攻撃力1000

「攻撃力1000か。ダーク・ガーディアンには届かぬ！」

「だから交換しましょう。魔法カード、強制転移！」

「なにっ!？」

「弟さん。プレイヤーは貴方ですよ。メテオ・ストライク付きのダーク・ガーディアン。頂きます！」

モンスターの立ち位置が入れ替わる。最強の守護神は今、自分のフィールドに。

完璧な流れ。けど途中で気がついたことがある。それはとても大変なミス。……いや、まして。このゲームは相手に効果を伝える必要は無い。相手フィールドに行つてしまったけど大盤振舞侍の効果は把握されてないはず。される前に早く動く！ 普通にやつても勝てないしこれ通すしか無い！

「では、マシユマカロン1体を攻撃表示にしてバトル！ まずは、マシユマカロンで大盤振舞侍に攻撃！」

「馬鹿め、攻撃力の低いモンスターで攻撃するとは」

「落ちて着け弟よ。何かある。何を狙っているかは知らぬが、これは我々にとつてもチャンスだ。罠カード発動！ 聖なるバリアーミラーフォース——！」

「おっと!？」

マシユマカロンの攻撃がきっかけで、ダーク・ガーディアン諸共モンスターが破壊された。

「我らのダーク・ガーディアン。弱点は我らが一番理解している」

「流石は兄者」

「でも、マシユマカロンは破壊されると、破壊されたカード以外のマシユマカロンを特殊召喚出来る。墓地からマシユマカロンを特殊召喚！」

マシユマカロン 攻撃力200

「続けて大盤振舞侍に攻撃でマシユマカロンは破壊されます」

自分 LP3800

大盤振舞侍には相手にダメージを与えた時の効果がある。それを説明する訳だが、いっつにも増して勢いよく、大きな声で説明に入った。

「この瞬間！ 大盤振舞侍の効果！ 相手にダメージを与えた時、相手プレイヤーに7枚カードをドロースえます！ 弟さん!!」

「なっ!!? なんだ急に大きな声を」

「ドローしますよ? いいですね? 自分相手なんで。いいですよね!」

「な、なんなんだ。そういう効果ならドロースればいいではないか」

「まで弟よ!」

「待たない！ すればいいならします。ドロー！」

ちゃんと許可は得た。コントロールしているプレイヤーの発言も聞いたので即座にドローする。これにより手札は7枚にまで回復したぞよし。

「……一応、弟さんに説明。大盤振舞侍のプレイヤーは貴方です。大盤振舞侍の効果を適応するプレイヤーを選ぶのも貴方です。だからさつき自分に対して「ドローすればいいではないか」って言ったからドローしました」

「……はっ!？」

「くっ、おのれえ！」

「ま、まあ。ほら。その代わり戦闘ダメージを与えたらお兄さんの手札を7枚に出来るカードを手に入れたんですよ？ なんかこう、頑張って使ってください」

2回目からは相手に使われる。ここから先、大盤振舞侍の攻撃は受けたくない。一度受けたら負けるレベル。使って気がついたのでは普通は遅いがとんでもないカードを送ってしまった事になる。でも、これしか無かった。

「では、カードを追加で2枚セット。終了！」

「私のターンだ。私も罠カード。生命吸収装置。直前の私のターンに払ったライフの半分。2000ライフを回復する」

迷宮兄弟 LP4000

「ここで、罨カード強欲な贈り物。兄者」

「助かったぞ。では魔法カード、プレゼント交換！ 弟よ」

「承知」

発動されたカードは、互いのプレイヤーがデッキからカードを1枚裏向きで除外し、ターンの終わりにそのカードを相手の手札に加えるという面白交換カード。一件扱いずらいネタカードだが、この変則ルールでは凶悪なカードになる。

「これで次の準備は終わった」

「兄者よ。攻撃だ。策がある」

「よからう。ダーク・ガーディアンよ！ そのモンスターに攻撃だ！」

マシユマカロンに無意味な攻撃。なのだが。

「なんか危なそうなので。続いての防御札。罨カード、ゴブリンのやりくり上手！」

「むつ。ただの手札交換カードでは無いか」

「2枚目の罨、強制終了！ このカードはフィールドの自身以外のカードを墓地に送ってバトルフェイズを終了する罨です。ゴブリンのやりくり上手を墓地に送り終了」

バトルフェイズ事終わらせる永続罨によって凌いだ。このカードの強さはそれだけではない。他のカードを墓地に送らなければならない効果も含めてだ。

「そして、やりくり上手の効果。墓地にあるやりくり上手＋1枚のカードをドローして、

手札を1枚デッキ下に戻す。墓地にやりくり上手は1枚。よってカードを2枚ドロ―
ー！」

「くっ。厄介なカードだ」

「次の防御は永続罠。これも結構厄介ですけど、突破出来なきやですよね」

とはいいいながらも、これが長く続くとは思っていない。罠魔法カード破壊を引かれたら終わる。迷宮兄弟はお互いにドロ―させ合う戦術を取っているためそういうカードを加えるのが早い。なによりプレゼント交換を見てこれが長く持つはずない事は予想していた。そのときに必要なカードをお互いが、加えられるのだから。

「カードを2枚伏せてターン終了だ。プレゼント交換の効果により除外されたカードを加える。弟よ、このカードを使い」

「兄者にもこれを託そう。では私のターンだ。ふっ。なるほど。魔法カード、大嵐を発動する」

「やつぱさうきますか？ それは何となく分かってたので、カウンター罠。アヌビスの裁き―」

手札を1枚コストに、対象の魔法カードの発動を無効にして破壊し、更に相手フィールドのモンスターを破壊。後に破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを与えるカード。決まれば相当強い。

「無効にして、ダーク・ガーディアン2体目を粉碎！　そして、ダメージを与える！」

「ぐおおっ」

「ぐおおっ」

迷宮兄弟　LP200

残り200ポイント。追い詰めた。変則デュエル。不利なのは絶対。ならばリスクが大きくてもリターンが大きいカードでゴリ押さないと勝てない。とデッキのカードを選んだのは間違つて無かつたと思う。けれど、引つかかる。なんだ、この感じ。わつざとらしい声でダメージ喰らいましたが……まさか、想定内なのか。

「ふっふっふ。ダーク・ガーディアンを倒し、我ら兄弟をここまで追い詰めたのは褒めてやる」

「だが我々の、真の無敵の連携はここからだ。罠カード、副作用？　を発動！」
理解した。やばいこれ。

「このカードは、相手にカードをドローさせ、その枚数分ライフを2000回復する効果を持つ。最大3枚までだ。兄者よ」

「当然3枚」

みるみるライフが回復どころか手札まで増えていく。

迷宮兄弟　LP6200

アドバンテージの暴力である。1枚だけでここまでのものは中々見ない。なんのラスボスカードだよそれ。と軽く引いている間にも、兄の方が続けてカードを発動する。

「更にここで、速攻魔法。デーモンとの駆け引きを発動！ 特殊なモンスターを特殊召喚出来るこのカードは、自分のレベル8以上のモンスターが墓地に送られたターンに発動出来る。」

ダーク・ガーディアンレベルは10！ 発動条件は満たされた。朽ちてなおその魂を龍として、この場に現れよ！ バーサーク・デッド・ドラゴン！」

腐り果てた体で、生を感じさせる咆哮を轟かせる。その姿に観客は言葉を飲み込んだ。

バーサーク・デッド・ドラゴン 攻撃力3500

「ふっ。我らのダーク・ガーディアンを倒してただでは済まさん」

「攻撃力ではダーク・ガーディアンに劣るものの、バーサーク・デッド・ドラゴンは全てのモンスターに攻撃する権利を持つ。その壁モンスターもこのカードの前には無力。次の兄者のターンで仕留める。カードを2枚伏せ、ターンエンドだ！」

圧倒的攻撃力のモンスターが次々と現れ、強力なコンビネーションで場を強化していく迷宮兄弟に、観客の誰もが兄弟の勝ちを確信していた。

「自分の、ターン。ふふっ、ふふふ」

だけど、この状況が楽しくて仕方なかった。自分がどこまでやれるのか。今分かる。明日香さんや十代君、目の前の迷宮兄弟の様に。有利だろうが不利だろうが全てに置いて加減は無く、勝ちを目的として戦う。デュエリストの、決闘の世界へ行けるのかどうか。

□□□□□□

僕は笑いながら独り言を呟く。するとみるみるうちに見ていた世界の特定のカード達が白く染まっていく。タイタン。闇のデュエリストもどきの事件。闇の中での事件は終わり、彼は気がついた筈だ。元々繋がりがけてたし。

「次のデュエルあたりで繋がるでしょ」

当然の様に全てのカードを与えたが、それはただの紙。それに、デュエルする事で集まるデュエルエナジーが反応し、本物へ繋ぎ、現れる。それがカードを通して少なからず彼に影響を与えている。

「彼が見つけるのを見たいんだよ僕はね」

呼ばれた中にはデュエルの外ですら現れるものが、力を持ったものが出て来る時が来る。自分で召喚しなきゃ意味が無い。そう、僕が用意した紙じや駄目なんだ。

場面は移り変わる。門番達とのデュエルが始まった。僕は満面の笑みでそれを見始

めた。

第7話 決闘の世界

兄 LP 6200

手札? 6枚

フィールド? バーサーク・デッド・ドラゴン

罠、魔法? 生命吸収装置、セット1枚

弟 LP 6200

手札? 無し

フィールド? 大盤振舞侍

罠、魔法? 生命吸収装置、セット2枚

自分 LP 3800

手札? 5枚

フィールド? マシユマカロン

罠、魔法? 強制終了、セット2枚

高まる感情。想像と期待以上の事に表情も明るくなる。初めてで、予想外。どこかの

誰かが「くだらん」と言った気がするがそんな事は気にならない程に。

「良いですね！　ただ。勝つではなく勝った。なんて思わないでください」

「なに……？」

「だって、ライフを0にする瞬間までは負けてないし勝ってないじゃないですか。逆転されるかもしれない。されないように、きっちりしつかり息の根止めてから勝ち誇って下さい。それぐらいじゃないと、後悔すると思うんです。さあ反撃のターンですよ！

幻獣機テザールフを召喚！」

テザールフ　攻撃力1700

「効果を説明しましょう。召喚成功時に攻守0の幻獣機トークンを1体特殊召喚出来るカードで、トークンがいる間は効果戦闘で破壊されずレベルが幻獣機トークンのレベル分上がります」

「耐性と」

「レベル変動か」

「更にいえば、機械族。そしてトークン生け贄に攻撃力が800ポイントも上昇するんですよ」

テザールフは単体で2500まで対処可能、そうでなくともモンスターを2体場に残す優秀なカードだ。

「……なるほどな。弟よ。多少の無理は承知でカードを使ってしまうが構わんか？」

「構わぬさ。何かあれば私が助けよう」

「頼んだぞ。そのモンスターがフィールドに現れた時に罠カード、無力の証明を発動する！」

罠カードの発動と共に、バーサーク・デッドが吠える。無力の証明は自分フィールドにレベル5以上のモンスターが存在する時に発動できる罠。発動ターンに攻撃出来ないデメリットは付くが相手ターンなので関係が無い。

「このカードの効果により、相手フィールドのレベル5以下のモンスター全てを破壊する！」

「おっと。良いんですか。マシユマカロンと幻獣機トークンは残っちゃいますよ？」

「それでもだ。芽は出来る限り摘んでおく。我々の勝利を確実にする為よ。その場限りで何もさせなければ良い。長期戦になれば全てにおいて我らが有利」

「そのとおり。我らのコンビネーションがあればターンが回るだけで互いの手札もフィールドも補う事が出来る」

事実言う通り。迷宮兄弟側は極端な話、副作用？の様なこのルールにおいて強力なパワーカードを互いに連打するだけで勝てるだろう。それでなくとも2体1のハンデは小さいものではない。結果無力の証明により、トークンが出る前にテザーウルフは破壊

され残ったのはマシユマカロンとトークンだけだ。

幻獣機トークン 守備力0

マシユマカロン 守備力200

マシユマカロン 攻撃力200

「むっ、またマシユマカロンを攻撃表示だ」と

「いえす。攻めますからね。普通に考えて正しくない使い方の時に輝くカードもあります。今から発動するこの盾で、相手をぶん殴つてみるとどうなるか。月鏡つきがみのたての盾を攻撃表示のマシユマカロンに装備！」

マシユマカロンの頭上に落ちて来た盾。正に鏡のような盾は腐り果てた龍を写している。

「ではバトル！ マシユマカロンでバーサーク・デッド・ドラゴンに攻撃！」

その攻撃は誰が見ても怪しい。だが、今は好都合だ。迎え撃つ弟は、狙っていた様に速攻魔法カードを合わせる。

「兄者よ。先程のお礼だ。その攻撃した瞬間に速攻魔法、サイクロン。その月鏡の盾を破壊だ」

「げっ。なんて嫌らしいタイミング……！」

吹き荒れる突風がマシユマカロンを包み込む。装備された鏡は風で飛ばされはるか

上空でキラッと光って消えた。月鏡の盾は効果で自分のライフを奪いながらデツキの下へと帰っていく。

自分 LP 3300

「ふっ。流石だ弟よ。これでそれは只のモンスターよ。それに効果でライフが減った事により勝利すら見えた！ 叩き潰せ！ バーサーク・デッド・ドラゴン！」

すぐさまバーサーク・デッド・ドラゴンのブレスがマシユマカロンを襲った。そのブレスで焼かれた後には何も残っていない。

「これで3300ポイントのダメージが通り私達の——」

「なっ、まて兄者！」

「どうした？」

得意げに腕を組む兄に前を見ると指を指す。その先には巨大なコントローラーが効果を適応されるのを待っていた。

「なっ。ライフも減ってないだとい！」

「今度は使えたエネミー・コントローラーですよ！ マシユマカロンさんには犠牲となつて頂きました。さあ、モンスター1体を生け贄に捧げたコイツの能力はターン限定のコントロール奪取！ 死んだダーク・ガーディアン之魂を引き継いで現れた第二の切り札も頂きますよ！」

バーサーク・デッド・ドラゴンのコントロールを奪った今はバトルフェイズ。当然攻撃権利がある。

「バトルフェイズ続行！ バーサーク・デッド・ドラゴンでお兄さんにダイレクトアタック！ 盛大に、焼き払え！」

「くっ……ライフで受けても余裕はあるが」

「いや、兄者。これで仕留める！ 罠カード！ マジック・シリンダー魔法の筒！」

バーサーク・デッド・ドラゴンの前に出現した二つの筒。このカードは相手モンスターの攻撃を無効にし、その攻撃力分のダメージを相手に返す罠カード。バーサーク・デッド・ドラゴンの攻撃力は3500。返されれば一溜りもない。

「本当に、やりますね！ 勿体ないけどこちらも罠カード、強制終了の効果を発動！」

「それは先程の時間稼ぎの！」

「自分のターンにも使えるんですよ！ バーサーク・デッド・ドラゴンをコストに強制終了！」

やむを得ない。強制終了によってバーサーク・デッド・ドラゴンを消しバトルを終わらせる。

「どうした兄者よ。浮かない顔だが」

「いや。何でもないぞ弟よ。あの永続罠、思った以上に厄介だ。あれを壊すべきだった」

「……先程のサイクロンか。なに。そんなのは些細な事。次の我らのターンで対処すればいい。我らのコンビネーションは無敵だ。そうだろう兄者」

「あ、ああ。そうだが」

「つたた……消費カードが五分五分ぐらいなら相手の方が有利なのに。どうしてこう、気持ちよく切り札で攻撃させてくれないんですかね。このままターン終了……いや、ここで手札抹殺打ちましょう。お兄さん。交換です」

「い、今か」

「今です。なんとなくそうしないと間に合わなさそうなので。で、シャドル・ビーストが墓地に送られた。効果で墓地に行くとドロウ出来ます。よし。これなら大丈夫。カードを伏せます。これでターンエンド」

「私のターンだ!」

「じゃあここで永続罫。魔封じの芳香! お互いに魔法カードはセットして次のターンが終了するまで発動出来ません!」

魔封じの芳香。あるだけで大きく行動を制限する永続罫。これで準備は整った。さあどうなるか。

「(何を考えている。長期戦は我らが有利。にも関わらずあの様なまるで長期戦を望むようなカード。くつ、あの永続罫カード2枚。邪魔者以外の何者でもない。強制終了を

破壊出来ねば攻撃は出来ぬ）私はカードを4枚伏せターンエンドだ！」

「次は私のターンだ。魔法カードは伏せねば使えぬのだつたな。兄者。何かあるか」

「くつ、すまぬ弟よ」

「そうか……いや仕方の無い事だ。私もそのままバトルだ。大盤振舞侍でトークンに攻撃！」

「強制終了の事は——」

「分かっている。だがそのカードは発動にカードを墓地に送らねばならない。いつかは終わる」

「なら、今終わりましたよ。まずは、速攻魔法。ドロー・マッスル！ 幻獣機トークンをこのターン戦闘破壊から守りカードを1枚ドロー。続けて強制終了！ コストはドロー・マッスル——の前に、邪神の大災害をオマケしてから強制終了ですね！ 強制終了のコストは変わらずドロー・マッスルで！」

「じゃ、邪神の大災害……これが狙いか！」

攻撃に反応して場の魔法罠を全て破壊する罠。

「お兄さん正解。最後のオマケはリビングデッドの呼び声ですよ。墓地に眠るマシユマカロンを特殊召喚」

連続して発動した4枚のカード効果が適応される。邪神の大災害で自分と兄の罠、魔

法は全て吹き飛んだ。リビングデッドで蘇生されたマシユマカロンは破壊されるがその効果で再び2体のマシユマカロンが。更にドロ・マッスルでもドロ・強制終了の効果でバトルフェイズは終わった。

「くっ。私のカードが……！ これでは、一気に――」

「お、落ち着け兄者。まだ我らのライフは6000も超えている。この有り余るライフがあれば次のターンで必ず、必ず何とか出来る。魔法カード、プレゼント交換！ 兄者よ。これで立て直そうぞ。これで、ターンエンドだ」

「では。自分のターンっ！ この瞬間を、どれだけ待ったか！ マシユマカロン1体と幻獣機トークンを生け贄に、自らを生んだ大地すら焼き焦がす炎。火之迦具土ヒノカグツチを召喚！！」

スピリットカードの中でも最上級レベルのモンスター。その効果もまた、最上級クラス。

火之迦具土 攻撃力2800

「マシユマカロンを攻撃表示に」

マシユマカロン 攻撃力200

「バトル。マシユマカロンで大盤振舞侍に攻撃！」

「また攻撃だと？ 同じミスはせんぞ！」

マシユマカロンは大盤振舞侍の刃にきざまれ分裂する。

自分 LP3000

マシユマカロン×2 守備力200

「大盤振舞侍がダメージを与えた時の効果を兄者に対して発動する！ これで、次のターンは磐石だ」

侍の効果で7枚ものカードをドロウした兄。だが嬉しそうな素振りは一切見せない。「火之迦具土でお兄さんに直接攻撃。ついでに炎の力をプレゼント」

迷宮兄弟 LP3400

兄を包む炎。その炎は、攻撃が終わったあとも手札で燃え続けていた。これがこのモンスターの恐ろしい効果の証か。

「これは……！」

「炎の力。それは相手のターン開始時に発動する。火之迦具土の攻撃を受けたプレイヤーは、ターン開始時に手札を全て捨てなければならぬ」

「なんだと!？」

「なんだと!？」

全てのカードを捨てさせる。増えた手札も使えなければ意味が無い。最強のハンデス効果。

「カードを伏せて、ターンエンド。このカードはスピリットモンスター。ターンの終わりに自分の手札に戻ります」

「あ、兄者……」

うろたえる弟。だけど。それにしつかりしろと強く声をかけ、兄はデツキの上にあるカードをドローする。

「我らは番人。挑戦する者の前に立ちはだかり、見極める者なり。挑戦者よ、見事だ。其方には確かに困難を超えるだけの力。そしてこのデュエルの世界で、戦うデュエルアカデミア生徒としての力が備わっているようだ。

——だが！ 我らとてこのまま引き下がりはせぬ！ ここを超えるならば……我らの守護神を倒していけ！ 魔法カード、ダーク・エレメントオ!!」

引いたカードをそのままディスクに叩きつけた。ライフを喰らい3度立ちはだかる最強の守護神。

迷宮兄弟 LP1900

「弟よ！ 我らの力を見せてやろうぞ！」

「言われるまでもない！ 私のターン！ ……来た。魔法カード、ダーク・エレメント!!」

兄弟揃つてのドロー。2体のダーク・ガーディアンがこちらを見下ろす。

迷宮兄弟 LP 950

これが意地か、切り札か。まだ終わらない。良い良い良い！

「倒しきれなかったのが憎い……けど、こつちだつて負けません！ 絶対に勝ちます！」

「やつて見せろ挑戦者！ 大盤振舞侍を守備表示に、そしてカードを1枚伏せターンエンド」

「エンドフェイズに速攻魔法、ツインツイスター！ 手札をコストに2枚までの魔法罫を破壊する、破壊するのはそのセットカード！」

破壊できた副作用？のカード。これはでかい。このターンだ。このターンにどうにかするしかない。また副作用？みたいなカードが引かれる前に決める。この状況を1枚でひっくり返して勝ちまで持つていくそんなパワーカードが入っていた記憶すらない。今持つてるのは確かにパワーカードだけど、現状どうにも出来ない。どうするか……

「さあ、そちらのターンだ！」

「この門を果たして通れるか！」

勝つとは言ったものの、分からない。デッキの上に指を置くと、ビリつとした衝撃が走った。そして、聞こえた謎の声。

『何をもたもたしている』

(……えっ?)

幻聴では無い。なんだこの声は。疑問があつたが、その疑問をかき消すように手から伝わる衝撃が強いものになっていく。

「ど、ドロロー! ……つて、おおっ!」

手札に加わったカード。それは、言つてしまえば切り札だ。自分の切り札。久しく考えてなかつた事だつたがこの世界に来て、必要だと思つて探し出した。そしてこれが今のデュエルこの瞬間で最高の答え。その効果は単純明快。

「その守護神2体は倒せません。だから、片方だけでも倒してここは無理に通ります。マシユマカロンを生け贄に!」

生贄は光に消え、漆黒の甲冑を纏った帝が姿を現す。

「邪帝ガイウスを召喚!」

それは先に立ち塞がるダーク・ガーディアン見据えた。けれど立ち向かう必要は無い。門番が居ようと居まいと、その中に入れば良い。

「ガイウスの効果。フィールド上のカードを1枚ゲームから除外し、それが閥属性だった場合、相手に1000ポイントのダメージを与えます。対象はガイウス自身。これで終わりです。卑怯なんて言いませんよね?」

自分の問いに、兄弟は嫌がる顔を全く見せずただ受け入れる様に目を閉じた。

「見事なり、挑戦者よ」

「見事なり、挑戦者よ」

力を発動させるガイウス。自身を砕き、そこから溢れた暗い力が直後に迷宮兄弟を襲う。それがデュエルの決着をつけた。

決着した後も、身体の熱が収まらない。勝てた。ギリギリだった。本当に。終わった後、楽しかったと言葉を伝え迷宮兄弟さん達と握手。最後のドロローが凄すぎて思わず色々と言ってしまった。そして、タッグデュエルの話を少々。ちよつと楽しそうです。なんか、実はタッグパートナーにダイレクトアタックかませるらしくて、それを魔法の筒で別の相手に返すっていうアレもあったとか。この世界のタッグデュエルは謎がいっぱいでした。

帰りの道、さつさと帰り、部屋に入る。一旦出て外に休ませろの一文を添えた張り紙をして再び部屋に入って鍵を閉めた。そのままベットに。

「んんっー！ うん。寝る」

疲れた後は、もう疲労感が凄いものだった。だけどベットの中でも思い浮かぶのはデュエルの事。意識が途切れるその時まで、思考はデュエルの事でいっぱいだった。多分、こんな瞬間が一番。この世界に来て楽しい瞬間だった。

変に速い時間に寝ると夜中に目が覚める。この日もそうだった。深夜3つ程時間が進んだ時、ふと目が覚める。

「……………と。……………そんな時間……………」

時計を見て変な時間に起きてしまったと思う。起きたら寝れないタイプなので地味に困る。授業中には発揮できる睡眠促進能力は誘発効果で条件が限定されている上に、時々できる。なのでタイミングを逃すと本当にどうしようもない。

「デツキでも、触る……うん……」

寝起きの動かない頭はデツキを触る選択をした模様でもぞとベットから出てテーブルの方に。でも。

『やつと起きたか』

テーブルの場所は先に取られていた。見慣れたテーブルの方には、見慣れないゴツイ黒甲冑で覆われた大きい人、声的に男の人が居た。

『貴様が起きるまで退屈で仕方が無かった。待たせられるのは最悪の気分だ』

「……………お待ち合わせ?」

『貴様とな』

「……………きさまさん?」

『——お前だ』

「……まあださんとう？」

『お前だ』

このやりとりの後、しばらく沈黙が続いた。えっちらほっちら働き始める頭がこの目の前の不審者が何なのかを思い出そうとする。いや、そもそも思い出すというか知り合いの人にこんなゴツイ人は居ない。しかも面白い事によく良く見れば見た目が邪帝ガイウスとそっくりだ。本場のコスプレか。気合が入りすぎだろう。本当に鉄製っぽいし。重そうだ。いくら掛けて作っただろうか。達成感はあるけど使った金額に後悔しないだろうか。等々考える程に心配になってくる。

「凄いですね。コスプレ」

『……一つ聞こう。こんな真夜中にわざわざカードゲームのモンスターコスプレをした者が訪ねてくる状況など有り得るのか？』

「有り得ないから今驚き。びっくり仰天。この世界には不思議な変人がいるものです。変態」

『……この世の中にはカードの精霊が居るのは知っているか。真夜中に、鍵のかかった部屋の中。勝手に人が入ってくる訳が無かるう』

「有り得ないって分かっているのにやってのけるそこに痺れ……」

次の瞬間。ガイウスコスプレマンはテーブルの上にある物を丁寧に避難させた

思ったら、コツン。と可愛げすらある程に軽い仕草でテーブルを叩いた。その後聞こえるのはそれに似合わぬ破壊音。お高そうなテーブルは木っ端微塵に粉碎された。

『人がこれを出来るのか』

「……人類を甘く見ない方がいい。きつと出来る。多分」

『そういう話では、くつ、先程から……ええい！　話が進まぬではないか！　名乗らんと分からののか！』

一人テンションの上がる変人に釣られて脳みそも冴えてきた。よく良く考えてみれば有り得ない事柄。ガイウスっぽい何か。ふと氣になつてマイデツキを取り出してガイウスを見た時に、なんとイラストが無いではないか。

そして目の前の人が話していた事を思い出す。そう、精霊とやらがこの世界にはいるらしい。

『ここに来てから散々な目にしかあつておらぬ！　最初が自身を除外だと？　笑い話にもならぬわ!!』

そう。確かこの世界に来てガイウスを使ったデュエルは1000バーンの為に自身を飛ばさせた。勝つ為には致し方なし。けど……いや、まさか。えつ。

やつとこさで氣がついた。

「精霊って、普通に来るものなんですか」

『これが普通に見えるか？』

その言葉は怒りと悲しみと、少しばかりの涙があつたような気がした。自分のせいかもしれない。

木っ端微塵になつてゐるテーブルだった物は、無視して歩くと、とても危険なのでせつせとガイウスさんにも手伝わせて片付けさせることから始めた。「なぜ私がこんな事を……！」とか言いながらせつせと手伝うガイウスさんごめん少し可愛いとか思つてしまう。でも壊したのはアンタだ。弁償も出来んだろうしきつと精霊なのだから逃げるのも容易いだろうし。で、テーブルが無くなつて寂しくなつた開けた場所にベットの大部分を取り外して敷いて、そこで座りながら話を聞く。ガイウスさん丁寧に汚れるからと地面に座る。礼儀正しい。

精霊。この世界に来て触れてみたいものの一つだった。十代君初見でハネクリボー見えなかった時点で諦めものだったのだがなぜ急に見えるようになったのか。

『それは貴様が闇のゲームに触れたからだ』

その一言だけで他に説明らしいものは無かつたけど納得した。闇のゲームだしね。仕方ないねと。でもここで疑問がある。

『見える様になつた事で私も出てくる意味が出来た』

「……今ガイウスさんに触れますけど。硬い。じゃない、実体化してるなら別にそれ関

係なくないですか」

『察せ。疲れるのだ』

「どうやら実体化は疲れるものらしい。その他にも色々聞いた。どうやら前の世界から居たらしいとか。けどそこは過去の事だどうでもいいと切り捨てられた。地味に気になったのに。」

「……まあ、なんですか。素直に嬉しいですが。精霊。へえ」

『無論だが、タダで貴様の元に来るとは言っておらん』

「ほほう。じゃあ何すれば？」

『決まって居るだろう。貴様のデュエルは全て見ていた。闇のゲームもな。弱い。貴様は弱過ぎる。そんな物では何も出来ん』

ストレートに言う度胸は認める。まあ否定も出来ない。雰囲気的に。

『デュエルも、身体もな。私を使うのなら、ある程度のレベルにはなってもらうぞ』
「……」

『これから先も闇のゲームには関わるつもりなのだろう？ あの程度で動けなくなるのは情けない』

「あの程度って、だって。闇のゲームですよ？ エセ闇のタイタンならともかく自分あれじゃ無い本物っぽい奴と戦ったんですよ？」

『だからどうした』

言っていることは分かるが凄いなおい。ガイウスさんは根っからの強いひとであるってことが分かった。

『私が出てきた理由の半分はこれだ。闇のゲームに耐えうる力をつけて貰う。そうでもせんと、見てられぬわ』

そこからさらにゴニョゴニョと聞いた。なんかめっちゃ心配されている。確かに闇のゲームでは動けなくなつたが。そんなに見てられない程にやばかったのか自分。立てなくなつたぐらいならまだセーフだと思つていたのに。

「力を付けろ。と言われてもこの身体ですし、どうしようもない気が……」

『良いか。闇のゲームは体力だけでは無い。精神力も共に大きく削られる。だからこそあれだけのダメージなのだ。貴様は動けなくなつたが……精神力の方だけでもあれば動くぐらいなら出来る。万が一の時に逃げる力ぐらいは残せるだろう』

「はあ……で、それはどうすれば？」

『決まっている。貴様ら人間が最も得意とする方法でやればいい。貴様は知っているだろう。要は、慣れだ』

「えっ？」

ガイウスさんが立ち上がったかと思うとすぐ、喉が締め付けられるような圧迫感を感

じた。そして徐々にガイウスを中心に暗い闇が広がっていく。

「……ちよ、い、いきなり来たと思っただけならそうなのは良くない」

『いきなり？ 何十年は共に居たが』

「前の世界からでしたっけ？ 1000円からですもんね。デュエルエナジー溢れてるここだから実体化出来て、つてそういう話したいのでは無いです。いや、慣れろつてまさか……」

『楽しいデュエルの時間だ』

初めて自分の元に精霊が来ました。心配してくれる優しい精霊です。それが出会って初日にこちらを半殺しに来ると、誰が予想できただろうか。この後、何回かまた動けなくなる体験をした。意識だけあるのに身体が動かないのは、何度目でも本当に怖かった。

午前午後深夜に至るまでデュエルしていた数日の間。特に深夜は闇のゲームとやらの体験をしたおかげか体調をまたしても大きく崩して復活するまで辛かった。だが、お陰で耐性自体は付いた。邪帝ガイウス。まさかの精霊。闇のゲームでくたばった自分が見てられずに精霊世界から出てきたらしい精霊。

「……はあ。まあ、これからも宜しくですよ」

だが幸運なのだろう。来てくれなければ闇のゲームから逃げるかもしれなかった自

分が立ち向かってても良いと思える様になったキツカケになってくれたのだから。部屋の中。傍から見れば何も無い中に向かって話す。自分の目にはうつすらと見える人が頷いた。

『よかろう』

この声も、聞こえる人以外には聞こえない。邪帝ガイウス。偉そうな精霊。どちらが上なのかと言えばきつと自分と言い張るだろう難しそうな精霊が付いてしまったらしい。まあ、悪い気分ではなかった。

『もう授業が始まっている時間だが』

「……うーん。いい朝ですね!」

『準備しろ』

「なっ!?!」

都合は少し悪いかもしれない。

朝になれば酷い顔をして、ちよくちよくガイウスと話すようになったせい（他人から見れば独り言）か、あのジュンコさんですら「本当に大丈夫?」先生に言っておくから休んできなさいよ」とか言われる始末。似合わないですと一言返すといつも通りに戻ってくれて安心。そんな不安の一つでもあるガイウス。十代君は見える。のですが。

「あー。やっぱりな。いつも後ろにいたんだけど、ほら。最初にそういった時には」

「あー。気のせいだよって言った記憶があります。……もしかして、あの明日香さんのデュエルの後励ましてくれたのって」

「ああ。結構言われてたからな」

「合点がいました」

「そういえば、精霊が見えるって事は、お前も相棒が見えるのか?」

「あ、はい。今し方、十代君の肩の上に確認しました」

恐る恐る手を振ると可愛らしい仕草で返してくれたハネクリボーほんとに天使族。

「……アニキ達。何の話っすか」

「カードの精霊だ」

「アニキ、それ。何回か聞きました。冗談でも何回も聞くと辛いっす」

「内緒のお話です。2人だけの」

「えっ」

十代君は割とほかの人が居ても平気で精霊の話します。合わせられないので適当に濁しますが。

寮入れ替えなんかもありましたね。万丈目さんの使う装備カードが劣化団結なのが印象深い。あと原作版の地獄の暴走召喚はチート。まあこれ止めると万丈目サンダーにならないので、デッキを捨てるのだけは考え直して貰いに行ったりしました。

ブラッドヴォルスとか普通に強いし。

海。デツキを片手に今にも手を離しそうな時。後ろから大きめに声をかける。

「万丈目さん」

「なっ!？」

顔だけをこちらに向けて、万丈目さんは驚く。

「それ、どうするんですか」

「これは……もう要らなくなったからな。捨てるだけだ」

「へえ……三沢君のデツキに見えますけど」

「な、何を根拠に!？」

「万丈目さんって、デツキに数式書いたりします?」

「はあ? 何を言うと思えば、何の事だ」

「良いから良いから」

「書くわけないだろう」

「そのデツキ、裏返してみて下さいよ」

「ちっ、なんなんだ……なっ、これは!？」

カードに数式が書かれているのは不思議だろう。書いた本人しかその意図は分からないし。寮入れ替えデュエル。万丈目さんと三沢さんが寮入れ替えを掛けたデュエル。

後がない万丈目さんは三沢さんのデツキをこつそり捨てる。まさにその場面に來たわけですが。

「……貴様も俺をバカにしにきたのか」

「え？」

色んな感情が混ざって、静かに燃えている。そんな眼でこちらを睨んでくる。寮入れ替えが起こった理由は、クロノス先生が万丈目の代わりに三沢さんをブルーにして上手いこと操ろうとしていたから。しかももう、入れ替えが決まった事同然のようにクロノス先生は冷たい態度で万丈目さんに接する。先生がそうすれば生徒だってそうする。今まで祭り上げられてきた万丈目さんも周囲の人から熱い手のひら返しを食らって馬鹿にされまくってる。それはまあ、万丈目さんも人を馬鹿にしていたからですな。

「別に？」

「じゃあなんで來た!!」

「なんでと言われれば、デツキを捨てるのは違います？」

色々省いてその言葉だけ言った。けど、本人はこつちが言いたいことを把握してくれたらしく、言葉を詰まらせる。

「でしょ？ 負けたらイエロー……でもそれだけです。イエローがそんなに嫌なんですか」

「つ……あ、当たり前だ!!」

一瞬の間を置いて、万丈目さんは答えた。

「俺は、俺は常に上に居なければならぬ。万丈目家の者として……トップに、ゆくゆくはデュエル界のトップに居なければならぬんだ」

「だからデツキを捨てていいと?」

「貴様には分からないさ、このプレッシャーが」

「そのプレッシャーとやらを理由になんでもしていいと?」

自分でも意地が悪いと思う質問ばかり投げる。話は、ほぼ進まない。分かっているけど、しいて効果をいうならば。

「俺だつて……俺だつてこんなことしたい訳じゃない!!」

怒鳴る声。質問に次ぐ質問の効果は相手の感情が凄く分かりやすくなる事だ。でもこれで分かった。万丈目さんは分かっているんだ。なら……あれ、そうだよな。

「じゃあしなればいいじゃないですか。まあ、自分には関係無いんで。では」

「なっ!!」

特に止めることも無い。けどまあ、うん。万丈目さんは大丈夫だ。大丈夫なんだけど、デツキを捨てるなっただけ言うのも違うし、回収するのも変だし。それは思い止まって貰う為の言葉を探したけど見つからなかった。だから、もう浮かんだ言葉だけを

捨て台詞に。

「万丈目さん。結局は自分がしたいようにですよ。どうせどんな事になっても人は慣れます。なら、なりたいたい様にみたいな？」

結局このまま、デツキ回収はせずに立ち去ったので隣で浮いてるガイウスさんに、何がしたかったんだ。と言われる。ご最中です。けど次の日行われたデュエル。デツキはちゃんと捨てられずに机の中に合ったみたいです。それでも負けてしまいました。が。退学どうこうの話にもなってないとは聞きましたけど、万丈目さんはこの学校を去っていったみたいです。帰ってくる時が非常に楽しみです。サンダーですからね。サンダー。

第8話 大人な子供

「アンタ。最近変よ？」

「ジュンコさん。自分は元から変な人扱いされてました。特に目の前に居るツンツン頭の人に」

「違うわよ。変態なのは変態。それとは別に変なのよ」

「変態の中に潜む変態？」

「えっ？」

「えっ」

「……」

「……」

「ねえ、ももえ。2人は何を話しているのかしら」

「さあ？ それよりお茶をお入れしましたわ」

「ご飯の時間。最近の話はこんなものばかりだ。妙に心配される。龍牙さん事件もあってかもしれない。来るべきゲームに向けてなのかほとんど非日常的な事が身の回りに置き始めている今日この頃。十代君とデュエルしてはトップ負けする。デツキは

参考にならない。どんな非日常よりもこれが非日常だよ。インシュランスって、何で入ってるんだ。どんなデュエルの負け方よりもインシュランスの活躍で負けたデュエルが納得出来ない。ふと思い出した止めをインシュランスでかわされたデュエルを思い出し、運命力の前には勝てないのか……と苦しい表情をしていると、割と強めの一撃が肩に入り「聞いてないでしょアンタ」とジュンコさんに怒られた。知ってる？ 女子の肩パンって結構力入ってるんだよ。

「すいません。聞きますから」

「全くアンタは。いい？ 私は——って、そこ、どうしたのよ」

指を刺された腕の方。普通なら袖がある部分（この学園の制服は色々とおかしい）を見ると、うつすら赤い線のような物が見えた。刺し傷、もしくは切り傷だ。丁度、切れ味抜群の包丁で切った様な傷。切った事があるなら分かるが表面上はさほど目立たない。左右に傷口を引っ張るとパカッと開く。

「何よその傷……どこかに引っ掛けたの。うわっ、しかもけっこう深いんじゃない」

「き、急用ですのでそれでは！」

「あつ。ちよつと！」

緊急回避、腕を捕まれる前に全速力で後ろに振り返り、ももえさんと視線の飛ばし合いから始まる決闘（数秒）を制して、戸惑う明日香さんの横を通り抜けた。

暫く走って、多分追いつけない所まで来たので休憩。指摘された腕のキズを見る。表面上は結構綺麗。一本の赤い線。ぐらいだ。だけど深そうとか言われたのでなんとなく開く。思った以上に開いた傷口に焦る。結構深く裂かれた模様。もう血は固まっているが、傷口の中が空気に触れてピリツとなる。しかも今、開いたせいで若干広がったまま戻らなくなった。すぐ気になる。面倒な。見られてまた何か言われるのはゴメンだ。これも全部袖やスカートが短すぎるせい。いや、袖ないかこの制服。どうなってるんだよ。

「こんな傷は目立ちますよね」

大絶賛聞ゲリハーサルみたいな傷を受けるような事を毎晩の様にしているせいだけど困る。

「傷……治せるのかな」

ガイウスさんからポーション貰って痛みは和らいけども、傷までは治してくれないのか。まあ治ってないからそうなんだろうな。時間経つてると回復できないとかあるかもしれない。今の見てくれが見てくれだ。傷は気にするべき。だと思ふ。何かと目立つし。自然治癒するまで待つのは時間がかかる。けど、ガイウスさんに頼むのもつていうか、あの人って基本頼みごと聞かないからな。

精霊。なんだが。いや、そのね。頼もしいんですけど。なんというか、硬い。

「なんでだろうな。ガイウスさん。こう、本当に硬いんですね」

それに、そういえば思い出した。あの人、回復系の魔法が苦手だ。練習でくたばっては元も子も無いだろうと講義をしたので常にポーションが支給されるがポーション以外見たことない。少し上位のゴブリンの秘薬ですらだ。時間が経った怪我を治せるだけの力は多分無い。1度だけ、ポーションしかないね。と言った。その理由は曰く「そもそも私は回復という行為自体がだな……」らしい。ポーションはどこから仕入れているのだろうか。分からないから取り敢えずポーション買い占めてる所を想像してしまい笑う。

攻撃面はばつちりのガイウスさん。1度だけ興味本位でガイウスさんのダイレクトアタックを食らったが受けた場所がはじけ捻れて消え去るかと思った。痛みの後、受けた部分の感覚が消える。こんなんばかりでやはりデュエリストは鍛えないとな。と思う。でもその時ばかりは弱くて良かった。いやヤバイんだけど、感じる方がもっとやばい精神的に。今では耐性だけは付いてきた。慣れは本当に凄い。

「……ま。一応相談だけはしてみますか。デッキ置いてきたし」

3人から逃げてきたのにまた戻る事になるのは仕方ない。どうせ戻るのだ。自分の部屋へとぼとぼと歩きはじめた。部屋の前で待ち伏せされていたというか、それは分かる。2人はちゃんと部屋の前に居た。でも1名は部屋の中で待ってたからね。

「あら、おかえりなさいませ。ですわ」

「きやつ！ こわーい！」

誰とは言わないが。怖すぎる。

やつとこさの夜。目の前には押し黙るガイウスさん。

「治せないんですね」

『そういう訳では無い、が』

「いや。いいんです」

『……いや。どうにかしよう』

「どうにかって、ガイウスさんじゃ力及ばずですよ」

『私がどうにかすると言ったのだ』

「大丈夫。どうにか出来なくてもガイウスさんは立派な帝」

『その口を閉じろ!!』

優しい目で言つてあげたのがよっぽどお気に召さなかったらしい。傷は治らない模様。じゃあこれを理由に長袖の服をつけよう。きつと許可される。されないわけが無い。むしろこれは都合がいいかもしれない。あの制服を一秒でも着なくていい時間が増えるならば。

丁度その許可を取りに校長室に行つた時だ。いやまあ校長室に行くような事でも

ないような気がするが一番上に通した方が早いんだよきつと。

「その場合はですね…」「校長から話を通してくださいよ」「っ!? な、なぜ……」「とおせよ」「……」

色々あったけど、すんなり許可は下りた。

「ありがとうございます。で、寮の件がすごく遅いのは何故?」

「それはですね、あきらめ……」

「ない」

「折れ……」

「ない」

「話を聞か……」

「ない」

なんだかんで、うやむやにされた。この狸め。長年生きてるだけあって誤魔化すのが上手い。下がらざる負えなかった。○○○は通さない! って感じで肝心な話を濁すのが凄い。別にいろいろもう手遅れなのを感じて、自分から下がった訳では断じて無い。

それとは別に。視線の先を別の場所にすると、少しだけ査問委員会の女の人が忙しそうだった。これは結構珍しい。

「あれ、いつもはぼーっと立ってるだけなのに何してるんですか？」

「暇人学生と一緒にするな。編入生が来るらしいからな。その準備だ」

「あー」

「早く行け。さっさとな」

「はい」

この人。最近はやつと、部下にもお疲れ様とか言えるようになって来たとか来てないとか。最初の頃はそんな言葉をかけられなかった人だった。らしい。全部部下の皆さんの愚痴情報なので正確な事は分かりませんけど。

最近ドヤ顔で部下に気遣いが出来る人になっただろう的な話をしていて、とても可愛かった。まあそれは置いて。その人が整理していた書類の、編入生の写真を見たらなんと恋する乙女だった。そんな時期か。

恋する乙女こと、早乙女レイ。男装してスーパーエリート学校であるデュエルアカデミアに入學してきた小学5年生。色々凄い。身体能力はさすがデュエリスト。木の一本ぐらい軽々と登って、枝を伝い向こう側の2階ベランダに侵入とかやってのけます。そこまでして、来た理由。それは「恋した人がここに——」って奴。普通の人なら諦めそうな結構な要素（遠距離十年の差。これだけでも相当。その他以下略）をものともしない辺り、恋は盲目で、無限のエネルギーなのかもしれません。行動力半端ないですよ。

「確かこれは、最終的にターゲットが十代君に移るんだよね」

十代君がデュエルふっかけて惚れさせる遊戯王的な展開するんですね。まあ止めてもいいけど。

「十代に移る？」

「あ、なんでもないです。さっさと出ていきます」

独り言を聞くとはい卑怯なり。やはりここでのついつい言葉が出ちゃう癖は直した方が良さそうだな。そう思いつつも急いで校長室を後にした。

□□□□□□□□

「ね、ねえ！ 本当に行くの!？」

「当たり前よ。ここまで来て帰るわけ無いでしょ。勝手に付いてきて文句言わないでよね」

「なっ！ 私は貴方の無謀な計画を止めるために——」

「グダグダ言わない！ はい、制服」

「常識的に考えて——」

「先に行ってるから！」

「ちよー！ 待ちなさい！ っていうか、本当に男の……本気だったの？ ありえない、本当に馬鹿。これだから子供は。いいわよ。なら私も。好きにするから」

しばらくして、音も消える。

「……べ、別に一人が嫌とか、ちよつと暗いこの場所が怖いとかじゃない。ただ、あの子を止めないと行けないから。そうよ。私が止めるのよ。しっかりしてる私がね。——つてもういない!? 早く行つたつて手続きがあるから直ぐには動けないでしょ!」

2人の小さな影が、島にやつて来る。一途な思いの為に。

「待つててね、亮様!!」

恋する乙女は強い。

□□□□□□

「おはようございます」

「おつ、なんだどうしたんだよ」

一人旅。レッド寮へ。十代達の部屋に殴り込みはもう何度も。時には三沢さんも引き連れてはデュエルしている。勝率は察してくれだが。まあ今回はそれが理由じゃない。部屋の後方へ目を向けると深く帽子をかぶった生徒がいる。

「なんとなく来ました。所で後ろの方は？」

「ああ。今日から俺達の部屋に来たレイだ！」

十代君の紹介。そして向こうがこちらに気が付き振り向いた。自分を見た後、固まって、じいつとこちらを見つめてくる。

「は、初めまして。所で、何故そんなに鋭い視線を飛ばすんですか」

「……どうして、オベリス・ブルーの人がここに」

「……あ」

そこからだったか。何故かやたらと内部情報に詳しいレイさん。ここでの階級関係もだいたい把握していた模様。転校初日の筈だが既に絡まれた……訳ではなさそうだけど。

十代君は外から来た三沢君に「野球の次はサッカーで勝負だ！」「おう！」といったやりとりの後に部屋を出ていき、何故か部屋に2人きりに。自分も出ていこうかなと思ったら、呼び止められて何故か話をする流れ。階級関係を知っているからこそ、ここにわざわざ来るブルー生徒の自分とはとても、ブルーの中では話しやすい相手だと察したのか。なんなのか。さり気ない会話の中でさらっと男子寮の話とか混ぜてきて念には念を入れた確認でもしているのかな。なんてのは考え過ぎか。

「先輩は、どうして……？」

「あー。そうですね。十代君とデュエルする、つもりでした」

「へえー……好きなんですか？」

恋する乙女、鋭い視線を再びこちらに向ける。つまり、まあ。いやな。ここで暴露しても得はないから止めとこう。そうしておこう。

「好きですよ。彼のデュエルは見ていて元氣が出ます。そういうレイさんは、好きな人が居るんですか？」

中途半端に回答しても面倒なので、回答＋相手への質問で返す。しつこい人には掘り返されるが大体はこれで大丈夫。その質問には、少しでも戸惑ったものの、笑顔で返された。

「はい。わた——僕にも、好きな人が居ます！」

「ほう。どんな男の人ですか」

「それは——つて!?　ち、違いますよ。僕は男です。男が男を好きになるのは、その、違います。こ、この話は終わり！」

「ですよー」

レイさん。頑張ってる。凄く可愛い。邪魔する気は無いが、不法侵入に関してだけはどうしようかと少しだけ悩む。多分止めた方がいいか。良いよな。

「でも、この時期に一人で転校って、よっぽどの事があったんですかね」

「……その、友達と一緒に来たんです」

「友達？」

友達と一緒に。予想外の一言。なんだそれは、いつ発動する。と思っている内に発動条件が満たされたらしい、部屋の外から入って来たのは、これまた小さな金髪の、同じく帽子を被った……男（仮）だ。

「……」

入って来て、自分を見た瞬間に露骨なまでに思考を展開しているような、悩み顔をしながらこちらを睨む。

「初めまして。所で、なぜそんな怖い顔でこちらを睨むんですか」

「……オベリスク・ブルーの、しかも女子が、なんで男子寮であるレッド寮へ？」

「……あ」

そこからか。言い方が隠す気もなくぶつ指してくるこの人物。なんだか態度もとっても偉そうな大人。とてもかなり見覚えがある。え、レイさんと同級生なのか。まあ、いいや。確か名前は、M・A・イングリット。一言で言うなら大人な子供。いや子供。かなりきつい物言いをする子でいつ人間関係で酷い事になるかが気になってしまふ感じ。自分には非がないと強気の口調が印象に残っているが本当に心配になる感じ。

凄く慎重かつ丁寧で、それでいて臆すことのない言葉でこちらの情報をひねり出してくるこの人。怪しすぎるんだろうな自分が。まあ警戒しない人よりは全然マシだけど。レイさんがやけに情報持つてるのもきつとこの子が調べた……としか思えない。万全を期す。という奴ですか。どうにかこうにか話をして、レイさんにもフレンドリーだよーと証明する協力をしてもらうこと10分。ようやく自己紹介。

「お名前は？」

「私は……マイ。マイよ」

「マイさん。ですか。宜しくお願いします」

まだ警戒はされてるな。と差し出した手をスルーされて感じた。警戒してますが伝わってきて逆に、なんか、こう。可愛い。警戒されてるなら、されたままにしましょう。少しでも楽しい事が出来るかも、出来ないかも。後はそう、挨拶がてらに話でもしておこう。そうしよう。

「2人とも同じ所から来たんですか。そうだ、その学校で、なにか面白い——怪談話ってありました？」

怪談話。別に好きでも無い。が、隣で目を輝かせるレイと、一気に暗くなり、それこそ子供のように小さくなった気がするマイ。

「実は、そういう話に自分は興味があつてですね。お2人は——」

「ありますー！」

「無いー！」

どうやら正反対の様だ。

「ば、馬鹿じゃないの。怪談なんてタダの妄想よ。非科学的な、何の根拠もないデマよー！」

「恨みの想いが募った怪談話、が苦手なら——恋の想いが募って出来た、恋のおまじない。の話とかはどうですか。興味——」

「ありますあります!!」

「無い無い!!」

どうやら凄く正反対の様だ。

「ちよつとレイ！ 何考えてるの？」

「何って、なに？」

「あの見るからに怪しい人よ！ 絶対に何かあるわ」

「考え過ぎ。あの人は、好きな人が居るから来ただけだよ」

「はあ……いい？ どう考えても——」

「それより、私は行かなくちゃ！」

「あつ、待って——もう！」

少しして別れたが、あの二人のいる場所は分かる。一応、先程十代君と話しましたがイベント無くてもレイさんのことは薄々気がついていたのか。なんて優秀な嗅覚だ。という事で十代君に任せた。が……あと一人。あれは自分が見張りましようか。十代君がレイさんの動きを察知した時、自分に任せてもらった。連れ戻した後、デュエルしてくれと。

□□□□□□□□

「もう、ここで待っててよ！」

「待てるわけないでしょ！ もう少し考えて」

「どう考えたってこの木を登ってベランダに飛び移る方が——」

「皆が貴方みたいなお化けじゃないのよ！」

「なによお化けって！」

「……」

あの子達は、男子寮の外側で喧嘩してました。どうやらレイさんのパーフェクトなプ

ランは却下された模様。自分でもそうする。危ないし。ため息少々、面倒くさい気持ち半分。残りはしようがないという意味でのろのろと二人を止めに行つた。

「これぐらいも登れないの？」

「そういう問題じゃないわ！」

「そうですねー。でも、どういう問題があるんですか？」

「そ、そうよ！ これで行けるのよ？ 何の問題があるのよ！」

「私が無理なの！ それに——つて」

途中で言葉を詰まらせるマイさん。後ろに立つ自分の方へ振り向く。釣られてレイさんもこちらを見る。マイさんが振り向いた時は気が付くのが早いな。とか思いつつ。苦笑い。

「お二人さん。ここ、ブルー男子寮。女子が来る場所じゃないです」

見つけたのに焦つたのか、口をパクパクさせてこちらとお互いを交互に見る。でもそれも少し。次には少し早口になりながらもマイがこちらに強く言葉を投げた。

「そ、それを言うなら貴方も女子でしょ！ 違反よ！ 常識知らずよ！」

「ご名答。貴方も女子。それつまり私も女子。であつてますか、マイさん？」

話を進めるためのご名答。自分が投げ返した言葉。その後、その場から2人を回収しましたが一切抵抗は無かった。

「十代君からレイさん怪しいって聞いて付いてきましたが正解でした」

ついでに、レイさんに十代君へ意識を向けさせるように一言。多分これで、進行は問題ない。カイザーが気が付かなくなつたのも、一応なんだかんだで小細工して気づかせた。手渡す髪留めは無いにしろ十代とレイのデュエルは見に行くだろう。むしろ明日香さんとカイザーさんは自分が連れていくまで考えている。そして、回収後の移動後。

「あらあら、可愛らしい——女の子ですね」

「えっ!？」

「えっ!？」

連れてく所もないのでデュエル場に行ったら、あの人が居た。どうやら片割れの爆風娘は居ない様子。レイさんとマイさんを見ると、何も言っていないが平然と放つた一言は、ふたりの心臓に悪かつたらしい。ビククリした顔のまま固まっている。

「な、なんで……」

「今の声で確信致しました。お2人とも、男子の割には小顔で、可愛らしくて、なにより体付きも全然違いますし。どこかの誰かさんよりは見つけるのは楽でしたわ」

どこかの誰かさんって誰かなー。2人は見ただけで、声を聞かれただけでバレた事に驚きを——驚く事か。いやまあいい。いやね。この年代で声変わりしてもそんな高い奴の方が珍しいと思うの。どこかの天使が体を魔改造したとかじゃない限りは。いや、

そんな人も居るけど、そんなに見ないよね。まあともかく、バレた事に驚きで固まって、特に金髪の子がすごい顔してるので。場を流す。

「お2人はとても可愛くて、性別をごまかすのが難しい。悪い事では無いですよ。女性として魅力的って事です」

「可愛すぎて誤魔化せるのは男が女装している場合ですものね」

「……ソウデスネー」

聞いてくれ。そういう気は無いんだ。本当に成り行きでこうなったんだ。信じろ！

とりあえず、ここでは男子寮に忍び込むのはやめろと言ってから2人をレッド寮へ送り返した。再びリトライされても困る。妙に落ち着いたマイさんが、何か変な事でも考えてなければ良いけど。

2人を返して直ぐに、1人で何処かへ行くマイさん。だいぶ行動が速い。時間的にも十代君が動く時間じゃないし、レイさんとは別で動いてるなこれ。

「……部屋で大人しくするという選択肢は無いのか」

とりあえず、動いた。もうすぐに、暗くなりそうな、でもまだ明るいような不思議な時間。何処かへ向かうマイさん目の前に立ち塞がった。

「何処かへお出かけですか」

まち伏せ。結構驚いた顔はしてくれましたが、直ぐに冷静な顔に。

「やつぱり、貴方ね。女性を付回すのはどうかと思うけど」

「やつぱりとは。付けられてると思っただけですか」

「当たり前。都合よくあの子が行動する時に、貴方がいた。疑われない方がおかしい。そもそも、私は最初から怪しいと思ってた。……気づいてたなら、どうして黙ってるの」
「黙っていて欲しいのでは？」

そう答えると不服そうな顔が更に凄いことになる。そして明らかな敵意を向けられながら話し始めた。

「そんな事は聞いてない！ 貴方もうすぐ大人でしょ!? なら、なら止めなさいよ」

大きな声。真剣な声で驚きましたが、自らを落ち着けるように咳をするマイさんも、普段はこんな声出さないでしょう。

「いいわ。どうせ、私からレイの事は終わらせるつもりだった。どいて頂戴」

「つもりだった。言葉が安定してないですよお嬢さん」

「……なによ」

「いやいや。なんでも。だが、ここを通すわけには行きません。ここを通りたくば、倒していつてもらいましょうか！」

「……はっ？」

声が響いて数秒。固まるマイさんを見て苦笑いした後、気を取り直して宣言する。

「マイさんが、何をしたいのかは知りませんが、ご都合上じゃあどうぞと好き勝手させるのも怖いので。デュエルしましょう」

「……まっつて。よく考えてよね。どう繋がったらデュエルに——」

「ここはデュエルアカデミア！ デュエルが全ての世界。と言つてもリアリスト気味のマイさんにはピンと来ないですよ。なので明確に言つてみましょう。びつくりする事聞きますか？ デュエルで退学とか、校長権限で何でも一つ願いが叶うとか。そんな事が起こる場所です。嘘と思うなら調べても構いません」

デュエルで人生が変えられる。そう言つても過言ではない。そんな事を聞いたマイさんは口がポカーンと開くぐらいには戸惑つていた。そう。一流のデュエリストならデュエルで全て解決する。多くは語らず「デュエルだ」の一言で終わる。理由だとか何だとかはグダグダ言わない。言わずとも分かっているらしい。

「まあ乗つ取つて？ デュエルしましょう。勝った方が自由。負けた方は、勝った方の言う事を一つ聞く。というのは」

「……いいわ。その話、乗つてあげる」

半分冗談で言つた条件でのデュエルだが、意外にも応じた。だが、乗ったなら話は早い。持っていないだろうから予備のデュエルディスクを一つ手渡した。受け取ったマイさんはしっかりと動作確認をした後にディスクを構える。

「勝った方の言う事を一つ聞く。でも常識的に考えて無理なものは無理」

「安心して下さい。それどころか、出来る事なら3つまで叶えましょう。自分ですが」
「……負ける気がないって事ね。そうとうな自信家かしら。流石はデュエルアカデミアの生徒って所？」

「ふふっ。その考え方はお子様ですよ」

「なっ……」

「3つまでというのも、そう言わないと貴方が疑い過ぎるから。心は大人のマイさん、信じることを覚えなないとこの先辛いですよ。大人は厳しいのです」

「っく！　なんでそんな事を言われないと行けないのよ！」

「それは、そう。そんな反応を見たいから。とか。まあなんでも良いじゃ無いですか」

「ぜったい！　倒す！　気に入らないわその態度！」

「自分はマイさん好きですよ」

「冗談はその言葉だけにしてくれる！」

「本当なんですがね……」

「これ以上話していても拉致が開かないと思われたのだろう。一方的に「デュエル！　先攻は私！」とデュエルを開始された。

「分からせてあげるわ。私は貴方が思っているような子供じゃないって事を！　まずは

モンスター、カード一枚づつセットして、ターンエンドよ」

「……では、自分のターン。出ておいで、ファアーニマル・ドック！」

可愛い犬さんのぬいぐるみに、小さな小さな天使の羽。パタパタと動く羽はその体を持ち上げることは出来ないけれど。

ファアーニマル・ドック 攻撃力1700

「マイさんはこういうの好きですか？」

「なっ、なんの事よ！」

「こんな、可愛いモンスターですよ。自分は好きなのです」

反応見るに明らかに好きそうで良かったけど、つい笑顔を見せる自分を見て顔が戻るマイさん。多分なんか、こう、嫌なんだろうな子供って思われるの。

「冗談はやめて。私は本気でやってるの！ レイの事も、デュエルも」

空気を和ませようと思ってたけどどうやらそれは必要ないみたいだ。真剣なのは伝わった。ならこつちも真剣にやろう。あの時みたいな恥をかかない様に。

「ファアーニマル・ドックは手札から召喚、特殊召喚した時にデッキから仲間を呼びます。クマダベアーなファアーニマル・ベアを手札に。ベアはすぐに効果を発動！ 手札から捨てる事でデッキの「トイポット」1枚をフィールドにセット出来ます。セットされたトイポットを発動！」

おおきなガチャガチャ、ガチャポン。言い方はそれぞれだが、大きな機械が出現する。ルールを守ってコイン替わりのカードを入れて、思いっきりガチャガチャを回す。当たりかどうかは人しだい。

「トイポットは、手札を1枚コストにカードをドロ―し、それが「フアーニマル」モンスターなら、手札から好きなモンスター1体を特殊召喚。ハズレなら引いたカードを墓地に送ります」

「……当たれば、手札から好きな上級モンスターを出せるカードね。不確定だけど」

「おや鋭い。でもでも、今回は……」

引いたカードは魔法カード。その時点で夢も希望もなかった。

「はずれ……ブラック・ホールは墓地です。では、バトル！ ファーニマル・ドックでセツトモンスターに攻撃！」

思いのほか強烈そうな捨て身タックルがネズミを貫いた。成人の人間ほどの大きさがあるネズミを。

「破壊されたのは、巨大ネズミよ。これでデッキから攻撃力1500以下の地属性を特殊召喚出来る。ありがとう、手伝ってくれて」

「おお、どういたしまして」

「……私が特殊召喚するのは、融合呪印生物―地」

融合呪印生物―地 攻撃力1000

気持ちの悪い岩。参上。まさかのリクルート先に驚きが隠せない。

「楽しそうなデツキですね!」

「……ふん。そう言ってられるのも今のうちよ。ターンが終わりなら、私のターンを始めるわよ」

「どうぞ」

「私のターン! ここから先に貴方のターンは無いわ! 永続罠、王宮のお触れ! そしてダーク・ヒーローゾンバイアを召喚」

セットカードは罠を無効化するお触れ。そして召喚されたのは攻撃力の高いモンスター。

「融合呪印生物―地の効果! このカードを含む融合素材のモンスター1組をフィールドから墓地に送って、決められたモンスターを特殊召喚するわ。この組み合わせで出てくるカードは――」

この組み合わせ。本気か? 子供がこんなの使うなんて相当嫌われそうだけど……正直見たことないデツキへの興味の方が強い。

「お互いの全ての召喚、特殊召喚を封じる異星の最終戦士。ですね」

「――っ、そうよ」

ダークヒーローは何を思っ、何を守ろうとしたのか。荒れ果てた大地に立つ最終戦士はその面影を、ほんの少し、残すだけ。

異星の最終戦士 攻撃力2350

「異星の最終戦士は特殊召喚時に自分以外の自分モンスターを全て破壊する。けど、私のフィールドにはこのカード以外存在しない。知ってたのは褒めて上げるわ。けど、どうしようもないでしょ。この突破手段も、ついさつき墓地に行っただけ。貴方のモンスターも最終戦士には叶わない。罠も無効」

「……ふふっ」

「な、何がおかしいのよ」

「おかしい？ いや、感心してたんですよ！」

シンプルだ。このロック戦術はお見事。しかも、大体のロックと違って攻撃は出来るから決着も早くつく。

「素直に、苦しそうな表情の一つでも見せたらどう！ バトルよ、ファーマル・ドックを攻撃！」

切り裂かれるドック。躊躇いのない一撃は強いものだ。

自分 LP3350

「私はカードを伏せて、ターンエンドよ」

「最終戦士特化。嫌いじゃない、嫌いじゃないですよ！ 魔法を封じない意味は、魔力吸収球体の存在と……防御カードや、相手のセットモンスターなどに回答する為の魔法を自分が使いたいから。」と言った所ですね」

「関係ない事言つてないで早く進めてくれる？（なんでコイツ、私のデツキを……なんでコイツは、私のデツキを知つていて尚、楽しそうな顔をしてるの？）」

「では。自分も見せて行きますよ。ちよつと、綺麗なデツキではないですが。さあまずはいフィールドを替えましょう。祝福の教会ーリチュアル・チャーチよ。鐘を響かせよ！」

場が教会の内部へと姿を変える。祝福の鐘が響く中、次々とカードを展開していく。「リチュアル・チャーチの効果。手札の魔法カード。今回は祝福の聖歌を墓地に送りデツキから儀式魔法を一枚を手札に加えます。自分が加えるのは大地讃頌」

地属性専用の儀式魔法。その名『土の歌』第七章の終曲にも使用されており、『土の歌』は大地への感謝や反戦の思いが込められている。見ていて微笑ましい姿をしたフアーニマル、祝福の教会。そして歌。それらが相手フィールドに佇む最終戦士が漂わせる空気とぶつかり合う。

「墓地の、罨カード。ブレイクスルー！ スキルは除外する事でフィールドのモンスター効果をこのターンのみ無効にします」

「墓地から異!? ……最初の、トイポットで」

「王宮が管理するのは生者がいるフィールド。死者が眠る墓地は管轄外だ。問題なく効果が適応されてこのターン、自分はモンスターを召喚できます。マンジュ・ゴットを召喚！ 儀式モンスターを加えます」

最後のピースも引き込み、これで全てが整った。

「ようやく、揃ったってわけね。……なんだか知らないけど負けるつもりは無いわ」

「そうですね。当然自分ありません。さあ発動せよ、大地讃頌！」

フィールドのマンジュ・ゴットと手札のプレサイダー。レベル4のモンスター2体が生け贄に。気がつけば謎のスイッチが入って芝居がかった台詞を吐く。

「歌え命を！ 祝福の力よ！」

協会の中。歌が響く、場が輝く。溢れんばかりの祝福は。

「それを全て、飲み込み、砕き、取り込む者の為に！」

その場を支配する、王が目覚めによってかき消された。

「なっ。急に、暗く……」

優しい光は濁り始めた。その元凶は、それは何もかもを取り込んで、現れでるモンスターは歪で、今ある全てを壊す為に。

「世界よ！ 満たされぬ我を埋めよ……儀式召喚！」

龍が現れた。巨大な翼を広げ、自らの存在を示す。巨大な龍から出ている人の半身は雄叫びをあげた。つんざく悲鳴が祝福の鐘を響かせ、音色を変え、大地の歌も踏みにする。それが変えてしまったその音は不安を掻き立てる。

「虚龍魔王アモルフアクターP!!」
きよりゆうまわう サイコ

虚構の魔王が、復活を歌う。

アモルフアクターP 攻撃力2950

場の空気は、完全に壊された。教会も荒れ果てる。最終戦士と虚龍魔王が対峙するこのフィールドは終わりの世界の様だ。

「なっ……な、なによ、それ」

「孤独な最終戦士に相応しい、魔王ですよ。アモルフアクターPの効果！ 次の相手ターン、メインフェイズをスキップさせます。つまり、マイさんは次のターンも、そのフィールドのままバトルフェイズに入らなければならない。もう一つ。このカードがいる間、融合モンスターの効果は無効化されます」

「効果は無効化なんて、……ちっ」

「そう。舌打ちしてしまう程に相性が最悪」

最終戦士の強みは効果だ。効果が強い故に攻撃力が少し低めになっている。能力を無効化するアモルフアクターPは最終戦士にとって最悪の相性だ。

「説明終えた所で、こちらのバトルフェイズ！」

「させないわ！ 入ったその時、速攻魔法、月の書！ これでそのモンスターを裏側守備表示に！」

「おや、つれないですね。それにこれで、このターンが終われば最終戦士の効果が再び戻り、魔王が反転召喚出来なくなる。少しキツイです。自分はこれでターンエンド」

少しキツイ。その言葉通りだ。攻撃は出来ないが、マイもアモルフアクターPがいる間は攻撃が通らない。アモルフアクターPの守備力2500を上回れなければ。

「私の、ターン。バトルフェイズを終了しメインフェイズ」

アモルフアクターPの効果で飛ばされたメインフェイズ1。手札を見ながらマイさんはじつと動かない。

（……落ち着くのよ。相手は儀式デッキ。儀式召喚に必要なカードが多い。デッキの大半をそれらのカードや、それを集める為のカードに使用する。加えてファーマルって名前のカード。アレが直接儀式と関係しているとは思えない。なら、儀式とは別で入っているカード。つまり、単純に相手の対策カードは少ない筈。例えばそう、シンブルに攻守が上のモンスターを倒すのに苦労するとかね）

驚く程静かに、その視線はカードに。考えがまとまったのかゆつくりと手が動き始める。

「……私は、魔導師の力を最終戦士に装備。カードを2枚伏せて終了」

魔導師の力の効果により最終戦士の攻撃力は魔法、罨ゾーンに存在するカード1枚×500ポイントアップする。今存在するカードは王宮のお触れ、魔導師の力、セットカードが2枚。

異星の最終戦士 攻撃力4350

「攻撃力をアップさせましたか。打点では確かに超えられない。自分のターン！ トイポットの効果を発動！ 自分は手札1枚を捨て、カードをドロウする。ドロウしたカードはファーマル・ベア。見事大当たり……なんですが」

「最終戦士の効果で召喚と特殊召喚は出来ないわ」

「そうなんですよね。まあ、ベアの効果を使います。捨ててデッキから新たなトイポットをセット。更に、墓地に眠るファーマル・ウイングの効果を発動！ トイポットがフィールドに存在する時、墓地にあるこのカードを除外し、墓地に存在する「ファーマル」モンスター1体を対象にとって発動。今回はファーマル・ベアを対象に。対象モンスターを除外してカードを1枚ドロウ。更に、トイポットを墓地に送ることで追加ドロウ出来ます」

「ふん。回りくどいことした割りには強欲な壺と変わらないわね」

「なんの。成功すると強欲な壺以上です。トイポットの効果発動！」

「トイポットの効果？ 墓地に送られたはずじゃ——」

「墓地に送られた時にデッキから「ファーンニマル」モンスターを1枚手札に加えます」

「はあ!？」

手札が2枚増える。強欲な壺以上。単純シンプルなその効果が強い事は見れば分かる。

（儀式デッキの消費を抑えるためにあのモンスター達は……でもそれなら尚更。自分の動きに集中したデッキ。相手の妨害は殆どない。最終戦氏もまだ暫くは耐える筈）

「加えるのはファーンニマル・ウイング。まだまだ！ リチュアル・チャーチの効果。手札の魔法カード、復活の福音を墓地に送りデッキから儀式魔法を手札に加える。加えるのは祝祷の聖歌。最終戦士の効果で反転召喚すら出来ません。カードを伏せて、終わります」

「エンドフェイズに速攻魔法、サイクロンを発動！ 最後にセットしたカードを破壊」

「なんと！ 残念ですね。月の書が破壊されます」

「……月の、書？」

破壊されたカードはマイさんも同じく使ったカード、月の書。モンスターを裏側守備にするカード。けどそれを見た瞬間に、マイさんは怒りを顕に。

「馬鹿にしないでくれる！ それを使えばこのターン突破できた。いえ、絶対使わない

と――」

「使ったら、突破させてくれたんですか？」

「――つつ、使わない理由がないでしょう」

「確かに無いですが、なんとなくです。マイさんなら対処札がありそうだ。性格的にも、用意周到デッキも特化型で綺麗にまとめていそうなタイプ。普通なら打つタイミングよりも、マイさんがとても辛いと思うタイミングで打ちたかった。それが裏目に出ただけです。」

「気にしないでください。言われなくても、使える時に使えるものは全部使ってます。さあ、マイさんのターンです」

（フィールドにはトイポットと裏側守備のアモルフアクターPだけ。どうやって防ぐ気……分らない。分らないから、早く、早く何かされる前に）

「マイさんの顔色が悪くなる。なにか不気味な物を見た時の様に。得体の知れない何かを見た様に。」

「私のターン！」

ドロ―したカードを食い入るように見る。そしてそれは望んだカードだったらしい。「私は、アームズ・ホールを発動！ デッキの上のカードを墓地に送って、デッキの中からメテオ・ストライクを手札に加える。それを異星の最終戦士に装備！」

「貫通効果を与える装備魔法。確かに、最終戦士以外は基本フィールドに残らないから。装備魔法主体強化、破壊耐性モンスターを残さない……その後の通常、特殊召喚はしない。だからアームズ・ホール。それ入れるなら……」

「さつきからデュエル中に独り言を話さないでもらえる！ バトルフェイズ。最終戦士でセットされたアモルフアクターPに攻撃！」

最終戦士の攻撃がアモルフアクターPを砕かんとする。その力はプレイヤーにまで伝わり、1歩退かせる。

「ぐおっ……いいダメージですね」

自分 LP1500

けれど、破壊されるはずのアモルフアクターPは墓地から溢れた聖なる歌によつて守られ、未だにフィールドに存在していた。

「なんでアモルフアクターPが破壊されてないの！」

「それは、墓地の祈祷の聖歌の効果です。儀式モンスターが破壊される代わりに聖歌を除外する効果。優しい気持ちは、聖なる歌は、皆を救う。魔王様でも救う力です。あと1度。そして、聖歌以外にはドラゴンが破壊される代わりに除外できる魔法カード、復活の福音が落ちている。つまりあと2度。アモルフアクターPには命のストックがあります。それだけじゃ無いですよ。アモルフアクターPが表になった事で効果が適応

され、再び最終戦士の効果は適応されなくなる」

最終戦士の力はまた、魔王の力で無きものにされた。数多の命のストック。場の強力なモンスター効果を無効化する力。

「が、魔王の効果は必ずしも不利益だけをもたらす訳では無いです。これで、マイさんもモンスターを召喚出来ます。……と言っても」

「うるさい。私が、一番分かっている……カードを伏せて、終了」

マイさんのデッキは最終戦士の強さを引き立たせる為のデッキ。それは最終戦士に依存したデッキでもある。相性が悪い。

「では自分のターン！ 特化デッキを使っている時、何が一番辛いのか。やっぱりそれは……その切り札が奪われた時だと思うんですよ」

「……奪われた時？」

「そのデッキの切り札。最終戦士。倒したいのは山々ですが、こちらに来るのなら話は別です。手札から永続魔法、グレイドル・インパクトを発動！ そして、グレイドル・アリゲーターを召喚」

ゲル状の物質で出来た体を持つワニ。異様に大きな目が光る。レベル8供給ギミツクの中でも単体が強く頼れるグレイドルパーツ達の1体だ。

グレイドル・アリゲーター 攻撃力500

「グレイドル・アリゲーターは戦闘及び魔法効果で破壊されると、相手モンスターの装備カードとなり、装備モンスターのコントロールは自分が得ます」

「なっ!!? なによそのインチキカード!」

思わず叫ぶ程に、破格の性能。この頃のコントロール奪取で同じような効果はダーク・ネクロフィアがあるが、あちらは墓地の悪魔族を3体除外、戦闘破壊されたエンドフェイズ時等々使いやすいものではない。

「容赦はしませんよ! グレイドル・インパクトはフィールドのグレイドルモンスターと相手のカード1枚を対象に、選んだカード両方を破壊でき——」

「なら速攻魔法、月の書! そのグレイドル・アリゲーターを裏側にする!」

「——判断早いですね」

隠れてしまったアリゲーター。これで対象に取れるグレイドルカードが無くなってしまった。

「でもアリゲーターが戦闘破壊されても効果が使える」

「最終戦士と戦闘する気? ライフを見て言った方がいいわ」

「冷静な子ですね」

宛が外れたのでさっさと次の手を探しに動く。リチュアル・チャーチの効果で手札の祈祷の聖歌を捨て、大地讃頌を手札に加える。トイポットの効果で手札のファーマ

ル・ウイングをコストに効果。トップはテラ・フォーミングなので墓地に。墓地のウイングの効果。墓地のベアと除外しトイポットを墓地に送って2枚ドロロー。トイポットが墓地に送られた効果でファアーニマル・ウイングを手札に。

「さてと。ではカードを2枚伏せて終了です」

デュエルも終盤になって来た頃だろうか。けどこのデュエルが始まってからマイさんの表情は悪くなる一方。デュエルに真剣なんだろうけど、マイさんの場合ちよつと良くないかもしれない。なんていうんだろうか。デツキといい三沢君とかに近いかも。計算して、本人なりのコンセプトの元動く。けど、そういう人は勝手に決着を脳内で着けそうというか……

（手札の差は開く一方。こちらは場に残った、効果が無効化された最終戦士という細かい線にしがみついている状態。あの2枚の伏せカードが何も無い事に賭ける。なんて甘い考えは無い。何かある筈だ。なら、このまま続けても私は……）

なんかそんな気がしたから、思わず声をかけてしまった。

「ドロローする前に暗い顔するんですね。引かないと分からないですよ？」

自分の言葉に、マイさんは悔しさと諦めが混ざった声を返す。

「……分かるわよ。普通に考えれば、このまま逆転できる確率が低いって事がね。私のデツキの強みは失われた。貴方だって分かっている。悔しいけど、貴方も一応……アカデ

ミアに入る実力を持ったデュエリスト」

「そこは、逆転できると信じる一択です」

「だから、子供扱い——」

「違いますよ」

真つ直ぐに見つめる。違う。違うんだ。普通は負けるとか、確率がどうか。そんなデュエルをここではない。負けそうなら逆転する。対策されたら乗り越える。むちやくちやだけど、それでも勝ちを諦める事は無い。少なくとも自分は、ここでデュエルしてそう思えた。

「確率、普通。その通りに動けば良い。つてのは思考停止と同じです。常識的に考えてとかもそれですね。その常識的につてのに外れたら、友達でも——自分でも諦めるんですか?」

突然そんな事を言われても困るだろう。けど。なんでだろうか。とにかく思った事を言葉にする。

「マイさん。貴方は普通に考えて有り得ないことをしようとした友と一緒にここへ来た。様々な問題なども無理やり超えて。何故です? 普通ならそうしない。どう考えても失敗する確率の方が多い。常識的にありえない」

「……それは」

「分からないでしょう。なら予想します。それは。きっと、マイさんがとっても、友達思いだからかもしれませんね。とってもレイさんを、信じてるから」

それを言つて少しすると直ぐに顔が赤くなった。

「こそ、そんな事ある理由ない！　ないわ！」

「いえ、そうでないと説明が出来ない。信じる気持ちは原動力です。レイさんは自らに燃える恋の炎！　その気持ちを信じて動けばきつと、自分のためになる。と分かつてたからここまで出来た。普通なら止める。やめとけ。無理だと。」

けどマイさんは止めなかった。それはやっぱり、普通はとか、そんなのじゃなくて、マイさんが考えた結果。レイさんを助ける事にした。それは、マイさんが、レイさんを信じてるし、大切な友達だから。そういう人達のことを考える時つて、割と無茶しても平気だったりします」

マイさんはレイさんの事を思つてるから。デュエルに真剣だから。レイさんの為に始めた筈のこのデュエルは彼女にとつて大切な筈。そんなデュエルで普通に考えて諦める。なんて言葉は聞きたくなかったのかもしれない。

「まあ分からなくても良いですよ。関係ない話でしたね。話を戻しますか。そのデツキを作ったのはマイさん。そのマイさんが負け濃厚というのなら、負けるんでしょうが……まあ無理もないですね！　なんてつたつてこちらのフィールドには数多の命を持

つ魔王！ 他者に寄生しその体を奪う生命体。それに対するは力を失った最後の戦士。既に場は出来上がっている。もう十分戦いました。諦めるならば今ですが？ サレンダーなら認めますよ」

どうする？ と上から目線で問いかけた。

マイさんは、デツキの上に指を置いた。

「……諦めない。とか、そんなんじゃない」

そして強く、カードを引いた。

「ただ、貴方が気に入らないだけよ！ 私のターン！」

引いたカードをそのままディスクに差し込む。

「強欲な壺！ カードを2枚ドロ！……そして、アサルト・アーマーを最終戦士に装備！ そのままアサルト・アーマーの効果を適応する。このカードを墓地に送ることで装備されていたモンスターを2回攻撃可能に！」

最終戦士が光に包まれた。魔王の周囲を照らすように。

「バトルよ！ むかつくから、その魔王の上から殴り倒す！ 異星の最終戦士でアモル

フアクターPに攻撃！」

「なるほど。だが、甘い！ 速攻魔法、サイクロン！ 魔導師の力を破壊する！ 力が無ければ非力な戦士。潔く散って——」

勝った。と思っていたが。

「速攻魔法、旗鼓堂々」

予想に反して、マイさんは速攻魔法を発動した。

「おっと？ 珍しい。墓地の装備魔法を、正しい対象のモンスター体に装備する魔法カード」

「そうね」

「だが、装備できる魔法が落ちてない。その魔導師の力は今はまだフィールドに……いや、えっ。まさか」

そう。無いと思っていたけどある。一度だけのタイミング。装備魔法が墓地に行く瞬間。

「……アームズ・ホールだと」

デッキトップを一枚墓地に置くその瞬間が。

「か、仮にあつたとしても……」

「私の墓地にある装備魔法は、巨大化よ！」

マイの墓地から巨大化が蘇る。その効果はあまりにも有名な物。

「巨大化なら安心。ライフはそちらが上！」

当然のようにそう口走った。巨大化。装備モンスターの元々の攻撃力を倍にする装

備魔法。だがそれは自らのライフが相手より少ない時。多い時は逆に半減させてしまうカード。なんの問題もない。

そんな事を思ってる自分にマイさんは初めて、憎たらしい程の笑みで返した。

「自分で説明したのに忘れたの？ 正しい対象となるフィールドのモンスターに装備よ」

やりたい事に気づくのに数秒。思わず自分のモンスターを見る。

「……魔王様！」

「遅い！ 巨大化をアモルフアクターPに装備！ 私のライフが貴方より上の為、巨大化の効果は装備モンスターの元々の攻撃力を半分にする効果に変化する！」

アモルフアクターP 攻撃力1475

異界の最終戦士 攻撃力2350

逆の作用を起こし、縮小した魔王を押しつぶすように最終戦士の攻撃が通る。結果はもう分かっていた。

「……祝祷の聖歌を除外して守る！」

歌が守るのは魔王のみ。ライフは削られる。力を封じ、数多の命を持つ魔王を相手にしても最終戦士は怯まない。

自分 LP625

「でももう1度攻撃出来る。それは破壊出来なくても、その守備モンスターに攻撃すれば終わり」

「承知の上です。でも、自分の残り1枚の伏せカード、常識的に考えて罠ですか?」

「決まってる。今更、止まらない!」

迷い無い一撃。魔王は残れど見事撃ち抜かれた。

「負けですね」

終わった時、やってやったって顔をほんの一瞬だけマイさんは覗かせていた。憎たらしいが悪い気はしなかった。

決着がつき、マイさんはディスクを返そうとする中で自分は負けた時の事について聞いておくことにした。

「面白かったです。さて、何するにも止めませんよ。そのやる事が終わったら、なんなりとご命令を。3つまでなら叶えてやろう。みたいな。でもマイさんのデツキは良かったです。でもとても楽しかったですよ!」

「……楽し、かった?」

「ん? ええ、楽しかったですね。最終戦士のデツキつてのは中々見ませんし。いやその、自分が知ってる最終戦士は凄く雑に添えられ——いえ、何でもありません。とにかく良かったです」

「……いいわ」

「えっ？」

「やる事が無くなった。今すぐ貴方に命令する事にする」

「無くなったとは一体……」

「1つ。その事についてはこれ以上聞かないこと」

「ん？」

「2つ。今のデュエルでしたような話を、ぜったいにレイの前でしない事」

「……お、おう」

「3つ。……このディスク。貰うわ」

「……えっ」

無言でディスクを外そうとしていた手を元に戻し、そのまま歩き始めてしまう。

「あ、あのー」

「なに？」

「それで良いんですか？」

「ディスクは高い」

「アカデミアのディスクですよ。周囲と違って結構目立つ……っていうか。アカデミア受ければいいじゃないですか。しかも、受けたとしてもどうせ使うのは結構先ですし、

それまでは家にあるディスクでも使えば……」

「良いの」

別にこの世界だデュエルディスクの確保に困る事はデュエルやってると早々無い筈だがなぜこんな事を？　とか思っただけと言った本人気にせずスタスタと歩くのを止めない。

「本当に……」

「くだい。何でも聞くって言ったでしょ」

「いや、良いなら……まあ。良いんですが」

「そんなにお願ひされたいのなら、あと一つしてあげる。名前は？」

「……はっ？」

「名前」

まさかの事に驚きながらも自己紹介を済ませる。そして必然的にこう返す事になる。

「えっと、そちらは？」

「M・A・イングリット。マイで良いわ」

「……そうですか」

レッド寮への道を歩きながら、なんだか妙にホッとした気分になった。

「では、親しみを込めてイングリッドさんと呼びましょう」

「それはヘン」

「気にしません」

「私が気にする」

「左様でございますか」

「私の事は関係ないって言いたいのか？」

「そろそろレイさんが……十代君に呼び出される時間ですね。まあそれも関係ない事ですかね」

「ちよつと待った。もう一回」

「レイさんが、十代君と、2人きり？」

とても大切な事なので2回。すぐさま飛んできた後ろ回し蹴りが鳩尾に綺麗に打ち込まれた。

「ぐおおっ!？」

「馬鹿じゃない!? つ、間に合え!!」

思わず倒れる自分を無視して、駆け抜けて行った。

「……ったい。なんだかんだで子供は元気だ。デュエルした後には全力ダッシュとはな」
痛みが収まったのを確認して、ゆっくり立ち上がる。大袈裟に言い過ぎたなど反省した。

これから後にまた色々と言われるのだがそれは別の話。

第9話 演るやる気

マイさんは余計な事をしない。と信じた。実際レッド寮に居た。なんとなく事情を察したらしい。終わるまで待つと。賢い子だ。自分はというと、明日香さんと合流する事にした。戻る途中。道を塞ぎ凄い顔でガイウスさんが立つてただけぞ。

『……見ていたぞ』

「あれ。デツキ置いてた筈では」

『貴様に縛られる事など何一つ無い。やろうと思えば勝手に離れる事も出来る』

一人で出来るもん宣言に聞こえた。ならば何故常にこちらを見てないんだ。見ないなら見ないで文句を言わないでくれと思ってしまう。

『何故負けた?』

「ああ」

マイさんとのデュエルですな。

『どう考えても、あの月の書は違う。それに……』

「月の書は、読みすぎたんです。自分でも何故か分からないぐらいには頭を使ってたよ。ブラフなんかも使いました。まさに、最後のセットカードはブラフの大地讃頌」

真剣にやつていても、やつてゐるからこそ変に深読みして。見返すと何やつてんだつてのは結構あります。デュエルに限らずですが。

「つても信じないでしょうけど。わざと負けたとかじゃないです。諦めて負けたなんてのはとんでもない」

『本当か?』

「もちろん。変に深読みしちゃう時だつてあるんですよ。信じよ、帝」

疑うような、と言うよりは。なにか見透かしたような視線を送つた後にため息をつかれた。

『減らず口を叩きおつて。どうしてここまでの事がありながら平凡なままで居られるのか理解出来ん……負ける程の理由があつたのか?』

「まーまー。何言つてゐるかわかりませんがホントに疑い過ぎです。でもあの子は伸びますよ。楽しみです」

『下らん……負ければ威厳が無くなる。貴様はあやつから見れば下の人種になった。負けた者の思い通りにならないのが世界だ』

「別にマイさんの上になりたいわけじゃないですよ」

『だとしても負ければ……』

「はいはい。知つてゐる知つてゐる。勝たなきゃダメな時は、勝ちますって」

この帝は、人とはかけ離れている割には人の心が読めるらしい。

「……じゃあ。最初のデュエルでガイウスさんに勝った自分は勝者？」

『最初から、デツキ破壊などと姑息なっ……』

「あー。はいはい。なるほどです。姑息な手に負けちゃったからノーカンって奴ですね。帝なのに、言い訳ですね」

『なっ!!』

最初のデュエルで負けている。それを掘り返した途端に怒った。確かに、上に立つなら勝つのは必須だと笑った。

ガイウスさんとの戯れもそこそこに、レイと十代のデュエルを見る為に移動。当然、計画通りに明日香さんについて行つてデュエル見ました。ついでに連れて来たカイザーと自己紹介も。

「会うのは初めてか。明日香から話は聞いている」

「初めまして。カイザーさん」

「カイザー……さん？」

「気にしないで。こういう人なの」

カイザーさん。という文の使い方が違和感らしい。でも自分の中ではカイザーさんなのだ。ヘルカイザーさんなのだよ。

「変な人みたいに言わないでくださいよ。ほら、丸藤さん。だと翔君と被りますし」

「翔君って呼んでるなら被ってないわよ」

「亮さん。つてのは、馴れ馴れしいですし」

「貴方がそんな言葉を使うのね……カイザーさんの方が、あだ名みたいで馴れ馴れしい印象だと思うわ」

「おー。びしつとした解答。流石デュエルクイーンさん」

「……」

「あ、ちよつと待つてくださいいたたたたた!! 絞め技だめ!! はしたない!! カイザーさんの前ですよ!!」

最近の訓練のおかげで何故かリアル耐久も鍛えられ落ちないけど痛いものは痛い。自分の首を締めている明日香さんを見た時のカイザーさんの顔が一瞬物凄いものだったのは内緒にしておこう。

肝心の十代君とレイさんのデュエル。見てる限り、恋する乙女はやっぱり脆すぎる印象。これゴ布林連打するだけで勝てるんじゃないやねってイメージ。実際辛いだろう。守備のゴ布林貰っても美味しくないし。後は、精霊が見えるからかデュエルの流れでクスクス笑ってしまいました。バーストレディを女の子って呼べる十代君凄い。そのデュエルも無事終了。つまりはレイの1件も終わり。見送りは十代君に全部投げた。

最初は、一人残される十代君かわいそうだから隣に立ってようかとも思ったけれど……ね。恨まれそうなので。カイザーさんの前で、男だあ！　とも言えないし。いや、何で隠したし。ああ。自分が分からない。当然、一緒にマイさんも帰るんですが、レイさんより先に船の中に行っていましたね。当然、挨拶はしておいた。

「では。気をつけてお帰り下さい」

「……ええ。またね」

「はい。またですよ」

シンプルだった。らしいっちゃらしいが。戦利品として奪われたディスクは腕に付けたままだった。予備ディスクよ……さらば。消えたディスクをごまかす方法を考えながらの帰り道は、カイザーさんと明日香さんについて行った。なんとなくだけど。そうしたらカイザーさんから話を振られた。あの人基本喋らないからびっくりしたけど。

「君のデュエルには、少し興味がある」

その一言から入った。

「迷宮兄弟に一人で勝ったその実力。偶然だと言う人が大半だが、俺はそう思っていない」

「そうですか？　自分でもあれは偶然だと思ってますが」

「デュエリストのデュエルに偶然は無い」

自分でも偶然だと、そんな事を思っていた自分にはつきりと。自分の言葉を否定するかの様に。そう言った。

「1枚1枚のカードの動き、そのドローでさえも。デュエリストは自ら決める。君のデュエルは、そういうデュエルに見えた」

「お、おお……」

正直どう返せば良いか分からない。確かに、カイザーさんほどなら初手やドローカード確定させられるとは思いますが。別に信じないわけじゃない。けど、前の世界からの常識が信じる事を邪魔する。

「それに、相手の切り札が出た時。君は笑っていた。自分のカードと同じように、相手のカードにも思いを寄せていた」

「お、おう」

「自分も、そして相手も。互いに認め、思いをぶつけられる。両者ともに全力を出せる。そんなデュエル。俺は、そういうデュエルを目指している。君のデュエルは近いと思った。そんな気がした」

言えない。多分、カイザーさんが思ってるのとは違うなんて言えない……

ま、まあ。真面目に考えてみよう。うん。カイザーさんのこの頃は、勝つても負けても共に得るものがあるからそれで良い。って考えだった気がする。後に起こる1件で

「負けたくないいいいい!!」になるからね。今は勝ち絶対じゃない。自分も多分、最初はそのスタンス。まあ負けても大丈夫だしのアレだったはず↓明日香さん喝入れられ↓やつぱゲームは勝たないと。に戻った感じ。ゲームじゃなくても、負けて得るものがあるのは、勝つ気がある人だけですよね。でもこれから本人気が付くんで言う必要ない……な。うん。

それにこんな話をする、ガイウスさんに勝ちがどうかお前が何言うって言われかねない。言い返せないけど。勝ち狙ってる。でも例外だつてある。

「まあ。そうなんですか。としか言えません。自分は好きなようにしてるだけですよ。」

ただ、カイザーさんとデュエルするなら、是非とも、是非とも、是非とも！ サイバー・エンドを拝みたい。いや、貴方なら出してくれる。絶対に。信じてますよ。いやむしろ、出してくれなきゃ困ります」

「ふっ。そうだな」

あのサイバー・エンド。必ずや使ってみたい。そうしたいではないか。責めて、上から倒したい。

「明日香が君に負けたという話も、納得が行く」

「負け……いや、引き分けでしたけど」

「2回目のデュエルだ」

2回目。思わず明日香さんに視線を送る。

「ええ。話したわ。1度負けた。1度だけよ。決着はついてない」

「……えー。話したんですか」

えー。って言った意味。それは、明日香さんが再選の時、わざわざ！ 2人だけしか居ない場所を選んでデュエルしたからです。そうしたら、誰にも言うなよって意味に聞こえるじゃないですか。

「入試の時と同じデツキ。聞いた時は驚いた。クロノス教諭を倒して尚、切り札を隠していたとは」

「いやー。それは、本当に偶然。むしろ、あのデツキは魔法使い族みんな切り札にするデツキですから」

そのデュエルでは結構ハプニングはあった訳ですよ。けど、楽しい感じでは無かった記憶。多分そんなに笑ってないし、終わるまで楽しいとも思わなかったかな。終わったあとも正直これはこれでどうなんだ？ って気はしてやっぱこの世界のデュエルをするのは難しいなと感じた記憶。

「それに……本気の君は少し怖いらしい。命を狙われてるかと思われていた。なんて言葉、明日香から聞いたのは初めてだ。とてもじゃないが今の君がそんな雰囲気を出すと

は思えない」

「ちよつと、亮！」

思わぬ発言に慌てて口塞ぎに来る明日香さん。遅いんですね。まあでも。

「まあ狙ってましたからね命。出てたんじゃないですか。そんな雰囲気」

「……えっ？」

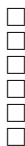
自分の返しにカイザーさんは固まり、明日香さんは戸惑いの声を漏らす。

「本気、真剣。賭けるものが大きい程に強いものです。例えばスポーツだって、その1人の人生。つまり命を賭けてやってる人が居ます。そういう人にならないと上に行けないからです。超天才は管轄外です。まあデュエルだってそうなんでしょう。命賭けて、命を狙いに行つたつもりでデュエルしました。……なんて冗談ですよ。2人とも固まらないでくれますか」

この世界のデュエルはただの遊びじゃない。そう思わせる程の何かを感じた。気づかせてくれた人に向けて、恩返し……と言うと変ですが。

「まー。ここに來たからには将来もデュエルで生きたいですし、なら本気ですてのは相
当に本気ですよ」

あのデュエルは……



「……分かつてるわね？」

「もちろん。真剣勝負ですよ」

大きく深呼吸する彼。1対1のこの場所で、デュエルは始まる。引き分けたデュエルに決着をつける為に。初めこそ私は彼を退学させるつもりで挑んだデュエルだったけれど、今は違う。

「……あー。よし。始めようか」

「じゃあ行くわ。私のターン、ドロー。フィールド魔法。リチュール・チャーチを發動。そして、手札抹殺。この魔法カードの効果で互いのプレイヤーは手札を全て捨て、新たに同じ枚数だけドローする」

彼のデュエルに関してはデータが少ない。と言うのもデュエル事に明らかに違うデッキを回していることが殆どだから。だからまず狙うべきは相手のデッキの把握。

「お互いに、本気になれそうなカードかもしれないわね。貴方の本気。見せてもらおうわ」「……そんな、狙って引いたみたいないなと言いますか？」

互いの手札交換を済ませる。墓地に送られたカードは入試試験の時に見たカード。つまり、クロノス教諭を倒したデッキ。

「リチュアーアル・チャーチの効果。墓地の魔法カードを任意の数デッキに戻し、戻した数と同じレベルの光属性・天使族モンスターを墓地から特殊召喚。私は墓地の手札抹殺とサイクロンをデッキに戻して、サイバー・プチ・エンジェルを守備表示」

サイバー・プチ・エンジェル 守備力200

「サイバー・プチ・エンジェルのモンスター効果。デッキから機械天使の儀式、または「サイバー・エンジェル」モンスターを手札に加える。私はサイバー・エンジェル―弃天―を手札に。」

まだ続くわ。魔法カード、儀式の準備は発動するとデッキからレベル7以下の儀式モンスターを手札に加え、更に墓地から儀式魔法カードを回収する。デッキから加えるのはサイバー・エンジェル―韋駄天―。墓地からは機械天使の儀式。そのまま機械天使の儀式を発動！手札のサイバー・エンジェル―弃天―を生贄に、サイバー・エンジェル―韋駄天―を特殊召喚！」

サイバー・エンジェル―韋駄天― 攻撃力1600

「弃天は生贄にされた時に光属性・天使族を、韋駄天は儀式召喚に成功した時に儀式魔法カードを、デッキから手札に加える。私が加えるのはマンジュ・ゴッドと機械天使の儀式。」

私は一枚。カードを伏せてターンエンド」

殆ど理想に近いターンだった。さあ、このフィールドをどう返すのかしら。

「自分のターンドロ。魔法カード。グリモの魔導書を発動。このカードの効果は、デッキからグリモ以外の「魔導書」カードを加えます。長いので流しますよ。分らない所は……いや。余計なお世話ですね」

いつもの様な軽い雰囲気、ターンが始まってから完全に消えた。ピクリとも動かないその目はカードじゃなく私に向けられている。

（こんな機会めつたにない。本気でやろう。その価値がある相手だ。この世界に合った本気を見せる。これは難しい事だ。このカードを只のゲームとして遊んで来た自分にとっては特に。けど前の世界の常識に囚われて、ただのゲームと思っでは勝てない。恥じらい等は論外だ。カードを信じてプレイする。命を賭けて戦う。そうやっている目の前の敵が、強いものだから。相手の全力に応えるなら、この先を見据えるなら……）

視線はこちらから外れず、手はカードを動かし始めた。見なくても分かっているとも言っているみたいに、迷い無く素早く。

「加えるのは、魔導書士バテル。そのまま召喚」

バテル 攻撃力500

「バテルの効果で「魔導書」魔法カードを1枚デッキから手札に。加えたのはセフェルの

魔導書。

そのまま発動。手札の「魔導書」カードを相手に見せ、墓地の「魔導書」通常魔法カードを対象に発動。選んだ「魔導書」通常魔法の効果を使用できます。見せるのはゲートの魔導書。墓地からはグリモの魔導書を選び発動。デッキからアルマの魔導書を加えます。魔導書院ラメイソンを発動して、カードを2枚伏せてターンエンド。……どうしました？」

どうしても不気味に見えてしまうと、不思議そうな声が、いつもの様な柔らかい声が届いてきて、思わずびっくりしてしまう。

「えっ？ あ、いいえ。何でもないわ。私のターン」

落ち着きましょう。冷静に考えるのよ。今はデュエルの事を……2枚のセットカードの内1枚は、入試試験でも使った速攻魔法。ゲートの魔導書。その可能性が高い。墓地の魔導書を2枚除外で表示形式を裏側に、3枚で1枚のカードを除外する効果。当然無視できる効果じゃない。それ以外に気にする事は、バテルが攻撃表示で出て来た事。入試の時はハッキリ間違えたと言っていた。今回も間違えた？ それとも、これを罠に罠を仕掛けたの？

「（予想はできるけれど、やりずらいわね……）私は、マンジュ・ゴッドを召喚！ その効果で手札に加えるのはサイバーエンジェル―弁天」

儀式魔法を発動するのか。発動するのならばゲートの魔導書で除外されるのはフィールドの韋駄天を除外される可能性を考えないといけない。そうなれば手札のカードも使わなければ儀式召喚出来ないから。簡単には動けない。ならまずは攻撃して、ゲートの魔導書があるなら発動させて……いえ、手札のサイクロンを……打つの？ この間にも彼は私の方から視線を外さない。獲物を狙う狩人。スキを伺う暗殺者。笑わない目がじつと、ただ私を待っている。

(つ……調子が狂うわね)

まるで今まで見てきた彼が、彼じや無い気さえする。いえ、違う。私は知らない。彼がどこから来たのか、なぜこの場所に居るのかさえ。

「貴方を見て、少し怖いつて感じたのは初めてよ」

重い空気に耐えられなくて、そんな事を言ってしまった。けど返って来るのは視線だけ。いえ、当然ね。真剣なデュエルを望んだのは私。彼はそれに答えてるだけ。

「……ごめんなさい」

「あつ、いえ、すいませんちよつと反応すれば良かったですね。つい……」

「いえ、いいのよ。私が言っただから。真剣に。本気でやりましょう。バトルよ。マジンジュ・ゴッドでバトルに攻撃！」

バトルフェイズが始まり相手攻撃宣言。その攻撃に彼は少しだけ不思議そうに首を

かしげながらセットされた罨、砂塵のバリアーダスト・フォースを発動した。

「ダスト・フォース？」

「ミラーフォースの、破壊の代わりに裏側守備にするカードです。因みに表示形式の変更に縛ります」

叩きつけるように吹き荒れる砂嵐が全体を多いつくしモンスターのは姿は消えた。バトルフェイズが終わる。ミラーフォースなら、機械天使の儀式で肩代わりしてバトルを破壊できた。裏側にされただけならば儀式召喚の生贄にもできる。そこまで大きな損害はない。けど確かに。迂闊だったかも知れないわね。

「私は、カードを伏せてターンエンドよ」

エンドフェイズの宣言と共に、場のカード1枚が宙に出来た渦に吸い込まれて消えた。

「エンドフェイズにゲートの魔導書。グリモ、セフェル、エトワールを除外して裏側表示の韋駄天を除外しました。」

では自分のターン。スタンバイフェイズに魔導書院ラメイソンの効果。墓地の魔導書をデッキの下に戻し——」

「させないわ！ 速攻魔法、サイクロンでそのフィールド魔法を破壊よ」

さっきのターン、罨を踏んでしまったけれどそれでもこのカードを取っておいしたのは

彼にドロ―をさせない為。嫌な予感がする。手札を与えらるゝとなにかが不味い……そんな気が。

「……バテルを生贄に、魔導冥士ラモールを召喚」

サイクロンを温存した結果召喚された上級モンスター。黒い服装で包まれた魔法使いは顔の半分を覆う髑髏がその表情を隠している。手に持つ大きな鎌と髑髏は嫌でも死神を想像させてくる。

魔導冥士ラモール 攻撃力2000

「上級モンスター……の割には攻撃力が低いわね。それだけ効果があるって事かしら」

「無いですよ。今は。ただの攻撃力2000です。更に手札から魔法カード、ヒュグロの魔導書。魔法使い1体の攻撃力を1000ポイントアップ。バトルです。セツトされたマンジュ・ゴツドに攻撃」

効果が無い？ そんなカードを彼が入れる？ いえ、そんな事はない筈。なら、少しでも効果を見る為にもここは通してみるのも手ね。攻撃がそのまま通ってマンジュ・ゴツドは破壊された。当然の様にその瞬間にカードの効果が発動する。

「ヒュグロの効果を受けたモンスターが戦闘で相手を破壊した時、デッキから魔導書を手札に加えます。加えるのはゲ―テの魔導書。バトルを終了。自分は手札からアルマの魔導書を発動。このカードの効果で除外されているアルマ以外の魔導書を手札に加

える。セフェルの魔導書を手札に。

セフェルを発動。手札のゲート、墓地からアルマを見せる。除外されているグリモの魔導書を手札に。

グリモの魔導書を発動。デッキから魔導書院ラメイソンを手札に加えそのままフィールドに。カードを2枚伏せて、終了」

結局、効果を発動したのは魔導書カードであの上級モンスターは何もして来ない。分からない。得体の知れないモンスターと、嫌でも見えるゲートの魔導書。本当にやりにくいわ。

「私のターン」

でも1度ラメイソンからのドローを防いだこのターンが、防御札がゲート1枚しかないこのターンが最も脆い。今のうちにダメージを稼ぐ。

「機械天使の儀式を発動。フィールドのサイバー・プチ・エンジェルと、手札のサイバー・エンジェル―弁天―を生贄に、サイバー・エンジェル―茶枳尼―を儀式召喚！」

茶枳尼 攻撃力2700

「弁天の効果で儀式モンスターを手札に。更に、茶枳尼の効果で貴方はモンスターを墓地に送らなければならない」

「ゲート」

茶枳尼の効果に合わせ、問題のカードが来た。けどそれは予定通り。

「何度もやらせない！ 手札の緑光グリーン・デクレアラの宣告者は手札の天使族モンスターとこのカードを墓地に送り、魔法カードの発動を無効にする！」

詠唱を遮った緑。その光で怯む間に、魔法使いは茶枳尼の一撃でフィールドから消えた。本当に呆気なく。

「バトルよ！ サイバー・エンジェル―茶枳尼―でダイレクトアタック！」

自分 LP1300

「リチュール・チャーチの効果で墓地の魔法カード2枚。機械天使の儀式と儀式の準備をデッキに戻してサイバー・プチ・エンジェルを特殊召喚する。その効果で機械天使の儀式を手札に加えるわ。ターンエンドよ。エンドフェイズに茶枳尼の効果で、墓地の弁天を手札に戻す」

「自分のターン。ドロロー。スタンバイフェイズにラメイソンの効果。ゲートを戻し、カードをドロロー。まずは、セツトしたサイクロンを発動」

ドゥーブル・パッセが破壊される。流石に簡単には行かないわね。

「天帝従騎アイデアを召喚。アイデアは召喚、特殊召喚に成功した時にデッキから攻撃力800、守備力1000のモンスターを特殊召喚する。これで冥帝従騎エイドスを特殊召喚」

イデア 攻撃力800

エイドス 守備力1000

「更にエイドスが召喚、特殊召喚に成功した時に、通常とは別に、生贄召喚限定でモンスターを召喚出来る。イデアを生贄に、手札から魔導鬼士ディアールを召喚」

それは空から落ちてきた。生贄のイデアをその剣で貫きながら。贄を通り越して突き刺さる剣を引き抜いたそれは、とても魔法使いには見えない。まさに悪魔そのもの。

ディアール 攻撃力2500

「な、なに……そのカード」

「悪魔のカードです。まあ可愛らしく杖でも持たせてみますか。装備魔法ワンダー・ワンドを装備。これを装備したモンスターの攻撃力は500ポイントアップ」

ディアール 攻撃力3000

「ディアールで茶枳尼に攻撃」

静かな悪魔がその剣先を茶枳尼に向けた。その直後。大きく跳ね、落下するように茶枳尼の頭上から迫る。ここで失うわけには行かない。

「墓地の機械天使の儀式を除外する事で破壊を防ぐ」

「けどダメージは受けてもらいます」

明日香 LP3700

「メインフェイズ2。ワンダー・ワンドを装備したモンスターを墓地に送りカードを2枚ドロー。カードを伏せて、終了」

最初の上級モンスターが何も無く破壊されたと思ったら、今度はドローの為に墓地に？ 理解出来ない行動にただ恐怖だけが募ってくる。

「私のターン。ドロー！ ……私は、大嵐を発動する！」

罫魔法を全て破壊するカード。自らのフィールドに破壊されて困るカードも無い今、メリットのみカード。決める。何か分からないけど、決着を急いだ方が良い。

「罫、和睦の使者。これでこのターン、受ける戦闘ダメージは0になります」

焦る私と違って、彼は焦らず罫を発動させる。和睦の使者。完全に相手の攻撃を防ぐ罫。しかもそれだけじゃない。

「更に、破壊されたラメイソンの効果。墓地の魔導書以下のレベルを持つ魔法使い族モンスターをデッキから特殊召喚。墓地の魔導書はゲート、ヒュグロ、アルマ、ラメイソンの4枚。よってレベル4以下……魔導書士バテルを守備表示で」

新たにモンスターを特殊召喚までしてきた。2体のモンスターを突破し、ライフを削り切れば勝利。届きそうで届かない。ならせめて、少しでも私の有利な状況にするしかない。

「私は……機械天使の儀式を発動するわ。サイバー・エンジェル―茶枳尼―を生け贄に、

サイバー・エンジェル―弁天―を儀式召喚！」

「……攻撃力の高い茶枳尼を生け贄に、攻撃力、能力の劣る弁天を特殊召喚した？」

「そして、ブラックホールを発動！ 私の弁天は機械天使の儀式を除外する事で破壊されない」

場のモンスターをすべて飲み込む超重力の渦。生還したのは弁天だけ。機械天使の儀式を墓地に送る為だけに召喚した弁天。けれど後悔はない。これで彼の手札は1枚だけ。ドロ―と合わせて2枚。少ない手札ではあのデッキは本来の力を発揮できない筈。

「これで、私のターンは終わりよ」

彼のターンが始まる。そして私は知る事になる。彼のデッキの本当の恐ろしさを。

「手札から、グリモの魔導書を発動。手札に加えるのは……ネクロの魔導書。このカードは墓地の魔法使いを除外し、このカード以外の手札の魔導書を相手に見せて発動できる。除外するのはバテル、見せるのは魔導書庫クレッセン。これにより、墓地の魔法使いを1体、特殊召喚する」

特殊召喚されたモンスターが現れた時に。死神がフィールドに現れた時に、彼は笑みを浮かべた。その笑顔は、果たして本当に笑っているのかも怪しいと感じる程に、でも純粋な笑顔に見えて。

「なっ……なに?」

「特殊召喚」

「ちよつと……えっ!」

一瞬のうちにフィールドにはモンスターが溢れ出した。4体の上級モンスターが。何が起こったのか分からない。どうして? 1枚のカードが特殊召喚されただけの筈なのに。

「なんで、そのカード……う、嘘……私の、茶枳尼も?」

良く見ると死神の他にさつき墓地に送られた筈の悪魔と、顔が薔薇になっている異形の魔術師。そして、私のモンスターまでが全て彼のフィールドに存在していた。

「時花の魔女―フルール・ド・ソルシエールは特殊召喚した時に、相手の墓地のモンスター1体を自分フィールドに特殊召喚する。サイバー・エンジェル―茶枳尼―は、頂きました。魔導鬼士ディアールは、墓地の魔導書を3枚除外する事で特殊召喚出来ます」
強力な効果を持つ魔法使い。そして最後に残った、なんの効果も使わなかったモンスター。このカードがまさに、見た目通りに正しく、死を私に運んできたカード。

「魔導冥士ラモール。このカードは墓地の魔導書の種類によつて効果が決定する。墓地にはグリモ、ラメイソン、ゲート、アルマ、ヒュグロの5種類。5種類の時、攻撃力が600ポイント上昇し、デッキから魔導書を1枚手札に加え、更にデッキから魔法使い、

闇属性、レベル5以上のモンスターを特殊召喚出来ます。これで、フルール・ド・ソルシエールを特殊召喚しました」

魔導冥士ラモール

攻撃力2600

フルール・ド・ソリシエール

攻撃力2900

魔導鬼士ディアール

攻撃力

2500

サイバー・エンジェル―茶枳尼― 攻撃力2700

「バトル」

茶枳尼の攻撃が弁天を貫く、悪魔が吠え、魔女が翻弄し。そして。

「とどめ」

ゆつくりと、私の元に歩いてくる。顔半分を覆う髑髏と、悲しげな顔をするもう半分の顔を持つ死神が、手に持つ大鎌を振り上げて。

一瞬で、私の身体を半分に引き裂いた。

□□□□□□□□

思い出すと実は結構恥ずかしい。最後は調子に乗って全力展開しましたね、必要ない分……真剣にやってたはずだが？　なんだこれってなった。まあ。次からはそこら辺も気をつけなければと。あと記憶に残ってるのはデュエルしていたその時、また鎧の人の如く変な声が聞こえた気がして、なんか「殺る」とか言つてて、普通に真剣に受け止めてそうだな全力で……つて感じでやってたような。

「ま、そんな話はもう良いでしょう」

少し固まった表情のカイザーさん。ちよつとテンション下がるとあれなので、柔らかくするために動く。話し始めながら距離を詰め、人差し指で軽くカイザーさんの鼻先に触れる。

「話すとすれば、人は見かけによらない。女の子は秘密が多いって事です。男の子なら覚えておくべし。ね？」

すつとそんな台詞が出た事に、自分であれで悲しい上に、明日香さんの顔が思いつきり笑つて無かった。それはきつとカイザーさんが恥じらった素振りを見せたからだろ
うか。

……ちがうんだよ。これは、あれなんだ。すつごくアレな話だけど、露骨なぐらいがわかりやすいんじゃないかな……つていうか、いや、待て。ダメだ。考えるのをやめな
きや。恥に塗れるのが人生とは言うが流石にきつい。

それに、どんなに露骨だろうがなんだろうが、男の子はね、基本的に、分かってても反応しちゃうんだよ。そんなものだ。生憎見た目は天使印の女の子だし。カイザーさんは貴方と同じで周囲に1歩引かれてるから女の子に詰められるって感覚もほとんど無いんだよ。多分。えっ、本当か？

でも。これで恥ずかしいならほぼゼロ距離で明日香さんと居る方が恥ずかしい気がするんだ。しかもあの制服ですよ？ 毎夜毎夜灯台で会ってますよね貴方達。

「な、なんてね。あ、明日香さん」

「……いや、私は、良いのよ。ええ」

「違うんだ!!」

「応援する?」

「する所が無いじゃないか!!」

人は環境で変わるといいうが、本当に変わる。自分の見た目なんて変わったら本当に影響が凄い。

「本当に、私は構わないのよ。むしろ今まで女子寮に居ても行動を起こさなかったのは……」

「その線はない! ってか、起こしたらやばいでしょ!」

「起こさない方がやばいんじゃないか。って最近話してたのよ。ももえと」

「やっぱあの人かよっ！ くそっ、そろそろ、そんな方向にもってかれると思ってたけど速い！ 良いですか、あの人の話は大概……」

「で、それを聞いたジユンコが……」

「ああそれ聞かなくても分かるめんどい奴！ ちつ、用事だ、用事ができました。自分はさっさと戻ります。お2人は灯台部頑張って下さい！」

「と、灯台部？ って、ちよつと！」

あれは止めなきやどんな被害被るか分からん。早く止めねば。明日香さんを見殺しで、ももえさんを探しに駆け出した。

見つけた時には漫画研究会の皆様と一緒に居た。その人達、自分を見るなり「合格ね！」「あり！」とかほざいていた。何の話か知らないが後ろで笑ってた人が残像を残して消えていたので何となく嫌な事だとは分かった。捕まえて起こそうとしていた騒動を鎮火させました。疲れた。当人は何食わぬ顔でニコニコしながらコチラに話しかけてくる。

「あら、むしろそうなれば、今後は監視の目も無くなりますわよ？」

「違う視線に晒されるから意味無いですよ」

「まあまあ、そうですの」

「分かってるよな……」

この世界に來た時は、デュエルだらけの人生で、それ以外は普通かな。と想っていたけど案外日常も忙しかった。主にこの人と、それに乗せられるジュンコさんのせいだな。部屋に帰ると、ドアの前で待っていた妙な顔つきのジュンコさんが「そ、その……今までごめん」と謝ってきた。何を言ったあの妖怪。ももえさんを引きずってきてジュンコさんの誤解を解消するのにまた、疲れた。

忙しいのはこれだけじゃない。デュエルパートは……「ヒーロー・バリアー」「悪夢の蜃気楼と、非常食!」「強欲な壺! 天使の施し! 貪欲な壺! エマージェンシーコール! 揃ったぜ、融合とミラクル……」「へへっ、伏せていたのはインシユランス!」って感じで忙しいが。ホントおかしい。でもやっぱ最後の奴だけ納得いかねえ。実はこの辺りを三沢さんと話すのが少しマイブームだったりする。あの人真面目な顔で「十代のドロー運を計算式で——」とか言う。控えめに言って脳みその構造が違った。違い過ぎて笑える。

疲れに疲れ、部屋に。腕の傷なんて忘れるぐらいには動き回った。なので服を脱いだ時によりやく気がついた。

「うわっ……」

一度広がった傷口は安静にしないと更に広がる。まあ見たくはない程度には広がって、消毒しないと不味いつてレベルに。風呂でめちやくちや痛そうだけど、これ傷口洗

うかな……とか考えていると、ぬつと現れたガイウスさん。

『帰ったか』

「こゝ、お風呂場」

『だからなんだ』

「……いや、いい。なんでもない。ガイウスさん。今日は疲れました」

『その傷、治すぞ』

「……えっ？」

唐突な傷治すぞ宣言。どうしたんだ急に。人に優しくしたり、誰かを癒すことに関しては他の髓を許さないぐらいに弱いガイウスさんが治すとは。尋常じゃないダメージを与えて「感覚なくなつたから治つた」とか言つてる方が自然なガイウスさんが。

『失礼なことを考えていないか？』

「ガイウスさん。苦し紛れにブルーポジションを傷口にかけるのは嫌ですからね」

『……治すとは言つたが、私がではない。後ろのだ』

「後——ろ？」

振り向く、黒いローブに身を包んだ人影。顔の半分を覆う髑髏の仮面。手に持つのは大きな鎌。その姿に、心を奪われた。

『治療を出来る者を連れて来てやつた。有り難く思え』

ガイウスさんの話も半分聞き流し、目の前の不気味な格好の人——それはきつと精霊。に話しかける。帰ってきた声は中性的で、透き通るような声だった。その声は、明日香さんとのデュエルで聞いた声でもあった。

「ら、ラモール？」

『……』

こくん。と首を縦に振るのは、見間違えることの無い姿で。その手が自分の傷口に触れると、その傷はまるで無かったかのように消え、健康的な肌が戻って来た。

『見ての通りだ、人と話すのが得意では無い。本来なら最初で連れてきても良かったが、拒否されていた。私はそれでも構わなかったが、貴様があまりにも脆く、必要になったからな。むりやり引つ張ってきた』

『……違う』

ワンテンポ遅れて否定が入る。最初の返事もそうだけどちよつと話すのが遅いというか、なんというか。というか、その声聞き覚えがありすぎる。「殺る」とか物騒な事言つてた、明日香さんとのデュエルの時に聞こえた声だ。

ラモール。カードの精霊。ガイウスさん曰く元々自分の所に居たらしいけど恥ずかしがつて隠れていたらしい。人と話すのが苦手。話すことを考えているらしく少し話はじめの前に間がある。

「なるほど。言葉を選ばないで喋ってるガイウスさんよりはマシと」

『貴様』

『……うん』

『貴様ら!!』

見た限りガイウスさんとの仲は良好。そして魔法使いだけあつて色々な魔法が得意。例えば回復魔法。その他、補助。ガイウスさんは攻撃すれば勝てるらしいのでそこら辺は覚えてないそう。

「そしてガイウスさんが出来ない事をやつてのけると。流石です」

『……ガイウス、苦手だから。人に優しくするの』

「それは分かる」

後ろで怒っているガイウスさんをスルー。でも本当の事だ。精霊来て驚く事はガイウスの時にやったので、割とすんなり受け入れられた。因みに十代君はHERO全員精霊だと思ふ。恋する乙女戦みたい。喋る機会はある見ないけど活躍していた。

きつと精霊ってのは結構居るものだと思います。恋する乙女も精霊、だと思ひますし。あれが「フェザーマンさまっ！」とか言ってるシーンは傍から見れば無言の特攻してる恋する乙女だったやうなので（明日香&カイザーさん確認）。

「最初から居たんですね」

『……けど、使われなかった。だから』

「そ、それは……」

最初から、つまり入試から。入試の時はフォルスで止めを刺せたので手札に置いたままだったのだ。

『……しかも、あの後から全然使わない』

「あ、明日香さんの時はありがとでした！ だから、許して下さい！」

なんだかゴキゲン宜しくないようで咄嗟にそう言うのと、後ろのガイウスさんが反応。

『なに、貴様。また明日香とデュエルしていたのか。私以外の奴で！』

「うおっ、な、なんですか。そうですけど」

『……ふっ』

ガイウスさんの反応具合から、何となく察したラモールさんが微かに笑った。

『なぜ私を使わない！』

「い、いや。魔導書で除外しないと明日香さんの機械天使面倒ですし」

『私の効果を忘れたか！ ええい、何故貴様は肝心な所で使わぬのだ！』

とても怒っていらつしやる。こう見えてガイウスさんは強者求むなお方。強い人とデュエルするのが好きな様子。明日香さんは強いですから。そんなお怒り気味なガイウスさんを見てラモールさんクスクス笑う。少し機嫌が戻ったらしいラモールさんの

言葉は、もう片方のお方を更に怒らせた。

『……あのデュエルは、いつもより出たから、許す』

『なんだと？ どういう事だ』

「えっ、ああ。2回ぐらい出さないといけなかったんです。手札事故ですよ、事故」

実際1回出した時には決めているのが殆どのラモールさんを数回出すのは事故だ。だが、あの人それが気に入らなかったらしい。まあガイウスさんは登場する回数1回が基本ですし、そもそも1枚しかデッキに入れてませんし、墓地から特殊召喚しても効果使えませんかからね。今日は、このままガイウスさんの機嫌を直すのが時間かかった。とんでもなかった。もうあれだったからね。

その日から数日の間、初手には必ずガイウスさんが居る。

「ガイウスさん、初手にいると動けない」

だが来るのをやめなかった。これは自分のせいなのだろうか。畜生め。だが絶対に必要ないタイミングで来られるよりは初手にいた方が良い。それに何だかほっこりする。精霊。いやまあ、嬉しい存在。けどやっぱりガイウスさんは面倒だった。

この時、忘れかけていた敵がすぐそこに迫っているのに気がつくのは、あとの話だ。遠い遠い場所から迫る、影。自らを隠そうともせず、立ち塞がる者に持てる全ての力でねじ伏せる。暴力的な影。影は興味深そうに男の話を聞いていた。

「へえ、そんな人が居るのね」

「ああ。……だが、それを聞いてなんになるんだ」

「色々よ、貴方は貴方で頑張りなさい」

獲物を見つけた狩人の目。オモチヤを見つけた子供の目。その目を遙か先の孤島に向けて。

「あの子が認めるデュエリスト。十分過ぎる情報ね」

第10話 不安と不満

「デッキ……組みますか」

唐突だが、デッキを組もうと思う。すぐさま部屋でデッキを組み始めた。最近、カイザーさんと出会ってふとサイバーのデッキを組みたくなった。こうなったら抑えられない衝動。今すぐにでも解決したいと今現在。普通にデッキ作るとワンキルなのでテーマを少し変えてみようとは思う。それに、最近はガイウスさんが少し面倒なので入りそうならデッキにねじ込んでいる。汎用性の高さもあつて活躍はするのだが、初手を確定で1枚潰されるのは割と辛い。最近は大人しくなったが。

「ふう。まあ、こんなものですか」

ササツと作ったカードを眺めていると、後から覗き込む影。

『……それは、なんだ』

「えっ。コンセプトというか、コピーデッキ？」

微妙な表情でこちらとデッキを交互に見るガイウスさん。なんの文句があらうというのか。

『……貴様がいいなら、良いが。私が居るのは違うな』

「分かります？ 無理やりねじ込んだんですからね。反省してください」

『……ふん』

てつきり頼んでないとか言ってくると思つたのに思ひのほかあつきりと下がつた。因みにそう言つてきたら問答無用でデッキから抜いていた。まさか、それを察したというのか。勝ちにこだわるのは勿論だが、好きなデッキを作るところは変わらない。というか、勝ちだけにこだわるなら好きなデッキなんて作れない。答えがほぼ決まつてる。元の世界の環境トップ、フルバーン、特殊勝利、ワンキル、制圧。それらを徹底して使うに決まつてる。それに興味を持てば作るが。無いなら作らない。

……まあ、作つても使えない説もある訳だが。

『それにしても、持つていたなら兎も角。良くもここに來てからデッキを作るな貴様は』
「まー。デッキ作るのが好きなんですよ。失敗なら、失敗で。面白いじゃないですか」
むしろ逆ではないのか。この世界に生まれてきたならまだしも、これが非日常の世界で生まれてきたのだ。ソリッドヴィジョンだぞ、色んなモンスターを試したいに決まつてる。

「二つに絞らないのはあんまり評判良くないのも知つてますけど。一応言つておきますけど、自分のメインデッキ作る基準はガイウスさんですからね。逆に言えば……ガイウスさん入つてたらなんでもいいんですが」

明らかなコンセプトの無い。まるで小学生が好きなカードを詰め込んだ僕の考えた最強デッキ。そんなデッキをここに来てから使っている。それはそういうデッキをやることで少しでもこのデュエルを理解する為だ。切り札がガイウス。つてのも正直その一環でそうしようと決めただけであまりピンと来ていない。ぶっちゃけ迷宮兄弟さんとのデュエルでの活躍と、こうして精霊として来てなければ切り札として使い続けようとしたかも怪しい。現に通常の学校では色んなデッキを使ってるし、他生徒から見て自分といえbaumたいなイメージがあるカードなんて無いだろうが。

まあせっかくこうして会えたわけだし切り札として色んなデッキで使おうと思った訳だ。理屈拔きの1枚。というやつだ。ただ存在しているだけともいう。それだけでもある程度強いものだから、ある意味らしいと自分で納得するほどだ。

『まあいい。だが、作ったからにはそれなりのレベルにしておけ』

「はいはい……では、お試しの相手でもしてくれますか？」

『良からう』

新デッキを作る度にやってくれるガイウスさんは割と優しいかもしれない。お手軽闇空間でリアルダメージさえなければもつと良いかもしれない。精霊つて割とバケモノ。早速ダメージ受けながらテストデュエルをする。最早多少のダメージなら何ともない。小指を角にぶつけても表面上なら撮り繕えるレベルにはなっている。今も止

めの一撃を受けてデュエルが終わったのだが、痛い気持ちを抑えて涼しい顔をしてる自分が居るが、すごい見透かしたような視線を向けたガイウスさんが、やれやれと言いたげな表示でデツキについて素直な感想をくれた。

『安定せぬな』

それはこつちが一番知ってる。1通りのデツキ作成が終え、ガイウスさんが何処かに消えて一息つく頃。そういえば。あと1人の精霊どこぞに行つたと後ろを振り向くと、なんと、部屋の隅の壁に立っていた。

「ラモール、さん？ 何してるんですか」

『……………』

いつも以上に言葉をためて、出た言葉も小さ過ぎて聞き取れない。最初の日こそ喋ってくれたが多分、それはガイウスさんがいたからかもしれない。ガイウスさんから人と付き合うのは得意ではないとは言われていたが、どうなったら隅つこの壁で黄昏のだ。こちらとしては仲良くなりたい。右手にブツを持ちながら、声をかける。

「取り敢えず………実体化して、こつちに來てください」

驚きの顔と共に固まるラモールさん。実体化は一応した。がやはり動かぬ。仕方が無いなどこちらから向こうに行つた。壁の向こう側に行きそうな程に下がろうとする様子を見るとヘコむから。悲しいから。

目の前まで来た。顔の左半分だけを覆う髑髏の仮面。なので右側に向かって手を伸ばす。ビクツと震えて目を瞑られた。

「口、開けて」

そう言うと思いつき口を閉めたので、右側から手に持ったソレを無理やりねじ込んだ。

『……っ!?!』

そう来るとは思つてなかったのか、そこまで抵抗なくソレは口の中へ。少し遅れて、驚いたりアクションをする。結構面白い。しばらくは動かなかつたが、ようやく口元が動いた。舌の上では爽やかなレモンの風味でもしているんじゃないか。

「嫌いですか?」

レモン味の飴を突っ込んだ。恐る恐る動いていた口元も、自然にな動きになって。

『……嫌い……じゃない』

「美味しい?」

『……うん』

それは良かったと笑いながら、他のお菓子を取ってきた。話のツマミである。口に突っ込んだ飴は小さいやつだからすぐ溶けて無くなるだろうし。冷蔵庫からお茶の入った容器を取り出す。冷蔵庫は付けてもらった文句は言わせなかった。お茶はもも

えさんが作ったやつなので美味しい筈だ。紙コップまでしっかりある。っていうかこの中だけでも生活できるレベルには揃えて貰ってる。

「折角なので、話しましょう。ご主人様……なんて言わなくて良いですよ。ガイウスさん見れば分かる通り放任主義です。楽にして下さい」

『……』

「ただ、命令はします。一応、こちらがマスターって認識……であってますよね？」

「こくん。と頷く。やはりそうであつたか。あの人が最初の精霊だったので全く分かんなかった。そもそも従う物じゃないんだなと思つてたし。てか普通に人だし。」

「じゃあ、取り敢えず」

壁に張り付かれても仕方ないのでテーブルに。お茶の準備から始める。コップを2つ置いた所で、お茶の容器を見ながらラモールさんが訪ねてきた。

『……注げばいいの』

「あ、ああ。自分のコップに注いで飲んでくださいな」

『……自分の？』

「当然。それ以外に誰のですか。まあまあ、今回は自分が入れますから座して下さい。聞いた感じ連れてこられた様なので。なんか、すいませんね」

『……その』

戸惑っているのを無視してコップを渡す。適当にお菓子も広げた。

「ガイウスさんが、どう言ったのかは知らないですが。コチラとしては助かりました。それにラモールさん好きですからね。嬉しさもあります。ずっとお世話になってますよ。それにしても、会ったときはまだ話してた気がしますが。なぜ遅れてそんな氣を使っているんですかラモールさん」

『……マスター、だから』

「えつとー、よくよく考えたら失礼かも的な。やつですかね。なら氣にしないで会ったときの感じをお願いします。その方がマスターは楽です」

『……………』

「今は、何でもいいですよ。繕ってでも。でも普段の自分と同じように振舞おうって考えながら普段通りの動きをするのは凄く難しいんですね……あー。いや、この話はいや」

如何せん、変な話にもっていつてしまふ。普通に生きてきた故に、とこつちに来て外れたテンションの影響で、ボロボロと……仕方ないね。

「まあ、宜しくって事です。今までもお世話になりましたし、これからも。お互い、楽に」

まだ、固いが少しだけ雰囲気やわらいだ氣がする。ただ、なんだろうか。マスター呼びもされるとむず痒いけど悪くない氣もする罪惡感もある氣もする。ガイウスさん

と比べると……なんかいいよね。お茶を一口飲んで、顔を上げるとさつきよりも少し陰しい表情でこちらを見ている。

「な、なにか？」

こちらの問に、恐る恐る口が開かれた。

『……お菓子……』

「……お菓子。ああ。お菓子。好きにどうぞ？」

『……ほんとに？』

「ホントに。沢山あります」

許可しなくても取ってもいいんだが、目の前に広げただし。ラモールさんは一つお菓子を手に取ると口の中に入れた。どうやら美味しかったらしく幸せそうな顔をしている。

『……おいしい』

「さ、さようで」

お菓子1個から受ける衝撃をはるかに超えた幸福感を顔に出している。なんか面白い。この日から、ラモールさんにお菓子をあげるのが日課になった。なんか想像以上に向こうも欲しがってるので。まあ、いいか。ガイウスさんではこんな事出来ないし。ガイウスさんと違って素直だし。

さてゆったりとした一日も終わる頃だ。

「寝る前に一応、調整後少し。しとかないと足元救われかねないですし。少しだけ」

この後、太陽に向かってお早い出勤ですねと言うことになった。後ろではお菓子が全滅していた。結構食べるなあ。4、5人分ぐらいはあったけど。

十代君から少し前にもけもけ使いとデュエルしてき。という話を聞いてそんな時期かと遠くを見る放課後。レッド寮で十代君とついでに三沢さんとダラダラしていた。三沢さんは、実は最初のテストの時から知り合いだ。もう何回も顔合わせてるし性別についても知ってる。初めてばらした時は「嘘だあー!!」とか言ってた。改めてクソ天使の改造は凄いなと実感して溜息だ。今はもう普通に接してくれるし、なかなか話す。十代君のドロ―運の理論化とやらが最近お気に入りだ。階級間の差別も気にしないタイプだし、こうやって3人でレッド寮に集まるのも数十回目。女子の中より万倍は気が楽だ。

「でも暇だなあ……」

「そうですね……」

「俺もさっきのデュエルで疲れたからな。少し休みたい」

暇だなあ。なんて言いながらぼーつとする。たまに適当な話をして、盛り上がったならそれを広げて、何かやりたいことを思いついたらそれをやる。しばらく何もしないまま

だった、十代君が何か思いついたらしく口を開いた。

「うーん。じゃあさ、野球でもするか」

「えー。3人しか居ませんよ」

「なんとかなるだろ。それに、翔呼べばさ」

「翔は補習だと言っていたぞ」

「ちえー」

「そうつまらなそうにするな。十代も、俺が教えてないと同じだっただろう？ 一緒に勉強に誘ってくれた彼に感謝するんだな」

「勉強に誘ったって……集まってる時に勉強の話し始めたの三沢なのにな」

「そうでしたねー。デュエルしてた時に……インシュランス……うつ、頭が」

トラウマが頭によぎったりしたがすぐ収まった。三沢さんは優秀な生徒っぽく勉強もしておくと五月蠅かったので、一応テストも近かったし乗ったただけだ。本当に、1度デュエルを止めて精神を安定させたかったから無理矢理十代を勉強させた訳では無い。結果として毎回テスト筆記が真っ赤な十代君がこうして暇している。それはつまり良いことだったという事だ。

「それにお前は俺が三沢に勉強させられている間、隣でデツキ作りやがって。卑怯だぜ」
「三沢さんが止めないから」

勉強なんてしないでいい自分はこれでもかと言うぐらい十代君にカードを見せつけてました。流石に途中から止めて、読書にしましたが。十代君はそれでも不服らしい。三沢さんにあの時の事を聞き返している。

「どうなんだよ三沢！」

「どうもなにも、君は彼の成績を知らないのか？」

「へっ？」

「知らない様だな。彼は成績はかなり上位の方だ」

「はあ!? 嘘だろ!!」

「本当だ」

「寝てるのか!？」

「……確かに。それは良くない事だ。が、それは俺に言われても困る。君も寝ているしな。文句なら本人に言ったらどうだ」

三沢さんが、チラツとこちらに向けた視線に連動して十代君の顔が動く。学生2回目だからなこっちは。勉強は楽なんだ。最近寝れないけどね。明日香さん怖いからね。明日香さん怖いのもあつてブルーの中ではいい方ぐらいまではテストの点数取るかな。出来ないなら勉強するしか無いですな十代君。まあ、出来るなら大丈夫なわけです」

「不公平だ〜! 俺もデッキ組みたかつた〜!」

「今更過去を振り返つても意味が無い。十代はこれからの試験に備えるべきだ。デュエルもテストもナンバーワンを目指す方が男らしいぞ」

「俺はデュエルで一番なら良いんだよ。……まさか三沢。今から勉強とかいう気か？」
「そうだな……君は？」

「どちらでも」

もしかしたら勉強になるかもしれない流れに十代君が猛反発。まあそれが見たかっただけで散々からかった後に冗談だとその話を終わらせた。結局何やろうかなと3人で夕日を眺めながら話していると、いつぞやの倫理委員会の人を通りかかった。

「あ、お疲れ様です」

「……ん。なんだ、貴様か」

十代君としてはろくな思い出がない人な訳で、自分が声をかけたことにもびつくりしていた。何も知らない三沢さんは「知り合いか？」と聞いてきたので「楽しい人です」と適当に答える。

「お、おい。その人は……」

「ああ、気にしないで。大丈夫な人です。爆発物じゃない危険物です」

「危険物……？」

「誤解を生むな！」

会話の流れで怒られたが、あの出会いを危険と言わずに何というのだ。一応謝って十代達にも軽く説明した。

「という訳で、大丈夫ですよ。なんならデュエルしてみれば？」

「……さて、何故そうなる？」

「おつ、デュエル出来るのか。なんだよ速く言えよ。そうと決まれば……」

「さて！ 何故そうなる！」

「デュエルか。データは多い方がいい。見たことの無いデュエリストと十代のデュエルは見ていて参考になる」

「違う！ お前も違うぞ反応が！ なぜデュエルを——」

やる気になった十代君を止めるものは無い。結局、十代君とデュエルさせられた。当然結果は分かっていたが、それに、デュエルするまでも長かった。

そもその問題。

「私はデュエルを知らん。カードも持っていない」

えっ。と声を出したような顔で動きが止まる十代君。当然だ。この人ガチで仕事してるだけだからね。だが知らないのは意外だった。三沢さんは少し考えたような仕草をした後、残念そうに呟いた。

「ルールなら俺が教えられるが、カードが無いのはどうしようもない。今から購買に

行つて揃えるのにも、タダじゃないからな」

当人は諦めろと言いたげだが、十代君と三沢さんはやれるならやる気だ。この流れで、自分が乗らないわけが無い。

「ならばカードはこちらで用意しましょうか」

しばし待てと、皆を待たせて部屋に戻り帰つてきた。リュックの中に、入るだけカードを入れた箱を詰めて。

「おおー。すげえ！ その中全部カードかよ」

「これ……全部君の物なのか？」

リュックの中を見せて驚かれたのに驚いたが、デュエリストなら普通にカードは数えるのをやめる枚数ぐらい持つてると思っていたが。

「十代君の部屋でデッキを作ってもらいましょう」

「まて、私はやるとは——」

「決まりだな。よし。じゃあ俺は適当に飲み物でも取ってくるから先に部屋に行つてくれ」

「分かった。だが本当にいいのか。カードは大切な物だろう？ こんな簡単に人に使わせて」

「使い方を間違える人にはこんな事しないから大丈夫。それに、この人にはそもそも

デツキ丸ごと投げるつもりですから。そのついで」

この発言に驚愕される。前の世界でも初心者には適当だけデツキぐらいくれたし仲がいい友達にもカードはあげてるから、こちらとしては普通なのだが。この間、初心者本人は自分抜きで話が進んでいるのに付いていけない様子。無理やり少し離れた所まで引きずられた。

「お前、何を考えている!!」

「まあまあ、たまには」

「私は暇じゃ——」

「今日はお休みじゃないですか」

「なんで知ってるんだ!!」

「島で過ごさないと行けない休みですよ。最近なにかとトラブル続きで、いつでも出れるようにと。でもまあ、ここでやる事ない、何をすればいいか分からないから取り敢えず他の人たちの仕事を見回るって名目でふらふらと……」

「五月蠅い!」という声と同時に鋭い突きがお腹に。割と容赦ない威力で「うっ!」とキツイ声を上げてしまった。

「貴様の予想どうりでは無い。が、確かに予定は無い。だが、私がお前達学生と、しかも学生の部屋で遊ぶなど……」

「当の学生がウエルカムなんですから。大丈夫ですよ。自分も居ますし。それに、デュエルを覚えておいて損は無いですって。デュエルは遊びにはとどまりませんよ」

「物は言いようだな。だがやはりだな」

「気にする人は居ませんよ。なんなら、ここに来た理由は自分達に注意喚起しに来た。とかにしておけば良いのでは？」

「注意喚起する？」

「階級も性別もバラバラな3人が一番下のレッド寮に集まってる。怪しいじゃないですか」

現にクロノス先生が頭を抱えていたような気が……しないでもない。自分と十代君はともかく三沢さんは相当な優秀性でブルー昇格もすぐだろうって人ですしね。

「……そう言えば。そんな件もあったな」

「じゃあここに来る大義名分も出来たことだし」

「いや、待て。それだと……お前らに迷惑だろう」

「……」

「……なんだ、黙って」

「心配、する人だったんですね」

無言の腹パンを貰って一瞬記憶が消えた。

「馬鹿にするのもいい加減にしろ」

「すいません……ま、まあ。大丈夫です」

お前が良くてもほかの2人がだな。とか言ってた。確かに学生と仕事で来ている教師ですらない大人が遊ぶって流れにはどう足掻いてもならない気がするがデュエルな話は別だ。マジで本気でデュエルは全部繋ぐ。凄い。彼女も最後はうなだれながら、「分かった……」と言って付いてきた。ありがとう。埋め合わせは後からする。

ルールも完璧、デッキも組めた。教えたのは三沢さんと結構ガチめだ。最初の相手は十代君。デイスクを使わない部屋でのデュエルは静かながらもサクサクと進む。そして負けた後に「意味が分からん!」と言っていた。そのデュエルはヒーローメダルなんかを絡めた感じで初心者の割には「あんなカード入るのか!」とか言ってる。安心しろ、入らない。三沢さんと一緒に苦笑いだ。

「つ、次だ! 負けっぱなしでは終わらん!」

「お、またやるのか? いいぜ!」

リベンジマッチも結果はお察しだ。三沢さんと一緒に、のんびり気が済むまでデュエルしている2人が終わるのを待った。終わった後には凄い元気な十代君とぐったりした人。まあ、仕方ない。

「……あの、大丈夫?」

「大丈夫……だ……」

正直に言えば、デッキ自体はこっち側が強い筈なんだが。三沢さんは最後のデュエルを見たあとに何やらブツブツ呟き始めた。これは邪魔出来ない奴だ。十代君も多少は疲れてるだろう。

「よし、じゃあ十代君交代。自分がやります」

「私はまだ……」

「まあまあ。十代君とやってばかりだと他のタイプの人と戦えなくなりますよ?」

「それは、そうか」

本当の話だ。十代君に勝つには理論の先にあるオカルトパワーを手に入れていると無理だと思っている。参考にするのはやめておいた方がいい。だからと言って自分のデッキも参考にはならないが。説得し、相手もその気にさせたので自分もデッキを取り出した。新デッキのテスト相手に丁度いいかもしれない。……しれない。

「じゃあ、デュエル! 先攻後攻は譲りますが」

「素直に先攻を貰うぞ。ドロー」

あの人、まあ大人だ。教えたの三沢さん。考え方は大人だ。カード用意したの自分。絶対にこここのカードプールよりは強い。テストとか言ったが、正直に言ってテストになるかどうか不安である。何故ならば。

「私はプロミネンス・ドラゴンを召喚する」

出してきたモンスターは可愛らしい……可愛らしいが、侮れない。このライフでそれは意外にダメな奴だ。

プロミネンス・ドラゴン 攻撃力1500

「カードを2枚伏せて終了だ」

この人、教えられてすぐにバーンデツキ組みやがった。当然のような顔で「ライフ削れば勝ちなんだろう？」って。あつてるけどさ。あつてるけどさ！ あんまりテーマ的に統一されてない、ある意味でオリジナルの半端なバーンデツキなのが可愛らしいというか、初心者だな、救いだな。と取るべきか。出てくるカードが読めないから面倒と取るべきか。自分は後者。

「エンドフェイズにプロミネンス・ドラゴンの効果で相手に500ポイントのダメージだ」

「うええ」

自分 LP3500

処理せざる負えない。けど伏せカードは罠。分かりきってるけど面倒。

「自分のターンですよ。相手フィールドにのみモンスターが存在するので、サイバー・ドラゴンは特殊召喚出来ず」

サイバー・ドラゴン 攻撃力2100

「……上級を特殊召喚か。なるほどな。私も使えば良かった」

「えっ、バーンカードじゃないですよ?」

「そうだが、下級カードより強いカードが同じタイミングで、召喚権を使わずに出せるんだろう。結果的に与えるダメージは増加する。バトルでも大体が勝てるだろう。それはゲームを有利に進められるということだ。……2回もモンスターを召喚すると手札の消費が多いが、その時はそのサイバー・ドラゴンだけで攻めればいい。大抵の下級相手には困らないだろう」

この人言ってる事が少し初心者か疑うんですね。三沢あ!!

「まあ……バトルって言いたいです。サイバー・ドラゴンでプロミネンス・ドラゴンに攻撃」

「そうだな。魔法の筒だ」
マジック・シリンダー

「わーい」

久しいカードにビックリ。思わず声が出る。サイバー・ドラゴンの放ったエヴォリューションバーストが軽やかに反転、自分に付き刺さる。様な気がした。

自分 LP1400

まあまあ、盤面は残って相手は減ってるだけだから。大丈夫だと言い聞かせる。そう

いうカードを使うと手札切れるの早いし。使い切った頃には勝てないといけないからね。初心者には……出来ないとはいえないのがこのゲームなのだが。十代君は必ずライフ回復かバーン無効カードを引いてただけだな。不思議とこちらは引かないな。

「じゃあ、メイン2。サイバー・ドラゴン・コアを守備で。効果でデッキからサイバー・リペア・プラントを手札に加えます。カードを3枚伏せて終了」

サイバー・ドラゴン・コア 守備力1500

「なら、1枚はサイクロンだ」

「……ふつ。ゴブリンのやりくり上手が破壊されます」

余裕を保ちながらも、焦るよね。この、初心者には負けてなるものかという小さなプライドをへし折られそうになるのを感じるのは。そんな可能性ないデッキ使えよって話だけど。

「私のターンだ」

因みに、この人がミラフォ等の破壊系を差し置いて魔法の筒を採用しているのは理由がある。十代君とのデュエルを見て分かっていたんだけど。

「強者の苦痛を発動する。お前のモンスターはレベル×100ポイントダウンだ」

サイバー・ドラゴン 攻撃力1600

サラツと発動されたこのカード、三沢さんの一押し。今日初めて見たらしく「これは強い……俺も欲しいな」とすぐに言った。あげた。何故強いかは色々と言っていてそれを聞いてこの人もデッキに入れた流れを見て相手する時凄くだるいなと思ったが本当にだるい。三沢さん一押しの訳は、今模索している十代対策だろう。純(?)アニメHEROで苦痛張られたら苦しいどころじゃない気がするけど十代君見るとそうでもない気がする不思議。

「そして、フレムベル・ヘルドックを召喚する」

モンスター倒すとモンスター増やす犬。シンプルながらに強い。

フレムベル・ヘルドック 攻撃力1900

このカードだ。魔法の筒等のカードが採用されているのは。このモンスターみたいな戦闘破壊をトリガーとするモンスターをメインに使う場合は、相手の場にモンスターが居ないと困る。ついでにゲームを決める力もある筒採用。という事らしい。ほんとか。

「バトルに入る。ヘルドックでサイバー・ドラゴンを攻撃する」

襲いかかる犬。鋼も砕くその刃。受けてなるものかと強化カードを発動した。

「なら、罨。アタック・リフレクター・ユニット!」

「むっ」

カードの効果処理としてサイバー・ドラゴンのカードを墓地に送り、デッキからサイバー・バリア・ドラゴンのカードをフィールドに置く。

「なんだそれは、見せろ」

「良いですよ。はい」

サイバー・バリア・ドラゴンのカードを手渡す。じつと見ながら不思議そうな表情をしている姿は少し和む。

「なんだこのカードは。強いのか」

「カッコいいでしょう」

「質問を聞く気があるか？」

「カッコいいのは強いです。思い出して下さい」

「……確かに、そうかもな」

「そうですね。だから、強いカードなんです」

「そうだな。うん……うん？」

「そうですね（ちよろいな）」

サイバー・バリア・ドラゴン 守備力2800

「こんな時は、攻撃をやめるか、新しい攻撃対象を選ぶんだったな。……まあ効果で無効にされるから意味が無い……」

「ああ、サイバー・バリア・ドラゴンとは自分が攻撃表示じゃないと効果が使えません」
「はっ？」

「守備力高いですよ！」

「効果は使えないなら意味無くないか」

「攻撃力800しか無いんです。だから、仕方ないですね」

「なるほどな。なら仕方ないな。……仕方ないか？」

「カツコイイから大丈夫。仕方ない」

「そうだったな。なら大丈夫か。仕方ないな」

疑問も解決されたようなのでヘルドックの攻撃が素直にサイバー・ドラゴン・コアを墓地に送った。

「効果だ。業火の重騎士を特殊召喚する」

業火の重騎士 攻撃力1800

そして出てきたのは……これは、覚えている人の方が少なそうな奴が。

「なんか。渋いですね」

「そうなのか。まあ、このターンはそれは突破できないな」

「どう考えてもその重騎士は生かしてターン回さないですけどね」

面白いセレクトではあるけど。まあ流石にね。こんな所も始めたばかりって感じ

がします。

「カードを伏せて、終了だ。そのまま勝てそうだな」

「何をおっしゃいますやら。まだまだ。自分のター……」

「その前にプロミネンス・ドラゴンの効果を受けろ」

「あつ」

自分 LP900

既にライフが1／4を切ってしまった。相手のライフ4000あるのに。この状況に気がついた三沢さんと十代君は面白そうにデュエルを見ている。

「本当にこのまま押されるかもしれないな」

「三沢さん冷静……」

「大丈夫だって。ドローしてからだぜ」

「はい」

相手の少し余裕のある顔を見せたのに少しイラツとしながらドロー。流石のトップ。

「……ふつ。カードを2枚伏せて、サイバー・バリア・ドラゴンを攻撃表示に変更」

サイバー・バリア・ドラゴン 攻撃力200

「ターンエンドだ!」

やり残した事はない。ターンエンド宣言に、相手は勝ちを確信した笑みを浮かべる。

「なら、私のターンだな。私は、メインフェイズ。業火の重騎士はフィールドに存在する時に、通常召喚扱いで再度召喚出来る。再度召喚に成功したこのカードは効果を得る」

デュアル。と呼ばれるモンスターの1体。再度召喚により効果を得るが、発動するまでフィールド、墓地では通常モンスターとして扱う。使いにくい事この上ないが上手く使いこなせば強力だ。そして、業火の重騎士は特殊召喚に成功したモンスターに攻撃したダメージステップ開始時に、そのモンスターを除外する効果。三沢さんも十代君も何度か見たカードなので把握しててちょうど二人がその話をしている。

「業火の重騎士は強力なモンスターを一方的に除外出来る効果だ。サイバー・バリア・ドラゴンの守備力が高くて意味が無い」

「ん？ それが分かってたから攻撃表示にしたんじゃないのか。あのモンスターの攻撃を、効果で止めるんだろ」

「それは知っているが、意味が無い。サイバー・バリア・ドラゴンの攻撃力は永続魔法の効果もあつて僅か200。攻撃表示なら、業火の重騎士でなくとも、クリボーですら破壊できる攻撃力だ」

三沢さんの解説と共に十代君が頷いている。自分も頷くその通り。攻撃力200のモンスター。こちらの手札もない。バトルフェイズの宣言がされる。ここが勝負。

「さあ、だが3枚の伏せカードがあります。ミラーフォースかもしれませんよ？」

「そう言うつては永遠にゲームが進まん。私はプロミネンス・ドラゴンでサイバー・バリア・ドラゴンに攻撃する」

臆すること無く攻撃。少し安心した。正直、攻撃してくれるかは賭けだったけど。

「攻撃宣言しましたね？ ならバトルスタート！ ダメージステップに罠カードを2枚発動します。反転世界と仁王立ち。この2枚の罠を」

これが、サイバー・バリア・ドラゴンデッキの勝ち筋の一つ。

「効果解決。仁王立ちの効果により自分のモンスター1体の守備力を倍にします。但し、ターンの終わりに0になります」

「守備力を倍？ それは攻撃表示だ、関係ないだろう」

「所が、その後に適応される反転世界の効果があります。このカードは、お互いのフィールドに存在するモンスターの攻守を入れ替える効果です」

攻守を入れ替える。経験しているプレイヤーでもさほど多くは体験しない現象に、ピンと来ない表情。だがそれはすぐに、しまったと口にしたくなるような顔に変化していた。

「まさか！」

「サイバー・バリア・ドラゴンの守備力は倍の5600に。その後にそれは攻撃力になります！」

サイバー・バリア・ドラゴン 攻撃力5800

サイバー・エンドすら超える攻撃力を手に入れ、更に防御能力まで備えたサイバー・ドラゴンの強化モンスターの出来上がりだ。

「当然、そちらのモンスターも変動!」

フレムベル・ヘルドック 攻撃力2000

業火の重騎士

攻撃力2000

プロミネンス・ドラゴン 攻撃力1000

「そしてバトルは止まらない! 迎え撃てサイバー・バリア・ドラゴン!」

油断しきったプロミネンス・ドラゴンにサイバー・バリア・ドラゴンの反撃が突き刺さる。

「プロミネンス・ドラゴンとサイバー・バリア・ドラゴンの戦闘。5800と1000なので」

「4800ポイントのダメージ。勝ちだな。なるほど、面白いコンボだ」

サイバー・バリア・ドラゴンの反撃と三沢さんの冷静な一言はゲーム終了の合図になった。

「馬鹿な、たった1回の戦闘で、ずっと私が有利だったのに……!」

見事勝利し、負ける事だけは阻止した。最初はどうなるかと思ったがドロースースに

頼ること無く揃ったので問題ない。全てライフ4000のお陰だった。

「な、納得行かんぞ!」

そして終わってすぐにこの言葉である。まあ当然か。十代君の時に言った納得が行かん。とは多分意味が違うんだろう。

「最後の1回に勝っただけでお前が勝つのは卑怯だ!」

「たまたまですよ。こういう日もあります。でもサイバー・バリア・ドラゴンのデッキはこういう勝ち方じゃないとキツインですよ」

この矛盾した効果だからこそ、攻撃表示にしても怪しまれない。まあオネスト警戒されてるなら関係なかったりするが。

「でもバリア・ドラゴンでもやっぱりキツイ。レーザーはもつとキツそうですね。改良せねば」

「おい! もう一回だ!」

「……はっ」

「なんだ、その顔は?」

「勝者の余裕です」

余りにもアレだったので思わずからかってしまった。この後怒涛の3連敗をした後、同じ事で返されたの言うまでもない。この日は、暗くなるまでデュエルを続けた。

今日始めた初心者だったはずの人は十代君と三沢さんという最強の2人のお陰でかなり強くなったんじゃないかと思う。何だかんだ言って楽しそうだった。

その帰り。十代君に別れを告げ途中まで三沢さんと歩いていた時。

「……君は、一体どんな人なんだ？」

「……えっ？」

ふと、そんな質問をされた。

「どんな人？」

「ああ。済まない。俺の推測だ。気分を悪くしたなら謝る。俺は君が、普通の一般生徒には見えなくてね。性別にしてもそうだが……君のカードを見て思った事がある。こう見えても俺は、基本的にデータとしてあるカードはすべて把握している。だが、君に見せてもらったカードの中にはそれに該当しないカードがあった」

そこで、とある大きな大きな問題を思い出す事になった。自分は、隠し事をしている事。カードの違い。迂闊だった。まさかそんな所で疑われるとは。

「未知のカードがいっぱいあるのもデュエルモンスターズじゃないですか。たまたま、ですよ」

「いや、たまたま知らないカードがあつた。にしては多いと思うんだが。……済まない。急にこんなに話をされても困ってしまうな」

「い、いえ。気にしないで下さい」

「入試でクロノス教諭に勝ち、不利なタッグデュエルで勝利し、俺の知らない未知のカードを多く持つている。不思議な奴だ。実はプロデュエリストだったりするのか？」

「……へっ、プロ？」

「俺達の歳でもプロとして活躍しているデュエリストは居る。その中には学生生活中は静かに過ごしたい人も居ておかしくない。君がプロで、目立たない様に過ごしている。とするならデュエルの実力があるのも、普通の人知らないカードを多く持つているのも、説明がつく」

「さ、さあ。どうでしょうねー」

隠し事。それはこちらがこの世界の人じゃ無いという事。当然隠す。知られたら何が起こるか想像もできないというのが一つ。それに、普通そんな話をしたら頭おかしいんじゃないかって思われる。つてのも一つ。だが一番は知らせる必要が無い。という所かもしれない。だけど、それは今の所。である。

「隠しているなら別にいい」

親しい人には、信頼できる人にはいつか打ち明けた方が良さのだろうか。とは思っている。けど、やっぱりまだ。言えない。

「……そうですね。確かに。隠し事はしてますが。友よ、話す時がこれば話そう。と言

うことで」

帰り道、最後の最後だけ、少し重い空気になった。いや、重い空気にしてしまったか。いつもの調子で言葉が出ない。

「じゃあ、自分はここで。また明日」

「ああ。また明日」

また、強く意識した。自分は、こことは違う世界から来たのだ。そして怖くなった。この楽しい日常が……

「いや、こういうのは考えても意味が無いか」

何もない日に。デュエルして、終わったあとに。ふとした時に思う。ただ漠然とした、将来と過去の不安に挟まれた今への恐怖が。

「……なんか、一人旅は結構荷が重いです」

皆いい人達で、一人ぼっちだなんていう気は無い。けど。この事情を知ってくれる人が他にも居れば少しは気持ちになるかな。なんて思った帰り道だった。

第11話 遊びと決闘

もう何回目かのテストが終わり、学校自体に慣れてくるであろう頃、このデュエルアカデミアでは学園対抗デュエルの時期だ。その前日。なんというか……悪寒がするのだ。どうしようもなく。とてつもなく。嫌な事でも起きるような。こんな予感はあるものだ。

「あー。クソ天使が言ったことがなんだか頭を離れない……!」

『……?』

自分の独り言に反応したのは、自分の頭上でフワフワと浮いている精霊、ラモールさん。なんかよく知らんがマスコット並みに小さくなっている。体のサイズコントロールぐらいは魔法で出来るらしい。小さくなってからお菓子を食べると、お菓子がとても大きく感じてお得だそう。

「ああ、気にしないでください。ただのゴミです」

『……?』

あれは今でもこちらに色々と言ってくる。大体が遅い。最近言われたのは「君のポジションは、本当は別の人の予定だったけど間違つて君を無理やり横から入れちゃったか

ら。弾かれた人が怒ってるかも」だ。最初はよく分からなかった。が理解した時には遅すぎた。

そう。やつが言ったのはこうだ。転生初日。あの受験番号で受けるはずだったのは自分では無かった。違う女だった。それはこの世界に居る住人か？ 違う。その受けるはずだった女も自分と同じ、神とかなんとかから転生させられた女だったと言うんだ。その人は、頑張れアカデミアの受験！ と言われ神様に飛ばされ、目覚めた先は全然違う場所だと思う。なんて他人事のように天使は言っていた。そして、自分がそれに割り込んだせいでそんな状況になったのを知ってる事はほぼ間違いないとも。そして続けられた。彼女は君を恨んでるだろうね。と。

目眩で倒れそうになった。見たことも無い女の恨みを買って新世界をスタートしていた事に。全部自分の意思では無いのにだ！ だけどそれで辻褄が合うんだ。妙にギリギリだった時間。無理に女の容姿にされていたどころか、骨格レベルで女の身体に合わせた完璧な男の娘とやらに変換されデータ上では完璧な女として扱われている事。すべてですべて。奴が無理矢理したことだ！ 全部、これの為かと！

問い詰めればあつさり認め、考えて対処しようかと思つたが、そのままの方が面白そうだからそのままにしたと。清々しい程にクズ。責めて男のままにしたのは優しさなんてほざいていたが、言つた口を縫い合わせたい。でも奴は力を持つてるバケモノで

こっちは触れすらない。

「はあ。考えても、仕方ない。受け入れよう、ようこそ今現在。今の自分。悪いだけじゃないさ。ただ十代達と会うはずだったその女とやらに会ったときは、いや。それこそ今考えても仕方ないですね。よし、気分を変えましょう。占いでもしてみますかな。気晴らしに。なんと魔導のカードはタロット占いが出来るのだ。アルカナフォースは揃ってないし」

『……タロットなら、出来る』

「本当ですか？」

『……いい』

「いっぱい？ ……ラモールさんが？」

『……………』

「自分の使います」

さらつと魔導のカード達を適当にシャッフルして一番上のカードをめくる。めくれた瞬間、目に入ったのは剣を持った化け物の絵。

「ディアール。悪魔ですか、やっぱり嫌な予感がします」

『……逆位置』

魔導鬼士ディアール。悪魔をモチーフにしたカードが逆さまの状態で見えた。本来、

元ネタの悪魔のカードは剣の刃部分を握っていた気がするがこちらは確り正しく剣を握っている。力を理解している賢い悪魔なのかもしれない。結果的には悪く無かったように見えるが、自分は首をかしげて悩む。

「逆位置だから悪くは無い……とは思いたいですが。意味ってなんでしたっけ」

『……新たな出会い、覚醒』

「ああ、そんな感じですか」

タロットでの意味のとり方なんて人によって違うので聞くつてのはなんか違う気がしますますが細かい事はいんです。それにタロットの本人がそう言ってる絶対あたってる。

「出会い……やっぱ嫌な予感的中な気がする」

悪魔との出会い。何故だろうか凄く知識を持つてそうな悪魔との出会い。意味を聞いて何故かその通りの事が起こるだろうなと素直に信じられた。

「デッキ組みます」

その出会いに備えるためなのか、急にデッキが作りたくなかった。悲しいかな殆どが白になると分かっているも色々準備はしてしまうのだ。結果悪魔降臨とかになったりした後でもそうしてしまうのは学習能力が無いのかと思ってしまうが念の為だ。使っちゃいけないパワーボンドみたく使えないカードを入れたデッキでも問題なく動くに

は動くし。引いたらやばいけども。でも、心の安心の為に入れたデツキを用意するしかない。

「ま、とりあえずデツキを。あ、そう言えばサイバードラゴン使った時に、なんか思い出したんですね。よし、あのカードを入れますか」

せつせとデツキを組みながら不安をかき消した。新たな出会い。それは、なんとなくだが、対抗デュエルの日。その日の気がして。

そして、当日。予定通り、学園対抗デュエルの日。デュエル場で万丈目さんと十代君のデュエルが始まる。嫌な予感がするので1人、入口のすぐ近くで観戦し、いつでも動けるように。デュエルの方は万丈目さんの先攻で、ドローした後顔がニヤけた。手札が理想的だったのだろう。

「いくぞ十代！ 万丈目サンダーの実力を見るがいい。俺は永続魔法、未来融合—フューチャー・フュージョンを発動！」

見慣れるカードから始まった。融合指定先はF・G・D。ドラゴン族5体で融合するモンスター。ドラゴン達が次々と墓地に送られていく。

「そしてアームド・ドラゴンLV5、ホルスの黒炎竜LV6。合計5体のドラゴン族を墓地に送り、2ターン先の未来で融合召喚する！」

更にホルスである。十代君メタを忘れない万丈目さんに拍手。ではない。いや、断定

は出来ない。ここにあってもおかしくないカードだし。けど。

「俺は死者蘇生を發動！ その効果でホルスの黒炎竜LV6を特殊召喚する！」

万丈目さんの声が聞こえる。墓地に落とすための未来融合であれば。決してF・G・Dを出すためじゃない。それだけじゃない。この動きはLVモンスターサポートの動きじゃなくて、この時代のドラゴン族デッキならこうした方が強いから、やってる。そんな風に見えた。強いからだ。理屈抜きでそうした方が実際強いから。でも、そんな考えで未来融合を万丈目さんがデッキに入れるのか？ いや、一応おジャマにも使えるから共通のサポートとして？

なんて悩んでいると、肩を叩かれていることに気がついて後ろを向いた。

「……？」

振り返るとすごい格好、まるで世紀末な服装……きつと多分、ノーズ校のコワモテ生徒だ。ああ、変な予感が当たったよ。どうしましょうかねこれ。

「お前が、この学校の入試で偉い格上のデュエリストに勝ったっていう……」

「違います」

「はっ？」

「すいませーん、警備の人ー、ちよつと他校の生徒に脅されて……」

「お、おい！ ちよつと待てよ!!」

「きゃー!!」

「なっ!? さ、叫ぶなあ!!」

そこまで大きくはないが叫んだ事に対してコワモテ生徒が驚き、近くに居た警備の人が気づいた。それを確認すると自分はガクガクと震えながら地面に座り込んだ。

「なんだ今の声は。って君は!」

「助けて下さい変質者が!」

「お、おい!! まてよ!! 声かけたただけだつて」

「そうかい怖かったろう。お前、少し来てもらおうか」

「待てつて警備さんよ! 話、ちよつ、まつ!」

コワモテ生徒無事連行。その様を見た後、すつと立ち上がる。

「……すまない」

連れていかれたコワモテ生徒に一応詫びる。届けこの思いである。あの焦り方から見るに多分、自分を連れてこいとか言われたんだろうが面倒事に関わる気は無い。普通なら行くべきだと思つたが、案外無視したら放つておいてくれるかもしれないし。まあとりあえず、ああいう動きが見えた以上はこの場は去ろう。デュエル場を出るとすぐ外で震えている翔君が居た。

「……どうしたんですか?」

「あ、あつ、こ、怖かったつすよお!!」

突然抱きつこうとした翔君を蹴り飛ばそうかと思ったが、普通に抱きとめた。おーよしよしとなだめながら何が起こったのかを聞く。震えている理由は、トイレに行くとき少しか場を出た時に、見慣れない女と大男2人に出くわしたらしい。

「で、その女の人が徐ろに合図をしたと思ったら、すごい格好の男が翔君に迫り、自分の細かい容姿や場所を聞いてきたと」

「そ、そうつす……」

「その女つてのは？」

「さ、さあ。そのままどつか行っちゃったつすよ。で、でも。なにかしたのその人に。もしかして危ない……」

「何もしてないでございますよ。それより、十代君の応援しましょう」

目を付けられても困る。男に恐怖を植え付けられた翔君のメンタルを少し直して、応援するつて理由の元に観客席に移動、席に戻した。肝心な情報は無かったが、まあよし。戻してすぐにそう言えばトイレに行く途中だったとすぐさま自分は席を立つ。さつと外に出て、自分の部屋に向かって一直線だ。デュエル場に人が集まつてゐるせいかな、やけに静かな校内を、独り言を呟きながら歩く。

「新たな出会いって間違いない。例の女。でしょうね。対処せざる負えない。こちらが

目当てなら、かってに寄ってくるとは思うけど」

複雑だ。正直。明らかな嫌な予感と一緒に感じるこの胸の高鳴りは。同じ様な人がここに、この世界にいるという事に対しての喜びか。自分でも分からないがハイになっ
てしまう。色々と考えてしまう。結果。

「さてと。……見てるでしょうガイウスさん」

声をかけると、自分には見える。目の前の空中に浮かび上がってきた、半透明の黒甲冑はふわふわと浮きながら面倒な顔をこちらに向ける。

『何を企んだ、貴様』

「やだなあ。企んでるのは向こうでしょうに。まあ、なんででしょうか。こちらは準備して迎え撃ちますよ。攻めるよりは、迎え撃つ方が多いでしょうし、慣れているでしょう。帝様？」

『……気色悪いから止めろ』

「はは。そうですねー。はあ。そんな事言ってくれてるガイウスさんこそ天使ですよ」
『本当に気色悪いぞ』

ガイウスさんはこちらの考えていることが大体わかってるから話が早いし、天使のようだったのも嘘じゃない。アレよりは全然天使だ。

『……まあいい。今回だけは見逃してやろう。慣れぬ力で本番は、貴様には辛いだろう

からな。気がついてるだろう?』

「はいはい。最終予行演習です。けどダメージは無しですよ相手巻き込むし。まあ、頼りますよ全力で。あ、念の為にラモールさんにも言っておいてください。人を守るのはガイウスさん無理ですからね」

『ほざけ、やらぬだけだ』

「おや、今日はブルーポジションの在庫があるようで」

『貴様あ!!』

足取りを早め、準備を始めた。何しても大丈夫。まあカードは白くなるから無理だけど。さて、どうせなら遊びましょうか。

□□□□□□

「使えないわね、貴方」

謝る男にため息混じりの言葉を吐く。長く伸ばした銀色の髪を弄りながら逃げた例の人物の事を考えていた。クロノスに勝った生徒。間違いないのよ。

「まさか逃げるだなんて。一体どういうことよ。どのみち逃げられない、会うことは決まっているような物なのに」

そう、本来ならその勝っている生徒は私で、ここで生活しているのも私だった。その筈だった。

「あんな寒い所に飛ばされて、わざわざ来たら逃げる？ 本当になつてないわね。良いわ、ならしらみつぶしに探すだけよ」

ノーズ校付近に飛ばされ目を覚ました。私を飛ばした神は言った。「何者かにお前の場所を奪われた」と。それから。それからよ。ノーズ校に入り、トップに登り詰め代表になり、来るべきだったデュエルアカデミアにようやくたどり着いた。全ては自らの人生を狂わせた何者かに会うために。

「……で、他の貴方達は何か調べてきたんでしょね」

周囲に居る5名ほどの男達。その1人が、出しにくそうにしながらも一枚のカードを差し出した。

「……なに？」

私の間に、男はカードを表に返す。本来ならモンスターや魔法罫のイラストや効果が書かれているはずの面は真っ白で、そこに文字が書かれていた。

「なによこれ。……初めまして。おそらく、貴方がお探しの者でございます。正直面倒なので逃げようかとも思いましたが、気分が乗ったので探されてみようかと思っています。暗い洞窟でお探しのお宝が、大きく光り輝いたと思って下さい……このふざけた

カードは誰に渡されたの」

読んでいる途中で持っている男を睨みつけた。すると男は顔を強ばらせる。

「お、女……悪魔みたいな、女に……」

「悪魔みたいな、女？」

これ以上は喋ろうともしない。何かおかしい。内容は続く。ただ。私としては貴方が危険かどうか分からない。なので、話し合う為に誰もいない場所で集まりましょう。廃校舎の中で、お待ちしております。

最後まで読んだ後、その紙をしまってから、ため息をついた。

「……何が誰もいない場所です。よ。明らかに異じやない。まあ良いわ。貴方達はもう戻っていいわよ」

男達に帰れと言って私は歩き出した。男達は止めようとしてきたけど。

「私に意見する気かしら？」

一言で、全て静まった。

「それでいいのよ。そうね、サンダーの応援にでも行つてなさい」

戸惑う男達を無視して廃校舎へと踏み出す。すべての元凶に会いに行く為に。

薄暗い空。廃校舎の中は微かな光が指し、それはただの暗闇よりも不気味。確かに雰囲気はあるけどこんなので止まってられない。そんな私が立ち止まったのはそう、悲鳴

が聞こえた瞬間だ。

「う、うわああああ!!!」

その悲鳴と共に、向こう側から走ってきた男は、私に目もくれず横を通り過ぎて行く。なにがあつたのかしら。叫び声が消えていき、静粛に戻る。その静けさは、先程までとは違い、どこか違う感情を煽った。

「……なつ、なによ。ハハハ」

自分の心拍数が少しづつ上がるのを感じた。何か、そう、危険な場所に誘い込まれてしまった可能性。その可能性を考えてしまったから。周囲はただ静かで、暗い。自分の吐息が周囲に響いているのではと思う程に。

「……全く、こんな場所に呼び出すなんて」

誰かの気配すら感じない場所。戻る方が安全だ。と思ったけど、既に進んだ後。後ろを振り返るのを少し、ほんの少し躊躇ってしまう。呼吸が少し乱れてきて、心臓の音が聞こえる程に。ドクン、ドクン。とその速度は呼吸と共に速くなつて。

「予定と違うわよ。私があいつを見つけて、呼び出す。その筈だった」

気分を紛らわせるために、考えを口に出して進む。独り言なのに途切れる様子は無い。止まっては行けない気がして。喋る程に呼吸も心音も大きく荒くなつていき不安が募る。

「どれだけ面倒な奴……って、えっ？」

それに気がついた私は足を止めた。辺りは静かになる。さつきと少し違うのは。

……アハハッ……

面白そうに笑う声が聞こえた事。

心臓から聞こえる音は速度を上げ息が苦しいと感じる程に。急に止まった声は行き場を失い喉に詰まる。その場で咳き込む。もう明確に浮かび上がった感情を抑えるために、深呼吸をした。大きく息を吸うことで、手付かずの廃墟に流れる埃臭い空気が肺の中に満ちる。けどそんなものが気にならない程に頭が混乱してきた。落ち着かないと。私は吸い込んだ息を大きく、声と共に吐き出した

「居るの？　なら出てきなさいよ！」

声は全体に響いてどこから聞こえてくるかも分からない。大きな声で問いかけるが、問いかけにも答えは無い。代わりに、少し前の部屋。その扉が開いた。こつちにおいて。扉の向こう側に潜む何かがそう言ってるみたい。

きつとこんなふうにからかつて私を馬鹿にしているのよ。ムカつく。思い通りになる訳無いじゃない。無言で足を速め、扉の中へ入る。足元にある何かに引つかかつて転びそうになった。

「危ないわね。こつち——っ!？」

足元にあつたのは、植物のツタ。だが、それは天井から、壊れている天井の隙間から微かに入る光によって違うものだと思つた。ゆつくり、ゆつくりと視線を足元から目の前に。そこに居たナニカは、毒々しい紫色を大きな身体、その身体に、複数ある、ゆつくりと動いている物。よく見ると、動いているのは口だと分かつた。開く事に糸をひき、何かが入るのを待っているかのように口を開き、閉じる。その口の 하나가、ナニカの身体ごと真つ直ぐ近づいてきて、開いた。生温い風が、顔から後ろへ向かつて吹き抜け、長い髪がなびく。

「いっ……嫌ああああ!!!」

やばいやばいやばい……!!

足元にあるナニカは私を逃がさず絡めとる。ベチャツとした感触に身体は固まり声も出ない。必死で逃げようと入口に戻ろうとするが、その出口を、毒々しい大きな身体から、しなやかに、まるで猫のように降り立った者が塞いだ。光が、それを人だと分からせた。仮面を被り、体のラインがくつきりと分かるような、派手な衣装に身を包んだ女性。美しい女性。その周囲にはツタのようなソレが蠢く。踊るような仕草を見せた女性は、私の視線を惹き付けた。そして私は、ツタのようなソレが自身の体に絡み付いてる事に気がつくのが遅れ。

「……ああっ」

気がついた次の瞬間。身体中を走り抜ける不快感と共に意識を失った。

「……あー。もしもーし」

「……うつ……」

「あー、やり過ぎましたかね。……いやだつて。新デッキ試ただけですつて。NEWカードの性能はいかに。どうやら失敗で即刻組み替えましたが。とりあえず今日の気分的には完成です。捕食月光は良さげな……本気でやれ？ やつてますよ。でもデュエルしていく内にやつぱり楽しむのも大切だよなつて思うんです。ええ、はいはい。すいませんでした。……あー、えつと。そうだ！ 今回の実験で思ったんですがソリッドヴィジョンも未来になると質量持つから、お化け屋敷業界は大助かりですね見た感じだと。まあ素直に人身救助に使った方が良さそうですが、機械使おうがソリッドヴィジョン使おうがバグる時はバグりますし。……いやかなり未来の話ですがね」

目を覚ますと、そこにはブルーの制服を来た少女が、何やら宙に向かって独り言を言っている姿だった。

「……ハハ、は……」

少しづつ動きはじめた私に気づいた少女は、空を見て「すいません、あとから話しましょう」と謝った後に近づいてきた。

「起きましたね。どうも初めまして。廃校舎と言えば、肝試し。肝試しついでに人払い

です」

意識がハッキリしてきた。どうやら座らされていた、みたい。

「しかし気絶するとは……怖がりさんですか？」

「……勝手に、話を進めないでくれる。頭が痛いわ」

「ああ、なるほど。じゃあ整理する時間も兼ねてお茶でもどうですか。美味しいですよ」

「……」

「何も入ってないです。入れる必要はないですからね。何かしたいなら、もう貴方はどうにかなった後ですって」

「……それも、そうね」

差し出された紅茶を一口飲んで、それから数分間無言のまま、状況を整理し始める。何が起こったのか私に。しばらくしてから状況を理解して、纏まって、次の瞬間私は叫んでいた。

「どういうつもりよ!!」

「うおー。耳が、響くから大きい声は控えてくれますかね」

「貴方？ 貴方よね!! 手紙の主は、こんな、ふざけた事をした張本人は!!」

それから丁寧の名前まで書かれた手紙を突き出す。それを見て悪びれた顔もせずこ

の女は肯定した。

「おー、自己紹介前に名前を知ってるんですね。では改めてご挨拶。はじめまして。貴方のお名前は？」

「私は美奈。——じゃないわよ！」

「え、偽名？」

「それでも無いわ！　っゝイライラするわね」

「短気は損気ですし、お肌に悪いですよ」

「誰のせいよ！」

面倒くさそうにため息をつくこいつに私は怒りで、怒りだけでいっぱいだった。

□□□□□□□□

待ち受けよう。と考えていた所に唐突に思いついたイタズラ。闇ゲ事件の経験から思いついたが、思い付いたからには絶対的にやるべき事だった。面白そうだったから。何よりも優先すべき事だった。結果成功した。デュエル時以外でもソリッドヴィジョンは動く事は他にも悪用出来そうだが今は考えなくて良い。

「まー。アレですね。話せそうな人で良かったです」

「……私は貴方が話せそうな人には見えないけど?」

「ああ。そういえば美奈さんが気絶したあれは、モンスターですよ。新デツキのモンスターを試しに召喚してたんですがね、この校舎の雰囲気とピッタリなのか、ホラーに見えるみたいです。怖かったですか?」

返事の代わりに素早く立ち上がった美奈さんは自分ボディーに拳を叩き込んできた。目の前に居る女の身体が少し、少し沈んだと思った時には強い衝撃に襲われていた。変な声がでて後退る程に。

「し、素人じゃない……力が、力がおかしい……!」

お腹を抱えてうずくまる自分を、立ち上がった美奈さんは見下ろしながら「その程度で済んだのを感じしなさい」と一言。この痛みは、まるで闇のゲームのモンスターの一撃の様に、痛すぎて痛みが消えかける。そんな力だ。

(人じゃない……モンスターだ!)

「こんなふざけた奴のせいで私は!」

「か、軽いジョークですよ。少し本気になっただけ」

「……立派な高校生の、ガタイのいい男子生徒が叫びながら走り去っていったのを見たけど、どこが軽いのかしら」

「人は見かけによらない。ってそんな話じゃないですよ。あの人達はオカルト研究

部。らしいですね。邪魔だったので。でも確かにあの人が全力で逃げるともなりとやり過ぎたような……でも、くだらない事でも本気でやるのが男の子心って奴です。軽いつもりでしたけど」

「もう……良いわ。で、話って何よ」

「えっ、そっちこそ何ですか？」

「……はっ？」

「いやいや。急にノーズ校の生徒に声かけられて、ビックリしたんですが。そうか話したいのかーと思って、話し合いするのに誰かに聞かれる場所じゃ不味いでしょう互いに。だから場所は用意したんですよ」

「……その軽いジョークとやらをする必要は？」

「無い！」

無言の蹴りは足を捉え、膝以外の所で脚が、しかも真横に曲がるかと思った。

そろそろ真面目な話をしないと行けないだろう。とお互いの事を、改めて説明しあつた。お互いが、転生者である事等を。そして、天使の話通りである事を確認した。美奈さんは、気が付いたらアカデミアの試験会場に居るはずが、ノーズ校の前で、薄着で放り出されていたらしい。

「すいません。本当に。本気で謝ります」

「……良いわ。それに関しては。私はお陰でノーズ校でクイーンになった。十代達が居たら、きつとなるのは難しかったから」

「クイーン？　と言うと、トップって事ですか」

「そういう事よ。けど……恨んでないと言ったら嘘になるわね。今の出来事だけでも相当恨むわ」

「……あ、あはは……」

「だから、デュエルしましょう」

「……えっ」

思考が止まるかと思った。この人は、自分と同じ存在である。だからⅡデュエルだなんて異次元回路をしているとは思ってなかった。

「ここはデュエルの世界。結果的に私は良い。けれど何かケジメは付けないと行けないわ。そう思うでしょう？　なら、こころしくデュエルでどうかしら。貴方が勝てば、そのままよ。私が勝てば、貴方はここを去る。もしくは私の奴隷にでもなってみる？」

「了解しました。奴隷、まあ、良い趣味ですね。凄い」

「そう。なら……って、了解しました？」

「はい。文句言える立場じゃないですからね。文句言いたいですけど美奈さんに言っても仕方ないです。奴隷か……頑張らないと行けませんよね。あ、優しくしてくれる

なら別になつても構わないか……優しい人ですか美奈さんって」

「つ、はあ」

なんかため息と一緒に大丈夫かこいつ？　みたいな目で見られた。多分大丈夫じゃない。

デュエルする場所は、この廃校舎内部。の端にある部屋だ。中心部や奥には何かと危ない場所だから近づかない方が吉だという提案をすると向こうは素直に乗ってくれた。

「私は、サンダーとのデュエルの後にやるつもりだったのだけれど」

「あそこで？　本気？　嫌です。目立ちたくない」

「目立ちたくない……何言っているのか分からないわね」

「切実な願いですよ。それに、何があっても大丈夫なように、ここなんですから」

「……へえ。そういう事ね」

「そういう事です。今から周囲が暗くなりますが、安心安全ですのでご安心を」

自分が宣言するなり周囲が黒いもので包まれた。黒で塗り尽くされた空間の中。光でもあるかのように互いの姿が見える空間に驚きもせず、美奈さんはこの一帯を包むそれに触れた。

「思ったより柔らかいのね。便利そうじゃない。そういう力を持つてるのね」

「いや、これは自分の能力というか、その。悪魔の許可を得た後に悪魔との話し合いの元

……まあいいや。そんな感じです」

某鎧さんの闇のゲーム練習空間である。デュエルディスクを起動するとそれに合わせて空気が重くなる。息をする事が少し苦しくなる程度には。

「……安心安全ね」

美奈さんはすぐに感じ取ったのだろう。これがどんなデュエルなのかを。この空間が、闇のゲームを行う為のものと。確かに安心安全感はないと思うだろうが、最悪ヒーラーが居るから安心。傷は治れば傷じやない。

「安心安全です。では、始めましょうか」

「良いわ。貴方みたいなふざけた奴は、1度倒れてもらおうかしら」

「ふざけたつもりは……無いとも言えない？」

デュエルは素早くドローをした美奈さんから始まった。

「私のターン！ 私は甲虫装機インゼクタ センチピードを召喚するわ」

ムカデのデザインをした装備に身を包んだ男がフィールドに着地。どこか戦隊ヒーローの雰囲気醸し出す。

センチピード 攻撃力1600

「げっ、甲虫装機……好きなんです？ それとも、本当に何でもありですか？」

「そうね。後者よ。勝つためなら強いカードを使う。当たり前じゃない」

甲虫装機。昆虫族閥属性のテーマ。それは発売された当初に猛威を振るい環境を一色に染めた。レアリティの低さから、誰でも使えて揃えられる——つまり、大人から子供までこのテーマ一色だ。その上、効果も複雑でトラブルも多かった。そんな過去があり害虫だのと比喩される事もある。

「貴方もそうじゃないの？」

「うーん……多分違いますかね」

「……まさか、貴方も自分だけのカードが。とか、切り札とか。そんな事言う人？」

結構棘刺しい感じでそう言われて、少し驚きはしたけど素直にそうだと告げた。その時の顔は、驚きと……なんだろうか、裏切られたみたいなお顔に見えた。

「そう。……まさか、貴方もそんな奴だとは思わなかった。同じ様な、そう。同じだと思っていたけど」

「いや、えーつと、美奈さん？」

「続けましょう。甲虫装機 センチピードの効果。手札の甲虫装機 グルフを装備する。そして、グルフの効果。装備カード扱いのこのカードを墓地に送ることで自分フィールドに存在するモンスターのレベルを2つまで上げる。私はセンチピードをレベル4に」

「センチピードは、自身に装備されているカードが墓地に送られた時にデツキから「甲虫装機」カードを一枚手札に加える。私に加えるのは甲虫装機ダンセル。カードを伏せて、ターンエンドよ」

「美奈さんは……この世界ですら、なんていうか。向こうの世界の勝つ為のデツキなんです。変な質問ですが」

「勝てば正義よ。だからこそクイーンになれた。それは私が間違っていない証」

「当たり前だ。と言わんばかりにそう答えた。なるほどシンプル。そして、ちよつと面白い。負けたら奴隷とかとんでもな事を言う人だから正直自分と同じテンションハイでおかしくなってるのかと思つてたけど、なんだろうか。」

「なによ。何がおかしい?」

「いや、なんでもないです」

「真面目に言つてる。この人は真剣にデュエルして勝つ為にカードを使つてる。そんな気がした。まるでそう、負けるのが怖い。そんな事を思つてる様な気が。」

「余裕がないな」と思つて」

「……余裕?」

「久々に気を引き締めないと。違う意味で。では、自分のターン!」

ドローしたカードを見るまもなく、元々手札にあったカードをセットし、モンスター

を召喚した。

「カードを伏せて、カードカー・Dを召喚。効果でこのカードを生贄にすることで2枚のカードをドロー出来ます。その変わり、ターンエンドしなくてはなりません」

「……それだけ？」

「動かないデュエルは……そんなに見ないですか。エンターテインメントとして行われるデュエルはセットエンドスタートは、割と普通ですが」

「貴方とは合いそうにないわ。私は勝つためにデュエルをしているのよ」

「奇遇ですね。自分もそう思っていますよ。ここに来てからは特に」

「……私のターン！」

美奈さんもまた、ドローしたカードを見るまもなくカードをプレイする。召喚されたモンスターは甲虫装機の1体。

「甲虫装機 ダンセルを召喚！」

ダンセル 攻撃力1000

光線銃を手に現れた新たな甲虫装機。トンボモチーフのコスチュームに身を包む、この攻撃力1000のモンスターから、甲虫装機は増える。相手の場を食い荒らす、相手を餌に増殖していく事を基本戦術としている。害虫。と例えられていたこともあるが、やられている方からすればその例えには嘘偽り無しと言えるだろう。甲虫装機達が

揃った時には相手の場は何も残らない。

「ダンセルの効果で、手札の甲虫装機 ホーネットを装備する。ホーネットは装備扱いの時に、このカードを墓地に送ることでフィールドのカードを1枚破壊するわ」

「で、装備が外れたダンセルの効果で新しい甲虫装機が生まれる。油断してる間には、ぬるい展開なんてしようものなら、相手に勝っている」と

「分かっているじゃない。ホーネットの効果でまずは後ろの伏せカードを破壊！」

セットカードが破壊される。

「ダンセルから装備が外れたわ。効果で「甲虫装機」モンスターを1体、デッキから特殊召喚する。私と呼ぶのは2体目のセンチピード」

センチピード 攻撃力1600

「1体目のセンチピードの効果で墓地のゴルフを装備。ゴルフの効果、このカードを墓地に送ってダンセルのレベルを4にする！その後、センチピードの効果により私は2枚目のダンセルを手札に加える」

手札とフィールド両方を補充しながら相手の場のカードを破壊した。既にピンチ。ここまで容赦ないと本当に凄い。本当に、この人。本当に勝つ為だけにデュエルしてるんだ。カードに思い入れとかそんなものは無く、ただ、勝つために。ここに来ても。

「気に食わないわね、その顔」

「まさか。いや実はですね。甲虫装機、嫌いじゃないですよ。言い方がアレですが……優しい方？　って言うんですかね。貴方がいて、自分が居ないと成立しない甲虫装機の戦術も、見た目とかも」

「あらそう。変な人。でもあなたが何を言おうと手加減なんてしないわ。バトルよ。甲虫装機　ダンセルでダイレクトアタック！」

自分　LP3000

放たれた一撃を貰ってもなんともない自分を見て。それに少し戸惑う美奈さん。

「どうしました？」

「……闇のゲーム、だと思っていたわ」

「にも出来るらしいんですがね。言ったじゃないですか。安心安全だと」

「そう。舐められたものね。続けてセンチピードでダイレクトアタック！」

センチピードは自らの足で走り出し、プレイヤー目掛けて一直線に。もう少しで届く。そんな時に、センチピードは動きを止めた。

「……止まった？」

「突っ込んできても良いんですよ？」

センチピードの足元、大きな口を開けている。気味の悪い緑色のモンスターがこの攻撃を止めたカード。

「相手モンスターの直接攻撃宣言時に、手札の捕食植物セラセニアントは特殊召喚出来ます」

その植物の根元が、微かに動きを見せていた。それは巨大な、自分の身体に生えている植物に同化するように緑色をした蟻だった。

捕食植物 セラセニアント 守備力600

虫で植物。受け入れ難い人にとっては絶対に見たくもないであろうモンスター。正直に言って、男女問わずこういうのが好きだという人はあまり居ないだろう。

「この子はセラセニアっていう食虫植物をモチーフにしてるんですけど、花言葉は、恋煩い。とからしいですよ。あと変人。そこまで変じゃないカードですけど」

「変人ね。お似合いよ」

「嬉しいですね。自分好きなんですよセラセニアント。さてこのセラセニアントは以外にもパワーがある。蟻も物凄い力があるように。戦闘を行うと、行った相手モンスターを破壊します。まあでも食虫植物なんで基本待つんですが、餌が落ちてくるまで」

問答無用で相手を道連れにする能力は見える爆弾の様なものだ。当然、基本的には発動の有無は相手が決めるため、脅しとして機能する程度の物だが。

「更に、戦闘及びカードの効果で墓地に行くと、デッキから「プレデター」カードを1枚手札に加えます。仲間を呼ぶ蟻さんでもあるのです」

「攻撃は中断するわ。カードを2枚伏せてターンエンド」
「ではでは、自分のターン！」

このターンですべき事。まず相手モンスターの殲滅。これが出来なければ確実に負けるだろう。続いて2回目のダンセルから始まる展開のケア。最低でも2枚のカードを破壊された2枚のカードを補充されるあの動き、それに対する回答だ。

少し考えながら相手の場を眺めていると、美奈さんは一瞬だけ、自分のフィールドに伏せられたカードを見た。なんだろうか。確認する様に見たカード。フリーチエーンなのだろうか。

「どうしたの、貴方のターンよ」

「いや、伏せカードが強そうだから、ちよつと動きを考えてます。1枚は、カウンター罠ですかね」

「教えると思う？ ……けどまあ、入る罠なんて決まってると思うけれど」
「ですよ。……いや、カウンター罠だけが理想ですが」

入る罠は決まっている。美奈さんの言う事を全て信じたとして、勝つ為にデュエルをしているなら自ずと罠も決められる。予想が出来る。これ結構バック厚いタイプですね。ワンキル特化だと思つてましたが、流石に予想外のカードに邪魔されるのが多々あるここではゆつくり押し潰したほうが良いつてなつたんでしょうか。で、あの伏せが力

ウンター罨ならまだいい。問題は、それ以外の罨。特に、永続効果を持つ罨カード。

「んんっ……いや、無いことにかけてあつたら負けるんですよねこれ。いや、いいや。分かりやすく行きましょう。手札から魔法カード、大嵐を発動します」

「なっ!? なんて悩んでたのよ」

「……ここで使つて勝てる手札なら悩まないんですがね……」

大嵐はフィールド全体に巻き起こる。お互いの魔法、罨カードを全て破壊する魔法。嵐はどんどん大きく、強く巻き起こる。その嵐の中心に向かつて、光が走った。雷の様に速い一閃。次の瞬間には、その光が消えると共に嵐が消えた。打ち消された。

「残念ね。大嵐は罨カード、神の宣告で無効にさせて貰ったわ」

「驚いたわりには用意してるじゃないですか」

「ライフポイントを半分支払う。けど、死ななきや同じよ」

美奈 LP2000

たった2枚の内、1枚のカードを守る為だけに使った。なるほど、どうやらあのカードは相当大切らしい。

「取り敢えずカード2枚は伏せます。……よし。では、魔法カード死者蘇生。美奈さんのホーネット。頂きましょうか」

大嵐に続く強力カードが発動。だが特殊召喚されるのは小さなモンスター。

「ホーネットが欲しいの。変な子ね」

「別に、ホーネットが墓地に居なければなんでも良いですよ」

「そう」

死者蘇生の力によって、墓場から蘇るホーネット。しかし。

「それは無理な相談よ」

蘇生出来る直前で再び墓場へ落ちてしまった。いや、弾かれて出てこれなかった。が正しい。

「そこまで引いてましたか……ヴァニティ・スペース虚無空間とは」

フィールドと墓地を、フィールドとそれ以外の場所を別けるようにして広がった意識。全てが空っぽの悪魔が創り出した空間。

「虚無空間。この永続罫がある限り、お互いのプレイヤーは特殊召喚が出来ないわ。その代わり、この空間はとても脆い。私のカードがデッキかフィールドから墓地に送られた時、発動される効果がある。その効果はこのカードを破壊する」

「死者蘇生は不発と。なら、これで全部ですね」

「全部？」

「防御札ですよ。では、セラセニアントを生贄に捧げる！」

手札のカード一枚を、高らかに掲げ召喚する。

「現れろ、邪帝ガイウス！」

漆黒の甲冑に身を包み、恨みを力に変える歪んだ帝王。埃を払うような仕草をした後、右手に闇を集め始めた。

邪帝ガイウス 攻撃力2400

「ガイウス……本当に、ふざけたデッキね」

帝の登場に、目付きを鋭くしてこちら睨んでくる。表情は決しているものではない。少なくともマイナスの感情だろう。

「まだ全然カード使っていないですよ。デッキばれた覚えはないですが」

「分かるわよ。2ターンも使ってこの程度の動き。お遊びのデッキでしょう」

「……好きなカードなんですよ。随分と気に入らないって顔されると少し悲しいですね。ガイウスさんは切り札ですし」

「そうね。気に入らないわ。そんなデッキに、負けそうになってる自分にも腹が立つ」
単なる強いカード信者にも見えた。けど少し様子がおかしい。あの顔は本気で怒っている。怒り？ 何故？

「邪帝ガイウスはフィールド上のカードを1枚除外し、それが闇属性なら1000ポイントのダメージを与える。対象は、甲虫装機センチピード」

なにかに怒っている。だが幾ら嫌いだからといって弱いカード扱いした物を見ただ

けでも怒りが湧くなんて事普通あるのか。

「自分の好きなカードで、本気で？」

美奈さんの身体は震えていた。

「勝ったつもり……？」

自分に対して……では無い。これ……

「笑わせないでよ!!」

声が響く。同時に放たれた光がガイウスを覆う。力を奪う光。その正体は美奈が手札から発動した1枚のカード。

「私は手札からエフェクト・ヴェーラーの効果を発動したわ。このカードの効果で、そのカードの効果は無効!」

手札から発動できるモンスター効果。光を放ち、すぐに消え去った女の魔法使いにガイウスは、心底つまらそうにソレが消え去った場所を見ていた。少し引つかかっていたなにかが分かった気がする。なんかおかしかったんだ。この世界に来て、ただ勝つ為のデュエル。何故かカードに対する思い入れなんて無いとでも言いたい様な行動。その理由。

「いい気味ね! 勝ったと思ったかしら。残念ね。勝てるわけが無いわ、そう。デツキの強さはカードが決める。貴方が好き、嫌いなんて全く関係が無い! 負けたら、意味

なんて無いのよー！」

強く強く、否定は許さない。そんな声。聞くだけで辛そうな声。

「ふむ……ガイウス」

短い攻撃命令。直ぐにダンセルが破壊され、当然虚無空間も破壊される。

「ダンセル撃破。更に、虚無空間も効果が発動してしまう。自身を破壊する効果を」

「そんな事しても、私は負けない！」

目の前でモンスターが砕かれ、自らのライフが減ろうが、自らの永続罠が効果によって破壊されようがなんとも無い。美奈さんはただ前だけを見ている。でも多分、前に居る自分を見てる訳じゃないだろう。

美奈 LP600

「それでターンは終了？ エンド宣言をしてくれるかしら。しないのなら、勝手に進めさせてもらうわ。私のターンよ！ 私はフィールドの甲虫装機 センチピードの効果を発動して、ホーネットを装備するわ。ホーネットの効果を発動。選んだカードを破壊する。対象は……邪帝ガイウス！」

宣言後、数秒もしない内にガイウスは木っ端微塵に破壊された。徹底的に。

「貴方の切り札とやらも、こんなものよ。分かった？ 貴方は負けるのよ。全ての事を決めるのは勝者。負けた貴方は何も得られない。そう、なにも……甲虫装機センチピー

ドの効果も発動するわ。デッキから甲虫装機　ギガマンティスを手札に加える。その伏せカードも、破壊よ。ダンセルの効果で墓地のホーネットを――」

ホーネットの効果発動の瞬間。

「それは、無理です」

手札のカードを墓地に送った。

「手札からD・D・クロウの効果。このカードを墓地に送ることで相手の墓地にあるカードを一枚除外する。当然、ホーネット」

異次元へと標的を引きずり込む鳥。ホーネットは歪みの中へ消えていった。それは場に静けさをもたらした。そして、それは渴いた笑いで満たされる。

「あつ、あははははっ!!」

美奈さんは笑った。その表情は笑顔ではないが。

「ほんつとに……ほんつとに。ふざけた奴ね!」

「おや。クロウは強いカードですよ」

「ええそうね。それがあれば、貴方の切り札を一瞬でも守れた。なのに、貴方は守らなかった!」

守らなかつた。見捨てた様に見えたのか、美奈さんの顔は今までになく感情を表していた。暗く、悲しそうな。

「最高に理解できないわ。好きなカードで？　って言うぐらいだから大切に思うかと思えば捨てる。でも、デッキはそんなもの。なのに本気？　笑いが止まらないわ」

「そーですよ。本気故に、ガイウスさんには犠牲になってもらったのだ」

「まだそんな事言うの？」

ピタツと。声も表情も止まった。

「……本音を言いなさいよ」

「本音ですよ。嘘つくとでも？　今は楽しくなってきた。1枚のカードに命を預ける感覚。ええきつと、間違った感情ですがこう思わざる負えない。楽しい、楽しい、楽しい！　……強いて言うなら、まあ。オカルトですが、なんとなく美奈さんの気持ちが分かりますよ。楽しくなさそうですね。勝ってるのに」

「……聞こえなかったかしら。私は、本音を言えって言ったのよ」

「言いましたとも。変わりませんよ。好きなカードでデュエルしてる。デュエルは楽しい。ここの人もそう言ったでしょ？　自分もそうです」

「……良いわ。貴方も、そうなのね」

熱は冷め、冷たい空気が周囲を刺す。

「引きずり出してあげる、思い出させて上げる。負けて、そう、思い出せばいい。勝てないという意味が無いのよ、ゲームは」

誰でも無い。自分自身にすら向けたような、小さな声でそう言った。

「私はダンセルを召喚」

「速攻魔法カバ―・カーニバルを発動。カバートークンを3体特殊召喚します」

カバートークン×3 守備力0

「悪あがき？ 甲虫装機の事を知っていてそのカードを発動したなら、悪あがきどころか手助けにしかないわ」

「どうですかね。効果、知らないでしょ美奈さんは。だって、強いカードじゃないから」
「……そうね。分からないわ。弱いつて事しか分からない。だから負けなさいよ！ 私はセンチピードの効果を発動！ 墓地に存在するグルフを装備する！」

「なら、その瞬間。罠を発動します」

「何かしら？ センチピードを今更止めてもダンセルがまだ……」

「この罠は、何も破壊しないし無効にしませんよ」

罠が発動すると、フィールド全てが霧に包まれた。

「な、なに？」

「スイッチヒーロー。この罠の効果は簡単。自分と相手のモンスターをスイッチ。入れ替えるカードです」

霧が晴れると、自分のフィールドにはダンセルとセンチピードが2体。美奈さんの

フィールドにカバー・トークンが3体。

「……えっ?」

固まってしまった。多分理解できない現象が起こったからだ。それはそう、こんな状況。普通は起こらない。

「ふっ。大・成・功! いやー、危なかった……本当にこれを無理やり通さないと行けなかったのは怖いですよ。まあお陰で美奈さんの甲虫装機ゲットです! が……なんかやっぱり、楽しくなさそうですね」

「……えっ……」

「おーい。美奈さん?」

まだ固まった美奈が戻るまでは少くない時間待つ事になった。

「さてと。知ってますとも甲虫装機。こうなると、返す手段は無いですよ。アイツらには散々やられて覚えました。死ぬほど苦労したな……」

「……ガイウスを、私に破壊させたのはこのカードを成功させる為」

「それもある。それ以上にガイウスを相手に渡したくなかったのもあります。これの攻撃は凄く痛い上に加減を知りませんから。でも賭けでしたよ。後ろから破壊されたら辛かった」

「……私の、負け?」

「そうなら、勝ちなので嬉しいですね」

美奈さんは動かない。受け入れられない訳じゃないだろう。けれど。

「まあ。黙っているならターンをもらおう。自分のターン！ 魔法カード、強制転移！」
再び互いのモンスターが入れ替わる。美奈のフィールドには攻撃力1000のダンセルが戻った。

「バトル！ センチピードでダンセルに攻撃！」

美奈のライフポイント600を、その攻撃は全て削った。デュエルディスクのソリッドヴィジョンが消えデュエル終了を知らせる。

「勝ち。です」

勝利に喜ぶ様な雰囲気では無いだろう。美奈さんは放心状態だったが、立ち直る。

「……偶然よ」

「かもしれないね」

「偶然に決まってる。納得出来ないわ！ 勝つ為にこのカードを選んだ私が、なんで貴方に負けるのよ！」

「知りませんよ。勝てる時は勝てるようになってるゲームなんです。それに、勝てるようにってなら……美奈さん考えてますホントに？」

「何言ってるのよ。私は……」

「例えば、そうですね……神の宣告とか。ライフが少ないなら別に発動してもしなくても少ないから変わらない。なんて適当にライフ削ってません？ 当然ですが死にますよそれ。美奈さんのデッキは、ゴブリン突撃部隊に装備カードつけて攻撃されたらワンショットキルされてしまうようなデッキです。神の宣告や虚無空間は、思ったほど頼りには出来ません。甲虫装機でワンキルしてたから気がつかなかっただけだと思いますが」

ゴブリン突撃部隊で即死するデッキ。そんな事を言われて、気がつき、美奈さんの表情は面白い様に変化した。

「つていうか、なんでそんな勝ちたいんですか。聞いた感じ別に好きじゃないけど強いから選んだカードみたいな事言ってますし。いや勝ちたいですが、負けたらその時はその時でしょう。美奈さん言っていましたし。ゲーム。でしょ？」

「……私は」

反応を見て、しばらく考える素振りを見せる。こういう反応には見覚えがあった。デュエル中の勝ちへのこだわりと、カードが好きって事に対する反応。幸運にも自分はカードでそういう事は無かったけども。例えばスポーツ、例えば成績。誰かと競って勝者敗者を決める事柄である最悪な出会い。そんな出会いをした人の中に居るタイプの人。

「……すごく適当な予想いいですか。まだゲーム初めて間もない頃。馬鹿にされたり、ボコボコにされたことがあります?」

この言葉に、美奈さんは微かに震えた。あたりかもしれない。この世の中にはある。どうしても最悪な出会いが。

「その時は、好きなカードを使つて遊んでた。とか。始めたばかりだったりしますかね。まあその時に、ある程度ゲームを知ってる人と戦うと当然負ける。それでその、負けた時に一々うるさく言ってくる人も居ますね。それも文句みたいな事を言うのは「俺が強い、お前が弱い」っていう思考のみの子供。知識だけが膨らんだ人。だと思ふんです。初心者の時にそんなのとゲームをしたら……」

睨みつけられて。その視線を感じて確信した。ああ、きつと楽しいから入ったんだろう。楽しいから入れたのは幸運だ。けど、出会う人が悪かったのか。

「言われそうですね。「そんな雑魚カード使ってるから勝てねえんだよ」みたいな。まあ良くあることです。それで止める人も多いですが……悔しくて、諦められなかった」

予想だから、間違つていたら無視して……なんて続けようとしたが、「そうよ」と美奈さんが話し始めた。こういう事はある。今じゃもっと多いかもしれない。楽しむ人に、くだらない暴言や、意味の無い正論ぶっかける連中に会つてしまう事なんて。

「……ずっと文句を言ってくる……馬鹿にしてくるの。負ければ当然だ。こつちが勝て

ば偶然だ。そんな事言われて黙つてろつて？ 諦めてやめたらつて？ 無理よ。出来るわけない！ それだけで勝手に私自身の事を決めつけられて、しつこく何度も何度も何度も……なに、勝てば凄いの？ 勝てば、勝てば何をしてもいいの！ なら！ だから、私は」

「だから勝つためのデッキリか組まなくなつたと。まあそれで勝つてれば相手も黙ると思います。それを続けたらそれが正しいと思つて仕方もないですが……楽しいですか？」

その質問に、答えは無い。表情は読み取れないほど複雑だ。楽しいなんて、デュエル中に考えた事はもうずっと無い事だろう。きつとこの人は負けず嫌いで、ちよつと人より強くて。だからやめるなんてこともなく。この世界に来て多分。きつと希望を抱いた。でも、その頃には出来なかつた。楽しむデュエルなんて、やった事も覚えてないから。もうその出来事のような事を言う奴なんて同じ世界にも居ないのに。ずっとソイツが心に残つて。

「楽しくないゲームはやっていて辛い。と思うのです。だから変えましょう。折角、続けているなら。こんな世界に來たのなら。楽しみましょうよ美奈さん。昔の事は昔。今は今です」

きつとこの世界は辛かつただろう。みんな勝つため。けど根っこには好きつて気持

ちがある人達が多い。そんな中で過ごすのはとても辛かったと思う。本当ならそうなりたかった自分と、そうじゃなくなっている自分の中で思う事があったのかもしれない。

だから自分と同じ様な、別の世界の人である自分を探した。今の自分が正しいと思える存在を。

「せつかくここに来たんですよ？ 楽しまなきや損というやつです。楽しまない本気も、楽しまない遊びも。つまらないですからね」

「……今更よ。私は——」

「今更なんて事は無いです」

変わろうとしただろう。当たり前だ。でも変われなかった。何度も何度もデュエルしてもカードを好きな気持ちなんて思い出せなかったんだろう。ずっと残ってる記憶が勝て勝てと脅迫じみたものになって離れないんだろう。トラウマなんてそんなものだ。別にそのままでも問題無い。って言っても良い。けど違う。この人は今でも思ってるはずだ。好きなカードで遊んだ頃のようにデュエルがしてみたいと。

出会いが最悪で、クソ押し付けられたんなら、ならせめて違うクソでも押し付けて変えてしまおう。どうせ慣れるなら、なるなら楽しむ方が良いに決まってる。

「デュエルです美奈さん！」

「……………えっ?」

「色んなデュエルがあつて、色んなカードがあつて、色んな楽しみ方がある! 人もそう。強いのか認めない。そんな人も居れば、自分ように楽しい、面白いって言う人も居ます。やってみなきゃ分からない! その上、こんな世界に来た。これはもう運命です。ここは! デュエルが、カードが好きなのが、大勢居る世界です。絶対に、楽しめません。だから、デュエルしましょう。自分の相手になつて下さい。試したいデッキが、カードが、山ほどあるので。それに、美奈さんのデュエルが見たい。人によつて、プレイも選択も変わりますし。ああ負けてもどうこう言うつもりも無いです」

一方的に止めない。そんな自分を見て美奈さんは固まったまま動かない。やつと動いたと思ったら、なんだか後ろめたいような顔をしながら小さく呟く。

「……………私は、良いのよこれで。だから」

「だから? こちらの心配してるなら、舐めてもらつては困ります。自分は負ける気ないですよ。強いデッキの相手上等ですよ。燃え上がるというものです。後は、自分もちよつと強いデッキあるんですね。試すなら同じかそれ以上に強いデッキじゃないと意味が無い。みたいな」

話し続けても煮えきらない感じの美奈さん。しぶとい奴だ。このまま返してもきつとこの人は同じデュエルをするだろう。自分には関係無い……………けど。もう関わつてし

まった。無視出来ない。お節介でもちよつかいでもなんでもいい。ああ、そうだ。なら、もう一度最悪の出会いをしてみよう。

「あはは！ そんなに乗り気じゃない？ ふーん。あ、まあ。そうですねー。勝てないという意味無い人ですからね……美奈さんは、一度負けただけで、もう勝てなくなるような人だったとかですかねー？」

わざとらしいその言葉。分かりやすい挑発。そして何より、その顔は人を馬鹿にするためだけに存在している様な表情をした。参考資料は最強最悪の奴が居る。更に続けて挑発を続けている内に。当然美奈さんはカチンときたらしい。ディスクを再び展開しカードを5枚ドロウする。

「……黙って聞いてれば、いい度胸ね。偶然、偶々、1回勝っただけで良い気になるなんて」

「はっ。勝者こそ正義です。ざまあみろですよ。まあまあ自分も鬼じゃないですし。弱いガラスのハートが砕け散った女の子いじめる趣味も無いですし。仕方ないですよ。美奈さん女の子ですもんね」

「良いわよ。貴方がその気なら、相手になつてあげる……その態度も、全部壊してあげるわー」

「ふふっ。そう来なくては。しかし美奈さんは以外に単純な人ですね」

「……なに？」

「面白い人で……うおっ!？」

「あら、惜しいわね」

「待って！ おかしい！ 蹴りが顔の高さに飛んできた！」

「顔狙ったのよ。当たり前でしよう」

「人の顔狙って脚振り上げて蹴り放てる女子は化け物です。男でもそんな難しいですよ」

「もう一回……」

「デュエル！ デュエルしましょう！ 自分のターン！ モンスターセット！」

「なっ!? 勝手に先攻を取らないで！」

そのデュエルは、思ったよりも長く。穴だらけの天井から入ってくる光が消えるまで続いた。

「……あはは。……はあ」

「ふっ。ふは。……少し、疲れましたね。もう外も暗いし」

「……そうね」

「そうですとも」

地べたに座り込み、互いを見つめる。デュエルをただただ。けどここに來てからか

不思議とデュエルだけで意思疎通が取れるようになってるのかも知れない。あれからずっとデュエルだけ繰り返した。それだけなのに互いに打ち解けた気がする。美奈さんは疲れきった顔をしながらも、満足げだった。

「……楽しそうな顔してますね」

「楽し、そんな顔？」

「そうです。なーんか、楽しそうな顔ですよ美奈さん。こっちも楽しくなります、その方が」

そう言って笑う。どうせ小言が飛んでくるのだろーうなんて思いながらも。けれど飛んできたのは。

「……その、楽しかったわ」

楽しかった。という言葉だ。一瞬固まってしまつて、その動きに気がついた美奈さんは前言撤回、そんな事は思つてない。なんてしつこく言ってくる。

「でしょう。楽しいもんですよ。素直じゃないですねホントに」

「だから！」

「何十回もデュエルしたのが何よりの証ですよ」

「それは……貴方が、ずっと向かつてくるからよ」

「まー。いや勝つ気ない人と戦うのってクソつまらないですからね。でもほんと。なん

でしょうか。それに……なんですか、美奈さんって、自分と同じじゃないですか。今まで前の世界がなんて話もできなかったの。秘密が共有出来る人がいるってのは何だか安心できます」

「人の話を聞く気があるのかしら？」

「あー……無いとか？」

「自分の事を疑問にしないでくれる？」

「はいはい。さてと。そろそろ戻らないと……あつ」

「なっ、何よ急に」

「美奈さん！ 船！ ノーズ校の人達帰りますって！」

思い出した。相手はノーズ校の生徒だと言う事に。

「それなら……」

「それなら急ぎます！ ほら」

「あつ、ちよつと……！」

強引に座っていた美奈さんの手を引いて立たせると、そのまま走り出す。こんな無理矢理デュエルさせて間に合いませんでしたなんて笑えない。

「貴方、なんで急いでいるの？」

「美奈さんに迷惑かけたくないからですよ！ 思ったよりもいい人でしたし、めんどく

無かった……といえは嘘になりますか」

「今日一番の驚きね」

「そりやどうも」

「……いい人。ね。散々文句は言つたつもりだけど」

「文句言うだけで悪い人なら極悪人はゴキブリと同じ数です。つてか、走りながら……つ、きつい！ そ、そろ……そろ、喋る余裕が……」

「仕方ないわね。行くわよ」

「えっ？ つて、おおおお!!」

地味に体力が無い自分を追い越し、逆に引つ張る形で美奈さんは走り出した。本当に力強くて引つ張られてる自分の足が勝手に動く。

「お、おおお……ら、楽」

「……逆に手を引かれて恥ずかしくないのかしら」

「楽です!」

「変な子」

廃寮を抜け出してすぐ、入口に偶々、査問委員会の女性が見回りに来ていた時間だった。

色々と騒動があつたがそれはまた別の話。

「……うーわ」

ブルー女子寮に戻ってきた。気分はそんなに宜しくない。それはその、後ろについている女性のせいであつて。

「……ね」

美奈さんは、ここに、残った！

どうやら決めていたらしい。廃寮から抜け出し一悶着起こしたあと校長室に寄ったかと思えばそんな話。部屋の話も。一人部屋にしろ！ と駄々をこねる美奈さんに戸惑う校長。諦めろというも自分を指さし「じゃあ何故この子は一人部屋な訳？」と文句。なぜ知ってるこいつとか思う暇も無い。そんな質問に対して「それはですね」と思ったよりも溜めずに喋ろうとした校長の座る机にカードが突き刺さる。こちらを見てきたので「部屋、一人部屋、用意しろよ」と言っておいた。たーまたま。偶然、余っていたらしい一人部屋に美奈さんは入る事になった。帰り際、自分のカードが何故か校長室に落ちていたので拾いながら部屋を出た。

でまあそんな理由で、寮の中に美奈さんを案内した。

「じゃあ、宜しくね」

「……あ、はい」

別れの挨拶をして、お互いに部屋に戻る。自分の部屋には何故か寝ているジュンコさ

んと、相変わらず優雅にお茶を嗜むももえさん。

「あら、お帰りなさいませ」

「……ももえさん、その、話いいですか？」

「あらあら、まあまあ」

愚痴って事になるのかな。何か知らんけどいっぱい喋ってスッキリしたが、やはり疲れた1日だった。

第12話 ふしぎ大地

仕事終わりの数人の男達は一つの部屋に集まっていた。学校が休みの日限定だが、ここに1人の生徒が居る事も日常になっていた。とあるキツカケで関わる事になったのだが、今ではすっかり馴染んでいて、友達同士のようになっている。そう、自分が倫理委員会組の面々と一緒に居る。

友達と言うとあれだが、完全にこつちが娘みたいな扱いで心が痛むのだが良くしてもらってる。そんな状況で、自分の目の前で頭を下げる男。

「……で。デュエルを教えてください」

「そうだ、頼む！」

かなり大きい大男。それもスキンヘッドの厳つい雰囲気を出している人に、縋るように手を合わせながら頼まれては、断れない。色々と怖い。頼まれた内容は、デュエルを。特にバーンカードに対する対策を教えてくださいという内容だ。

「なんでまたバーン？」

「ボスが使ってくるあのカードが、どうしても苦手なんだよ！」

「……あのカードって」

「魔法の筒ってカードだ！」

「……ああ」

魔法の筒。相手モンスターの攻撃を無効にし、モンスターの攻撃力分のダメージを相手に跳ね返すカードだ。ボスと言えはお馴染み緑の女性。あの人めちやくちや怖がられてるがデュエルを覚えてようやく部下とコミュニケーションでも取れるようになってほしい。が手加減なんて無いしそもゲームと言えど部下に負ける気も無いだろう。この大男、鈴木さんはボコボコにされたばかりだった。

「あれさえ対策すれば！ ボスに勝てる！」

妙に確信を得た口調で話す姿に少しだけ可愛らしさを感じたので、言われた通りの事を教えることにした。対策、まあ対策を。

「……例えば、ピケルの魔法陣とか。効果ダメージを発動したターン無効にする罠です」
「なっ、そんなカードがあるのか！」

「ええ。他にも、相手モンスターの攻撃を受けた時。そのモンスターの攻撃力分ライフを回復するカードとか。なんなら、4000ライフ一気に回復するカードもありますよ」

とても楽しくバーン無効カードと回復カードを並べて一通り話した後、それを聞いた

鈴木さんは、「デツキを組んでくるぜー」と部屋を飛び出した。懐かしいなと笑う自分に、もう一人いた細身の男が話しかけてくる。

「なあ。ゆうちゃん。このゲームって、罠とか消せないの?」

「えっ? ああ。消せますよ。そしてゆうちゃんはやめて下さい」

「……ゆうちゃんが教えたのって、死なない方法で、勝つ方法じゃないよね」

「おお。流石ですね。そしてやめろ。って、そこまで分かるなら貴方もやりましょうよ」

「いや、いい。それより賭けでもない? 大丈夫。ジュースだから」

「鈴木さんがボスにデュエルで勝つか負けるかで、鈴木さんが負ける方に賭けられるならやります」

「……次来る時に、ジュースは持つて来ておくよ。前から思ってたけど、今時の子供って怖いんだね」

「實際経験した方が早いですよ。初心者頃はやけに回復やバーン無効が強く見えますし。攻撃やバーンのダメージが強いだけに。貴方達のボスはその幻想を普通に打ち砕いてくれます。次は漠然と対策を教えてくれ! じゃなくて、このカードどう思う? って来てくれると嬉しいですね」

「ボスも初心者なんですよ。ここまで差が開くことってあるの?」

「そちらのボスは野球で数式を使用する脳みそ別次元のハイパーエリートからデュエル

の基礎を教わってます」

「……………俺はその数式の話が気になるんだけど。野球で？」

「バットに数式ですよ。その人は部屋も数式だらけだし、なんならカードの裏にも数式書いてあります。前なんか、隠れんぼをしたんですが、この式の計算上、ここに隠れていれば——とか言っていましたね。かくれんぼに当然の如く数式が入ってくる辺り流石ですよ本当に」

「今時の子供って怖いね」

「ですねー」

その日の話題はいつの間やら、「恐怖、三沢の脳内回路」になっていた。次の日。片手にジュースの缶を持ちながら、目の前で必死な顔で「勝つ方法を教えてくれ！」と言ってくるスキンヘッドに、サイクロンの存在を教えてあげた。これでもう怖くない。って飛び出して行った。悲しいかな多分結果はって感じたが。

「なあ！ このポールポジションってカードなんだが、ボスが使う強化カードの対策として——」

「やめろ」

三沢さん。この人は本気で変わってる。例えばそう、勉強時間の時。

「この式は、あの公式を使うと——」

「ああつ。分かんねえよ三沢！」

「ダメダメっすねアニキ。僕もっすけど」

（流石三沢さんです）

パズルゲームの時。

「このパズルは既に攻略する為の式が完成した！」

「おお、なんか知らねえけど。頑張れ三沢！」

「フアイトっす！」

（まあこういうのも得意ですよ。パズルゲームで式……しかも数式？）

体育の時間。野球の場合

（あ、次三沢さんバッターだ）

「君の投球の攻略式は、既に完成している！ うおおお!!」

数式が書かれたバットを迷いなく振り切り、ボールは遙か上空へ。

「三沢が打ったぞ！ ホームランだ！」

「流石だぜ三沢！」

「計算通りだ」

（相変わらず凄いなあの人）

サッカーの場合。

（十代君ボール奪ってからもうゴール前に一人で攻めてるし。まあでも……キーパー三沢さんだから）

「喰らえ、必殺。フレイム・シュートお!!」

「出た! アニキの必殺シュートっす!」

「残念だが、それは既に計算済みだ! はあっ!!」

ボールの来る場所が最初から分かっていたように移動した三沢はガツシリと十代の放つシュートをキャッチ。

「ああ! アニキのシュートが完全に止められたっす!」

「くそお!!」

「残念だったな。そのシュートは既に見切った」

（遠目から見ると下の地面に数式書かれてるんだよな。味方が攻めてた間ずっと書いてたのかあれ）

隠れんぼ。

「よっしや、隠れんぼしようぜ！」

「ええー。もうそんな歳でも無いっすよアニキ」

「賛成します！」

「ええっ!？」

「楽そうなんで」

「俺もいるぞ！」

日もくれた頃。

「よし、もうこんな時間だし、飯食ってこうぜ。じゃあな！」

「あつ！ 待つてよアニキー！」

「はーい。……あれ、何か忘れてるような……あつ」

搜索から数分。体育座りをする三沢発見。

「み、三沢さん。その」

「いや、良いんだ。計算通りだ。俺の導き出した式が最適な隠れる場所を見つけ出した。それだけだ。だから……」

「……その……凄いです。完璧でしたよ。計算以上でした」

三沢さんが座っていた周辺、そこかしこに書いてあった数式。数式を見て悲しい気持

ちになったのは久しぶりだった。

「そ、そう言えば。ほ、ほら！ 三沢さん。カード！ 渡す約束のカードです！」

「——強者の苦痛か。……はは」

「あつ。いやつ、別に深い意味無いですよ。三沢さん強者じや……違つ。その、本当。ね！ あれです！ ね！ あ、そ、その手に持つてるカードって、なんなんですか？ 数式書いてるし多分余ったカード——」

《エア・イーター》

通常モンスター

星6／風属性／悪魔族／攻2100／守1600

周囲の空気を食べてしまい、相手を窒息させるモンスター。

「——ですね。……デーモンの召喚とか来て使わなくなったのかな。はは、ははは」
何故か呼吸が苦しくなった。

□□□□□□

迫るその日に焦りながら、そしてそれから目をそらす様に、いつも通りの現実を過ごそうとしていた。でも、自室で寝転がって考え事をすることが多くなり、いつも通り、い

つも通りと考える程にいつもとは違う、何故かふと考え事をしてしまう。そんな生活になつていた。今日もそんな1日。自室のベッドで寝転がり、天井を見ながらだらけている。

「……そろそろ、だよな」

命の危機へなのか、自身の考えへなのか。それに対しての葛藤が収まらない。ここ数日の内に、ただ漠然とそんな気持ち湧き上がってくるのだ。唐突に死について考えて悩む様な、そんなどうしようもない事について考えてしまうのだ。

暫く部屋で「あああああ……」と呻いていると、ノックの音が2、3回。

「はい」

もともとベッドから這い出て眠そうな目で扉を開ける。目に止まったのは長い銀色の髪だ。腰まで届く長い銀の髪。それが別に違和感無く視界に存在しているのはもう色々感覚が狂ったのか、それとも目の前の人が凄いのか。

「……髪の毛の色って、まあ、あれだ。慣れますよね」

「……第一声がそれ？」

「綺麗ですとも。本当に。でもあんまり見ないから普通違和感とか感じるかなーって、思うじゃないですか。ビックリするぐらいにあつてます」

「相変わらず元気みたいね。髪は驚きはしたけれど、私だから似合つて当然ね」

「どこから溢れるんだその自信は」

「自信なさそうにしているから似合わないのよ」

「一理ある」

部屋の前に立っていたのは、同じ立場の人物である美奈さん。ノーズ校からここへ来た。その力は凄まじく、なにやらファンクラブまで既に出来てるとか。男女共に人気らしい。良くも悪くも裏の無い性格だからか、単純に見た目なのか。化物である。

でもそんな化物の登場は安心出来るものでもあった。これから起こる事への不安を共有出来る人物の存在は。ただ悪い事もある。安心して過ぎて、今まで緊張と恐怖で元気の無かった身体全てが元氣を取り戻すという問題が発生するぐらいには。不意に起こったこの問題の対処の為に1週間ほど授業を休んだりしていた話、結果としてジャージ登校を認めると乗り込んだのは別の話。

「目立ちますよね美奈さんって」

「貴方も十分よ。最近だと格好で目立っているけど。それ以外の話も聞いたわ、迷宮兄弟に2体1で勝利。……で、なんのデッキ使ったのかしら」

「自分のデッキです、まあ立ち話もなんですからお茶でも」

「お腹がすいたわ」

「はいはい。お口に合えば宜しいですけどね」

軽い話をしながら部屋の中に招き入れる。適当に座っておいて。と言ってからお茶とお菓子を用意し、自分も適当場所を選んで座り込んだ。

「……お菓子？」

「お茶との組み合わせがどうか聞きません。お上品にパンやケーキがご所望ならば、別の場所をオススメしますけど？」

「仕方ないわね。これで我慢するわ」

「そうしてください（本当に偉そうだなこの人）」

自分は別段嫌だとも思っていない。それに、ここまでの上から目線は普段はしない……そう信じている。やけに上から物言いをしてくるのが精霊にも居るからな。と黒い甲冑を着た奴を思い出しながらも不服そうな美奈さんの顔をみて苦笑い。

「で、話とは？」

「そろそろよね。セブンスターズ」

「……ああ」

その言葉は、自分が今感じていた悩み事だった。この世界の未来が分かる状態で来たような自分達はこれからの行動を選ばなければならない。

セブンスターズ。三幻魔とかいうヤバいカードを巡って起こる戦いで闇のゲームもあるよって言う出来事。それに首を突っ込むかどうかという話だ。

「どうするのよ。一応、私達は色んなことが出来るわよね。例えば、三幻魔の復活を根本的に止めるとか」

「それデュエルやめろよって皆にいう気ですか？ 無理でしょうそれ」

「知ってるわよ。なら、普通に闘うことになる。闇のゲームをやらないと行けないわけだけども。使うの？」

「……使いますよそりゃ、多分、きつと」

使うというのはいわゆるとも知れたカード類だ。美奈さんには漂白事件の事を話しては無いから自分がびびって使っていない。と思われているが実際そう。

「きつと、ね。なんで躊躇うのかしら。私としては、別に良いのよ。貴方が仮に出し惜しみして取り返しのつかない事になったら、後は私がやるから」

「それは、とても頼もしいです。よろしくお願いしますね」

「……冗談、下手だったかしら」

「本気でよろしくです。頼れる人が居ると少しは気が楽ですよ」

真面目な顔でそう言った自分に、軽めの拳が飛んできた。

「痛っ!!」

「冗談って言っているでしょう？ まだ出会ってすぐの私に、本気で頼れるとか言う気？ むしろ、怪しまれると思っていたわ」

「痛いな……冗談に冗談で返すな。みたいな言ってますけど、本気ですよ。美奈さんは信頼出来ます」

「騙されやすいタイプ？ には、見えないけれど」

「嘘のようなほんとか分からない話。信じるか信じないかはアナタ次第」

「……はつきり聞くわよ。いくつ？」

「黙秘権。美奈さんは……」

「女性の歳を聞くななんて正気の沙汰じゃないわよ。それと、貴方に黙秘権は無いわ」

「ええ……」

話は少し纏まったと思う。現状、頼れる物全てに頼らざる負えない。という結論に至った。頼らず解決する気がないならデュエルアカデミアに来た意味がないのだから。ここに来たということは、そういう事なのだから。

次の日。鮫島校長から選ばれた生徒達が呼び出された。その中に、クロノス先生と大徳寺先生の姿は無い。

「貴方達には……」

校長先生からとある話が皆にされた。三幻魔。そう呼ばれるカードの事、それが7つの鍵で封印されている事。そして近々、その鍵を狙って来るデュエリスト……セブンスターズがこの島に来る事。

校長先生はこの自体に備えて優秀なデュエリストに鍵を託し、守ってほしい。と考えたそう。それが闇のゲームという事を知っている自分からすれば学生に預けるなんて正気じゃ無いが……良い意味でも悪い意味でもデュエル最強なこの場所に置いてそれは正しいのかもしれない。

「ちよつと待つてください校長先生」

「……なんでしよう？」

状況を察したので素早く動く。話は最終的に自分が鍵の所持を辞退する形で、クロノス先生に持たせ、サポートに回る形で落ち着かせた。そうした事に美奈さんは驚いていたけど。

校長室から退出した帰りの廊下で、当然のように呼び止められる。

「……どういう事？」

「先生が鍵持つてないとまずいでしょう」

「どうしてかしら。てつきり貴方は、引き受けるものだと思っていたけど」

「物事にはキッカケがいるのです。キッカケ一つで大物になりますよ」

「なら、良いけど。でも、キッカケがそんなに大切な事なら、キッカケ一つで小物にもなる訳ね」

「そうですね。って考えると人は結構雑に代わるものですね」

「私の鍵を貴方に渡してもいいわよ？ 私はこちらに来たばかりだし、正直明日香ぐらいで十代達とはそこまで話してもいいわ」

「ご安心を、今日の予定は美奈さん歓迎デュエル大会です」

「……は？」

「十代達集めてデュエルだあ。です」

「ちよつと、勝手に……」

焦り出した美奈さん。だが遅い。もう自分は今の漠然とした不安を吹き飛ばしたくて吹き飛ばしたくて仕方が無いのだ。

こちらの声をかき消すような大きな声が、丁度の後ろから聞こえた。噂をすればだ。

「おーい！」

「あ、じゅーだーいさーん」

手を振って走ってくる十代君に、気だるげに手を振り返す。こちらにたどり着くや否や、美奈さんを見て目を輝かせた。

「今日はアンタも一緒だろ？ 美奈。だったよな」

「……初めましての相手に呼び捨て？」

「俺は遊城 十代！ なあ美奈ってさ、ノーズ校じゃ一番だったんだよな!? サンダーから聞いたぜ。あのサンダーが俺と同じぐらい強い奴が居るって聞いてからどんな奴

か楽しみでさー！」

「私の話は無視？」

「ノーズ校の1番なら、デュエルアカデミア1番の俺とデュエルだ！ どっちが真の1番か今日のデュエルで決めようぜ！ なっ！」

「……通訳」

「おい、デュエルしろよ」

「……この子、よく生きてこれたわね」

「人に対する態度なら貴方も大概です。強いて言うなら楽しそうか偉そうかの違いでどっちも普通じゃないですよ、自覚は無いでしょうか」

明らかに嫌そうにしているが、お構いなく話しかけてくる十代君のメンタル欲しい。だがあの二人だけだと会話が絶対続かないので、適当に間を繋ぎながらデュエルを行うレッド寮まで移動した。

「はあ……」

「そのため息つかないで下さいよ。そうでもしないと無いでしょう。仲良くなるキツカケ」

「……そうね。そうかもしれないわ」

「いつかは仲良くなってるかも知れませんがね。十代さんとの話し方とかは、デュ

エルしてれば慣れますとも」

レッド寮にはいつもの面々に三沢さん、明日香さん、万丈目さん等の多くの人が集まり小規模ながらデュエル大会が行われた。運営側と称して参加はしなかったけど見ているとやっぱり楽しいもので、少しだけ気が楽になる。

時間は流れデュエル大会の決勝、美奈さんと十代さんのデュエルは長い戦いの末に、終わりが見えてきた。

「デツキにダンセルもホーネットも無いですつて。くつ、カードを伏せて、ターン…エンド」

「なら、エンドフェイズに罠カード発動。インシユランス！ そのセットカードを手札に戻す！」

「そう。改めてターンエンドよ」

「つて事は、俺のターンだな。なあ美奈。このターンに俺が逆転できたら、面白いと思わないか？」

「……逆転？ 何を言うかと思ったら、状況を見て言いなさい」

十代は手札もフィールドもカードは1枚も無い。美奈さんには伏せカードは無いがギガマンティスを装備して攻撃力が2400になったグルフが居る。ライフポイントは2000だがこれはライフコストで支払った分。つまり十代君の攻撃は1度たりと

もライフを削ってはいない。

「私のライフを1も削れなかったのに、ここに来て急に逆転するなんて、今の今までずっと私が勝っていた。そうでしょう。夢は寝てから見てなさい」

「いいや、夢は起きているこの瞬間に叶えるものさ。見せてやるぜ、美奈の言う夢が現実になるこの瞬間を！」

俺のターン！ 手札がこのカード1枚の時にのみ、手札からE・HERO バブルマンは特殊召喚出来る！。そして、バブルマンがこの方法で特殊召喚に成功した時、フィールドと手札に他のカードが無い場合デッキからカードを2枚ドロウする！」

バブルマンがフィールドに登場し、その厳しい条件を満たしてカードを2枚ドロウする。張り詰める空気の中、手札を見た十代君は満面の笑み。

「これがこのデュエル最後の融合召喚だ！ 魔法カード、ミラクル・フュージョンを発動！ 墓地に存在するフェザーマン、バーストレディを除外して現れる！ E・HERO フレイム・ウイングマン」

十代のエースモンスター。フレイム・ウイングマンが現れ、残り手札は1枚。

「ここでミラクル・フュージョン!? でも、まだ攻撃力は私のゴルフの方が……」

「フレイム・ウイングマンで甲虫装機ゴルフに攻撃！。そして、攻撃した時に速攻魔法、決闘融合―バトル・フュージョンを発動！」

「バトル……フュージョン?」

「このカードは自分の融合モンスターがバトルをする攻撃宣言時に発動出来る。発動した時に自分のモンスターの攻撃力を、戦闘を行う相手モンスターの攻撃力分アップさせる」

攻撃力4500。圧倒的攻撃力を持ったフレイム・ウイングマンは地を蹴った。

「フレイム・ウイングマン! フレイム・シュート!」

その攻撃力のはかの究極竜と同等。目の前に立ちふさがる敵を一掃する。業火に焼かれ甲虫装機グルフは消し炭になり、姿を消す。

「そんな……こんな事って! い、嫌よ。嫌ああ!!」

そして、プレイヤーの叫び声と共にデュエルの幕は閉じた。

「ガツチャ! 楽しいデュエルだったぜ」

「やったあ! アニキが勝った!」

「流石だなー番君は」

残念だがこれが現実である。デュエルの決着が付き周囲も騒ぎはじめた。喜ぶ十代達の中で1人、うずくまってその場から動かないお嬢様の元へ足を運ぶとこちらに見向きもせずひたすら地面を眺める姿だけがあった。

「そ、そのー。大丈夫、です?」

「……大丈夫に、見えるかしら」

「全然。まあ、仕方なしです。理屈抜きで……あるいは、別の理屈があつて勝てなかったんですよ」

きつとプライドは粉々に砕け散つただろうなあ。何故かとは言わないが。他の皆は惜しかったとは言つてくれるが、違うんだよなあ。まあ知るはずも無いけど。

「その、ドンマイですよ美奈さん。マジで。具体的に言えば……インシユランスとか？ 終いにはエンドサイクみたいに使われて。セットカードはなんでした？」

「……虚無空間」

「……その、ホントに。美奈さんは悪く無いです」

「……ありがと、少しだけ、感謝するわ」

「はいはい。どう致しまして」

悲しみに暮れる美奈さんの気分を少しだけ直してから、その後フリーでデュエルするなり話するなりの自由時間に流れた。美奈と十代はやや合わないなと思つてはいたものの、話のネタはつきさつき出来たばかりの物がある。それもあつてか打ち解けるのはだいぶ速かった。

「ふああ……良かった良かった。ノーズ校の人達見て思つてたんですが、打ち解けてくれて本当に良かった。性格もそうだし、他にも……心配しすぎかも、しれませんが。で

もノーズ校であんな感じだったから心配するなって方が無理ですよ。まっ、実力主義のノーズ校じゃ自然と上下関係がデュエルの腕で決まりますし。ここではそんな事ない……とも言えないのが。ノーズ校の上下関係はわかり易いし綺麗つちや綺麗だけど、ここのは……いや、いや。どっちにしろ危なかったというか、なんというか」

1人心配事を呟きながらも、安心。これからあの人が徐々に好きなカードとか言える様になったら、面白いんですが。

「とにかく良かった。これでなんとか……」

「1人で何をしているの？」

「……あつ、どうもー」

1人でぶつくさ悩んでいるといつの間にか美奈さんが来ていた。

「どうですか、やっぱ良い人達でしょう？」

「ええそうね。あの査問委員会の女よりはよっぽどね」

「……これで、ここに来て2回目の敗北ですね」

「あれは敗北に入らないわ！ いい？ 貴方がデュエルをアイツに教えてるって知ってた——」

「はいはい。知っていても無理でしたよね」

これで安心したのはそう、失敗した1回目があったからだ。美奈さんと査問委員会さ

んは面識がある。初日に起こしたトラブルでデュエルになった。結果はワンターンキルで美奈さんの負け。

「まあそれはもう過ぎた話です。自分としては美奈さんが仲良くやっていけそうで安心ですよ」

「何かしら？ 私に心配されるような要素があつたみたいな言い方ね」

「……（無いと思つてたのかと言いたい）」

「なんで黙るのかしら」

「黙ってないです。話そうとしたタイミングが被つてしまつて、先に美奈さんが話したので聞いたまで」

「面倒ね、はつきり言いなさいよ」

「面倒になつてしまいましたねー。普通にすいませんって返した方が良いんですけどねー。続けていえばこんな事は黙っていた方がいいんですよねー」

「次そんな風に言つたら、いいものあげるわ」

「遠慮します全力で」

その後は他愛もない話が続いた。本当に、唯々学生に戻つたようなそんな時間が。けどやっぱりそんな時間も終わりが来る。

「さてと。少し速いですがそろそろ時間です。企画した自分が言うのもなんですが、そ

ろそろ戻らないと……」

「待ちなさい」

「……えっ？」

「貴方、今日デュエルして無いわよね。どういうつもり？」

平和にお開きにする予定は、その言葉で、場の空気が変わったせいで無くなってしまった。

「あ、そう言えば！」

「十代さん、そうなんですが今は……」

「確かにそうだな。見てただけだ」

「三沢さん。そうですが別に……」

「集めた貴様がデュエルしていないのは、確かに変だな。それに、お前は俺が負けた時盛大に笑っていたのは忘れんぞ！」

「万丈目さん！」

「さんだ！」

「だから万丈目さんって言ってます！ それはおじやまで盛大な自爆特攻したら笑いますって！」

「黙れ！ 装備カードがサイクロンで破壊されていなければ！」

「破壊されたから笑ったんでしょうが！」

その場の空気は徐々に広がり、周囲は自分を逃がさないように囲みながらデュエルデイスクを起動する。その中で、目の前に立つ美奈さんが笑った。

「誰から相手する？」

「……誰からでも。まあ、そうですね。別に全員、倒してしまっても構わんのだろう？」
そこから始まったバトルロイヤル方式のデュエルは、日が落ちるまで続いた。

「なっ、なんで私ばかり狙われるのよ！」

「自分無害。ほら万丈目さん。ギフトカードです。三沢さん、強欲な贈り物。闇の指名者はそうですね……」

「くっ、腹が立つが最後にたつていれば勝者だ！　いくぞ美奈！」

「万丈目！　貴方はプライドが無いの！」

「……もらった建前もある。戦略的に俺も美奈を狙おうか。あの甲虫装機というカードは厄介だ。俺の今のデッキで全員に勝つにはそれが良い。彼は見るからに戦えるデッキではないからな」

「僕もっす！」

「いくぜ明日香！　フレイム・シユートお！」

「そうはさせないわよ！ ドゥーブル・パッセ！」

「……あの2人はなんかほつといて、じゃあ翔君に向かって闇の指名者。ビークロイド・コネクション・ゾーンで。頑張つて美奈さん倒してください」

「頑張るっすよ！」

「このっ!! 貴方は本当に……その前に翔！ 貴方もよ！」

「ひいつ!？」

結果としては、最終的に残った明日香と十代の一騎打ちの結果。十代が勝利して幕を閉じた。

第13話 呪う貴婦人

声が聞こえる。自分が言っているのではと思うぐらいに、身体の中から声が聞こえてる。薄っすらと笑みを浮かべた様な声が、優しく、寄り添うように。

「不安じゃないのか？　そう、今にも自分が居なくなってしまう様な、そんな気がするんだらう？」

否定して、首を降る。でも声は優しく話しかけて来た。敵意は無いと。味方だと。

「知っている。私は安心を与える事が出来るよ。勿論、君が望むなら」
声が聞こえる。

□□□□□□□□

「……眠い」

「君、いつも寝てるよね？」

「……その、なんというか。眠くない？」

「眠い日もあるけど、ほら。私の席、明日香様の近くだから」

「……様、いや。そうですね」

「そう言えば君は明日香様とよく話すよね。いいな」

「……いいか」

他愛のない授業風景。はい隣の人とペアになって。そんな状況で名前すら覚えてない同級生と作業をしなきゃならない。そんな時間。今回のペアの人は話しかけてくれるタイプだったのが良かった。乗れば暇を潰せるし、次こんな事になった時にやりやすい。あ、同級生の明日香さんに様を付ける人は少なく無いです。どこぞの女王様が少し嫉妬してました。頭おかしいね。

「ねえねえ、明日香様って普段どんな会話してるの?」

「……話した方が早い。って、やれるならやってます?」

「やってますー。でも出来ないでしょ? 今日明日香様が居ない授業だから言うけど、少し声掛けずらいわ。取り巻きの2人も居るし。特にジュンコって奴が五月蠅いのよ。全く、明日香様にベタベタくっついて、何様のつもり?」

「五月蠅いってのは同意。凄く同意。明日香さんが近寄られない理由に入るのは分かる」

まあ、聞いてく感じだと「明日香様」に対するイメージと現実の「明日香さん」とのギャップでトラブル起きるんじゃないかレベルですが、どうせ深くかわらないのでス

ルー。だが流石にこのまま明日香様トーク続けられても飽きる。明日香様と親しくするところなるなら尚更面倒いなどか思う。

話の流れを変えようと、別の話題に切り替えると、噂話に流れた。変な噂は男女問わず好きな人種が話すもの。大概はどうでもいいが。ひたすらに迷惑なものもある。良いにしろ悪いにしろ噂話好きな人は噂をばらまく事を躊躇わない。

「そう言えば、最近新しい先生が来たの。3、4名らしいわ」

「へえー。またこんな時期に、多くないですか？」

「そうなのよ！ 多いよね？ 怪しくな〜い？」

「……というと？」

「ふふん。実はね、その中の誰かは分からないけど、1人怪しい噂を持った先生がいるって噂よー」

「へえ（噂の飽和状態だな）」

聞くにそれは妄想で片付けて終わりだが、まあいいや。下らん妄想を広げるのは男も得意だ。広げる方向性が違うが。

「その先生が、前に居た学校でデュエルを……あ、先に別の学校に居たって噂からね」

「……いや、話進めて」

「なんで学校に居たって噂が……」

「そこじゃない。いや正直こんがらがってますが、デュエルを？　なんです？」

「あそうそう！　デュエルをすると、その生徒の意識が無くなる！　っていう……」

「噂がある」と

「そうなのそうなの！」

「はあ」

その生徒は、それから得意げに噂（の噂の噂ぐらい）の話が続けた。すまんこの子は普通じゃないぐらいに噂好き。で話が終わった後、授業が終わり、キリよく休み時間になつて解散だ。机の上で、噂話大好き生徒が立ち去つたのを確認しつつ大きな欠伸。ふうーつとゆっくり息を吐きながら机の上に身体をだらけさせる。

「はあ。正直まだ実感がわかないというか、昨日はダークネスがあつたばかりだと言うのに」

実は昨日の内でダークネスと十代君の戦いが終わっている。仕方ないね。マグマの場所にワープだからね。見に行く必要を感じる以前に眠っていた。ウカツ。尚、美奈さんはしっかり見て言つた模様。流星だが起こしてくれなかったのか。あんなにあんなに悩んでいた事なのにスツと始まってしまつて巻き込まれ始めている現実を受け入れられない。まあ受け入れなくても向こうは待つてくれないけど。

「何から手をつける。何に手をつければいいのかも分からないのに。いや、とりあえずは

眠るの無し。それから一回ぐらひはデュエルしないと行けないから鍵を……」

答えは多分用意されてる。なんだかんだしてデュエルし、勝利すれば決着が付くだろう。そういう世界だから。

「よし、早めが良い。次の相手はきつと、カミューラさんだ」

机から起きて、直ぐに自分の部屋に行く。とりあえず思い付いたことは全てやるしかないと思き出した。

部屋に向かう途中。廊下に出て、丁度そう、保健室の前を通った時に。入口の方で少し騒いでいる数名の生徒と先生が見えた。先生の方はいつもの先生では無い。見知らぬ顔だ。騒ぎの内容は、どうやら一人の生徒が、何かをして意識が無くなつたらしい。

「先生！ 大丈夫なんですよね！」

「ええ、大丈夫よ。少し気を失つてるだけ。でも、これに懲りたら危険な事はしない事」

「は、はい」

「全く。夜出歩くだけでも危険なのに。吸血鬼が居る。だなんて。見つけたらデュエル出来て、負けたら……気を失う。だつた？」

「ち、違います！ 私見たんです！ その女の人が、私の友達と……そ、その」

噂話大好き。つて訳でもないのですがこの学校に流れている噂を把握している訳では無いが、その話が妙に気になる。少し服装を整える振りをして立ち止まり、聞き耳を立て

た。

「……えっ、く、口付け？ ってキスよね」

「それから、顔色が悪くなって…」

「……夜出歩くから寝不足になるのよ。幻覚症状ね」

「違います先生！ その人、デッキがヴァンパイアモンスターを使っている！」

「そう。吸血鬼もデュエルする時代なのね。まあどちらでも、危ないのは同じ。とにかく、夜に出歩くのは禁止。私からも他の先生に伝えるから」

整えるふりをするのも限度がある。が、大方の話は聞けたのでさっさと保健室の前を通りすぎた。

「おつかしいな。そんな話初めて聞きましたよ全く」

この後、真っ先に始めたのは噂話を集める事だ。特に知ってそうで、勝手に話しそうな人達を集めて。というか集まってくれる人達から話を聞いた。

「ああ、その話ね。アンタもこういうの好きなの？ 男の癖に？」

「その反応だけは嬉しいけど、そういう考えは偏見ですジュンコさん」

「ふーん」

「興味無さそうだなー」

自分の部屋を見回り隊員の1人であるジュンコさん。最近監視の目は1人1人交互

に来るようになった。緩くなったものだ。

吸血鬼の噂。これはカミューラが姿を現し始めた兆候。だが、デュエルするなんて聞いてない。しかも、した生徒が倒れる……倒れるだけ？ いや、そこは今は気にしないでおう。とにかく変化が起こってる。

「赤いドレスを着て、幽霊みたいにふわあつと現れて、相手の血を吸う時にだけ実体化して、ちゅうーって」

「そうですか。あ、今の少し可愛かったです」

「……な、なに言わせてんのよ！」

「なに言ってるの!？」

理不尽な拳系女子が多い自分は週一ぐらいでお腹にダイレクトアタックを受ける。ただ慣れもあるし、ジユンコさんの威力は可愛いなと本気で思ってる。本物受けたら声は出ない。

一応、しぶしぶ、嫌々あの人にも聞きに行った。

「あらあら、わたくしの部屋に来たのは初めてですわね。事情を知っているから断わるかもですわ」

「……くつ。ほんつとに面倒な人ですね。断られたら立ち話でも良いですよ」

「立ち話……廊下から部屋にむかって話してる人なんて変な人ですわ」

「やっぱり帰ろうかな」

ももえさん。多分一番、知ってる人とズレがある人物。いや、出番ないから日常はどんな人だったのか知らんけど。デュエルに関していえばもつと知らないけど。因みに話は大きく変わらなかった。ブルー女子寮の裏手、森、デュエル場の深夜。いずれかに出現してはデュエルをしたりしなかったりして、最後はキスして終了だそう。倒れた生徒は貧血みたいな症状が起きて倒れたらしい。

これが誰の仕業か知らない。が、自然に考えればカミューラだろう。美奈さんにも知らせておくか。と簡単に知らせた。ももえさんもそうだが美奈さんも部屋に入れないどころか扉すら開けないが。2人曰く女性の部屋は覗くものではない。らしい。ももえさんはまあ分かる。が、美奈さんは自分の性別知らないのにこれだ。

「そうなの。カミューラがそんな事した記憶が無いわね」

「だからご報告です」

「倒せば問題ないんでしょう?」

「多分」

「クロノスとやらせた後よね。貴方がそうしたいみたいだし」

「そうですそうです」

「……酷いわね。負けるって分かっている戦いを止めないなんて。一応、知らない十代達

からすれば命の掛かった大変な事よ？」

見殺しか。みたいな言われ方ですが、そうですと返す。多分安全。ただ人形にされるだけなら大丈夫だ。

「じゃあ今日は早く寝たら？　明日にでもカミューラ戦が起こるわよ。……蝙蝠が五月蠅くて迷惑だったわ」

「あら災難ですね。じゃー言われた通り寝まーす。おやすみですよ」

結局、情報収集で一日潰れたが、次の日に目的のものが始まるならそれでいい。眠りに落ちる少し前に、今日の出来事を思い出し、どうしようもない違和感に包まれながら、明日になるまで目を閉じた。

次の日。予定通りの事が起こった。城が出現し、鍵をかけたデュエルが行われ、敗者が人形になる。セブンスターズの1人、吸血鬼カミューラが仕掛けた鍵を掛けたデュエル。彼女にとっては、一族の復興を掛けたデュエル。

始まってすぐには手を出さなかった。皆が集まり焦る中、1人だけ冷静過ぎたかもしれない。あ的美奈さんですら焦った様子ぐらいは作っていたのに。そして、一瞬でもすぐに認識出来なくなったとしても城が建つなんて目立つ事があつたんだ。不思議パワーで一般人には見えないらしいが出てきた瞬間は見えたりしたのかな。ともかくそれで査問委員会の女性にも何があつたんだと聞かれた。部下が城を見たらしい。

「本当に、知らないんだな？」

「そーですよ。でも近づかない方が良いです。闇のゲームつてのは本当にあるので。命惜しくば。ですよ」

「……そうか」

クロノス先生のデュエルまで見収めた後。鍵を美奈さんから借りて、1人その城に乗り込む。招待する？ とかなんとかは無視だ。あちらの言われた通りにする意味は無い。正々堂々とデュエルを受ける意味はもつと無い。後からガヤガヤ言われようがこれが楽だ。あのカードの生贄も確保されないし。乗り込む前に精霊達とも話しておく。せつかく話せるし、協力者ならいくらでも欲しいし、何より頼みたい事がある。

「さてと。任せますよ」

何かあった時のための話し合いも終わって準備万端だ。誰にも見つからない内に、見つからない様に。その日の夜、自分は外に出た。カミューラが居る城に向かって。

一瞬で現れたとは思えない程の巨大な城。1人その城へ忍び込んだ。中に入つてすぐに目立つ様に翼を羽ばたかせた蝙蝠が真横を通る。忍び込んだのがバレた。その証として、目の前には誘導してくれる蝙蝠が目を光らせながら先を示すように飛んでいる。案内の通りに進むと大きな広間に。目の前には赤いドレスの貴婦人が、悪い笑みを浮かべてデュエルディスクを構えていた。

「1人で鍵を持ってノコノコと来たのが、こんなお嬢ちゃんだなんて。女に興味は無いのだけど。招待が来る前に、人の城に勝手に忍び込んでくる盗人まがいの無礼者なら尚更。死んでもおかしく無いわよ。貴方」

吸血鬼カミューラ。彼女の名前。セブンスターズの1人。

「初めましてカミューラさん。盗人をどうにかしてしまいう毘でもありそうだったので、鍵を持てれば、相手してくれるかなーと思ひまして」

「そうね、持てなかったら貴方なんて興味無いわ。そうね、血になれば興味が湧くかね」

「……へー。血を。吸血鬼みたいです」

「みたい？ もしかして馬鹿なの。あの無様なら男とのデュエルを見ての通りよ。私は、人々が恐れ、化け物と呼んだ吸血鬼そのもの。貴方の血なんて貰っても、大した足しにもならないけど」

「ほら、カミューラさん分身するじゃないですか。自分の知ってる吸血鬼は、影分身出来ないのて信じられないですね……」

血を吸って、力を貰う性質。おとぎ話に出てくる吸血鬼そのもの。そして、今アカデミアで噂の吸血鬼とデュエルをした者は氣を失う。これはやっぱカミューラさんが原因なのかな。他者から血を貰うようになった。その違い。それ自体の意味はさてお

き、違いが現れた事に意味がある。それは、自分の持つている知識が、いくつかは役に立たないものだろうと知らせてくれた。

「本当なら、予定外ですが。お相手下さい。鍵を掛けたデュエルです」

「予定外なのはこっちの方。けれど、勝手に鍵を落としてくれるなら良かったわ。それに貴方に興味は無いけれど、貴方に使い道はある。私の勝利を確実にする為にね。あのデュエルを見てもらった通り、勝者は次の道へ。敗者は人形に封じられる。けれど、貴方に限っては別の道もあつてよ」

「人質として、これ程便利なものは無い。ですか。幻魔の扉に使う贄とか。一族の復興には必要ですからね。いや、必要だから集めろと渡されただけで実際の所は分からないけど、それに縋るしかない。」と

すらすらと、思いついた言葉を話した後に、少し顔色を曇らせた。というつかり、口を滑らせてしまった。やばいもう、この芝居調が染み付いてしまっている。カミューラさんは見て分かるほどに顔を変え、こちらを睨んできた。

「お前。幻魔の扉の事を、一族の事を、何処で知った!」

声まで変わり、コチラを見るのはまさに化物。冷静に言葉を返す。

「どこでも。知りたいです?」

「いいわ。やっぱり貴方は、負けても人形にならずに済むわね。人形にしくなくても、その

小さな身体は人形遊びするのに丁度良さそう。人間から教わった様に、貴方達が一族や、同族にまでした様に！ 遊んであげるわ。仲良くなったらゼーンぶ。ハナシタクルワヨ」

これでもかと口を大きく開き、舌を伸ばすカミューラさん。あの目は冗談を言ってる目じゃない。

「……うつわ。誇り高き吸血鬼とつるんでいた人達のやつてた事？ 碌でもない頭イカれた上級階級の遊びとか嫌ですよ」

言われた台詞から思いつく、シンブルな遊びは簡単に浮かぶ。勝手なイメージだが、アニメや漫画で金持ちやその類いが、人を見てお人形遊び。なんて言ってたら大概酷いものだ。別の見方をすれば、遊びというのは人間達が吸血鬼にしてきた事。人間に教わったというのはやられた事。例えばそう、貼り付けや杭を打ち込む事。勝手な妄想だが考えることを早々に止めた。

「勇者気取りでここに來た事を後悔させてあげるわ！ 貴方にはそう、仲間だった者からも恨まれるような、美しいストーリーを用意してよ？」

「はいはい。遠慮しますつと。じゃあデツキを選びますか……」

「デツキが沢山あるのね。誇りを感じられない。こんな小娘の相手だなんて、本当に残念」

「誇り高き一族の事は分かりませんね……まあ、楽しいんですよ。色んなカードに触れるのが」

「楽しい？ 笑えもしない。今までの事を見て、その元凶の私と戦うのに、何も思わないの」

「怖いです。けどそれと楽しいは別。楽しまなくては遊びも本気も面白くない」

「……面白いなんて、ここまで馬鹿にされた気分は久しぶりよ人間」

「すいません、でも、絶対楽しむって決めたからですから。何があっても楽しく面白い事を考えたい。さあ、始めます。楽しみましょう、カミューラさん」

「……じゃあ、貴方を、恐怖と畏怖の表情で染めてやるわ！」

デュエル。と声が響いた。セブンスターズとの戦いは、静かに始まった。

「先攻は……お譲りします。レディーファースト。って事で」

「私のつ、タアーン！ 私はモンスターとカードをセットし、ターンエンド！」

叩き付けるようにカードを扱うその目の前で、ゆっくりと、カードを引いた。

「では、自分のターン。まずは手札抹殺！ お互いにカードを全て捨てて、同じ枚数ドローする！」

発動した瞬間。「最初からそんなカード？ お笑いね」と嘲笑する声と共に、「馬鹿な!？」と驚きが飛び出した様な声が聞こえた。気のせいかもしれない。「貴様ああ!!」と叫

ぶ幻聴を聞きながら手札を全て墓地に送る。あの鎧どんな時でも自己主張激しいのである。

「抹殺して、新たなカードをドロ―！ 新しいカード達こんにちわです」

「はっ。実に汚い人間らしい言葉。お前達はそうやって、他の種族を弄び、また新たな玩具を見つけたと他の種族を弄ぶ。でも、抹殺したと思っても、お前ら如きには消せないものもあるのよ！ 味わってもらうわ。私は墓地から、闇より出でし絶望の効果を発動！―」

墓地から溢れる闇は、そのまま起き上がった。暗い闇の中に光る目と、相手を握り潰すための手を作って。

「闇より出でし絶望は、相手の効果によって手札、デッキから墓地に送られた時フィールドに特殊召喚する！」

闇より出でし絶望 守備力3000

「……そんなカード居たな。しかも丁寧に守備表示とは」

「ヴァンパイアは不死の一族。死することは無い、死を超越した一族。その私に、墓地のカードを増やすようなカードを使うなんてね」

「不死なら一族滅亡しないですって。普通。おっと、悪意は無いですよ」

「お前っ……！！」

「まあ、倒したと思っても復活するのはまさにアンデット。アンデットと吸血鬼は厳密には違うかもしれませんが、人から見たら同じですかね。その不死性そのものが怖いですし、相手にするのは大変です」

死なない敵。それに対する恐怖が少なくともある。

「でも、アンデットを倒す側になってください。死んでるか分からない相手なら、それは死体が消えるのを確認するまで、女子供の見た目をしていようが関係無く、執拗に、徹底的にやらないと死んだかどうか分からない。ならそうするしかない。人は死ぬ。死なないものなんて恐怖以外の何者でもないですよ。だから、仕方ないです」

仕方ない。それはカミューラさんにとって、ヴァンパイア一族にとっても聞き逃せない言葉だっただろう。

「仕方ない?」

自分の予想を言ったただけだ。けれど、最後のヴァンパイア一族にとってその言葉は許し難い言葉で。抑えられていない怒りがこちらに叩きつけられるのは必然だ。

「だから、……そんな……そんな理由でお前達は私達を滅ぼしたのかあ!!」

放たれた力は軽々と地面をえぐった。その怒りは現実のものになるまでに強いらしい。デュエルが動いてない今ですらこれだ。きつとモンスターのダイレクトアタックは痛いなんてものじゃない。だけど、その為にずっと訓練はして来たのだ。

「さあ、ヴァンパイア一族と戦った、ごく一部の人間しか知りませんよそんな事。ただ、きつとそうだなという予想です」

「分かった、いや分かっていた！ 汚らしい人間め！」

「人間を一括りにしないでくれますか？ 人間みんな一緒なら平和な種族ですよ。つと、いつの間にやら人類と吸血鬼のお話になってますが、代理戦争でもしてましたっけ」
「ええそうね。これは私の、ヴァンパイア一族の復活を掛けたデュエル！」

「……はあ。これは人間でも間違う人が居るんですがね。死んだのって普通、帰ってきませんよ。死んだらどうなるかは、死んでからしか分かりません。案外死んでからも幸せかもしれないね」

死んだ事がある。それを認識しながら生きてるから、この言葉は当たり前という言葉のように言えるけど、カミューラさんは知らない。でも例え生き返っても叶わない事もある。それはずっと自分が考えない様にして来たことだ。そう、結局の所。戻れないんだろう。と。だから早々に諦めた。

「でもやつぱり、死んだら。どう思っても、きつと元の世界には帰ってきません。カミューラさんは良いように使われてるだけです。酷い嘘ですよ。そもそも、この鍵を掛けたデュエルに命をかける必要があるとか……そんな事をしなくても良い。乗せられて踊ってるだけ。」

仮に、カミューラさんが持ちかけられた話が本当だとしても、死者を復活させる術が、多くの死者を復活させる術がある者なら、カミューラさんに頼らない」

「黙れ！」

「必要が無い。あるにしても、もつと楽な方法があるんですよ。カミューラさん。貴方がデュエルする理由も、する事で得られる物も、無いんですよ」

「黙れええ!!」

瞳が赤く光り、それに合わせてフィールドの闇より出でし絶望の右手も動いた。触れたものを壊しながらこちらに向かってくる。それを見ながら、カードをディスクにセットし発動する。発動後に闇より出でし絶望の迫る手は、黒い拳に弾かれた。闇より出でし絶望を弾いた存在と、発動された魔法カードをカミューラさんが憎らしげに見つめ牙を剥く。

「死者蘇生。で、復活させましたのは邪帝ガイウスです。で、まだ自分のターンなのに攻撃出来るとは流石ですよ。防げるかも不安でしたが……」

邪帝ガイウス 攻撃力2400

「くそつ、くそお！ 都合よく死者蘇生？ 私の攻撃を弾いた？ ……忌々しい！ よりによつて今！ そんなカードで……あああ!!」

「ふふつ。抹殺からの死者蘇生つてのは定番コンボです。ゲームですから。で、その反

応見るに、本当に藁にも縋る。って感じですか。死者蘇生に縋るって感じですか」

「黙れと言っている！ 信じない！ 私は、お前も！」

「……分かつてるじゃないですか。自分に信じないって言う前に、信じない。と言うべきものがあるのでは？ 貴方に復活の道を示したのも、人でしょう」

カミューラさんは叫び、闇より出でし絶望が反応する。もはや制御しているかも怪しい攻撃が繰り出され、それをガイウスがすべて打ち払う。

「……やっぱ真剣に考えるべきじゃないですね。知らない感じでデュエルすれば良かったです。ガイウスさん大変です？」

『速く攻撃と言え。黙らせんと面倒だ。貴様がその気なら一撃ぐらいは通しても構わんのだぞ？』と有難い言葉を頂いたので素早く動く事に。

「はいはい。速くします。バトルフェイズ。セットモンスターにガイウスで攻撃」

攻撃宣言と共に、ガイウスさんが右手に力を込める。右手には黒いエネルギーが、その周囲の景色を歪めながら圧縮される。

それをまさかのセットモンスターの先に居るカミューラさんに向かって放った。放たれた瞬間に、カミューラさんは意識を戻す。目の前に迫る、空間すら歪めるそれが自らを目掛けていることを察知したらしい。デイスクセットモンスターを表に返しながら、今いる場所の後ろに3歩ほどの場所まで飛び退く。

「セツトモンスターはピラミッド・タートル!」

守るようにそびえ立つピラミッドは放たれた球体に触れた時、弾ける球体と共に木っ端微塵に弾け飛んだ。

「ピラミッド・タートル撃破。すいませんカミューラさん脱線してしまつて。まあお互い落ち着いた所ですし、ゲームしましょうよ。デュエルを始めたんですし、鍵はデュエルでしか奪えないんでしょう?」

「私には、お前を殺してから別の鍵を守る守護者が現れるまで待つ選択肢がある!」

……だが、それがいる限りは手こずりそうね」

ガイウスさんに視線を移しながらそう言った。

「デュエルの方がまだマシ。掻き回されて滅茶苦茶な気分。だけど……お前が長く喋りすぎた。長々と話を続け、時間をくれたお陰で、私は冷静にデュエルが出来る。そう、私の勝つ未来が見えたデュエルがね! ピラミッド・タートルの効果!」

弾けたピラミッド・タートルの欠片を払い、眠りについていた者は蘇える。

「デツキから目覚めよ! ヴアンパイア・ロード!」

整った顔立ちをした男。その青白い肌は死人のようで、その肌と牙が人ではない事を表している。

ヴアンパイア・ロード 攻撃力2000

「ヴァンパイア一族の力を、思い知らせてやるわよ」

「……カミューラさんのはシンプルに力ですからね。カードを2枚伏せて終了」

「私の番よ！ 私は、闇より出でし絶望を攻撃表示に変更！」

闇より出でし絶望 攻撃力2800

「そして、フィールドのヴァンパイア・ロードをゲームから除外し、手札のヴァンパイア・ジェネシスを特殊召喚する！」

人型のヴァンパイアは、その身体を何倍もの大きさにした化物に姿を変えた。

ヴァンパイア・ジェネシス 攻撃力3000

「更に！ 私は、魔法カード。幻魔の扉を発動！」

「……まじか」

ヴァンパイア達の後ろで、開かれた扉。禁断の力。カードの精霊、の一種なんだろうけど。

「相手のモンスターをすべて破壊。そして、このデュエルで1度でも場に現れたモンスターを私のモンスターとしてフィールドに呼び戻す。さっき私の事を邪魔した、貴方の切り札を復活させて上げるわ！」

「切り札って言ったかな……」

「調べれば分かるのよ。私には可愛い下僕が居る」

「……ほう。で、今回使ってる自分のデッキ見て、対策できました?」

「する必要は無い。そんな寄せ集めのデッキなんてね!」

「あはは……まー。対策するより自分の戦術を押し付けた方が強い。で、幻魔の扉が発動されたって事は、うーん……一度は場に出たヴァンパイア・ロードを復活というのは?」

「さあ現れる、邪帝ガイウス!」

消され、再び扉の力で場に現れた帝は、主人に向かって容赦無く攻撃する、カミューラさんの下僕となって。

「ギャハハ! 貴方の切り札も、私の……」

大きく口を開いて笑うカミューラさん。その声に重なるのは小さく、クスクスと笑う声。次第にその声は大きくなりカミューラさんの笑い声をかき消した。笑いが止まらない。

「あははっ! 最高ですよガイウスさん!」

向こうの人は何が起こったか分からない。そんな顔をしている。

「敵にすると恐ろしさ100倍です。その厳しい鎧は敵を威圧するのにピッタリだ」

「(奪われた者がする顔は、もつと悲惨で、もつと鬱々しく、暗い物の筈だ。かつての自分が、一族を奪われた時の様に。なのに)……なんだ、お前は。恐ろしくないのか!」

私が、幻魔の扉が！ 恨めしくないのか！ 目の前に立つ自らの仲間だったモンスターが！」

「恨めしいではありませんが、それはそれ。それよりも。幻魔の扉発動したんですよ？ 魂は自分のを賭けるんですか」

そう。幻魔の扉は発動のリスクとして、使用者が敗北した時、魂を捧げなければならぬ。とんだカードの精霊である。命よこせとは。どこぞのサイコなシヨツカーですら後も強引に奪いはしないだろう。この場には2人のみ。カミューラさんが捧げられる魂は一つだけだ。何もかもが上手いかず苛立っていたカミューラさんは勢いに任せてこのカードを発動した。

このまま慌てると思っていたけど、カミューラさんはニヤリと笑みを浮かべ笑いを堪えながら、こちらの質問に答えた。

「んふふっ……いいえ。今思い付いた。もう1人、私以外にも賭けられる魂が有る」

もう1人？ 誰だ？ この場には外野は1人も居ない。

と思っただけ、思いついてしまった。1番にその可能性を。焦りの表情から汗が流れ出す程に危険な可能性。それできるなら最初からやれと思う可能性。だけど……

「あ、それ待っ……」

「貴方の魂よ！」

幻魔の扉は開かれた。扉から飛び出す何かが生贄を探して宙を漂う。

「私もやるのは初めて！ けれど、出来ない決まりもない。幻魔の扉でお前の魂を捧げる事が出来れば、勝利したその瞬間。お前の魂は幻魔に奪われる！ お前は勝つ事が出来なくなる！ 負けたら当然、人形になってもらう！」

カミューラの言葉によつて幻魔の力は手の形を作ると、こちらに襲いかかる。掴まれたら、やばい。

「幻魔の扉が貴方を生贄と認めたようね！ さあ、始めましょう。闇のゲームを！」

その手が直前まで迫る。それ出来るのか……最悪ですよ全く。これできるなら無理だな。素直に諦める。幻魔の力が目と鼻の先に来て。

その瞬間に。起こった小さな爆発に巻き込まれ後方へ飛ばされた。

「うおっ！」

急に身体吹っ飛ばされたら驚くに決まつてる。倒れ込んだ身体を焦りながら起こす。迫っていた幻魔の力を探すが、見当たらない。代わりに、フィールドを睨みつけるカミューラさんが見えた。

「……こ、こんな事があつてたまるかあ！」

カミューラさんが睨むのは、自らが奪つた邪帝ガイウス。それは視線など気にせず高らかに笑い、笑い声をあげたと思えば次には指をパチンと鳴らす。その瞬間に広がる闇

は自分達を巻き込み、その空間を包んだ。後ろで開いた幻魔の扉を入れずに。

「何が起こっている……お前のカードか！ お前のカードが、たかが1枚のカードが幻魔の力を弾いたというのか！」

「……知らないけど。まあ、ガイウス……かなあ」

確かに幻魔の扉もカードの精霊の力なら、同じ精霊でも防げない事はないとは思いうけど、本当流石に威張りちらしてるだけはあるって凄いいっぱい。

「幻魔の扉が誰を生贄にするかは保留。なんですかね？ カミューラさん、どういう事です？」

「私に聞くな！」

カミューラさん今の現状に焦っていた。魂の生贄を相手プレイヤーにする、幻魔の扉が生贄を決定出来ずに発動した等々、イレギュラーが連発して処理しきれて無い様だ。

現状。幻魔の扉が見えずとも、カードの効果は既に適応されている。幻魔の扉としても最終的に魂が貰えれば良いという事を表しているかのように。

「使用者も知らぬと……」

「こうなったら、デュエルに勝ってしまうのが手っ取り早い。行け、ヴァンパイア・ジェネシスッ！」

待つ気は無いと、ヴァンパイア・ジェネシスからの攻撃。

「ならば、手札からバトルフェーダーの効果を使用。直接攻撃を無効にしバトルフェイズを終わらせる」

ヴァンパイア・ジエネシスはフィールド全体に響いた鐘の音で怯み動けない。鐘を鳴らした悪魔は汚らしく笑った。

「くっ、小賢しい！」

「よく言われます。と、ついでにフィールドに特殊召喚されます」

バトルフェーダー 攻撃力0

「生け贄を残してしまったか……カードを伏せて、ターンエンドよ」

「生憎、生贄を捧げる人はそちに居るんですね。なので、ドロロー！ まずは、強欲で貪欲な壺！ デツキトップを10枚裏側で除外して2枚ドロロー！ そして、魔法カード、強制転移！」

発動されたカードの効果を知っているだろうカミユラさんは、むしろ良かったと笑みを浮かべる。

「強制転移？ 互いのプレイヤーが自身のモンスターを選び、そのコントロールを入れ替えるカードね」

「いえす。こちらはこの、バトルフェーダーを差し上げます。で、こちらは？」

「当然、邪帝ガイウス！」

鐘の悪魔と邪帝が入れ替わる。明らかに釣り合っていない交換だが互いに満足そうなのでウインウインだ。

「お帰りなさいませ」

帰ってきた人からは遅いと文句の声が聞こえる。ほんとコイツ凄いや奴。

「早い方かと。わざわざ相手の切り札じゃない方取りに行っただけですかね？」 感謝してほしいです」

自分の言葉に、『本音はどうだ』と見透かした声が。ええそうですよ。そうですとも。「ガイウスさんフィールドから居なくなると多分この空間解除されてまた幻魔に襲われそうだって。致し方なしでお守りしたい」

取り敢えずガイウスさんを取り戻した。けど、勝利条件が追加されたっぽいんですよね。ガイウスさんが居なくなれば幻魔の生贄にされ、そうなれば勝った瞬間に幻魔の物になってしまう。

「これで、その邪魔なカードを私の手で葬る事が出来る！ それさえ居なければ幻魔もきつと、貴方を生贄にする筈よ！」

「分かりませんよ。幻魔はもしかして、弱っている方を生け贄にするかもしれないです。例えば……自分がそっちのヴァンパイア・ジェネシスを破壊できれば、カミユールさんが生け贄になるかも？」

「お笑いね。そんな根拠の無い仮説を言っても意味が無い……まあそれ以前の話よ。ヴァンパイア一族である私の、最強の下僕たるヴァンパイア・ジエネスをお前如きが倒せる訳が無い！」

ヴァンパイア・ジエネスは雄叫びを上げる。地面さえも恐れを表す様に震える。ここに今。最強の吸血鬼が居ると存在を見せつけた。

「最強の下僕ですか。こっちは下僕どころか自分より最強の奴が居るんですよ！ それこそ、全員自分より下とか言ってる化け物が！ 誰かの下僕が、誰かを従える帝には勝てないです」

「ギャハハ。ならお前はそのモンスターの下僕とでも言うのか？」

「多分そういうことになってます。まあ、下僕1人ぐらいは余裕で守ってくれると思いますよ。少なくとも、誰かの手下に負ける事は無い。と信じてます。あ、カミューラさんも雇われ主の手下みたいになってますよね」

「……ふつ、ふふつ。余計な一言が無いと生きていけないよねお前は。なら、その生きがいも奪ってあげる。口を縫い合わせて上げないとね!! 1本1本、私が丁寧に針を通してね!!」

「おお怖い。ならば、縫い合わされない為に全力を尽くすほか無し。バトル。邪帝ガイウスでバトルフェーダーに攻撃」

攻撃で鐘の悪魔が弾け飛ぶ。その残骸は周囲を漂うが、次第にそれが黒く、広く自分のフィールドに集まってきた。グズグズに破れた破片は変色していく。

「……これは、罠か」

「そのとおり！ 私はお前の攻撃に合わせて、このカードでウイルスを感染させていた。死のデツキ破壊ウイルスをね！」

「死デツキ!？」

「そう、このウイルスは攻撃力1500以上のモンスターを破壊する！ 当然、そのカードも……」

「遠慮しますとも！ セットされた速攻魔法、禁じられた聖槍は対象モンスターの攻撃を800ポイントダウンする。当然ガイウスを弱体化！ ついでに魔法、罠の効果を受けなくなります。これによりウイルスの効果回避」

ガイウスさんの右腕に槍が突き刺さる。これによってウイルスからは守られたが、当然怒りながら刺さった槍を、左手で握り碎いた。

「だが手札のカードは逃げられない！ さあ見せなさいその手札を」

「残念ながら、手札はゴブリンのやりくり上手とサイクロンのみ。魔法と罠です。さて、本題はここから。死のデツキ破壊ウイルスにより3枚。攻撃力1500以上のモンスターをデツキから破壊します。カミューラさんなら分かると思いますが、有効活用させ

てもらいますよ」

「……ちい」

「自分が選ぶのは、シャドル・ビースト、ゼータ・レティキュラント、マスマティシャンの3枚！ ビーストは効果が発動します。それによりカードを1枚ドロウする！」

死デッキは強力だけど、デッキ破壊はむしろ、相手にとつてのメリットではない。

「くっ。おのれえ……」

「カードを2枚伏せてターン終了」

「私のターン！ けど、貴方のモンスターは私のモンスターに勝てない！ バトルよ、ヴァンパイア・ジェネシスで邪帝ガイウスを攻撃！ ヘルヴィシヤス・ブラッド!!」

ヴァンパイア・ジェネシスはその巨大な身体を霧に変化させ、ガイウスに襲い掛かる。さあ守らなければ死ぬぞこれ。

「その瞬間……罨カード、ゴブリンのやりくり上手！ サイクロン！」

「はっ。どちらも戦闘に関係ないカード。それに私のフィールドに魔法罨は無くてよー！」

「知ってますよ！ サイクロンで破壊するのは、ゴブリンのやりくり上手！」

本来ならば敵を破壊する竜巻は自らのフィールドに存在するカードを巻き込み消し飛ばす。

「ゴブリンのやりくり上手は墓地にあるゴブリンのやりくり上手の数＋1枚のカードをドロ―して、1枚をデッキに戻す。破壊されてもゴブリンのやりくり上手は効果を発揮します。墓地に存在するゴブリンのやりくり上手は1枚。よってカードを2枚ドロ―して1枚戻す」

「だからどうした！ ヴァンパイア・ジエネシスの攻撃は止まらない！」

「破壊される瞬間に、墓地のサクリボーは効果を発動する。モンスターが戦闘で破壊される代わりに墓地のこのカードを除外する！」

攻撃に割って入るサクリボー。霧はサクリボーを包み込み切り裂いた。破壊し、その霧が巨大な化け物へ姿を戻した時、真に破壊すべき対象が残っていることを知り、怒りを顕にする。

「ダメージは、ウイルスによって防がれます」

「ダメージは無くとも、モンスターの破壊は1度は防いでも2度目はない！ 闇より出でし絶望で邪帝ガイウスを攻撃！」

絶望の一撃に、ガイウスは飲み込まれて破壊される。完全に破壊を確認したカミュ―は高らかに笑った。

「ギャハハ！ 邪帝ガイウス、撃破！ これで私の勝利は揺るぎない！」

「あー。で、バトルフェイズは終わりですか？」

「…………くつ。何を呑気に」

「終わったみたいですね。では、華麗なる脱出ショーは成功です!」
「なに?」

破壊されたその場所から、光る物体。場に出て輝く白いクリボーが鳴き声を上げると、次の瞬間にはガイウスが、魔法の様にその場に現れた。

「……馬鹿な! 破壊したはず!」

「クリボーンは、バトルフェイズ終了時に手札から捨てると、このバトルで破壊されたモンスター1体を復活させる事が出来ます。運良くガイウス残せて良かった良かった。いや、一度離れたら終わりかと思っただけですぐ復活させれば間に合うみたいですね」

「またしても……おのれ人間! カードを1枚伏せ、ターンを終わる!」

「では、自分のターン!」

ドローしたカードを見た。2枚目のサイクロン。

「サイクロン発動。セツトカードは?」

破壊された魔法の筒。よし。

セツトされたカードを見て、大きく目を見開く。これは、今日このデュエルの為だけに入れた。そんなカード。大きく深呼吸。宛が外れたら、いや……決めた。今しか無いんだ。セツトした罫カードを発動。そのカードを見たカミューラさんは、声にならない

悲鳴を上げている。

「なっ、なっ！　そ、そんなカード」

「さっき入れたんですよ。罠カード。墓荒らし。その効果を発動します」

小人がカミューラさんの墓地に入り込み、1枚のカードを奪って手渡す。使用者すら恐れる1枚を。

「加えるのは、幻魔の扉。このカードで手札に加えたカードを使用すると、2000のライフを失いますが、それでも充分すぎるカードです」

相手のモンスターをすべて破壊し、フィールドに1度でも存在したモンスターを無条件に特殊召喚する最強のカード。だがそのリスクは大きい。その代償は使用者の魂を生贄に捧げる事。

「まっ、待ちなさい！　考えるのよ！」

カミューラさんの口から咄嗟に言葉が出た。命の危機を感じたからだろう。

「それを発動すれば、お前の魂は確実に幻魔の物になるのよ!」

「ええ、でもカミューラさんの魂も幻魔の物ですね」

「それで、それで勝つても……生き残れない！　意味が無い！　か、考え直すべきよ！」
「そうですね。でも仲良く一緒になら最低限の仕事はした事になりますし、良いかなって」

「ま、待って！……そ、そうよ！ 私なら！」

「では、魔法カード。幻魔の扉を発動します」

発動と同時に、周囲の闇はかき消された。カミューラさんの後方にあつたはずの幻魔の扉は、自分の後ろで開かれる。その瞬間に、互いが感じただろう。自らの心臓を握られた様な、吐き気を伴う感覚を。

「2000のコスト……もそうだけど、痛いなこれ……」

自分 LP2000

「……あ、ああああ!!」

カミューラさんは、叫びながら地面に伏せた。終わりを感じたのだろう。誰も救われない未来を見たんだろう。

「幻魔の扉より、ヴァンパイア・ジェネシスを特殊召喚」

自分よフィールドに並ぶ2体目のモンスターが幻魔の扉によって現れる。最強のヴァンパイアモンスター。ヴァンパイア・ジェネシスが。

「さてと。カミューラさん、まだデュエルは終わってないですよ？」

「……終わった、終わったんだよ人間」

張り上げる声も、力無く。虚ろな目で言う。

「どちらが勝っても、幻魔の扉で互いの魂は幻魔の物……このデュエルに勝者なんて居

ない」

「引き分けに……するのも難しそうですし。仕方ないですね。じゃあ、諦めますか。バトル。ヴァンパイア・ジェネシスとガイウスでダイレクトアタック」

2つの化け物はトドメを刺した。呆気なくライフは0になり、デュエルは終わる。ただその場に残るヴァンパイア・ジェネシスとガイウスだけは、未だ消えずにその場に居た。それも少し経てば消えるだろう。

「所詮、人間が渡した力なんですよ。それで一族をどうしようとしたのが、そもそもの間違いです。カミューラさんも、馬鹿ですね」

デュエルに勝利して、明らかな悪意を込めて、笑った。あざ笑った。侮辱した。

「滑稽かな？ バケモノと言えども、餌をちらつかせれば思い通りに動く、仮に失敗しても勝手に処理できる。なんて優秀なコマなんでしょうか！ ……人間様は笑いが止まりませんよ。所詮ヴァンパイア一族と言えども、蝙蝠に毛が生えたような生き物で、人とは程遠い」

そしてカミューラを、いや一族全てを侮辱する言葉を投げつけた。後ろで開かれる門を見ながら。

「ヴァンパイア一族の為に？ この程度ですか。ヴァンパイア一族は。ヴァンパイア一族の受けた憎しみは、怒りは」

「……………るな」

「拍子抜けだな。そうしてまた、ヴァンパイア一族は人の手によって負け……」

「ふざけるなあ!!」

カミューラは、立ち上がった。その身体から湧き出す力を全て解放して。溢れ出す黒いなかには一族の怨み。カミューラと共にヴァンパイア・ジェネシスもまた、その力を解放し、自分と、幻魔の扉に向けてそれを放った。

「ふざけるなよニンゲン!! 私、私達は、誇り高い一族!! 受けた怨みはこの地を黒く染め上げる!!」

「あははは!! そうですかそうですか。でもどうしますヴァンパイアさん? 貴方はここで終わり。人から渡された、その幻魔の力に頼ったばかりに。人からすれば面白い。化物同士が勝手に潰しあってるんですから」

「お前らの、思い通りになってたまるかああ!!」

「力を放出する気ですか。流石ヴァンパイア。けどその程度じゃ壊れない。幻魔の扉は絶対だと、知っているでしょう? ほら、それを壊さなきゃ、人間に触れもしない。籠の中の小鳥さんです。自分で入った籠から出ようとするのは滑稽ですよ」

「ダメレ!! 私の、私達の力が、に、ニンゲン風情に……負けない、負けない、壊してやる!! コロス……コロスコロスコロス!!」

膨れ上がった力による抵抗、幻魔の扉は未だに魂を掴めない。それどころか、掴むはずの力を前に出せない。扉の中に入り込まれていくのは魂ではなく、憎しみ怨み殺意。留まることのない意志。——だと自分の隣に居る帝は言った。意志の力は時空を歪めるほど強い。怨みとなれば尚更だと。

「コワレ……口、ぜんぶ、ゼンブ!!」

最早言葉は届かないだろう。全てを壊す事に、生き残る事に、使う。今までは考えもしなかっただろう。幻魔の力に抗う事など。だが、それをしなければ一族の復活は夢のまた夢。復讐なんて永遠に達成できない。死ぬ訳には行かない。ましてや、人間の思い通りに動いて再びヴァンパイアが滅ぼされるなどあつてはならない事だから。

もう話せなくなつた相手に向けてでは無く、話せる相手へ。

「任せましたよ」

それを聞いたガイウスさんは頷き、幻魔の扉へ向かった。触れば壊れてしまいそうな怨みの中を平然と歩きながら。何も見えない中で、姿が変わるのを見た。見るだけで気が触れてしまうような瘴気を、抑えられない力を使う邪帝の姿を。

その中でどんな動きがあつたのかは分からない。だが、幻魔の扉はヒビ割れ、粉々に砕け散つた。その場に流れていた力は全て消失し、最後には気を失つたカミューラさんと、2枚のカードが落ちていた。その力を失つたのか、白紙になつたカードと邪帝ガイ

ウスのカード。

「完了。ですか。無理させましたね。ほんとに」

□□□□□□□□

耳障りな声が響く。意識を取り戻すとそこには憎き人間が居た。

「おはようです。気分はどうですか」

「……私は、生きて、げ、幻魔の扉は！」

「アンティールールに則り自分が貰いました。なんて言ってみたり。まあ、自分の勝ちです。大人しく鍵を渡すべし。ですよ？ それ以前に、言いたい事が有りそうですね。幻魔の扉が消えた事にはノータツチです。今は生きていることを喜びましょう。実際、助けるのが上手くいくかは分からなかったんですがね」

「……助けた？」

「おっと、失礼。助けたっていうか……まあ、気にしない気にしない」

助けるなんて言葉は聞き捨てならない。コイツは私を、私達一族全てを侮辱した。それだけじゃない。デュエリストとしても。勝負を捨てたんだ。どちらかが勝利する訳でもない。どちらも終わる決着を望んだ奴だ。

「何故だ！ 何故……何故、幻魔の扉を使った！ あれだけこの力から逃げたのに、私から、奪い取ってまで！ そうやってもお前が得るものなんて無かった！」

「てつきりまた人間許さんって攻撃されるかと思ったら、その話？ 確かに。恐れて逃げたけど、やっぱり勝つ為には必要だと思つて、墓荒らしまでして、命削つて、手に入れた力を使つたら死ぬなんてオチですからね。全くこんなのに頼ろうとしたのが間違いでした。やる前は、これしか無い。つて思つたんですけどね。結局、無理な願いは無理なものなんですよ。ましてや、知らない人の、コントロール出来ない力なんて頼るべきじゃなかった」

静かに言つた。冷めた口調で。

その時に気がついた。震えている身体に。まるで怯えた小動物の様な姿に。けれど、そんな中でもその目が真つ直ぐにコチラを見つめている事に。その目はなにかを訴えている様だった。なにか硬い意志があつた。

「はは、そうか。そうか……人間、お前は」

ヴァンパイア一族を思つた私が、ヴァンパイア一族の為に動く筈の私が、なによりも信用してはいけなさと経験したはずの人に。自らを生贄に欲する化物に。頼ろうとした。そんな自らが、何よりも愚かだった。そんな後悔は、今更だ。何よりも憎んだはずの人間にそれを気付かされた。

「最初から、何か言っても聞く耳持たないと思って。デュエルしましたとも。まあ墓荒らしてまでやったのは人間の方で、結局カミューラさんも人間さんも救われないです」

「……馬鹿だな。私を倒せば、それだけで、少なくともお前は救われた」

「ですね。でも納得いかなかったんですよ」

「……何の話だ？」

「例えば、仮にそう、未来を知っている人が居たとして、カミューラさんが死ぬ未来が見えていたとして、何故死んだのか。納得いかなかったんです。このデュエルに命をかける価値は無い。じゃあなんで、カミューラさんは消えるのかって」

「お前は、未来が分かるというのか。そんな話を信じろと。それを信じた上で、私を……助けたと？」

「信じなくても結構ですよ。確かにヴァンパイア一族は人にとって滅ぼすべき……なのかも知れませんがね。自分は、目の前で人が死ぬのは見たくない。ヴァンパイアだろうと自分の中なら人です。本来なら、幻魔の扉に魂奪われて、身体は砂みたいになっただけですからね。後味悪いし、気味悪いし。別に、カミューラさんじゃなくても助けましたよ。自分の為です。助かっておいってくださいな」

初めてだ。人間から助けられた事は。なんだコイツは、こいつは、人間なのか？ 少なくとも普通では無い。なにか……

「人間に、助けられるか……」

「嫌ですか？ まあ珍しくも無いと思いますけどね。カミューラさんって、綺麗ですし。ちよちよっとすれば男なんてコロコロ手のひらで転がせるんじゃないですか？

そうじゃなくても、意外と優しい人は居ますよ。そりゃ、人間不信になったら嫌な思い出で満たされて、人間なんてみんな腹黒だ！なんて思いますが……カミューラさんにも居たんじゃありませんか。優しくしてくれた人」

その言葉で思い出す。滅ぶ一族を見ながら逃げ惑ったあの日々。全てを呪ったその日に。一人の人間から私は……

「人間は結構、人それぞれ違うのです。カミューラさんの一族じゃなくても、人間って、同じ中に優秀な人が居たらそれを責めたり、中にはその血を滅ぼすぞなんて感じて殺したりしますし。ヴァンパイアじゃなくても、人間でも人間を恨む人も少なくない。だからですよ。ヴァンパイアが化物だからってよりは、その、なんというか。優秀だから……いや、あんまり楽しくない話はしない方が良いな……」

「……話が長い人は嫌いよ」

「ま、まあ。つまりアレです。良い人も居るんだよって事です。悪い人の記憶が目立つちやうかも知れませんが。自分みたいに、少し変な人も居ますけど」

不思議な奴だ。全く理解ができない。なんだか真剣な雰囲気を漂わせていたのがア

ホらしく感じて。

「負けだ。鍵は持つていくがいい。私には必要無い。鍵も、人形も……あの男も、人形にしていた奴らは全員……」

「おっと。それについては、お話がありますよ」

「……話？」

「ええ、まあまあ。悪い話じゃありません。カミューラさん。デュエルって、結構面白いもので、今回もそれがあつたからギリギリ、自分でもカミューラさん助けられました。いや、助けたというか……カミューラさんが自分で幻魔の力に刃向かつてぶっ壊してくれました。流石ヴァンパイア一族。やっぱり力があるんですね」

「……」

「ほら、カミューラさんって。デュエルそんなに楽しくなさそうにしてる割にはデツキの切り札には自信があつたり、するじゃないですか。トラウマあるのは分かりますが、辞めるのもつたいたないなど。きつと絶対。楽しんでやればもつと強い、はず。そこでお願いがあるんですよ」

人間はそう言うカードを取り出し、話を始めた。



城は以前として崩れる事は無く、陸地まで伸びるレットカーペットの上を歩き地面がある場所まで戻って来れた。戻ったと同時に、1枚のカードを取り出す。邪帝ガイウスのカードを見て、話しかけるも返事は無い。

「……ま、賭けでしたからね。お疲れです」

城へ乗り込む前の事、その話をした時のことを思い出した。

「えっ、本当に幻魔の扉って、壊せるんですか？」

『当たり前だ。その必要は微塵もないがな』

幻魔の扉を壊せるかどうかと言う質問に、まさかの答えが帰って来た。

『……貴様も分からんのか。言ってみるがいい。幻魔の力とは、なんだ』

「……な、なんかの、精霊とか？」

『そうだ。貴様らが魔物等と呼び、カードに形を封じられた者達の力だ。同じ力を持つ者同士、どうにも出来ぬと言う事は無い。だが無理に破壊するとなれば、それ相応の力が居る』

同じ魔物。故にその力を弾く事が出来ても不思議では無い。その理屈はかなり無理があるとは思ったが、そういうものらしい。

「ガイウスさんは、破壊出来るんですか？」

『誰に向かって言っている？』

「……へえ。じゃあですよ？」

『その続きは言わずとも、そういう事を言った時点で察した。どういう考えかは知らぬが、意味が無い。素直に倒せばよろう』

「だって、そうすると死んじやいますしカミューラさん」

『……馬鹿か貴様は。敵に情けでもかける気か』

「いやいや、情けとかじゃなくて。単純に死ぬのは見たくないからですよ。だから助けるんです」

『……何が、言いたい？』

「自分が。嫌だから。助けたい」

『忠告するぞ。軽い気持ちで、ああいう輩に関わるな。相手の為でもある』

「軽くても重くても変わりませんよ。それじゃダメなんですか。大義でもなければ助けては行けないと？ それに、別に相手の為じゃないです」

『……』

「自分が嫌だから。結果相手を助ける。ですよ」

『ふざけているなら、笑えんが』

「ふざけてないでございますよ。じゃあ相手の為って言えば、力を貸しますか？ カミューラさんに同情したとか、気持ちが悪いほど分かる。なんて言えと？ はつきり言つて分かる訳がありません。それは、一番相手が思つてゐる。自分が今思えるのは、どう頑張つても可哀想だな。って言うぐらいです。相手は関係無い。自分が助けたいから助けます。勝手に自分が決めた事。だから責任も自分が取るし、自分がしたいから頼れる人に頼ります。少なくとも、後から助けて誰かのせいになんて絶対にしない。勿論、ガイウスさんにも意思がある。断られたら、素直に倒します。どうですか」

それを全て聞いた後、ガイウスさんは少し体を震わせた。

『貴様如き弱小者が、口だけは達者だな。出来もしない責任を取るだの、自分が決めた事だの……だが』

悪く無い。そう言った。

『ああいう輩は、下手に同情されるのが一番頭にくる。そも、ああいう外された者達は、他者を信用しない。出来ぬのだ』

口ぶりに、何か知つてゐるみたいですねと表示で表すと、当然知つてゐると答えが返つてきた。

『闇。になつてゐるだけだ。知らぬものから見れば、闇だろう。そう言わざる負えない力。現に私の力は何よりも憎んだ物に近づいてしまった。それを殺す為にな。私は力

がある。この世界に居る帝達もまた、持つ者に力を与えていただく』

「あ、確かにいました！ 氷帝持つてる人なんてそこら辺一体を雪景色に変えていたよ
うな」

『そういう様に私の力は使えぬ。私の力は、コントロール出来ぬ限り、害にしかならぬ。
使えば周囲は荒れる。物理、精神両方がな。だというに、コントロールするために力を
消費する役目の貴様が軟弱と来た』

「……す、すいません。それはどうにも」

『まあいい。貴様の代わりに居る。あの幻魔を打ち破る程の力を持つている奴がな。そ
れを使う。当然貴様からも使う。それでもあれば一時的に封印までが限度やもしれぬ』

「……代わり？」

『……察しが悪いな貴様は。私の力は怨み。憎しみ。絶望。怒り。四帝が操るものとは
全く別の物、感情だ。一族を背負っているのだろう、その怨みを持つていと言つてい
るのだろう。本当なら、私が纏めて幻魔にぶつければ良い』

「カミューラさん……を、もしかして、その感情つて引き出さないとダメ？」

『当たり前だ。無理に使うのだからな。普段は思い出したくもない物を思い出させるの
は……それは貴様に任せる。そういう事だけは得意であろう？』

「こんな優しい人捕まえてそんな事言うなんて……まあ、はいはい。分かりました。失

敗した時……いや、それは無いですね。さてと。任せますよ」

□□□□□□□□

「結局、ガイウスさんの事は半分意味不明でした。適当に合わせましたが……上手くいつて良かった。でも、結局あの力は、いや、分からない方が、良いか」

結果は丸く収まったのだから。それで良い。ただ暫くはガイウスさんは休まなければならぬだろう。

取り敢えず、無事で良かったと背伸びして帰ろうかなと視線を前に移すと、自然と目の前に居る人物と目が合った。教師の制服を着けた女性は、こちらに気が付くと少し怒りながら「こんな時間に出歩いて」と注意してきた。

「どういう事？ こんな時間に、全く……立派な規則違反よ貴方」

「……い、いや、す、すいません先生」

「危ない噂もあって、皆気がたつてるんだから。今回だけは多めに見るから速く寮に帰りなさい」

まさか先生が居るとは。適当に誤魔化そうと思っていたが勝手にどうにかなった。ラッキーだと帰ろうとした癒影だが、ふと足が止まる。

「……先生？」

「なに、どうしたの」

「先生は、何でこんな時間に？」

「聞いてなかったの。危ないから見回りよ見回り」

「やだな先生。見回りなら黒服グラサンの外から雇われた連中がしてるじゃないですか。しかも、危ないなら女性に見回りなんてさせませんよ周りが」

「人が足りなかったのよ」

「……デュエルディスクは、次は誰とデュエルする予定で？」

「先生が付けていたディスクを指さした。デッキが差し込まれている。つい先程までデュエルでもしていたかのように。」

「見回りって、どういう意味です？」

「……はあ」

先生と言われていた人物が、その演技をやめた。

第14話 最悪な予感

鍵を預けてから次の日。アイツは私に不思議な話を報告しに来た。

「十代さん達はお願ひします。自分は鍵持つてませんし。カミューラさんは多分デュエルしてくれません」

「……それよ。貴方、なんでカミューラは消えてないの?」

「仕留め損なったか……」

「……本気? 馬鹿じゃないの!」

「仕方ないですって」

「どうするつもりよ!?! じゃあ、今日……」

「カイザーさんか、十代君と、デュエル。まあまあ、安心して下さい。十代君には既に、吹雪さんから闇のアイテムが渡されています。何故か。だからきつとセーフ」

「ちよつと、ふざけないで!」

「自分はやるがありますので、では!」

聞く耳持たず。早々に走り去る。そんなアイツに、頭を抱えながらため息。深いため息を。

「……失敗したのね。全く」

失敗した人へ、呆れながら。

その日の夜、城へ招待された十代達はセブンススターズの1人、ヴァンパイアカミューラとのデュエルを行う事に。カミューラを見て怒りに震えるカイザーに、クスクスとカミューラは、子供を見るような目で笑っていた。

「なにが可笑しい!」

「……いいえ。何でもないわ。私にもそういう時期があつて、思い出ただけ。さあ、デュエルをしましょう。勝者は次の道へ、敗者は人形に」

そしてデュエルが始まった。カミューラはモンスターが1枚に、セットカードが2枚。対するカイザーは……

「俺のターン! 手札からパワーボンドを発動機! 3体のサイバー・ドラゴンを融合。サイバー・エンド・ドラゴンを融合召喚! パワーボンドの効果により攻撃力は2倍になる!」

サイバー・エンド・ドラゴン 攻撃力8000

「あら、随分と気が早いのね。そうがつつき過ぎると嫌われてよ?」

「バトルだ! サイバー・エンド・ドラゴンでヴァンパイア・レディに攻撃! エターナル・エヴォリューション・バースト!!」

圧倒的攻撃力を持つサイバー・エンド・ドラゴンの攻撃。でもこんなもの驚異でもなんでもない。

「サイバー・エンド・ドラゴンは貫通効果を持つ。不死の能力を持つカミューラのヴァンパイアモンスターでも、カミューラ自身のライフを0にすれば倒せる。考えたな」

「やった！ これで兄さんの勝ちだ！」

浮かれる周囲の声。その中でカミューラは、焦らずにカードを発動させた。

「罨カード。妖かしの紅月！ レッドムーン 手札のアンデットを1枚捨て、相手モンスターの攻撃を私のライフポイントにして、バトルフェイズを終了させる。これで私のライフに8000ポイントが加算され、合計ポイントは12000になる」

罨カードの発動。当然カイザーは1枚の速攻魔法をすぐに発動させた。

「速攻魔法。融合解除。フィールドにいるモンスターの融合を解除する」

融合解除。文字通り融合モンスターを融合前に戻す速攻魔法。これの発動によりカイザーは妖の紅月の効果を回避し、更なる展開に繋げる事が出来る。
はずだったけれど。

「融合解除ね。ならば私も手を打ちましょう。魔法の様な一手をね」

「……なに？」

「私も罨を追加で発動させて貰ったわ。このカード。魔法の筒を」
マジック・シリンダー

「なっ!？」

サイバー・エンドの放つ攻撃が、筒の中に吸い込まれた。

「お前は焦り過ぎたんだ。ボウヤ」

魔法の筒は相手の攻撃を吸い込み、そのまま跳ね返す魔法使いの道具。8000のダメージが、今まさに放たれる。そのダメージは凄まじく、カイザーはその場に倒れた。

呆気ない。とまで言える早過ぎた決着。誰もが息を止める中で、カミューラの静かな声だけが聞こえる。

「可愛い子。私の事がそんなに憎いか。お前のデツキも、お前のそれに答えた。……だから負けてしまったんだ。」

どうしたお前達。黙っていないで、次のお相手が居れば、どうぞ？」

沈黙が続く。学園最強であるカイザーがワンターンキルをされたのだ。中には勝てる訳ない。と意気消沈する奴までいる。

そんな中で、1人。デュエルディスクを構えてカミューラの前に立つ人物。

「今度は俺が相手だ。カミューラ！」

「お前か……遊城 十代。良いだろう。今のデュエルを見ても自ら声を上げるその勇氣。私を買ってあげるわ。だが私はお前達が恐れる吸血鬼。人を人形に封じ込めてしまうような恐ろしい存在。お前の勇氣だけでは私に挑むには足りない。そうね、追加で

1人。その子を生贄に貰いましょうか」

そう言うのと、カミューラは自らの分身を作り上げた。それは大きな牙を向き、少年の元に飛び掛る。

「う、うわあああ!!」

「翔!!」

「ふふつ。お兄さんと一緒が良いわよねえ? 今すぐ同じ場所に仲良く送ってあげるわ!」

今にも牙を突き立てそうな分身が迫る。その時だ。十代の首に掛かっているアイテムが光出した。

その光が輝けば周囲に漂う闇が祓われる。カミューラの分身も悲鳴を上げて消えて行った。

「……ちつ。私の力を、そのアイテムか」

「これで、お前の変な力は使えないぜ。観念して、正々堂々とデュエルするんだな」
「嫌ね。正々堂々なんて虫唾が走るわ……なんて、言うつもりだったけど。良いわ」

「……えっ?」

すんなりと、カミューラは認めた。十代も含めその場に居た者達は啞然とする中、静かにカミューラは微笑む。

「受けて上げる。言ったからには、正々堂々と行きましょう？ 人間……遊戯 十代。貴方の相手は、セブンスターズの1人。——いえ、誇り高きヴァンパイア一族。カミューラがお相手するわ」

デュエルディスクを構え、カードを引くだけで皆の視線はカミューラに集まる。不気味な程に透き通った、人とは思えないほどの美しさを持つ一族の存在を目に焼き付ける。私の知らない姿を見せつける。

「さあデュエルよー」

カミューラとのデュエルは正に正々堂々としたぶつかり合い。お互いがお互いの力を存分に振るう戦い。

「フレイム・ウィングマンで、ヴァンパイア・ジェネシスに攻撃！ フィールド魔法、スカイスクレイパーの効果で攻撃力は1000ポイントアップする！」

「……褒めてあげる。私のヴァンパイア・ジェネシスを倒そうとするなんて。でも、そろそろこの街も飽きた。こんな鉄の塊が連なる汚らしい街よりも、美しく。この戦いに相応しい場所を用意して上げる。罨カード、ヴァンパイア・シフトを発動！」

ヒーローが活躍する街は姿を消していく。深い夜に、場を紅く染める月光が差し込めばそこは誇り高き一族の住まう城になる。

「スカイスクレイパーが……HERO達の街が壊れていく」

「このカードの効果により、私はデッキからフィールド魔法。ヴァンパイア帝国エンパイアを発動する！ スカイスクレイパーは滅び、ここはもうヴァンパイア一族の支配するフィールド！」

更に、お前のフィールド魔法が消えた事によりフレイム・ウィングマンの攻撃力は1000ポイントダウン。それだけじゃない。ヴァンパイア帝国がある限り、私のヴァンパイアモンスターが戦闘を行うダメージ計算時に、ヴァンパイアモンスターの攻撃力は500ポイントアップする！」

立ちはだかる巨大な闇の存在。周囲は怯え、恐怖する。帝国の王。ヴァンパイアモンスターのの頂点に君臨する創始者に。それがもたらす破壊に。

「英雄気取りの愚か者に、闇の恐ろしさを分からせてあげなさいヴァンパイア・ジェネシス！」

見ただけで震えてしまう程の闇に。立ち向かうHEROは臆するどころか、笑った。

「これで終わりよ！」

「いや、違うな。HEROは、遅れてやってくる。速攻魔法、瞬間融合を発動！」

「瞬間、融合？」

「このカードの効果により、俺はフィールドのスパークマンと、フレイム・ウィングマンで融合召喚を行う。現れる！ E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン！」

白銀に輝く鎧を身につけたヒーローが、深い闇を切り裂き光を放つ。

「バトルフェイズ中に融合ですって……でも、所詮攻撃力は2500。ヴァンパイア・ジェネシスの攻撃力は、3500になる！ それでは届かなくてよ！」

「シャイニング・フレア・ウィングマンは、墓地のE・HEROの数1体につき、300ポイントアップする。俺の墓地には4体のHERO達がいる」

「攻撃力3700……ヴァンパイア・ジェネシスを上回った」

「行け！ シャイニング・フレア・ウィングマン。究極の輝きを放て！ シャイニング・フレア・シュート！」

光を受けて、闇が消える。破壊されるヴァンパイア・ジェネシスを前に、カムイウラはそつと目を閉じた。

「……瞬間融合で召喚したモンスターはターン終了時に破壊される。けれど、それは分かっているんでしょう？」

「ああ。シャイニング・フレア・ウィングマンは、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える」

「私の負けか」

シャイニング・フレア・ウィングマンの力はプレイヤーにまで及び、カムイウラのイフを全て削りきった。

十代の勝利に歓声が沸き起こる。そして、目の前に居る貴婦人からも、惜しめない拍手が送られた。

「偶には、こんなのも良いわね。良く私を倒した。遊戯 十代」

「へへっ。ガッチャ！ 楽しいデュエルだったぜカミューラ」

「私は負けた。鍵も持っていけ。私には必要の無かった物。人形にした奴も帰してやる。そこに倒れているのもな」

カミューラの言葉通り、後ろの方では人形になっていたクロノスが身体を取り戻し慌てふためいている。カイザーも意識を取り戻した。

脅威がさつたのを確認して喜ぶ仲間達の前で、十代はカミューラと向き合う。

「……なあカミューラ。お前、こんな事しなくても強い。なんで闇のゲームなんかやってるんだよ」

その間に、カミューラは口を閉じたがしばらくすると、遠くを見ながら答え出した。「言う必要なんて無い。けどね、遊戯 十代。お前にもいつか分かる。仲間が苦しめられ、死の窮地に立った時。そこにいる者は縛られる。目の前の敵に、やられて行く仲間、無力な自分に。そんな者達への憎しみに。そこにいるものが弱ければ、更にその憎しみは連鎖していく」

「憎しみ……」

「お前の様な者は、知っておかなければならない。仲間の気持ちを、思いを。そして覚悟しなければならぬ。そうでなければ、仲間は助けられないし、報われないだろう。仲間だけじゃない。そうしなければお前も……例えばそう、今日最初に相手をしたボウヤみたいに、簡単に終わってしまうかもしれないな」

「ちよつと、どういう事だよ……」

困惑する十代に、背中を向けてカミューラは歩き出した。

「今日のデュエルを覚えておきなさい。皆を助けるのが、ヒーロー。なんででしょう？」

そして次に歩を進めた時には、カミューラは蝙蝠達に姿を変え、その場から去っていた。

城は壊れ始め、皆はこの場を脱出する為に走る。セブンスターズの1人を退けたが、未だに不安が残る形になってしまった。

不安。そう、私の知らない事が起こっている不安に。



崩れるお城を背景に、目の前の女性と話す。

「自分でもムカつくわ。あんな事を言うなんて」

「負けたカミューラさんが悪い。でも流石です。どんな役でもこなせますね。綺麗な女は怖いですねー」

「いつまでも過去を引きずるなんて、小さいわね人間」

「今まで過去に引きずられてた人が言うのと重みが違うなー」

無言の攻撃が繰り返され、紙一重で避けながら慌てて前言撤回すると声が響く。

「冗談冗談。ほんとに冗談ですよ……でも、頼んでない事まで言ってしまったなー。お陰でなんか、イメージだいぶ変わりました。正々堂々とか、正直凄かったですけど、それは？」

「……正々堂々としろと言ったのはお前もだ人間」

「名前で呼んでくれませんね。それに自分が言ったのは闇の力で攻撃しろ、普通にデュエルしろ。それだけです……まあいいでしょう。そういう事で。十代君はデュエルしていて楽しかったでしょう？」

「ああ。けれど、デュエルしたから分かる。あれは危険だ」

「その感覚、未だに自分は掴めないんですね」

「はあ？ 私にデュエルを取り戻させたのはお前だろう。なぜお前がデュエルを知らない」

「そうですけど。あくまで自分は、ただのゲームとしてカードに触れたんです。デュエ

ルただけで色々分かるって感覚は……そう。小さき者は分かんない」

「相変わらず、減らない口なこと。やっぱり縫い合わせようかしら」

「来世で宜しくお願いします」

「……来世の自分に呪われるわよ」

「来世の自分はきつと来世の自分に肩代わりさせる」

「忘れない」

「忘れてください」

「お前の名は」

「本当に忘れてくれて結構なんですがね。……さてと、これからはどうするつもりで？」

「どうもこうも無い。すぐにでも私を探す追手が来る。逃げて、適当な男を引っ掛けて生きる事にするわ。人間に関わるのは不本意だが……」

「へえ。別に食う寝る無くても大丈夫なのに、わざわざ、人と。まあいいですけど」

「この世界は、デュエルがあれば稼ぐ事が出来る。その手を使うならどうせ人間とは会うことになる。そうねえ、人間共を倒しまくって稼いだお金でお城でも買っちゃおうかしら」

「お城とか……どんだけ稼ぐ気で。つて、その追手とやら、雇い主さんですか？」

「ああそうだ。最早私は、向こうからすれば邪魔者。計画に支障をきたす可能性がある

危険要素。生かす価値もないだろう。……だが、お前達が、雇い主の計画を潰してくれ
る。そうすれば向こうとしても私は必要ない。自由になれる」

「それは。まあ、なれるかも知れませんが、そういうお願いは今回デュエルした子に言っ
てください。ヒーローなんで」

「……ああ。確かにそうした方がいいかもしれないな。私を助けた人間は、生憎ヒー
ローとは程遠い小賢しい人間だった」

「なんと。それは残念」

「それでもない。そのよく回る口のおかげか、お前とは対等に話せる気がする」

「……それは、褒められてるのか」

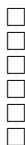
「いや、ヴァンパイア一族が人に劣る事など有り得ない。むしろ下だ」

「助けてくれた人に向かって1歩引いた姿勢で話し合うことから学んだ方が良いでしょう
ね」

「本当によく回る口だ」

「お互い様な気がします」

その2人は楽しそうに会話をした後、お互いに笑顔で別れた。また逢う日までと言
合って。



「さてと。今日から……歴史等を受け持つ事になった。橘だ。宜しく頼む」

授業の中、これほど目が覚めることがあるか。嫌な予感がする日つてのはそういう事が続く物だ。

カミューラさんの事件がひと段落したのはほんの1日。24時間以内の事。次の日の授業で、先生として出て来たのは昨日の夜にあった女。とても怪しい女性。

「その君。顔がポカーンとしてるが、大丈夫？」

「……大丈夫ですよ。橘先生。昨日ぶりです」

「ああ、そうか。君は確か会っていたな。よろしく頼むよ。私はデュエルが大好きで、デュエルアカデミアに来る事が夢だったんだ」

「……はい、宜しくお願いします」

ほぼ確実にやばいやつなのは間違いない。がまさか先生として入って来るとは思ってたなかった。

橘さんは、当然だが理想的な先生として行動している。その立ち振る舞いから誰でも話しやすく、声は聞きやすい。そして周囲を、何故だか知らないが特に女性に好かれる先生だった。男も当然魅了しているが、同性にも同じか、それ以上に好かれる。1日目

でこれとかどんなカリスマだふぎけんなどか思うが。相手は先生。既に人気者。これは周囲を遠ざけたくても、その周囲が聞かないだろう。

そういう風な先生になって、わざわざ自分の目の前に来た。有り得ないぐらいに好戦的だ。そして……

「きつゝい」

こうなつてしまつたのは最高に不味い。何故ならば、自分が守るべき対象は言うまでもなく生徒も含めた全体であり、相手はそれにいつでも細工できるという事だからだ。正直橋先生の件に関しては慎重に観察しつつ、相手が仕掛けてきたのを甘んじて受け入れるしかない。出来れば、1人で全て解決したい。今はそれぐらいしか考えられない。

この三幻魔の1件を含めてそうだが、相手は思つた以上に巨大である。一応大まかな展開は知つてゐる。だから相手の思惑を知つてゐるから先手を打てる。なんて考えは一瞬だけ過ぎるがすぐに思ひ直すことになる。何年も掛けた計画、つまりそれだけ長い間人を動かせる化物共に逆らつてデュエル以外の選択肢を取られると普通にこちらが詰む。リアルファイトしかり、裏からのみ消し等々。場合によつては人1人ぐらいは普通に消しそうなのが現実味を帯びてゐる相手だ。どう考えても相手の思惑通りに動いて、デュエルしている方がいい。むしろデュエルに賭けるしかない。知つてゐるだけじゃどうにもならない事だつてある。知つてゐるだけでどうにか出来るなら……金持ちになる

方法を知るだけで金が入るならみんな億万長者にでもなっている。実際そうならないのが現実であつて難しい。

次は異変の調査。カミューラさんが血を吸う行動を起こした。とか普通は無かつた事の捜査。これもしておいた方が良さだろう。早く見つけて処理したい。処理と言つても限界はあるけど一応、対象がもし自分なら、こつちにだけ被害を集中させる事が出来るかもしれない。

そんな事を考えて居ると時間は既に空が暗くなつた頃。帰る……前にグラサン達に挨拶がてら何か聞いてこようかと森の中。道を歩いていると生徒が1人。女生徒で、何度か話した事のある噂好きの生徒だった。

「あ、ここにちは」

嫌な予感と言うのは結構良く働く。ある日、森の中で知り合い以上友達以下の人と待ち伏せされていたように出会うなんて。

生徒。なんで此処に。すぐに浮かんしたのは今日から入ってきた先生。見た感じ好戦的ですが、何でも仕掛けてきそうな敵。そう、先生として来た敵と認識していいだろう。その敵が何かを仕掛けるなら、例えば……その立場を使って、他生徒を利用してくるなんてのは、どうなんだろうか。

「ここにちは。どうしたんですか？」

「えへへ。ねえ、この前話した噂があるじやい。その話をしに来たんだよ」

「あー、なるほど？」

「先生のー、噂ね。間違つてたんだ……」

瞬きして、開いた時には赤い目がちらを覗いていた。そして気がつく。大きく開いた胸元に、2つの黒い穴が見えた。鋭い何かで刺されたような痕がある。

「先生はね、凄いんだよ……あはははは!!」

そして狂った声を張り上げた。

それは壊れた玩具の様に、笑い続けて遠い空を見ている。その目に写っているのは自分じゃない。遠くに居る何かを見ている。

「センセえが言ったの。貴方とー、なかよくなりたいて、じゃあ。てつだうよね!!」

深夜のテンションハイでもこうはならない。すぐに落ち着いたがどう考えても異常者だ。目の前の人が急に発狂し始めたら見なかった事にして逃げるのが普通まであるが、ぐつと堪えて普通に返事を返した。返せる自分も強くなつたと思う。

「……別に話せば皆仲良しですけど」

「あは……で、でも。デュエルすれば、もっと仲良くなるよ。だって、先生が、そう言つてたからー!」

「先生のお名前は？」

「先生は、先生！」

「ですよー……」

分らない事が多すぎる。前のは敵なのか味方が操られてるのか。闇のゲームなのか否か。使用するカードはどうか。目が赤いのも気になるし、刺された様な2箇所
の痕は。一体……

「私と！一緒に、一緒に！ 火炎地獄！」

話している途中で、まだカードにも手をかけていないのに。気がつけば業火が自分に襲いかかって視界が埋まっていた。咄嗟に防御姿勢を取る。少しの衝撃と、ほんの少し。ほんの少しだけ焼けるような匂い。

「くっ……」

ライフが減少している。当然だがもう既に始まっていた様だ。勝手にディスクが腕についてるわ起動してるわで状況把握が難しい。

自分 LP3000

闇のゲーム？ にしては威力が低い。じゃあ普通のデュエルか。いや……そうじゃない。なぜなら、目の前の生徒の服は。確かに焼けていたからだ。スカートがほんの少しだが確実に。足下から吹き上がった炎によって。

「あはは！ たのしい！」

女生徒 LP3500

その中で笑っているのは、痛くないからか、それとも気にしていないからか。どつちだ。いや。違うまず、なんでデュエル始まった？

「ほらあ、手札引いて？ それとも、手札0枚から始めるの？」

「……有難く。5枚引かせてもらいます」

落ち着け。まず落ち着け。何故かは知らないが相手は強制的にデュエルに持ち込む能力でも授かったらしい。次にディスクだ。デュエルディスクが通常とは違う黒いディスクで、何やら厚みがある。明らかに構造から違うのだろう。鈍器としてのグレイドは確実に上がっているのは分かる。ただ色が違うのか、それとも……

「もう一枚！」

考えてる時間も無く、次の炎が放たれた。焦げる匂いは強くなり、受けた腕が熱さをより感じる。相手が受ける炎もまた強く、熱いのか汗を流していた。

自分 LP2000

女生徒 LP3000

本当に不味い。これはきつと危ないゲーム。更にいえば、受ける力が調整されてる。徐々に強くなっていき、更に相手の方が受けるダメージが高い。それはつまり相手が一般生徒で、こちらが守るべき対象であるが故の仕様だろう。

しかもバーンデッキときた。露骨に殺しに来るとは。

「まだ、まだ！ 私は魔法カード、カップ・オブ・エースを発動！」

発動されたのはギャンブル性が高い魔法カード。ソリッドヴィジョンがそのカードを映し出し、くると回りと回り始めた。

「このカードは、コインの表裏で効果が変わるの。でも、コインが無いからカードの向きで決めるね！ 回転するカードに、私がストップの声を掛けて正しい向きなら表、逆向きなら裏！」

「OK。どうぞ」

「じゃあ。ストップ！」

カードが止まる。逆の位置に。

「裏……相手が2枚、ドローする」

「ありがとうございます。……カップ・オブ・エース。珍しいカード使いますね」

「うん。先生がくれたの。嬉しかった！」

「……」

聖杯のアルカナ。タロットで、詳しくはないけど確か四代元素で分けるなら水。カードの意味は基本的には人の感情に対する意味を持っていた。幸福や喜びは勿論ながら愛なんてものまで。人物で分けた時に。女王や王なら、善良で公正な人物であるとか

んとか。

「私のデツキに。ぴったりだつて！　でも、まだ、まだ。ご隠居の猛毒薬！　当然、ライ

フを削る方！」

「くっ……本気でダルイですね！」

炎に続けて、怪しい爺さんが投げつけてきた薬ビンが飛んでくる。紫色の液体なんて明らかに毒だ。

炎で火傷したんじゃないかって程に痛みを受けたあと、割れたビンとそれに入っていた液体によって痛みが拡がった。痺れる様な感覚は神経に作用しているんだろう。

自分　LP700

「けど、やられっぱなしじゃないですよ！　手札の冥界の使者ゴースは効果ダメージを

受けた時に特殊召喚出来る！」

ゴース　攻撃力2700

「そして、受けた効果ダメージをそのまま相手にも与える」

女生徒　LP2200

使用カードを見る限り、ここに居る一般学生と変わらないみたいだ。多分。ただ……

「関係ない。天よりの宝札！　私は手札とフィールドのカードを全て除外する代わりに

手札が2枚になるようドロウする！」

自分のターンで無理にでもワンキルする程度には組まれているらしい。メタモルポットや罫を使わず、強烈な弱体化を受けたあの宝札を使う程には無理矢理ワンターンキルにこだわっている。だがこれは唯一のチャンスだった。

「手札からアーティファクト・ロンギヌスを生け贄に効果発動！ このターンお互いのプレイヤーはカードを除外出来ない！」

手札から発動したモンスター効果。取り敢えず天よりの方札が入っているから発動した。

「遅いよ！ もう私のカードは発動されてる！」

「知ってますよ！」

少しでも可能性があるならば。デッキを見る限り先攻絶対有利な構築で、後半の事なんてこれっぽっちも考えていない。ならありえる。あのゲテモノ宝札が複数入っている事だって。

カバーしたのは2枚の宝札を相手が引いてかつ、残り1枚の手札が自分のライフを削りきらない場合のみ。でもそれでいい。そもそもだ。

「……っ、こない」

ああいうデッキは事故が大半だ。相手は手札を見て苦しい顔をしていた。

「……私は、モンスターをセットして、ターンエンド」

「自分のターンで」

あのデッキは、きつとフルバーン。だがモンスターをセットした。考えられるのは2つ。メタモルポット等のドロースカ、セットする行為を挟んでキルターンが遅れるのは知ってるが、決まれば十分なほどにダメージを飛ばせるカードか。ならばこちらもシンプルに終わらせる。

「手札のDDクロウを攻撃表示で召喚」

DDクロウ 攻撃力100

「それを、攻撃表示で？」

「当然。次のカードは強制転移の魔法カード！ さあ、交換です」

発動した瞬間に、相手の目は大きく見開いたまま動かなくなった。交換されたセットモンスターはデスコアラ。守備力もそこそあり、纏まったダメージを最初のターンなら与えられるカード。

「……何も。ないみたいですわね」

まだカードは切れるが、これで勝ちだ。このまま攻撃すれば。だが良いのか。これは、このまま攻撃しても。

問題は相手が受けるダメージだ。深刻になるなら……

「……提案あるんですが、サレンダーとかしません？」

「嫌。先生が、サレンダーは嫌いだって」

「……いい先生です」

やばいどうする。見ている限りでは無理だ。相手が受けるダメージの方がより大きい。そんな中でダイレクトアタックをして大惨事なら……

こんな時にガイウスさん居ればと思ったがアレは人を守るとか治すとか無理なので結局役にたたないか。あれ、これどうするんだ。

「……ゴースでDDクロウに攻撃」

冥界の使者が空に手をかざすと大きな剣が落ちてくる。それを手に取り力を溜める。今にも動き出しそうなゴース。だがそれは確実にプレイヤーにも被害が及ぶ。

「待って!」

思わず声が出た。なんで声出したんだろ。意味無いのに。そう思ったが……

ゴースはその声に反応した。振りかざしていた剣を下ろし、こちらに振り返っていた。

「……」

そのまま黙っていると、同じく固まったまま動かない。

「……」一番弱い攻撃とか、でお願いできますか」

言葉が通じるかも疑問だが言った。そして、言われた通りにゴースはゆっくり前進

し、DDクロウに軽く触れる。触れられた身体はすぐに消えたがそれだけで、相手には影響は無いようだ。

なんだこれ、どうなってるんだ。戸惑う自分。けど相手は何の事か分からない、見えない様に振舞っている。いやまさか見えないのか。

「ライフは……」

デュエルディスクのライフポイントを確認すると、しっかりと相手のポイントは0になつていた。数秒するとソリッドヴィジョンも消え始め、このデュエルが終わった事を改めて確認する。手に残る感覚や熱が、このデュエルが、ただのデュエルでは無かったことを終わった後も感じさせながら。

「一体、なんなんだこれ」

デュエルに勝利したは良いが、敗北した後に。女生徒の足がふらつき始め、今にも倒れそうな勢いに。

「くつ、ちよつと。大丈夫ですか？」

「負けちゃ……」

「うおっ!？」

話す言葉も途中に女生徒の目が閉じて身体も崩れ落ちる。なんとかギリギリ間に合ったが身体を支えるのがいっばいで、背負って運ぶなんて出来そうにもない。

「これどうしょ」

取り敢えず。PDAを取り出してある場所に連絡する。

「もしもし。あの、森で女生徒が倒れていて……運ぶの手伝いに来てくれませんか？」

連絡してすぐに、黒グラサン3人が素早くコチラに来てくれた。これの上司にまた文句を言われるとは思うが、今回ばかりは仕方が無いし、一応仕事内容的にも間違った事をさせて無いので大丈夫だろう。

黒グラサン達の1人。スキンヘッドの厳つい人がその女生徒を背負いながら何があつた？ 大丈夫か？ と話しかけてくれた。

「さあ。デュエルしたらいきなりこうなつて。自分だつて知りたいですよ」

「……この子もか」

「この子もです。つて、この子も？」

何やら引つかかる言い方をした。

「ああ、実は俺たちの中にも居るんだ。デュエルして倒れたとかで休養中の奴がな」

倒れた。それも日が経つてる。

「デュエルとやらをボスがあんまりにも楽しそうにするんだ。それによ、こう言っちゃなんだが女の上司に俺たち野郎共がどう接すればいいか、足踏みしてたんだ。そんな時にやつてるのを見かけてな。何かのきっかけになればって俺達もデュエルを始め

たんだよ。が……未だに信じられねえ。ゲームで意識不明なんてな」

「いつ、いつからですか？」

「それは……そうだ。丁度、吸血鬼が居るだとか、湖の方にでつかい城が見えた。つて見回りの奴らが言い出してからだよ。これで3人目だ」

3人目。つまりその原因とやらはまだ動いている。そして、カミューラさんが来てから既に始まっている所を見るならば、それは新しい敵とは全く関係の無い……

思い返されたのは、不思議な先生の事。噂のデュエリストの事。カミューラさんの事件だと思っていた事が違うとしたら。

「はあ……いやー、どうしようか」

遅くなる前に動かなくてはいけない。事件を追えば必ず何かあるはず。セブンスターズなんてそっちのけで自分は、その日から不思議な噂話を追うようになった。

第15話 大地の怒り

学生の頃、自分の好きな授業だけはやる気が出る。そんな人も多いだろう。自分もそのタイプ。そしてここはデュエルアカデミアである。

朝方に雨が降った影響か、蒸し暑くて長袖なんてやってらんねえという天候の中。意地でも長袖を着用して受けている授業。考える事が数多くなければもう少し今の授業も楽しめたのだがそうは行かない。最近のデュエル実技を任されているのは、あの怪しい先生だ。

「よし、これから授業を始める」

その一言で周囲が一斉に静かになって、橘先生の方へ注目する。つい最近入ってきた先生で、見ているだけならいい先生。

ただし自分目線では違う。その出会い方からして疑う以外の事が出来ない危険人物である。最も、危険人物だ。と思わせたのは本当に最初の出会いだけ。ついこの間は呼び出され、ようやく来るかと身構えたが先生として注意されたただけだ。肩透かしにも程がある。そう、本当にこの人は、ただ先生をしているだけなのだ。しかもこの先生は本当に楽しそうに授業をしていて、授業を重ねる度に、突如自分の中に生えてきたデュエ

リストの感覚で見るなら悪い人では無い気さえする。信用出来ない自分が嫌になつて来るぐらいには。

そんな橘先生のデュエルは実践形式で生徒を数名選んでデュエルさせる形が多い。教科書を開く気が無いんじゃないか。そう思う程にはデュエルが多い。今日も例に漏れずそのパターンだろう。欠伸をしながら教科書を下敷きにして机の上にダラリと身体を預ける。最近は気を張つてばつかで疲れるのでこうなるが、男子ならともかく女子がこれをするとは嫌な程目立つ。故にすぐに体勢を戻すのが理想だが体が重い。近くの席から飛んでくる視線を流しながら、教壇から聞こえてくる声に一応耳を傾ける。

「さて。今日の授業は昨日の続き。風属性について。風属性はサポートもそれ程多く無い。特徴もバウンス系のカードが多い。ぐらゐしか記憶に無い奴も居ると思う」

今日のテーマは風属性らしい。風属性は確かに難しい。全体的なサポートもこれだと言うものは少ない。どんどん増えていくカードの中で強化はされて行っているが……属性で固めるなら分かりやすい闇属性や水属性、地属性を選ぶと思う。過去になれば尚更だ。アカデミア内では地属性が数が多いこともあって良く見かける。

「バウンスと言っても曖昧で、ハッキリとしたイメージも持てないだろう。けれど、風属性は弱く無い。しっかりと使えば強力なデッキテーマになる事もある。そこで今日の授業は、風属性のデッキを組んでもらい、デュエルしてもらう訳だけど。相手役は……

三沢君」

相手役で三沢を選ぶとはなんてえぐい事をするんだ。話を聞いていて殆どがそう思っただろう。風属性はやれるぞ！ という事を見せるために相手を強い人を選んだのかもしれない。だが、今から作り上げた即興風属性デツキで、実力は既にブルーと評価されている三沢とデュエルしたい生徒なんて居ないと思う。

「次に、今から風属性のデツキを作ってもらい三沢とデュエルしてくれる奴は……」

先生が周囲を見渡すがビツクリするほど皆が顔を逸らす。これは決まらないなど早々に理解したのだろう。指名すると言って即座に指を指した。

「君。前に来て」

自分に向けて。

「……………」

「速く」

「……何故に自分」

「クロノス教諭に居眠り魔だから注意してねって最近頼まれたの。だから君」

「なん……………だど？」

「身体を起こして、さあさあ」

驚きの理由が飛び出て身体が固まる。まさか、クロノス先生がそんな風に見ていたと

は……おのれクロノス許すまじ。けれど、よく良く考えなくても自業自得で言い逃れも出来ないので素直に前に出る。居眠りは本当にダメだなと改めて思い、悔い一つも先生から渡されたカードの束を受け取る。どう考えても100枚ぐらいしか無いそれを受け取った。少くないかな。

「風属性関連のカードは大体あるから。君が風属性デッキを手持ちで組めるなら、それでもいいけど、とりあえずデッキのモンスターは風属性で縛って、風属性専用カードも入れること。そして組み終わったら、先生に見せて」

「……はい。了解しました。善処します」

「じゃあ。すまないけど作る時間を決めさせてもらうね。15分で作って。三沢君も、テスト用のデッキ渡すから、15分はデッキ調整してもいいよ。他のみんなは今から小テストのプリント配るから、それを書いてね」

言う事を素早く言ってプリントを配り、「15分後に戻ってくるから」と言っただけの先生は教室を一旦後にした。チラリと見えたプリントは分かる人なら5分くらいで終わるぐらいの量で、実際デッキを作り始めて10分も経った頃には生徒同士でどちらが勝つか予想しあっている声も聞こえた。

「しかしこれは……」

まず適当に15分で作った縛りデッキで三沢さんと戦えとかいう事自体凄い事言う

「授業だから当然ですか……」

「よし。完了と」

「君とこんな形でデュエルする事になるとはな」

「お互い自分のデツキでは無いのが残念だ。けれど、悪いが手加減はしない。全力で倒させてもらう」

「こちらこそ。甘く見ることに無かれですよ」

「そんな事はしないさ。特に、数多くのデッキを操る君相手なら」

「三沢さんも大概です」

デッキの所持数なら三沢さんも8個程は所持している。各属性デッキを持っている三沢こそ選ばれるべきだったのではと頭に過ぎたが、今更なので置いておく。先生のデュエル開始の合図と共にデュエルが始まった。先攻は相手だ。

「俺のターン。モンスターとカードをセットしターンエンドだ」

「では、自分のターン」

手札をざっと確認する。この頃、風属性といえばサファイア・ドラゴン等が有名だがそんなものは入ってない。

「自分も。モンスター、カードセットでエンドです」

「俺の番だ。俺が伏せていたモンスターはデス・ラクーダ。このカードの反転召喚に成功した時カードを1枚ドロー出来る」

デス・ラクーダ 攻撃力500

ラクダゾンビが陽の光を浴びる。守ることさえできれば優秀なモンスターで毎ターン手札をくれる良いカード。今回はこちらが温すぎなので特に問題なく生き残った。

「速攻魔法。手札断札。互いのプレイヤーはカードを2枚墓地に送り、2枚ドローする」
続けざまの速攻魔法。自分が動かないので好き勝手にやられて辛い。

「良いカードをドローした。速攻魔法、帝王の烈旋を発動する。その効果により君のモンスターを生贄に、手札から守護者スフィンクスを召喚」
ガーディアン

セツトされていたモンスターが消え去って相手のフィールドに建設されたのは巨大なスフィンクス。ラクダを見下ろすソレが動くのだから恐ろしい。

スフィンクス 攻撃力1700

「バトル！ デス・ラクータと守護者スフィンクスでプレイヤーにダイレクトアタック！」

ゾンビとスフィンクスのエジプトアタックを挨拶がわりに受け取る。既にライフは半分を下回るが仕方ない。

自分 LP1800

「バトル終了。フィールドに存在するデス・ラクータと守護者スフィンクスは1ターンに1度だけ裏側守備表示に戻す事が出来る。ターンエンドだ」

セツトモンスター2体。デッキはリバスサイクルデッキか。守護者スフィンクスは維持するだけでこちらが壊滅する恐ろしいモンスター。なぜかと言えば反転召喚されるだけでこちらのモンスターは全て手札に戻されるからだ。厄介この上ない。

「では、自分のターン」

手札で無理やり守護者スフィンクスを封じることが出来る。が。

「更にモンスター、カードを2枚セット。終了」

前のターン同じようにセットカードでターンエンドをする。周囲は思いつき微妙な雰囲気で、正直帰りたい。しょうがない。

「俺のターン。反転召喚、デス・ラクーダ。そして、守護者スフィックス」

「スフィックスだけは通しませんよ！ 罨。デモンズ・チェーンは相手モンスターの効果、攻撃をこのカードが存在する限り封じます」

「流石にスフィックスは封じてくるか。デス・ラクーダでカードをドロウする……手札からフィールド魔法、アンデット・ワールドを発動」

「なっ、アンデット・ワールド!?!」

その魔法は、バイオハザードでも起こしたかのようにフィールドのモンスター達を腐り果てたゾンビに変えていく。フィールド並びに墓地のモンスターまで、アンデット族に変えてしまう影響力の強いフィールド魔法。特に種族サポートデッキからすれば張られただけで負ける。それ程のカードだ。

「このカードにより互いにフィールドと墓地のモンスターはアンデット族に、更にアンデット族以外のモンスターを生贄召喚する事が出来なくなる。今あるカードの中で、風属性デッキは鳥獣族と強い関連を持つカードは少なくない。悪いがその可能性を潰させてもらった」

流石は三沢さん。主にこっちのメタで発動するとは。確かにそう。風属性は鳥が多い。こっちのデツキを立ててくれる気なんて一切無いのが三沢さんらしい。今願うのはゴットバード・アタックを引かないことだ。だが、アンデットワールドが入っている理由がメタのみな訳が無い。可能性として候補が幾つか上がるが。

「アンデットデツキとは……いや、違いますか」

「違う。何故そう思ったんだ？」

「えっ、いや。ただ。そんなデツキ組んだ事あるんですよ。だから、予想です」

スフィックスにアンデットワールド。この組み合わせからなるのはアレのデツキだが、流石に自分以外に見たことは無い。が。まさかな。先生があれのデツキを準備する筈がない。

「……やはり君は侮れない。俺はフィールドの守護者スフィックス1体を生贄に捧げる事で手札のカードを特殊召喚する。このカードは岩石族だが、生贄召喚ではないためアンデットワールドの効果に阻害されない」

「それっ……まさか」

その召喚条件は、守護神の名を持つカードの特殊召喚条件だ。エクゾディアのパチモン、効果は似ても似つかない。ここまでして出す意味なんて話が出てくるそれは。

「手札の守護神エクゾードを特殊召喚！」

地響きと共に神が降臨する。巨大な人の形をした守護の神。その破格のステータス。効果共に珍しく、物珍しきで言えばアンチホープと並ぶ程のデツキ。まさか相手にする事になるとは。

守護者エクゾード 攻撃力0

「えっ、エクゾードさん!」

見慣れないカードに、周囲の生徒も騒ぎ始める。「なんだあのカード?」「攻撃力……0?」「正気?」などなど様々な声が聞こえる中で、ただ自分だけが気を引き締めた。ちなみに、このカードに対して攻撃力0のモンスターは効果が厄介で。なんて事は一切ない。

《守護神エクゾード》

効果モンスター

星8／地属性／岩石族／攻 0／守4000

このカードは通常召喚できない。

自分フィールド上に存在する「スフィックス」と名のついたモンスター1体をリリースした場合のみ特殊召喚する事ができる。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、地属性モンスターが反転召喚

に成功した時、相手ライフに1000ポイントダメージを与える。

頭おかしいのかあの先生は。エクゾード様のデッキを初めての人につて。使えてる三沢さんみだけど。

「攻撃力0のモンスターを攻撃表示。それなのに驚かないな。君は」

「……それ使ったことあるつて言ったら信じます？ セットカードも当てられますよ」

「なら、防いでもらおうか」

躊躇いなくバトルフェイズに入り、守護者エクゾードはセットモンスターに攻撃してくる。攻撃力は0。周囲も一段と騒がしくなってきた中で、自分はセットカードをオープンする。

「速攻魔法、旗鼓堂々！ これは墓地の装備魔法を正しい対象に装備する魔法。自分の墓地にあるビックバン・シュートをエクゾードに装備！」

ビックバンパワーによって神の力は上昇し、貫通能力まで得た。これにより攻撃力は400になる。

守護者エクゾード 攻撃力400

「つて本気かよ！ 相手の攻撃力上げてどうすんだ！」

「貫通まで与えてるし、三沢も三沢だぜ。攻撃力0のモンスターで攻撃なんてな」

「いや、あの三沢が考えなしに攻撃するか？ 絶対何かある」

「なんにしても、やってる事はよく分からね」

周囲もこれ以上にないぐらい騒がしくなってきた。あの先生は楽しそうに見ている反面、少し期待とは違ったデツキに困惑していた。

「さあ、どうします三沢さん！」

「……くつ。そのまま攻撃は続行する」

「では、セツトモンスターはトルネード・バード！」

トルネード・バード 守備力1600

「反射ダメージを受けてもらいます」

三沢 LP2800

「更に、トルネード・バードはリバースした時、フィールドの魔法、罠を2枚手札に戻す。自分が戻すのはもちろん、デモンズ・チェーンとビクバン・シユート！」

フィールド魔法の影響で腐った鳥が現れたが。その羽ばたきは力強く、起こした突風が自分のカードを吹き飛ばす。ただ戻した訳じゃない。これは除去になる行為だ。

それを理解していた三沢さんは驚く様子も見せず、自分の場のエクゾードをゲームか

ら取り除いた。

「ビックバン・シュートの効果。このカードが離れた時、装備モンスターを除外する。最初からこれを計算していたのか。それだけじゃない、もし何らかの方法でエクゾードの攻撃力がアップすれば、ビックバン・シュートの効果で俺がより多くのダメージを受けながら、エクゾードを処理されていた。貫通ダメージを与える効果は君の場のカード。つまり、当然コントローラーの君からみて相手にダメージが入るからな。最もその場合はトルネード・バードを破壊できていたが」

「ふふつ。まあ元々、旗鼓堂々で装備した装備魔法はエンドフェイズに破壊されますから、除去は確定ですよ。あとは三沢さんの言った通り」

「上手くやられたな。バトルは終了。デス・ラクーダを裏側守備表示に戻し、新たに1枚のカードを場にセットする。これでターンエンド。君の番だ」

「よし。そろそろ攻めます。ドローして、自分は手札から霞の谷のファルコンを召喚」

超強力アタッカーにして自分のカードを手札に戻さないと攻撃できないデメリット……デメリット？ 能力を持つハイパーモンスター。攻撃表示のモンスターに、手札には装備カード。準備は整った。

「そして、永続罠。ポールポジションを発動」

最初から伏せられていたカード。禁忌の永続罠が発動される。

「このカードがある限り、フィールドで攻撃力の一番高いモンスターは魔法の効果を受けません」

ファルコン 攻撃力2000

フィールドで攻撃力が一番高いモンスターは魔法の効果を受けない。ただそれだけの効果。とは行かないのがこのゲーム。短い文にこそ、隠された効果があるものだ。これでもかと言う程に苦い顔をしているあの先生は分かっている。この悪魔のカードが抱える闇を。条件さえ揃えば異界の最終戦士と同じレベルの効果を持つその闇のルールに。今回は狙ってそれを使いはしないが。

「霞の谷のファルコンに装備魔法、ビックバン・シユートを装備。攻撃力アップや貫通効果はポールポジションの効果によって得られません。」

カードをセットしてバトルフェイズ。霞の谷のファルコンは自分の場のカードを手札に戻して攻撃しなければならない。今セットしたカードを戻して、セットされてるデス・ラクーダに攻撃！」

ファルコンを阻むものは無く、隠れているデス・ラクーダを破壊した。遅すぎるくらいで相手はもう充分ドローしたが。

「カードを3枚セット。これで終了です」

「俺のターン。手札から魔法カード、生者の書―禁断の呪術―！ このマジックはアン

デット族専用カード。自分墓地のアンデットモンスターをフィールドに特殊召喚し、相手の墓地に眠るモンスターをゲームから取り除く。通常なら俺の墓地にはアンデット族は存在しないが」

「アンデットワールドの効果で種族が変わっている」

「その通り。俺は墓地に眠る守護者スフィックスを、死後の世界からこの場に呼び戻す。その対価は、君の墓地にいるモンスターの魂だ！ 甦れ、守護者スフィックス！」

怪しげな書物がページを開き、光り輝く。自分の墓地に居るモンスター。エア・サーキュレーターがフィールドに引きずり出され、耳に障る機械音を上げながら光に取り込まれた。パターンと本が閉じると、光は粒子となつて散らばり、膨らみ、大きなスフィックスの形を作った。

「守護者スフィックスの効果でこのカードを裏側守備表示に出来る」

「当然、罨。デモンズ・チェーン。その効果と攻撃を封じます！」

「計算通りだ。再びスフィックスを生贄に捧げ、手札の守護者エクゾードを特殊召喚！」
「2体目……」

2枚目のエクゾードから、そのデッキの本気が伺える。またしても攻撃表示。

「バトルだ。守護者エクゾードで霞の谷のファルコンに攻撃！ 大地の怒り！」

その拳が大地を殴り付ける。衝撃は地表を巨大な岩石に変化させモンスターに襲い

かかった。

「君の事だ。何かあるんだろう？」

「面倒な……」

自信あり気な攻撃。何も無いだろうと放置すれば、このままなら返り討ちだ。けどそうもいかない。あのデッキと相性のいい罠で、エクゾードの攻撃力を爆上げするあのカード。それが伏せられていたら。だが普通に考えて攻撃力0が、それも戦闘に置いてはバニラ同然のカードが攻撃してくるのに動くべきでは無いだろう。

ただやはり、当然の様に。三沢さんはダメージステップの罠カード発動する。

「ここで伏せておいたカード、リバーサル・ワールド反転世界！ このカードの効果により互いのモンスター

の攻守は入れ替わる！」

エクゾードに限らず。スフィックスモンスターも守備力が高いモンスターが多いのでデッキ自体と相性の良い罠。

「攻守が入れ替わり、攻撃力が一番高いモンスターは守護者エクゾードに変わった！」

君のポールポジションの効果でこのカードは魔法の効果を受けない！」

「でも、ファルコンは魔法の効果を受けるようになって攻撃力が400ポイントアップですよ！」

エクゾード 攻撃力4000

ファルコン 攻撃力1600

トルネード・バード 守備力1100

「それだけなら守護神エクゾードには届かない！」

「ならおまけで罫！ 銀幕の鏡壁！ このカードが存在する限り、相手の攻撃モンスターの攻撃力は半分になる！」

エクゾード 攻撃力2000

エクゾードの攻撃力は下がるが、それでもファルコンは勝てない。荒れ狂う土砂に巻き込まれてファルコンは倒れ、僅かな戦闘ダメージを受ける。

自分 LP1400

「危ない……鏡壁でなければ即死だった」

この鏡壁も、これまた面倒くさいカードなのだが。この時ばかりは感謝。

「防がれたか。俺が思っている風属性デッキとは大きくかけ離れているのは、君が他とは違う事を改めて感じさせられる」

「……褒められてると受け取り、やったーと喜びます。ターンエンドですか？」

「ああ。これでターンエンドだ。銀幕の鏡壁は、存在し続けなければ効果を適応出来ない。そして維持コストであるライフは君に払えない。君のスタンバイフェイズには銀

幕の鏡壁は破壊され、エクゾードの攻撃力が4000に戻る」

三沢さんの説明通り。自分のターンになり、銀幕の鏡壁は消えエクゾードの攻撃力が戻った。更に言えば、ポールポジションの効果で魔法効果も受けない。

「君に、このデュエルの勝利の方程式が導けるか！」

「当然！ 罨。強化蘇生！ 墓地のレベル4以外モンスターを特殊召喚し、レベルを1つ上げ、攻撃力も100ポイントアップします。当然呼び出すのは霞の谷のファルコン！」

赤黒いオーラを纏って墓地のモンスターが復活。更にフィールドに残ったトルネード・バードを攻撃表示に変更。

ファルコン 攻撃力2100

トルネード・バード 攻撃力1600

「バトルフェイズ！ 霞の谷のファルコンは攻撃する時に自分のカードを手札に戻す！」

突風が巻き起こり、手札に帰る1枚の永続罨。その瞬間、フィールドに存在していたエクゾードにも異変が起こる。

大きな破裂音が響き、足元から崩れ落ちたエクゾード。そのまま脆く崩れ去っていく。

「戻したカードはボールポジション。このカードがフィールドを離れた時。攻撃力の一番高いモンスターは破壊されます。このままダイレクトアタック！」

ボールポジションのもう一つの効果。それによってエクゾードは砕かれた。それだけでは無い。ファルコンの攻撃は相手のライフポイントも大きく削る。

三沢 LP700

「止めてですよ！ トルネード・バード！」

「甘いぞ！ 俺の最後のセットカードはリビングデッドの呼び声！ 3度甦れ、守護者スフィンクス！」

「同じ奴をを3度も生かしはしませんよ！ こっちの最後の罠は、風霊術——雅——！ 風属性のファルコンをコストに、フィールドに存在するカード1枚をデッキの下に戻す。戻すカードはリビングデッドの呼び声！」

死者を呼ぶ声をかき消す風。全てのモンスターと、セットカードを使い切り、相手を守るものもう無い。

「トルネード・バードのダイレクトアタック！」

こちらのモンスターの攻撃で、相手のライフポイントが0ポイントになり、デュエル終了の合図が先生から言い渡された。

終わった後、先生からの一言は全く参考にならない。という言葉葉。

「先生の期待とは違った。でもなかなか面白いカードを使ったデュエルだった。でも正直に言えばもう1度、風属性の授業を行う事にはなる。その時は三沢君が風属性のデッキを使つて」

なんだか知らないがケチをつけられた気分になったが、それが普通かと思い直し特に何も言わずに席に戻った。そして席に戻つて考えた結果、あんなデッキを使わせる先生もやはり悪いと結論。エクゾードを選ぶなんてかなりいい趣味をしている。

今日のデュエルは、相手も珍しいだけあつて途中からは素直に楽しんでいた。けど、忘れそうになるが今日の前に居る先生は危険人物。にも関わらず何も仕掛けてこない所か、本当にただ、今を楽しんでいるだけに見える。羨ましいぐらいに。

「風属性。とはかけ離れたが。今日のデュエルでは、このゲームには多種多様なデッキがあるんだと再認識出来たと思う。攻撃力0のモンスターが4000になったり、手札に戻す。ただそれだけの効果が他のカードとの組み合わせで厄介なものになったり。君達も自分でそういうコンボを探してみると面白いかもしれないね」

明るい笑顔で授業をする橘先生が敵なのかどうか。少しだけ、疑問に思った1日になった。

その日の放課後は久しぶりに、デッキが組みたくなつて、1日ぐらいいは油断してもいいか。と何処にも寄り道せずに部屋に戻る事にした。そんな日に限つて部屋のドアは

叩かれるのだが。

□□□□□□

また1人、薄暗い夜に。ふわりと浮かぶ赤いドレスに、真っ赤な靴。その女性は、相手の唇を奪う。

「んっ!?! んんっ——んんんん!!」

奪われたものは、心地よいのか、天にも登る様な。幸せな表情を見せる。そしてそのまま、唇と唇が離れると、力が抜け。地に伏せる。

『私、綺麗でしょう。私と遊ぶの、楽しいでしょう』

少女の様な幼い声で、真っ赤なドレスの女性は踊る様にその場から立ち去った。赤い靴を鳴らせて。

第16話 私の主人

「退屈」

教室を立ち去りながら呟く。私は言葉通り退屈を持て余していた。ノーズからここへ来て何かが変わる。少なくとも、私と同じ考えの人に出会える。そう思っていたけれど現実はかけ離れていた。

「全く……なにしているのかしら」

続けて呟いたのは例の人物の事。何かしているのは知ってるが、手伝おうにも向こうが危険だと手を出させない。よっぽど大変なことでもしているのかしら？ ……と思えば、見かける時は普通に遊んでいるのだから、本当に何をしているのか分からない。

カミューラの一軒からすぐの事。授業も理由あつて出ないって言ってたけど、実は授業受けたくないだけ……つてのは有り得ないとは言えないよね。あの子は。

別に、あいつの事なんてどうでもいい。そう考える事は出来る。けれど。

「……ムカつくわね」

私はいつもと違う足取りをたどった。暑い太陽が照りつける昼間。外に出て、森の中へ。最近起こっている事件。赤いドレスの女とデュエルすると倒れて意識が戻らなく

なる件。こんな噂話を誰が信じるの？　って思うけれど、アイツがその事件を追っているのは知っていた。

「危ないとか言つて、何も進展ないらしいじゃない。本当にサボる口実を作ってるだけじゃないかしら。なら……私がこれを解決して、引っ張り出してやるわ」

そんな理由で、それが目撃されている場所に向かう。事件が起こるのは決まって夜。今は午前中なのだけれど、夜はダメ。

「出てくる筈も無いわね」

蒸し暑い森をさまよっていると、チラリと人影が見えた。ふわりと宙に浮いているように軽い足取りで、謎のシルエットは迷いなく森の奥へと進む。

「……誰？」

気がつくのと、自然と後をつけていた。

追いかけても追いかけても後ろ姿しか見えない影に釣られて。たどり着いたのは誰も寄り付かなさそうな奥地。枯れた井戸があるその場所に。

「……カードが捨てられてた場所」

今は立ち入りも禁止されているらしいその枯れた井戸には、昔この場所に居た生徒達が使えないカードを捨てていたそうね。

あたりを見渡しても誰も見えない。追いかけていた筈の影は一切見当たらない。そ

もそも。こんな場所に来る人物なんて本当に居たのかと考えてしまう。もし人がいたのであればこの先に掛かっている、枯れ井戸の中に繋がる梯子。下へ向かうそれを降りた先にしか無い。

「一応見るべき、よね」

その梯子に手を掛ける。触っただけでもビクリして手を引いてしまいたくなるほどに冷たい梯子。下に行こうと意識を向けると頭の中が掻き乱される。よく分からないう雑音が響いているようで。よく聞けばそれは女の子の声に聞こえて。

梯子から手を離し、少し後ろに下がる。改めて周囲を見渡すが誰もいない、暑い森の中。ただ梯子に触れた手だけが異様に冷たく感じた。

「べ、別に。驚く事なんて無い。下を見て確認するだけ。誰も居なかったら、それこそカードがあるだけで怖い事なんて……」

手が震える。この島に来た当日も。こんな事があった。忘れようとしていた記憶。不気味な声に、異質な化物。カードによって植え付けられた恐怖。

「捨てられてた、カード」

何年も前からその場に捨てられていた物。例えばそれが人形なら、怪談の1つや2つが出来てもおかしくない。そして、イメージから自身の頭の中で話が勝手に作られて。勝手に膨らんでいく。その場に立っているだけで、冷たい感覚が手のひらから、腕に、全

身に。雑音は再び脳内を埋め、それは声に変わり。そして……

「急用。そう。急用があつ……たっ!」

手に何かが触れた感触は、ぞわりとした感覚と共に背中を撫でる。

「んっ!!」

声を出さないように精一杯口を噛み締め、その場を立ち去った。何も考えられない考えたくも無い。ただ一心不乱に走った。

□□□□□□

「……困ったなこれ」

一人部屋で頭を抱える羽目になった今日。クソ面倒な事件事故を追っている中、途中で思い出しためちやくちや便利そうな人を助けたなど思い出した日。島中に手先の蝙蝠を走らせ情報を即座に集めるの事の出来る存在。吸血鬼カミューラ。今現在逃走中の為流石に目立つことは出来ないが、逃げる前にあつた出来事なら何か知っているかもしれないと思い、呼び出す為に島中の出現しそうないたる所で煽り散らかしていると不意に蝙蝠が自分の体を貫く勢いでぶつかって来た。やはりあの人は自分の種族に対するマウント取りを絶対許さないウーマン。呼べた事は予想通り。多少のダメージは

負ったものの、蝙蝠越しに会話が出来た。そしてありがたい事が分かったのだ。

「血を吸った事は無い。だって言われるとは……」

丁度そのカミューラさんが出現した頃に現れた赤いドレスのヴァンパイアモンスター使いとデュエルすると倒れたりする。という事件。それがカミューラさんとは無関係という事実は面倒極まりない事だ。

それを聞いてからまた一から話を集め直す。分かった事といえばヴァンパイアモンスターがいる時と居ないときがある。たまたま最初に噂になったデュエルでそれがとどめを刺したのが原因らしい。そして、中には意識が戻らない人が多数居るという事。割と大事件だがなぜ学校側が何も言わないのか……とか思ってたが、理由不明だし変に騒ぎ立ててもあれかと思ひ直す。

「にしても、ヴァンパイアモンスターにしてはヴァンパイア・ベビーとか使うのか？ 確かにヴァンパイアだけど、ヴァンパイアデッキとしてデッキを組んで使ってる人が使う様なカードじゃない気が……」

そうやって悩んでいる時間にも終わりは来る。急にボタンを連打しているようなドアのノック。凄い怖いが多分知り合いだろ。凄い人いっぱい居るからなと思ひながら開くと目の前には必死の形相をした美奈さんが居た。

「……どうしたんですか？」

「っ!!」

「いやマジでどうした」

何か言いたげな顔しながら口元を開こうとする度に閉めるのはどういう訳だ。ただ顔から焦つてるといふか、何かから逃げてきた感じがするのは分かるが。

とりあえず落ち着かせて、お茶でも渡して、お菓子も広げて。相手がいつも通りになるまで待った。

「で、どうしました。そんな顔あんまり見せないじゃないですか」

「……な、なんでも無いわ」

「なんでも無いとはこれ如何に」

「ただ、ついて来なさい」

「ほんとにさ。話の中身話そう?」

目の前にいる美奈さんは自分勝手とか、偉そうとか。そういう類の人だ。さも当然のように、決まった事のように物事を喋るし巻き込む時も自分の中で話を整理して結果しか言わない。相手に分かるように言ってくれるならまだしも自分が分かるようにだ。

「いいから黙ってついて来なさい」

「こちらの予定とか考えた事あります?」

「それはキャンセルね」

「はあ……でも、話の内容が分からないと。そもそも何処に？ 何が目的で？」

「行けば分かるわ」

「最初きた時なんであんな焦ってたんです？」

「……質問が多い。嫌われるわよ」

「ちよつ……引つ張らないで痛いから。強い強い！ って言うか！ デュエルディスク 持っていない！」

「必要ある？」

「お馬鹿！ あるに決まってますよ！」

問答無用で引きずられ前を歩くこの化物。逆らってもまあ無理なので諦めて付いていく。森に入りずつと奥。誰も立ち入らなさそうな奥地。たどり着いたのは枯れた井戸がある場所だった。

「ハハハ」

「……ここって、ああ。万丈目さんが来る予定の」

この枯れた井戸は昔から雑魚カードと呼ばれたものが捨てられてたらしい。辺りを見渡すが精霊らしきものは見えない。

「……あれ、見えない？」

そう、見えない。気配すらない。自分はそれが見える人で、ここにはおじやまモンズ

ターを初めとする精霊達が居たはずなのだ。が、見えない。

「見えないって、な、なにか居るの!？」

「いや、おじやまブラザーの黒と緑がいる筈じゃないですか。そう言えば……美奈さんは精霊とか見えます?」

「あ、そ、そうね。そうよね。私はそういうのは見えないから」

「見えないだと……まあ。でも。美奈さんってどちらかと言えばリ Arist 寄りですかね。カードの絆って信じます?」

「なにいつてるの?」

「……なんでもないです」

思った以上には真顔で即答されてなんか怖い思いをしたが、それはそれ。ただそんなのが見えない美奈さんがここに連れてきた意味。それはつまり、あれじゃないのか。

「ねえ、こここの下降りました?」

顔を向けると同時に逸らす相手。降りてないのは分かった。

「よし。降りましょう」

「嫌よ!」

今度は真剣な顔つきで、もうそれこそ鉄の意志と鋼の強さを持った声で即答された。

「……なんでここに連れてきたんです?」

「それは、そうね。……貴方が色々動いていることは分かつてるのよ。だから、怪しい場所を教えてあげた。感謝しなさい」

「……つまりここで、なにかがあつて、やべえよアイツ連れて来て処理させよつて事です？」

「それは違うわ。貴方に舐められているみたいだから、私だつて……」

「その言い方するなら、ここのヤベエ事をそのまま解決した方が良くないですか？」

「っ……」

口がどんどん閉じて言つて、代わりに突き出された手を躲す。怒つてるのは分かつた。なぜ怒られているかは分からないが。

「大体、私を無視するなんてどういうつもり？ 普通はもつと貴方から来るべきじゃない」

「ごつめんなさい何の話してた？ 今話変わったよね？」

「私が来てから数日ぐらいよ。それから私は私とも十代とも会わずに1人でふらふらと、たまにあつたの見た時は遊んでるだけ」

「それは友達と会う時は遊ぶ時以外なからうて。学生ですし。でも美奈さんは……」

「とにかく。私の話はいいのよ。貴方の話をしましょう」

「付いてけないですクイーン」

「その呼び方は止めなさい。ノーズで付きまとわれてた奴らのことを思い出すから」
「えっ？」

なんやかんやで落ち着いた頃。

「話を戻すわ。ここに居るのは精霊なのよね。なにか起こったら精霊の仕業。じゃあ見える貴方が対処するしかないじゃない」

「見えない美奈さんが異変を感じたつてのを考えるに多分誰でも見えると思います。精霊って決まった訳じゃないですが。ここで異変を感じたなら精霊っぽいですよ。ちようどこの真下に捨てられたカードの束があるなら尚更」

恨みとか妬みで実体化して生徒達を襲う。そんな事があるのかと言われれば、ある。精霊が現実の人間をおそう事件。現在発生中の三幻魔もそれだし、サイコショットカーの精霊が生贄求めて大暴走なんて事も起こったり、精霊が人形に乗り移って闇のゲームを仕掛けて来るなんてのも起こる。

その類の。つまり精霊がなにか起こしている事件つてのが、現在進行形で起こってるのではないか。それがもしあの赤いドレスの事件に繋がるなら？ この島は精霊が実体化しやすい。三幻魔計画によってデュエルエナジーとやたらに満ちあふれているからだ。

「……調べてみますか。下に行きますよ」

「正気？」

「待つてて結構。なんなら帰りまで送りますか？」

「そんな事をされる覚えは無いわ」

ツンとしてそう言い放つ。ここで下に降りないなら何故ここまで連れてきたのかと言いたい。

「凄いですね色々と。流石はクイーンと言った所ですか？」

「物理的なハンデを背負いたいのかしら。安心しなさい。ただの蹴りよ」

「骨砕けそう」

「怒らせたいの？ 折れることはあるかもしれないけれど、そこまでの力は無いわ」

「怒ってますよね」

この人のボディタッチ？ は容赦が無いので本当に貰わない内にさっさと下に降りた。ちょうど地に足ついたぐらいで、上から声が聞こえる。

「いい！ 絶対にそこから動かない事！」

「……はーい」

「絶対よ！ 姿が見えなかったら見つけ出して叩き潰すから！」

「……………」

「い、居るなら返事しなさい！ 秒で返信しないと……」

「めんどくさいです！ 早く降りて！」

こちらに言葉の嵐を投げつけながらゆっくりと降りてくる美奈さんの口は、1度足を地面につけるまでの間続いた。やたら怖がっているが、何があったんだろうか。取り敢えずちゃんと降りたことを確認したので先に進む。

……いや、進みたかった。が正しい。

「あら、思ったよりも綺麗な場所ね」

降りてきた理不尽の塊は呑気そうにそんな事を言う。それはそうだ綺麗なはずだ。

「ですね、きれいなフローリングな感じですからね。いやそう見えるですけどね」

「それに、壁も綺麗じゃない」

「きれーに塗られた白い壁ですはい。多分内側だけです。所で美奈さん。今足動かします？」

「そんなの当たり前……」

後ろを見るとぐぐつと力を入れて歩こうと頑張る美奈さん。動かない様だ。自分も動いてないのだから。

例えばの話をしよう。目の前の自分たちが見えている景色が、徐々に全く違う景色に変わっていった時。人は気がつくか。正解は割と気が付くまでに数秒はかかるということ。個人差があると思うけど。

「……」

無言の眼力で圧を飛ばしながら必死に動こうとしている美奈さんを見て少し笑いそうになる。なんだろうか、ただほんとに必死で声も出さない。

「ふむ。枯れ井戸の底に降りたはずが気がつけば家の中だった。しかもどうやら床は粘着テープのようにくつつくらしい。罠か……罠だとしてそんな雑な罠にかかる奴がいるだろうか。いや、いる。これは粘着テープの家ですね。守備力500以下らしいですよ自分も美奈さんも」

《粘着テープの家》

通常罠

相手が守備力500以下のモンスターを召喚・反転召喚した時に発動する事ができる。

そのモンスター体を破壊する。

「でも粘着テープの家ですか。言い方悪いですが、いかにも捨てられてそうな効果のカード。つまりまあここに居る精霊的な奴の仕業かも。見えないピアノ線とかじゃないだけマシ……いや、ピアノ線はカード化されてないか」

「言ってる場合?」

罠に掛かったことを認識したからか、それ以外の理由か。焦る声が後ろから聞こえ

た。正直やばいとは思うが、どうしようもない。

「しかし粘着テープの家にしては小綺麗ですね、幻惑系のモンスターもいるかもしれないですね！ ノーフエイスとか？ 有名所ならそこですかね」

「し、知らないわよ！ 粘着テープの家？ それカードの名前？ なんて楽しそうなのよ！ そんな事はどうでもいいから！ 早く、はやく！」

「早くと言われましても」

粘着テープの家。カード効果通りに解釈するなら捕まった対象はもれなく破壊される。つまり命が危うい。罠に掛けた対象の気配すら感じられない。ただ。

「よっぼどの趣味じゃなければ、今生きてる時点でこれ以上の害は無いですよ。やる気ならもう終わってます。落ち着いて下さい」

「落ち着けて言われても……！」

何かしら接触する為の粘着テープなのか、ネズミ捕りよりマシだけど、いくらデュエルエナジーに満ち精霊の力を発揮しやすいこの島でも、ここまでの力を出すのが限界なのか。試す方法として浮かぶのは……

「この罠を貼ったモンスターのみなさーん」

声を大きく上げる。瞬間、空気が変わった。そして動き始める。間違いなく1体じゃない気配。

「何が目的でこんな事をー？」

「ちよつと、急に独り言を話されたら違う意味で怖いわよ！」

「あ、いや、その。……後ろかな」

「後ろって……」

後ろの方。美奈さんの真後ろ。もはや密着してるのではないかという程に近い場所に、それは居た。赤いドレスを着た女。よく見ればそれは女の子と呼ぶにふさわしい顔で、足元は宙に足場がある様に浮いていた。

『見つけた』

金の髪が目を惹く少女は微笑む。今この瞬間を理解出来ない美奈さんはただ立ち尽くして。一切の動きを止めた。

『待ってたの。私の……』

女の子が話し始めるが、目と鼻の先にいる人物はピクリとも動かない。立ったまま気絶している。と言ってもいい。

『私のマスター』

そしてこの精霊とやら、超絶面倒そうな雰囲気醸し出していた。



「本当に？」

「ああ本当だよ」

そう優しく、父は娘言った。その言葉に少しだけ戸惑いながらも、娘はカードを手渡す。

「……じゃあ。ばいばい。またね」

またね。と言つてカードは手渡された。娘が部屋に戻ると、父は使用人を呼びつけて、受け取ったカードを渡す。

「もうこんなものは必要ないだろう。処分しておけ」

「はっ……ですが」

「構わん。どうせ娘は気が付かない。騒いだのなら新しいのを買えばいい」

「左様で、ございますか」

捨てられる筈のカード達。だが使用人はそれをするのは少し罪悪感を感じてしまい、それらを寄付した。デュエルアカデミア。このカードの価値は分からないが、このカードを使う学校に寄付するなら、使われるなら、捨てられるよりもずっとましだろうと。

気がつけば、数枚のカードのみが回収され、残りは全て井戸の中。枯れ果てた、誰も来ない井戸の中。その中でカードは待った。

「またね……またね」

待てども待てども来ない少女。いつしか動ける様になった身体は自然と外へ。動き出す。少女を探して。あれから何年経っただろうか、今ではすっかり成長しただろうか少女を思いながら。

「また一緒に遊ぼう」

その願いが叶わない事は、分かっているのに。



『私のマスター』

ふわりふわりと浮遊する女の子は言った。ここは枯れ果てた井戸の中。捨てられたカード達。

そしてここは、カードの精霊達の力を発揮する為に必要なデュエルエナジーに満ちた島。怨みに満ちた精霊達が動けていてもおかしくは無い。そんな中に、まるで炎に向かう蛾の様に、自分は足を踏み入れてしまったことを自覚した。

「あの一」

心の底から来る恐怖を抑え、自然なトーンで声をかけると少女が振り向いた。綺麗な

赤いドレス、艶やかな長い髪。ただそれよりも、少女の姿で目に付く場所があった。ドレスと同じ、赤い靴に。それは。

「……げっ」

目だ。

その靴には、大きな一つの目があった。こちらを見つめる大きな目が。ギョロギョロと大きく見開きこちらを見つめる目があった。

「……朱い靴、さん。でいいですか」

それを見て、そう呟いた。靴の目が、目を細めて睨みつけてくる。同じく少女自身の目も。

『だあれ?』

「自分の事より聞きたい事がありますね。私のマスターと言ってましたけど、私のマスター候補はもつと居たでしょう? 今までデュエルして来た子達はマスターじゃないんですか」

『……違う。違うよ。私のマスターは、私の事を覚えてるもん。みんな違ったの。でも』少女の足が、地についた。カッンカッンと音を鳴らして、目の前に。

『貴方、私を知ってるの?』

「知ってますよ。こんな可愛い女の子になるのは聞いてませんが……自分が見た事ある

のは靴だけです」

朱い靴。それはデュエルモンスターズのカードの1枚。それは目の前の少女がそれの精霊である証。

『じゃあ貴方が私のマスター？』

「違います。そして多分ですけど、もうマスターは来ませんよ。ここがどんな場所なのか。自分より、よっぽどそっちが知ってる筈です」

赤いドレスの女。それとデュエルしたのは多くが女性。デュエルをした人等は皆、意識が戻らない。思いもしなかった所で見つけた。この事件の犯人を。精霊。カードの精霊。だとすれば尚更、無視出来ない。

『どうしてそんな事を言うの』

「どうして、ですかね」

少女が何も無い地面を踏みつける。それに合わせて自らの身体が下に押し潰される感覚と共に膝をついた。逆らおうとかそんな次元じゃない。

「これは、そ、そんな効果でしたね」

『意地悪な人嫌い』

目の前から感じるのは明らかに人の物では無い雰囲気。自身の能力に合わせた力を現実で使えるっぽいこれ。逆らえず、立ち上がれない。実体化した精霊の前には、悲し

い程に無力だった。

『でも。初めて。私を知ってる人。名前は?』

「名前の前に身体を自由にしてほしいんですがね」

『おなまえは、なあに』

言葉が後になるにつれて、身体にかかる力が強くなるのを感じる。後少しでも強くなれば顔と地面がくつつく。その瞬間、まさに罠にかかった獲物の様に容易く命を刈り取られてしまうだろう。

「分かりました!」

慌てて名乗る。自分の名前と共に力が弱まり、どうにか耐える事が出来た。

『忘れないで。貴方はもう罠の中。罠が無くて私の力には逆らえないし……』

少女が目線を送ったのは、未だに動かない美奈さんの方。周囲にはいつからから、黒や紫色をした霧の様なものに囲まれていた。その霧は幾つもの顔が無数に集まっている様にも見えた。

『逆らえても逃げないよね』

「魔法と思いましたけど、これは……怨念集合体か。なるほど確かに逃げられませんね」

《怨念集合体》

通常モンスター

星2／闇属性／悪魔族／攻 900／守 200

恨みを持って死んでいった人の意識が集まってできた悪霊。人を襲いその意識を

とりこんで巨大化していく。

目の前だけじゃない。多く、多くの精霊が居る。罨の中、自分より強い敵、人質。この状況を打破するのは困難。だから考えた。考えるしか無い。この状況を抜け出すなにかを。

「……こうなっちゃってしまっは。ですね。でもなぜ、自分を罨に？ 今まで通りデュエルをすればいい。罨にかける必要なんて何一つ無いじゃないですか。目的は、そっちの気絶したお嬢様では？」

『マスターになつてくれるなら、この子じゃなくても良いの。そして、罨を貼った理由。それは、貴方が他の人とは違うから』

「違うとは」

『死体が動いていたら、怖いでしょ』

「それって……本当にどういう意味ですか」

『でも、でもね。ふふっ。私は貴方が気に入ったの。お話し出来るし、思っていたよりも、想像以上に、他の人間と変わらない。なにより、私の事を知ってる。ねえ、私のマスターにならない？』

「死体呼ばわりは新手のイジメ？ 結構酷いこと言われましたが……」

なにか引つかかるが、それよりも。考えつく限りのことを試すしか無い。とデュエルデイスクを起動させた。

「条件があります。デュエルしましょう」

少女が、あからさまに美奈さんの方を睨む。怨念達がより多く現れるが脅しに付き合ったらどうせ負けだから無視だ。

「貴方の目的はマスター探し。自分達2人を逃せばまた最初から。別の人今から探します？ こんな言い方は酷いですけど、これから先、貴方の事を知ってる人は少ないですよ」

『……』

怨念達が自分の周囲にも漂い始めた。それでも続ける。

「そちらが勝てばマスターにでもなってやります。でも、もしこちらが勝てば」

『勝てば？』

「貴方とデュエルした人。意識が戻らない人も居ます。理屈は知りませんがその人達を解放して欲しいです。ついでにそこで気絶してる女王様も外に出してやって下さい」

『私がその条件を……』

「因みにですが、自分は解放してくれなくても構いませんよ」

少女の動きがピタリと止まった。周囲の空気が凍りついた様に。壁に飾られている美しい絵画の様に。

『……………どういう意味』

「そのままです。貴方が勝てば思いのままに。自分が勝てば自分以外を解放。その後改めて自分をどうこうするなら、付き合います。話しましょう。まず取り敢えず、自分以外の事でゲームをしましょう」

『…………デュエルの力で私を倒しきるために、無理にでもデュエルへ持っていきたいの？』
「自分の出せるパワーなんてたかが知れてます。貴方を消すまでの力は無い。たとえ闇のゲームになったとしても。自分じゃあ無理です。とても警戒されていて、わざわざデュエル以外の方法で罠にかけられたのが、本当に理解出来ませんね」

疑問ではある。これ程までに丁寧な罠。まるでデュエルでは太刀打ちできないと思つての罠。ことデュエルに置いては人間の2歩先を行く精霊たちが、何故これ程までに自分を恐れるのかと。

そして、ここに入ってから消えないその疑問の答えを、ようやく少女は口にした。

『…………幻魔の扉』

静かに、言った。その声を微かに、ほんの微かに震わせながら。

『悪魔では、有名なの。それを貴方はデュエルによつて封じた』

確かな恐怖と畏怖を持つてその名を告げる。幻魔の名を。理解した。その力のほんの一部を抑えただけでもこの恐れられつぷりにその強大さを。

『だから、貴方が来ると分かった時。私達は罠を張ったの。ずっと見ていた。貴方のデュエル。安定したものじゃない。だからこそ怖かった。そんなデュエリストが、なぜ……不気味。そんな貴方が真正面から私たちの罠に掛かったことも含めて』

虎の威を借る狐の気持ちだ。意図せずだがそれを感じた。恐ろしい、恐れられている事は結構だがそれにしても恐ろしい。もし自分の力が弱い者だと知られるその瞬間が、今この時に訪れる事が。

『でも、もし力があるのなら私達の罠には掛からない。幻魔の力を封じ込めるほどの力があるなら尚更。安心した。だから、安心して受けて上げる。そのデュエル』

ふわりと少女が浮遊する。その左手には、真っ赤なデュエルディスクが浮かび上がり、デッキをセットするホルダーから、触手の様なものが飛び出した。

「これはっ……!」

足を固定されている自身は避けられもせず、触手はポーチの中に潜り込み、40枚のカードを、目の前で奪い取った。

カードを奪い取った触手がホルダーへ戻る。カード達はピツタリと、デュエルディスクの中へと収まる。

『ふふふつ。私、いつもこうして遊んでもらっていたの。マスターが、デッキを2つ用意して、戦わせるの。今までの人達は、2つもデッキを持つてなかったみたいだから、代わりに私のカードを貸していた。1つも持つてない子には、半分こしてデュエルをするの。でも安心して。取ったデッキはデュエルが終われば、ちゃんと返す。この子達のマスターは貴方だから』

自分のディスクにセットされたカードを優しく撫でる。だが次第に、血管が浮き出るほどに力を入れ、カードに指をかけていた。

『羨ましい。マスターが居るカード達が。そして憎い。カードを通して感じるの。カードを大切にしないマスターを。大切にされてるカード達も。嬉しい事も悲しい事も、全部全部感じられて。私達は、もう何年も、そういう事は無いのに』

カードたちの喜びも憎しみも等しく、その少女にとっては恨めしいんだろう。

『貴方は、大切にしてるのね。私にも、してくれる?』

「……」

『じゃあ始めましょう。デッキが無いなら私の……』

少女が言い切る前に、40枚を超えるカードを取り出すとデュエルディスクにセットした。

『……やっぱり。貴方はある。いっぱいカードを愛している』

「愛してるとか、期待が重すぎます。本当に。でも少し納得しましたよ。今までの人達が全員負けた理由も。……そして少し、ほんの少しだけ怒ってます」

『……怒る?』

疑問を浮かべる少女に、少しだけと言ったが、明らかな怒りを、押さえつけながら言った。

「返すからOKじゃあ無いですよ。人のデツキを、こちらの了承無しに取るなんて。それで負けたら起きれないと来た。そっちがデュエルを恐怖の対象にしてどうするんですか。マスターを待つどころか、マスターの対戦相手まで消してしまう様な事ですよ」

『良いの。私のマスターだけ居れば。マスターが私を動かしてくれれば』

「……なるほど」

もはや口先で語る必要も無い。互いの想いを乗せた、「デュエル」の掛け声で決闘が始まった。先手を取った少女は、カードをドロー。

『闇の誘惑。カードを2枚ドローし、手札の闇属性モンスターを除外する。除外するのは、メルキド四面獣』

除外されるのは、まるで阿修羅像の様に、否。阿修羅像を超える四面に顔が存在する生首モンスター。それが闇に飲まれ、代わりに闇から吐き出された2枚のカードを少女は躊躇いもなく受け取ると、すぐさま使用した。

『モンスター、カードをセットして終わり』

「自分のターンドロー。……セットして終わり」

『私の番……私が召喚するのは、魔界発現世行きデスガイド!』

赤い髪が特徴的な可愛らしいバスガイドが、生きているかのような、なにかの呻き声のような不思議な音を上げるバスの中から降りてきた。その後ろについて降りるのは真つ赤なボデイの丸っこい犬。

『その効果で、魔犬オクトロスを特殊召喚』

デスガイド 攻撃力1000

オクトロス 攻撃力800

『罨。闇次元の解放! 除外されている闇属性モンスターを特殊召喚。闇よりいでよ、メルキド四面獣』

メルキド四面獣 攻撃力1500

既に4体のモンスターが展開された。明らかに不味い。流れは完全に少女にある。

『手札の、このモンスターはメルキド四面獣と他1体を生け贄に特殊召喚出来る。メルキド四面獣と、魔犬オクトロス2体の獣を墓地に、現れて。仮面魔獣デス・ガーディウス!』

その悪魔は、知性の欠片も感じさせぬ奇声を上げてこの場に現れた。あたりを見渡

し、匂いを嗅ぎ、敵を見て吠える。だがそれから感じる闇の力は獣とは思えない程に強く、コイツにかかれれば、たとえ伝説のドラゴンでも一瞬で蹴散らしてしまうだろう。と思える程に。

デス・ガーディウス 攻撃力3300

『墓地に送られた魔犬オクトロスは、デツキからレベル8の悪魔族モンスターを手札に加える。私に加えるのは最上級悪魔族、ダーク・ネクロフィア。彼女の召喚には墓地に眠る3体の悪魔族の魂が必要』

『今の墓地には2体しか悪魔族は居ない』

『だから、私はセットされているモンスターを反転召喚。彼岸の悪鬼 グラバースニツチ。このカードは場に「彼岸」以外のモンスターがいる時に破壊される』

姿を現してしまつたが為に、無残にも悪魔は墓場へ送られる。そしてこれが勝利への布石である事は、この場にいる誰もが分かつていた。

『グラバースニツチが墓地に眠る時。新たな「彼岸」の悪鬼をデツキから呼び覚ます。現れてファーフアレル！そしてファーフアレルも、同じ様に破壊！』

「ファーフアレル……これは、このターンで」

『そう。ファーフアレルが破壊された時の効果は、モンスター1体をエンドフェイズまで除外する。その得体の知れないセットモンスターを除外！』

たった1枚の、唯一のカードは次元の裂け目へ消えていった。少女の言う、彼女の召喚とやらの準備のついでに。余りにも呆気なく。

『これで、彼女の召喚条件は揃った。墓地に存在するデスガイド、オクトロス、ファーフアレルを除外してダーク・ネクロフィアを特殊召喚!』

悪魔の魂を糧に、闇から滲み出る。壊れたマネキンの女性が、同じ様に壊れたマネキンの赤ん坊を抱きながら。対峙するものが感じるのは、恐怖と、色気と、得体の知れないものに出会った時に感じる言葉に出来ない感情である。

ダーク・ネクロフィア 攻撃力2200

今、少女の場には3体の悪魔。そのうち2体は最上級モンスター。

『これで、終わり。そして初めまして……マスターア!!』

容赦の無い総攻撃が襲いかかる。デスガイドの一撃を受け、ダーク・ネクロフィアから放たれる怨念から繰り出される二撃目を受けるその時……

「気が早いですよ」

怨念は弾かれた。目の前に、怨念攻撃に割って入るようになってきた影に。少女は舌打ちをしながら相手の手札を見る。1枚、確実に1枚。手札が減っている事に気がついた。

『どうして……じゃま、なの』

「シグナル・レッド。それが今の攻撃を防いだカードの力。相手の攻撃に合わせて手札から特殊召喚されたコイツはその戦闘を請け負い、そして1度だけ破壊されない」

それはある意味当然の結果。防がれた事により本体へのダメージは、たったの1000ポイント。

自分 LP3000

『それでも。私がお有利。メインフェイズ2に入って私は、この場にカードを1枚伏せる』『おっと、伏せる前にやる事をやつて貰いますよ』

『何を言つて……』

バトルを終えたその瞬間に、動いていた。目の前に迫る鋭い剣先の圧で少女はようやくそれに気がついた。

『ぐう、ああっ!!』

カードの精霊でもある少女は瞬時にその力を見破った。デス・ガーディウスを除く全てのカードの力で、辛うじてその剣を防いだ。

「拮抗勝負。自分の場に何も無い時に手札から発動できる罫で、自分の場のカードの数と同じになる様に、相手の場のカードを裏向きで除外します。自分の場は拮抗勝負1枚なので、1枚を残して除外ですけど、デス・ガーディウス以外を消しましたか」

拮抗勝負、同じ数になるように。聞いただけではまるでいい勝負のように聞こえる

が、そんな事など断じて無い。

「責めて、こつちを取るべきでしたね。相性とかそんなもんじゃ無いですよ。それ以前にデッキの内容をすべて知っているこつちが有利です。どんなドローをしても……そのデッキの限界は知ってます。そういう意味でも、人のデッキ取るのはオススメできませんね」

『どうして、よつぽど、絶対。私の方がデッキを上手く使える筈なのに』

カードの精霊である少女の自信を感じる。確かに精霊はカードの扱いに自身があるようだ。元より人間に遅れを取るなど無い。そんな事を言いたげな顔で。

「なぜそんなドロー出来るのか、とか思いますが上手く使えてもって奴ですよ。単純にそのデッキはまともな戦闘しないデッキに弱いんです。戦闘ガッツリして、デカイの出すデッキ相手には強いんですが……で、ターンは続けますか？」

『……ターン、エンド』

先程伏せたセットカード1枚と、残ったデス・ガーディウス。手札2枚でターンを返した。同じタイミング、ファーフアレルで除外されたセットモンスターも帰還する。

残り手札とセットカード。これなら行けただろう。もしも少女が完璧なドローをするならば、そのデッキの最高のドローをするならばそれはもう、手の内全てをさらけ出してに等しい。

「自分のターン。反転召喚、カオスポッド。どうします?」

『つつ……くうつ……!』

苦しい顔をする少女。どうにも出来ないだろう。

『デモンズ……チエーン……』

魔を封じる鎖がポッドを縛り付ける。残る希望はデス・ガーディウスのみ。だが。

「強制転移で」

頼みの綱は、相手のフィールドへ。少女の場には、少女自らで封じたカオスポッドが。

カオスポッド 攻撃力800

「後は、マスマティシヤンを召喚。効果は使いません」

マスマティシヤン 攻撃力1500

「バトル。カオスポッドにマスマティシヤンで攻撃。ダメージは受けましたが、あるならどうぞ」

ダメージを受けながら、少女は無言で返した。

「最高のドロロー。ですね」

デス・ガーディウスに攻撃を命じた。予想通り、防がれることは無く攻撃は少女を貫く。デュエルの幕引きは醜い獣の咆哮だった。

「……手札。予想しましょうか。悪魔族カード。それも墓地に落ちると効果を使える

カード。と、ダークネス・ネオスファイア」

少女の手からこぼれ落ちたカードは、魔サイの戦士とダークネス・ネオスファイアのカード。

「確かに完璧。伏せデモンズ・チェーンですからフェーダーとかトラゴエディアよりはそっちが良いですからね。と、返してもらいましょか」

いつの間にか、粘着テープの家は消え失せ、元の洞窟へと辺りは戻っていた。倒れ込む少女に近寄り、デッキを回収する。そして、デッキが無くなった少女のデュエルデスクから、新たな40枚のカードが浮き出てきた。

「……お返しさせてもらいますね」

躊躇なく新しく出たそれを抜き取りデッキを見る。全部見るのに10秒。どんなデッキか把握するのも時間はかからない。

「これを貸していたんだとしたら、本当に尚更。タチが悪いというか。いや。何となく使い込まれてるから分かりますけど……でもこれはデッキじゃない」

上級、儀式、融合、下級。持っているカードを取り敢えず詰め合わせた様なカードの束。その中には、3枚の朱い靴が入っていた。

『……返して。私と、マスターのデッキ』

「何だかんだ言って、マスターは決まってるじゃないですか。なんでこんな事をしたん

ですか」

ルールも知らないマスターとのデッキ。他人から見ればカードの束だが、少女にとっては自分が使われているデッキ。そう、紛れもないデッキなんだ。

「……まあもう理由はどうでもいいです。意識起きない人達って、なんで起きないんです?」

『遊んでもらってるの。マスターの代わりに……少しだけ、新しいマスターが来たら、帰すって言うって』

「すいませんが今すぐ解放して下さい。トラウマになる前に」

少女は素直に頷いた。周囲の罨が無くなっているのも負けた条件を飲み、美奈さんを解放するためだと言った。精霊だからこそ、デュエルでの条件は絶対だと。美奈さんが見えない何かに持ち上げられフワフワと宙に浮く。適当に外に出せばいいと言ったので、言葉通りに地上まで運ばれ、下へ降る梯子の手前に降ろされた様だ。

「よし……条件通り自分は解放されてないですね」

周りには逃げられない様に怨念達がクルクルと回っている。まあ仕方ない。それに、やりたい事がある。

「でも正直、自分も興味あるので良いです。で、まずは……ですが」

ポーチの中から数100枚のカードの束を取り出した。そして少女のデッキを再び

手に取る。

『ああっ!』

「ストップ。思い出のデッキに難癖付けるわけじゃないですよ」

少女のデッキから、3枚の朱い靴を取り出すと残りをそのまま少女の元へ。手渡された少女は何が何だか分からない顔をしている。

「朱い靴さんなのに、朱い靴さんのデッキじゃないのは頂けないでしょう。このポーチには詰められるだけのカードとデッキが入ってます。……正直足りませんが、今は仕方ない」

『なに、えっ?』

「朱い靴って凄く難しいけど……最高のドロ―想定デッキを……いや、そんなの許せない。許せるわけが無い。やはり作れるだけ作る」

戸惑う少女を尻目にカードを広げデッキを考える。ああでもない、こうでもないという言を言いながらカードを選んで行く。それが何をしているかは理解出来るが、何故こうなっているのか少女は理解出来ないのか驚きの顔のまま動かない。

「足りん……後ろのカード達い!」

圧倒的にカードが足りないこれは無理。大声で声をかけると驚きの余り見え隠れする他のカード達。まどろっこしいのでそちらに行くともた動かず固まったままだった。

「見つけた。カード本体は奥ですか」

『まっ、待つて……何を……』

「何をつて、デツキ。組むんです。使えるカードがあるかもしれません」

『どうしてデツキを……』

「どうしてもこうしてもありますか！ 思い出云々あるんでしょうが、あれはデツキじゃない。それはデュエル出来るあなたも知ってる筈。どう探してもマスターは1人。どのデツキを使ってもマスターのデツキは1つ。もう会えないと分かっているんですよ？ ならそれは大切にして下さい。けど、これから先の貴方が、デュエルするには思いの出のデツキが必要じゃない。今戦うデツキが必要。っていうか、デュエル挑むなら普通そうする。人のデツキは取らない」

『わ、わかる。けど、なんで？』

「分かるなら、良いんです」

奥のカードたちを全て持つてきて、また1人でブツブツと言い始める。30分も経つと、そこそこデツキらしい感じになったものが出来上がった。1号と名付ける。さあここからだ。

「プロトタイプ1号。さてと、試しますか」

『……………』

「ぼーっとしてないでほら。貴方のデッキって本当に難しいんですからね。まずは無理矢理、貴方でトドメをさせる様に組んでは見ましたが、さつき一人回した時はあんまり……」

『どうして、デッキを？』

「ん？ 強いて言うなら、好きだからですかね。あ、勘違いしないで下さいよ。マスターとか、ずっと使えとか言われても無理ですからね。ただ、デッキ作るの手伝ってとかなら手伝いましょう。そして、そのデッキを使っている間は、きっちり使い切りますよ。それこそ、その間だけならマスターでも良いです」

『マスターにはならないって、言ったのに』

「ああ、いや、そのですね……こういう言い方しか知らないんです。脳内の選択肢がとてもしゃないが上等じゃ無い。励ます時は頑張れれか思い付かない感じ……みたいな」

上手く言葉に出来ず目の前で口籠る自分に、少女は笑った。

『……デュエルは、良いけど。さつきと同じ結果にならない？』

「なる。けどまあ、実際に他の人が動かしてるのを見た方が分かりやすいんです。さあ始めましょうか！ 怨念さんも、後から作りましょうか？」

周囲を浮遊する怨念が、その言葉に反応し、回転の速度を増した。

「分かりやすい。っていうか、その。今更なんですけど。貴方達って、別にマスターとか

居なくてもデュエル出来ますよね?」

『実体化出来るのは、この島だから。デュエルエナジーと三幻魔の力があるここだから』
「それじゃなくても、精霊世界とかあると思うんですが。それでもやっぱり、この世界でデュエルするのは特別なんですか」

『そう。特別。私だって、マスターが言ってくれたから。女の子の身体がいつの間にか出来てたの。あなたは可愛い女の子ねって、マスターが言ってくれたから』

「不思議……がそこら辺は後から聞きます。今は、デッキ作りましょう。いや、何となくですけど。朱い靴さんはワンチャンあると思ってるんです」

そこからは、デュエルの連続だった。一人で調整し、デュエルして試し、その間にほかの精霊たちも集まって来る。

「ふむつ。こんな、感じだろうか」

『……マスターも、こんな風に遊んでくれた』

「ああ、1人で2つのデッキ回す奴ですね。少し寂しい気持ちもこみ上げるんですが回さんと分からないですよね自分は」

『私が出ると、相手は何も出来ないの』

「……1人で回してると、勝たせたい方のデッキを勝たせちゃう事はあります。気持ちも分からなくないですが。正直朱い靴さんは強くなイタタタタ!」

『意地悪、嫌い』

「しょうがないですよ！　こればかりは。だからデツキアレコレ悩んでるんです！」

『弱かったら、捨てられる。ここに居るみんなはそう言ってる』

「そうかもですね。自分も組んだあと使わなくなるデツキなんていっぱいですよ。でも、時々考えるんですよ。本当に自分はそのカードの全力を出し尽くしていたのかと、弱いのは弱い。けど使い道はある筈。コイツの可能性を全て試した上で自分は弱い、使えないとハッキリ言えるのかと。考え出すと、気になって、結局そのデツキ掘り返してまた弄つての繰り返しです。まあ意地になって、無理矢理でも使って使えるぞ！　って言うまで弄るとは思いますが」

『今は、私が戦えるまで、やるの？』

「……カード本人にそう言われると凄くプレッシャーなんですけど、期待しない程度に待つて下さい。今日では絶対満足行きませんけど。始めたからには必ず、取り敢えず形にまではしますよ」

『じゃあ、期待しない程度に。待つてる』

「はいはい。お待たせしますがしつかり作って持つてきますよ」

『……絶対だからね、また、来るよね』

「当然。……って、それは？」

どういう意味だと首を傾げると、少女は上を指さした。

『帰って良いよ』

「……ふむ」

少女の言葉に、返事をして。再びカードに向き合う。

『帰ら、ないの?』

「もう少しだけです。つていうか疲れました。あんま動きたくないです」

『……危ないよ?』

「危ない目に合わせるならもつと前だと思うんです。それこそ粘着テープの時点ですらにでもしてるはず。だから信用します。自分は貴方のデツキを作る。だから貴方は自分に危害を加えない。ギブアンドテイク。そう出なくとも興味が湧いたので貴方のデツキは作ります」

『良い、けど。そんな事言ったら』

「そんな事言ったら?」

少女が答えるよりも先に、様々な精霊達が姿を見せた。色とりどり多種多様な精霊達に、流石の自分でも驚く。

「……皆さん。まずはお話ししましょう。そんなでもって順番ですよ。ホントに。こつちの身体は1つ。脳みそも1つですからね。……1日では無理ですからね!」

その日は、日が暮れ夜になるまで洞窟から出られなかった。洞窟を出たのは、気がついた美奈さんの叫び声が頭上から聞こえたその時。その瞬間の事である。



「……はっ！」

目を覚ます。暗い周囲、不気味に揺れる木々の中。横たわる身体の上半身を起こすと左手が冷たい物に触れる。

「……」

あの井戸の、下へと続く梯子に触れた。

「っ……!!」

この時ばかりは美奈さんも、女の子様な悲鳴を上げた。下から登ってきていた自分は、悲鳴を上げつつも腰が抜けて動けない美奈さんを見て大爆笑し、そんな自分を見たからか、動ける様になった美奈さんは容赦の無い蹴りをと打ち込んできた。

立場が逆転し、倒れ込む自分と立ち上がり冷たい笑みを零す美奈さんの図は10分近く続いた。お楽しみはこれからだ。

第17話 学園の危機

『危ないよ』

朱い靴の少女が、帰り支度をしているその時にポツリと言った。

「危ないとは」

『……やっぱりあなたは変なの』

デュエルの最後、カードを落とした時の事を話し出す。カードを落としたのは恐れもある。その手札は本来ならばここにあってはならないカードで、それがもし本物なら触れる事すら恐ろしいカード達であると。ただ軒並みやばいカードが漂白される自分のカードの中で使えるという事は、少なくとも特別な力など欠片もないはずだ。

「ああ。力は無い。らしいですけど」

『それ自体に無くても、本体がそれを見つけたら、動くかもしれない。それは……』

「……そういえば、話してましたね。カードについて。例えば、かの有名な三幻神のカードは、コピーカードを使った決闘者を焼き尽くした。とか。コピーでは無いにしろ、力が無いにしろ、その類の事が起きてもおかしくない。……えっ？」

少女は頷く。カードは精霊と人間を繋ぐものでもある。ソレがコチラに気づいた時。

そのカードを通して何をされても不思議では無いと。そいえばカードについてそんな説明は受けてないが……いや、流石にこれは何かあったら自業自得か。

『本当ならもう、貴方は魂が——』

少女の続けた言葉。それを聞いた時少しだけ不安にはなった。けれど正直信じられないし、ピンと来ない。だが嘘を付くようにも思えない。

「運が良くてたまたま平気なだけです。でも危険って言うのは、本当にそうですね。普通の精霊である貴方がここまで動けますし」

カードと精霊の力。ここに居る朱い靴を初めとした精霊達から話を聞いた。多種多様な種族、属性の者達からの話を。

『氣を、付けて。強くなってる、私達の力。貴方が来てから。今、幻魔の力が放たれたら。恐ろしい事になる』

「それは知ってます。そつちが話してくれましたからね。カードにまつわる厄介事。特に三幻魔に気がついた人達が求めるのは、命。不老不死」

遠い昔からあった争いの種の一つ。遥か昔から、人にとつて三幻魔は命の象徴だった。生命を操る幻魔の力。特に、求められたのは若返りの力だという。

『蘇生じゃない。今ある我を、多くの生命によつて不滅にする』

けれど、未だかつて幻魔によつて永遠を得たものは居ないという。それでも、人は幻

魔を求めた。セブンスターズの一軒も、それを求めた者が起こした計画の1つなのだ。『本当なら、近づかない方が良い』

「危ないかもですね。まっ、忠告は受け取っておきます」

手を振って、明るい顔で立ち去る。それを見送る少女は、どこか心配そうな顔をしていた。

『……またね』

□□□□□□□□

デュエル・アカデミア。文字通り、デュエルを学ぶ学園。その歴史はそこそ長く、ここに居る長生きのお祖父ちゃんと同じぐらいには長い。そんなデュエル・アカデミアは、今この瞬間、最大の危機を迎えていた！

「……困りましたね」

「立ち話的な感じで話しましたが、校長。本来、発表する前に生徒に話す事では——」

「まあ、困りましたね。という訳で校長、意地でも折れないその意思に敬意を評して、クッキーを1枚多くプレゼントです。ティータイムとか、結構おしやれな事しますね」

「これは有難い。いやしかし、君と話すと心が穏やかになる。君に比べれば、この事なんて些細な事のように感じるよ」

「ははは、ぬかせ老人。本当に男だと何度言えば分かるんだ。移動はよ！　はよ！」

「私なんのために期間を置いたと思ってるんですか。もはや生徒間で君は女性。真偽はともかく、もう後戻りは出来ませんな」

「このジジイ……」

「ほっほ。まるで孫とでも話している気分だ。本来ならば叱るべき言葉遣いですが、許せます。可愛らしい女の子なら尚更」

「見た目だけだぞ？　ハリボテだぞ!」

「——言っている場合かあ!!」

怒声が響き、お茶を啜る2人。校長と自分が驚いて声の主を凝視する。倫理委員会、査問委員会等と様々な呼び方があるこの女性、緑の女を凝視した。

「分かっていますか？　学園の危機なのですよ!」

「まあ、落ち着いて下さい。条件付きですから。慌てずに」

「そうですよ。どうせサンダーのデュエルが解決するんです放っておけば良いです。あと、思ったよりも敬語が似合いませんね。やっぱ怒鳴ってる方が合ってます」

「お前はっ……!」

「おや。出された条件を知っているとは。入学当初から君には驚かせられてばかりだ」
「自分も性別否定から入る人が存在するのかと驚かされてばか——ぐおっ!？」

スパンツ! と綺麗な音がして、スリッパが自分の頬を叩く。そのままの勢いで地べたに倒れ込んだ。

「うおっ、頭があゝあつ——」

「少しは反省しろ。……それより、本当に大丈夫なんだろ——なんですよね。校長」

「ほっほっほ。安心して下さい。万丈目くんは元々強かった。それが、自分を見つめ直し更に強くなつて我が校へ戻つて来てくれた。今の彼はレッドなのですが……そういう他者から与えられる肩書きなんかに振り回されない強さが、今の彼には確かに有る。彼なら、無事条件をクリア出来ます。彼だけ攻撃力500以下のモンスターで戦うというデュエルでも」

「なっ——なんだそれは!!」

攻撃力。それはモンスターの強さを決めるにあたつて最も重要と言ってもいい事の1つ。真つ向勝負でブラック・マジシャンは青眼の白龍に勝てない。それと同じ様に。「どうも今回の条件で戦うのはデュエル素人。その為、ハンデとしてその条件を万丈目に付けて受けてもらう事に」

だが、攻撃力だけで決まるほどデュエルモンスターズは単純なゲームではない事も、

デュエリストなら理解していた。

緑の女に至つては、始めたばかりだというのに遥かに深くそれを理解しているだろう。

「……ハンデ、になるのか」

ポツリと零したその言葉に、校長の顔が首を捻られた人形のように彼女の方へ回転する。

「な、なんと?」

思わず声も出る。この緑の女は、この条件を枷だと思つてはいない。これっぽっちも。焼き魚を食べる際の、魚の小骨程にも気にしていない。その事に驚いたのだ。

「あはは……とと。ようやく収まりました。で、さつき騒いでましたけど、心配いると思います?」

「いや、文字通り相手が素人なら問題無いだろう。仮にも万丈目とかいう生徒はオベリスク・ブルーだった。つまり一番強かつたんだろう?」

「そうですね。けどですね、バーンデッキは使わないと思いますが」

「何故だ?」

「なんか、いや。何でもないです」

「……」

校長がこの話を知ったのはこの後の事だ。彼女が、噂でグリーンデビルと恐れられている事を。目に優しい緑色の服装とは裏腹にそのデュエルは冷酷。そして、その戦術は新緑の緑とも、凍りつく程の冷たさとも違う、全てを焼き焦がす炎のデッキである事を。「でもまあ、使えなくも無いですよ。やらないよりは、やって見ますか」

「何の事だ？」

「なーんでも」

「良いか。お前達が校長も含めて色々やっている事は既に私には分かっているんだ。三幻魔とか言ってたな」

当たり前のように喋る緑の女に「えっ……」と声を漏らす校長、さつきから驚きを隠せない。隠せるはずも無い。自分も隠せてない。いつの間に。

「他を巻き込むなら、被害を最小限にしろ。当たり前だがな。そしてもし、無理なら話は通せ。——これは校長先生。貴方にも言っています」

「は、はい……でもなぜ、関係の無い貴方が三幻魔の事を——」

「あー、うん。多分犯人なら目の前ですよ校長先生」

緑の女と校長の話に割って入った犯人が、自ら名乗りを上げた。そして先程のようにお茶を啜り、飲み干して立ち上がる。

「バレちゃいました。すいません」

「きつ、君は……」

「お詫びはまたいつか、お茶のお礼も一緒という事で。それでは！」

口が空きっぱなしの校長を背に、扉から堂々と部屋を出る。動いたと思えば項垂れる校長に、私は気の毒そうに声をかけた。

「校長。アイツと深く関わるのは辞めておいた方が良かったと思われます」

「……入学早々、コチラに殴り込みに来た生徒ですからね。ああされると、嫌でも関わってしまいますよ」

アイツが出て行つたドアを遠い目で見つめる鮫島校長。そして部屋に2人分の溜息。

「……かくいう私も、アイツに散々やられて、嫌でも関わらざる負えなくなりました」

アイツがトラブルなのか、トラブルにアイツが居るのか。あるいはその両方か。兎にも角にも巻き込まれてしまった者が多少なりとも振り回されるのは必然的な事かもしれない。

「所で、1つ気になったのですが」

「はい、なんでしょう」

「寮の移動について話をしていた様ですが、聞き間違ひなのか。女子寮から男子寮に移せという話に聞こえましたが」

「ええ、そうですよ。彼女は入学してからその話を幾度と私にしています」

「……どういう事なんだ、アイツは」

「いやはや。もしかすると想い人が居るのかも知れませんか。ほっほっほ」

「そういう輩には見えませんが……」

多種多様なトラブルの元。そんなアイツが今、考えている事。想像するだけでも気が重くなる。

□□□□□□□□

「よし、ピツタリぐらいか」

時は進み、万丈目兄弟による対決が終わった後。悔しそうな顔をしながら来るであろう、今日負けたばかりである万丈目 長作の乗る帰りのヘリの前で待つ。ちょうど都合良く来た長作さんがこちらを見つけた。

「……なんだ、君は」

「ふふふつ。万丈目さん。いや、長作さんと呼びましょうか」

「私は忙しんだ。邪魔を——」

「悔しくないんですか？」

一言。たった一言を挑発するように投げつけた。長作さんは、顔の筋肉をこわばらせながら目の前に居る自分を睨みつける。

「勝ちたくないんですか？」

「もう1度言う。私は忙しい。私の負けを見て何かを言いに来たのなら、なんとも言うが良い。だが、私の行動を邪魔しないで頂きたい」

「あれ、負けて悔しくないんですね」

「当たり前だ」

「はっ。実の所は、見下していた弟に負けて悔しくない。条件までつけて負けて、悔しくない。プライドが無い人には見えませんけど」

「くだらん！ 弟が上手だっただけの事だ。マグレにしても……」

「言い訳は沢山ありますね。けども、そうじゃ無い。重ね重ねですが自分は、悔しくないか。勝ちたくないのかと聞いているのですよ、お兄様？」

「先程から、私に何が言いたい!!」

怒りの声。それを聞きたかったんだ。乗ってくれた長作さんへコチラからの提案を言う。そう、悪くない提案の筈だ。

「悔しいなら、リベンジ、しません？」

「リベンジ……だと？」

「ええ、貴方は弟に負けた。自身でデュエル界に進出する目的も挫折した。このまま終わって、また政界に引つ込んで、そこで成功しても、この汚点は貴方の中で一生残る。仮に万丈目……サンダーが将来、デュエル界で名を残したとしても、貴方とのデュエルが話される事もあるかも。その時、貴方はどうしますか。笑いながら「初心者のが弟に敵う筈も無かった。私には向いてなかったんだろう」と笑いながらテレビ番組の受け答えとしますかね」

普通ならなんとも思わないはず。けどこの人は違うだろう。そんな未来があつたとしたら、想像するだけでも。

「予想ですが、許せない」

「想像は勝手だ！ 第一、アイツがそこまでのデュエリストになるかも分かんのだ」
「なつたら受け入れると」

「くっ……それは」

「一生残る汚点には変わらない。それを拭うには、貴方がデュエルで強くなり、自身の手でデュエル界に進出し、そして……然るべき場所で再び弟と相見え、そして真つ向勝負で勝つ。それしか無い。ええ、そう思うんです」

自分の言葉に長作さんは握り拳を強くしている。やつぱりそうだ。そうだろうとも。悔しいんだこの人は。

「そうだとしたて……お前が、私に話しかける理由はなんだ」

「それこそ本題です。交渉しましょう。コチラの条件を飲むのなら、自分が貴方に教えますよう」

「なんの冗談だ？」

「冗談ではないですよ。教えましょう。デュエルを、デュエル界で万丈目グループの名を残す案を。その代わり、色々と、欲しいなみたいな」

「ははは、面白い——冗談を言うな小娘。ただの1人の生徒であるお前が？ 私に？

万丈目グループをデュエル界進出させるとでも」

「そのアイディアを教えるって事ですよ。それが本当か確かめる為にも、デュエルしてみませんか？」

笑い飛ばす長作さんに、デュエルディスクを構えた。

「確かに、貴方の考えてる事もわかります。だから。自分のデュエルをあなたに買ってもらいたい。あなた自身の目で見て、確かめれば良い。

このデュエルはそうですね、貴方に自分の戯言を聞いてもらう時間を頂くためのデュエルとしましょう。貴方が勝てば、自分は今までの全ての無礼を認めて土下座しましょう。それと……貴方は初心者ですから、自分は条件付きでデュエルしましょう」

「ふう……」ここまで大口を叩く子供は初めて見たな。だが確実に、人をイラつかせる才

能はある様だ」

長作さんが指を弾くと、どこからとも無く現れたスーツマン達が、デュエルディスクとデッキを持って来て、装着させた。

「条件を聞こうか、攻撃力0以下のモンスターで君も戦うというのかい？ 私を馬鹿にしに来たらしいからな」

「まさか。自分はそうですね……メインデッキにモンスターを入れないで戦いましょうか」

モンスターを入れない。それは、ソリッドヴィジョンが発達しているデュエルモンスターズでは異端で、デュエルモンスターズを深く知らないものが聞けば、仮に知る者が聞いたとしても異質な事である。

「……舐めるのもいい加減にしろよ!! 見ていただろう？ 私のデッキは万丈目グループの力を詰め込んだレアデッキ！ それにモンスターを入れずに戦うだと!」

「いえす。あと勘違いしないで下さい。モンスターは使います。トークンって言ってモンスターの代わりになる物を出せるカードがあるんですよ。面白いでしょう。他には、バーンと言って直接相手のライフポイントを削ったり、特殊勝利と言って条件を満たせば勝つ。っていうカードもあります」

説明を聞くだけなら予想はこうだろう。なるほど。ならばコイツは、直接火力か特殊

勝利を狙ったヘンテコデツキで挑んで来るのかと。でもそれじゃ普通だ。

「まあ今回は、バーンも特殊勝利も使いませんけどね」

3秒程、動きが止まり。3秒コチラを見つめて、1秒もしない内に怒りで身体を震わせた。

「良いだろう。余程の自信があるそうだ、私が勝った後、君には社会の厳しさを教えてやろう!!」

「乗りましたね。男に二言は無しですよ!!」

火に油どころでは無い。色々ぶち込んだ拳句、直接爆弾を放り込むような形で始まったこのデュエル。先攻である自分は流れる様にドロ―した。

「さあ! 当然ですが4枚のカードセット! 終了です」

罨、魔法ゾーンが埋まる。だが長作に恐れ無し。

「私のターンだ! そんなカード等、吹き飛ばしてやろう。魔法カード、大嵐!」

「罨魔法を消し去るカードですか。じゃあまず一つ教えてあげましょう!」

大嵐の魔法カード。その効力が発揮されるまさにその時、何の前触れもなく大嵐のカードは粉々に砕け散った。

「これはっ!」

「大革命返し! 2枚以上のカードを破壊する効果を無効にして破壊します。伏せカ―

ドが多い時は、相手の魔法除去への対策カードがある事も計算に入れましょう。通れば勝ちなので今の使い方が悪いとは言いませんが」

安易な突破は叶う事なく打ち砕かれた。しかし長作に恐れ無し。大口を叩くだけはあると微かに笑みを浮かべながら、手札のレアカードに手を掛けた。その中には、あの有名な海馬瀬人も使用したカード類も存在するのだ。

「私が召喚するカードはこれだ、サファイア・ドラゴン！」

青色の宝石が表面を覆うドラゴン。宝石の名を持ち、宝石の輝きを放つドラゴンの中の1体。美しさだけでなく、その攻撃力はレベルと比較するとデュエルモンスターズ界の中でもかなり上位の存在。

サファイア・ドラゴン 攻撃力1900

「ははは！ どうだこのレアカードは！ この攻撃力、並のモンスターでは突破出来ない！ 最もお前のデッキにモンスターは存在しないがな。バトルだ！」

サファイア・ドラゴンのプレスがプレイヤーを襲う。セットカードは3枚。

「おーけー、ライフで受けましょう」

セットカードを1枚も発動せず、また手札、墓地から何かを発動することも無くライフポイントでその攻撃を受け止める。それは相手にとっては予想外の事だったらしい。顔の表情から力が抜け落ちていた。

自分 LP2100

「ぐおっ……痛いですね」

通常。通常のデュエリストであればこう思うだろう。まさに不気味と。何かあるんじゃないか？と疑い、警戒するだろう。だがしかし――

「はははは!!　なんだ、大丈夫じゃないか!!」

だがしかし、長作に恐れ無し！

「良いぞ。やはり弟はマグレで私に勝ったのだと、君とのデュエルで実感出来る様な気がしてきたよ。ふふつ、やはり万丈目グループの力を使って組んだ、このレアデッキが！　弱い筈がない」

「……面白い人ですね。あんまり余計な事しなくても良さそうです」

「私は、カードをセットしてターンエンド」

今の長作から、滲み出て――いや、溢れ出ているのは自信！　圧倒的金力を持つてして、圧倒的な力で相手を押し潰し、圧倒的な権力で相手を這いつくばらせる。課金ゲームなら最強の名をほしいままにしただろう。けど。

「んつ」と。さあさあ自分のターンですよ。カード、ドロ―！　よし完璧。セotto一枚で……いや2枚で。終了ですが、その、何か発動します?」

「当然だ！　罨、砂塵の大竜巻。選ぶのは今伏せた2枚の内、一番最初に伏せたカード

！」

長作さんの視線が、体勢が、その雰囲気までもが、明らかになにかを発動するのを待っていた。故にセットカードを1から2に増やしたのだ。その様はまるで目の前に餌がありながらも「まで」をされている犬の様、少し可愛いなと思ってしまった事は心の中に永久に封印しておこう。

「もう一つの効果は使わん。私のターン！ ふつ。いいカードを引いた。本来であればこのターン、私の手札にあるエメラルド・ドラゴンをサファイア・ドラゴンを生贄に召喚するつもりだったが……私は手札から魔法カード、融合！」

「ちよつ」

デュエリストなら驚くだろう。けれど長作に恐れ無し。何のためらいもなく手札の素材を墓地に送りモンスターを融合召喚した。

「手札の神竜 ラグランクとロード・オブ・ドラゴンドラゴンの支配者――を墓地に送り、竜魔人 キングドラグーンを融合召喚！」

そのドラゴンは、上半身を人、下半身を竜で構成する半人半竜の存在。人が手に持つ笛は、余りにも有名なドラゴンを呼び寄せる笛。

キングドラグーン 攻撃力2400

「これで終わりじゃないぞ。先程も言ったように私の手札にはエメラルド・ドラゴンが

居る。そして、このキングドラグーンは1ターンに1度、手札のドラゴン族モンスターを特殊召喚出来るのだ！ 出て来い！ エメラルド・ドラゴン！」

宝石の名を持つドラゴンの1体が呼び笛によってフィールドに導かれた。

エメラルド・ドラゴン 攻撃力2400

3体のドラゴンが、目の前に立ちはだかる。まさにパワーデッキと呼ぶに相応しいデッキ。圧倒している。今まさにこの瞬間に置いて、長作側が圧倒的有利。故に長作に恐れ無し。

「弟とのデュエルでは、私の攻撃を阻む壁モンスターにしてやられた。だがそれも無い今、私に弱点は無い！」

（どれだけ面白いんだこの人）

「そして教えておいてやろう。キングドラグーンが居る限り、私のドラゴンは対象にならない。そのセットカードも使えまい！」

大量展開を得意とするデッキにおいて、警戒するべきは、対象を取らない全体除去である事を初心者である長作さんは知らない。仕方の無いことである。

「バトルだ！ まずはサファイア・ドラゴン、ダイレクトアタック！」

「聖なる、いや……」

悩んだ。大いに悩んだ。あのプライドを打ち砕いたその瞬間、目の前の人はどうする

のかと。しかし手を抜くわけにも行かない。出来ることならこのカードを、来るか分からない第2展開への切り札として温存するべきなのかと。

「……聖なるバリアーミラーフォース―」

無慈悲な光がフィールドを覆い、輝く反射エネルギーは長作の場を全て壊滅させた。

「なんだと、なん、だとお!? わ、私のモンスターが、ぜ、全滅……!!」

一転。長作の自信は粉々に打ち砕かれた。長作さんとしてミラーフォースというレアカードの存在を知らないわけでは無い。だがそれを使われるという感覚が無かった。だからこそ、使われた今。その恐ろしさをその身に刻み込んだ筈だ。

「……」

「馬鹿なつ、そのセットカードは、最初からセットされていた――ならなぜ、サファイア・ドラゴンの最初の攻撃で発動をしなかった!」

「まあ。使う時では無かったからとしか、この辺も後から話しますが」

「ここまで刺さるミラーフォースを見たのは何年ぶりかと、久々にミラーフォースを見直したデュエルであつた。」

「ま、まあ。これ以上カードも無いですよ。自分のターンです。手札から装備魔法、自律行動ユニットを発動。1500のライフを支払います」

自分 LP 600

「そして、相手の墓地のモンスターを1体。自分の場に特殊召喚です。現れる、キングドラグーン！」

半人半竜の存在が、ターンをまたぐ間に持ち主が入れ替わった。目の前に、自分の出したはずの融合モンスターが居ることに納得出来る長作では無く。

「なんだその効果は！」

「死者蘇生の劣化です。そろそろ、こちらも反撃！ キングドラグーンでダイレクトアタック！」

キングドラグーンの一撃は容赦なくライフを削り取る。

長作 L P 1 6 0 0

「このまま終了ですが……」

初心者。ただの初心者なら正直やめてる人も居るだろう展開。少しだけ不安があった。けど……それはいらぬ心配だったみたいだ。

長作さんはデッキトップのそれを躊躇なく引き込んだ。諦めてない。どころかまだ逆転を狙っている目をしている。

「私の、タアーン!! 強欲な壺のカード効果により2枚ドローする」

執念のドロー。最早、長作に恐れ無し。

「私は手札からサイクロンを発動！ その自律行動ユニットとやらを破壊する！」

ユニットの破壊は、キングドラグーンの解放を意味する。場のキングドラグーンは再び、長作の墓地へ眠りそして。

「そして、死者蘇生を発動！ 呼び出すのは当然！ 竜魔人 キングドラグーン!!」

キングドラグーンの雄叫びが木霊する。主人の場に帰ってきたのだと。そして長作もまた叫ぶ。己の意志を持って。

「私は2度も、負ける訳にはいかんだ！ キングドラグーンで止めだ！」

キングドラグーンの一撃。それは相手に届くその瞬間。

「和睦の使者」

竜魔人の一撃は、か弱い女の使者達によって作られた障壁に阻まれた。散っていく、キングドラグーンの咆哮が。

「くそっ……ターンエンド」

次のターン。長作さんが初めて渴望したターンだろうと言うのが見て分かる。本気なんだ。自分でも思い出せる程だ。始めた頃のデュエル。勝負の楽しさを、理不尽さを知ってなお楽しみが勝った時。これ程明確に、心の底から欲した物があるだろうか。純粹な気持ち。次のターンが欲しい。そう、知らず知らずの内に引き込まれていた。デュエルモンスターズに対する気持ちに。

「良い感じですね、自分の番です」

こちらにも負けて居られない。それに、このデュエルはもう少しで勝てるんだ。そう思っていた。その油断を勝利の女神が許さなかったのか、またはデッキが許さなかったのか。ドロークカードは今この瞬間で、最も必要の無いカード、一時休戦のカードであった。

「……微妙な」

では打たずにこの場を凌げるか。否。

「一時休戦の魔法。互いにカードをドロークして、次の貴方のターンが終わるまで、互いのプレイヤーはダメージを受けません」

こここの休戦は大きな意味を持つ。これにより長作さんはチャンスを得た。切り札、キングドラグーンに続く新たなレアモンスターを引き込み体制を立て直すチャンス。このチャンスを与えてでも欲しかった。あの場で輝く、キングドラグーンを突破する術を。次のターンが。

「ターン、エンド」

「次は私の番という訳だ。流れはこちらに傾いた様だな。キングドラグーン！」

キングドラグーンのドラゴンを呼び覚ます力が、新たな宝石のドラゴンを場に出現させる。一層輝く細身の身体。その輝きは、最も有名であろう宝石の一つ、ダイヤモンドの輝きを放っていた。

「ダイアモンド・ドラゴンを特殊召喚！」

ダイアモンド・ドラゴン 守備力2800

一掃したにも関わらず次々と出て来るドラゴンの軍団。対峙する者が感じる事の出来る空気。あのキングドラグーンが居る限り、ドラゴン達が尽きる事なし。

「一時休戦の魔法によって、ダメージは与えられんか。ターンエンド」

「……ドロー。1枚セットして終了です」

未だキングドラグーンは場にあり。そして、キングドラグーンに呼び寄せられる様に、デッキに眠るドラゴン達はフィールドへ集う。

「私のターン！ これはっ！」

長作さんは引き込んだ。ドラゴンでは無い、しかし自身のデッキで最強クラスのドラゴンを呼び出す魔法カードを。

「いくぞ！ スタンピング・クラッシュ！」

「ホーリーライフバリアー！」

発動した魔法。それを見て即座に罠を発動する。正直言つて舐めてると死ぬのは痛い程経験済みだ。

「私の発動した魔法カードは、罠、魔法を1枚破壊し、相手に500ポイントのライフダメージを与えるカード。それにすかさず罠を合わせるとは」

「このバリアは戦闘効果あらゆるダメージを手札1枚をコストに防ぐ罫。その対象に選ばれたのがこのカードで助かりましたが……」

「しかしだ。モンスターを使わずに、私のドラゴン達の攻撃をここまで躲すとは。大口を叩くだけの実力が、一定のレベルで備わっている様だな」

「ええまあ。小狡い手を使ってますが」

「今となつては、少し興味すらある。お前がこの私にどうやって勝つ気なのか。……素人の私を弟に勝たせるとほざいたんだ。その言葉が本当かどうか、このデュエルで証明しろ！ 私はキングドラゴンの効果により、手札のクリスタル・ドラゴンを場呼び出す」

クリスタル・ドラゴン 攻撃力2500

「ホーリーライフバリアーの効果により攻撃は無意味。ターンエンドだ」

心の内から湧き上がる物があつた。期待されているのだと。きっと彼の中で、デュエリストとしての弟はこういう状況も乗り越えられる男で、それを超えさせると豪語したのなら、お前が更に上である事を見せてみると。

だから願つた。たとえそれが最も冷酷かつ残酷な札だとしても。それを引き当てる事を。

「自分のターン！」

デツキは、意地悪そうに微笑んだ。

「ブラック・ホール！」

超重力の渦が、光も余さず全てを飲み込む。数少ないキングドラグーンを倒せるカードを引き当てた。再び消えるドラゴン達を見る長作に恐れ無し。弱音の一つもなく堂々とする様はもはや元々デュエリストだったんじゃないかと思う程。

「カードセット。終了です」

「私のターン。これならどうだ！ 手札から魔法カード、ドラゴンズ・ミラー龍の鏡！ 墓地に眠るクリ

スタル・ドラゴン、ダイヤモンド・ドラゴン、エメラルド・ドラゴン、サファイア・ドラゴン、神竜ラグナロクの5体を融合素材としてゲームから取り除き、ファイブ・ゴット・ドラゴンF・G・Dを

融合召喚!!」

5体の竜が1つとなった。その力は伝説を超え、究極を超える。

F・G・D 攻撃力5000

「バトルだ。今度こそ消し去ってくれる！」

「罨。くず鉄のかかしは攻撃モンスターを対象に、その攻撃を無効にします」

けどこの攻撃は通らない。攻撃を止められた長作さんは、ターンエンドを選択した。

「自分のターン。バトル。セットされている速攻魔法、造反劇。相手を1体選んで、それのコントロールを得ます。F・G・Dを頂きましょうか」

最初のターンから、動かなかったそのカードの発動。その最後で長作さんも気がついただろう。キングドラグーンの強大な力に。

「トドメです」

F・G・Dが、敵を薙ぎ払う。その先にいた長作さんは悔しがる様子無く、1歩前に踏み出した。ほつと息をつき胸を下ろす自分の元へ。

「私の考えだが。お前の力はこんなものでは無いだろう。ハンデとしてモンスターを入れずに戦ったのだからな」

「いえ、正直。キングドラグーンはああいうパワーカードに頼る他無かったんです。自分でも必死で軽く引きます。もう少し綺麗に勝って起きたかったんですがね」

「それはご最もだな。だが余りにも露骨だ。いくら素人だろうと分かる。最初からお前はハンデと言いながらも、勝てるデッキを使い私に挑んだ。そうだな」

「……あはは。その、はい。期待はずれでしたかね」

「卑怯とは言わん。この世界は、勝利こそ全て。我が万丈目グループも勝利を積み重ねたからこそ、ここまで大きくなった。勝利の重さは、それを背負うものだからこそ分かる事がある。お前は負ける訳には行かなかった。……何か理由があつて私に声をかけたんだろう。話ぐらいなら聞いてやる」

「えっ、本当ですか」

再び何処からか呼び寄せた使用人らしき人物達にデュエルディスクを預けながら話を続けた。

「金の話で付き纏われるのは慣れている。が、そんな私だからこそ分かる。金は二の次だろう」

「なんでそう思うんですか？」

「簡単だ。金のお話をする輩はもつと必死に這い寄ってくる。ここまで話したが、お前から感じるのは……いやいい。早く話を済ませよう。時間を奪われる以外の損は無いだろう」

「ふむ。じゃあ、話しましょうか」

すぐに終わると始められたお話は、30分に及び何かを手に入れた自分は満足げにへりを見送った後帰宅するのであった。

「なんだとお!？」

早朝。たまたまレッド寮にお邪魔して、万丈目さんの部屋に遊びに行くと、そこには驚きを隠せない顔をしている万丈目さん。今の万丈目さんはオジャマモンスター達を回収しており、その過程で向こうにあったカード達は万丈目ルームに移動されていた。あの時いくら探しても居なかったオジャマ共は一体どこに隠れていたのだろうか。今

となつては神のみぞ知るって奴である。

「おはようです。朝から騒がしいですね」

「なつ、なんだお前か。つて騒がしいとはなんだ！ 人の部屋に早朝から上がり込んでくる無礼者が」

「ちよつとカードを……つて、それ。本土のニュースですか。ふむふむ」

万丈目ルームは違法改造が施されておりテレビなんかも普通にあるのだが、今流れているニュースは少し面白いものだった。

「へえ。お兄さん、ですよね」

「ああそうだ。だがこれは……」

その番組では、今をときめく有名人がプロのデュエリストとデュエルしてその将来を占うという企画をしていて。それに参加した1人の男が、なんとプロに勝ってしまったらしい。これは番組の中でも珍しい事だそうなの。

「長作兄さんがデュエルを続けていたなんて、それだけじゃない。あの時より確実に強く」

「そりゃあ、強くもなりますよ。でもあの人、目標があるらしいですよ」

「目標？」

「どこかの記事で読みましたけどね。当面はデュエル界進出の予定は無く、今デュエル

を続けているのは、初めてデュエルをした男にリベンジする為。らしいです」

その言葉は重く受け止められたらしく、万丈目さんの顔は真剣そのものだった。

「次やる時は負けるかも知れませんが。そうしたら、万丈目グループのデュエル界進出も私がやる。とか言い出したり——」

「そんな事があつてたまるか!!」

「分かんないですよ。あの時、万丈目さんがハンデつけても勝てたのは、初心者が相手だったからですしね」

「うぐっ。それは……」

「まあ落ち込まないでください。サンダーだつて頑張つてるのは知ってるんです」

「なぜお前に励まされなければならんのだ!」

「まー、サンダーがさつさとデュエル界に進んで万丈目グループの名前を広げれば良いだけじゃないですか。それとも——自信無いんですかサンダー」

笑いながら言ってしまったが、既に遅し。サンダーの限界値はとうに超えていた。

「ふざけるなあ! 俺を誰だと思つている。この俺様は。人呼んで黒い稲妻、漆黒の雷光!」

「冷やすと美味しい」

「一、十、百、千! 万丈目サンダー……つて貴様ア!!」

自分の事を凄く持ち上げるサンダーはまさに踊り狂う雷。この後も、若干の恐怖はあるらしいが、リベンジが来たら受けると言う話をしていた。その時はハンデ無しで真正面から2度目の敗北をプレゼントすると共に、デュエル界はこの万丈目 準に任せろと言つてやるらしい。そのリベンジする瞬間を、その台詞が言えるかどうかも含めて。とても楽しみが増えて嬉しかったりする今日この頃だった。

第18話 ナンバー1

外は太陽が照りつけて暑い日。室内の教室はレッド、イエロー、ブルー平等にクーラーが効いた涼しい部屋の中授業を受ける。

そんな所ではだらけてしまいそうだが自分はそうも行かない。なんだか知らないが一番前のだ真ん中。先生と目と鼻の先の席に移動させられた今は授業を受けるという選択肢以外は無いのだ。

「はい。これが、今回のまとめだ。ちゃんと聞いてた君?」

「先生、この距離で聞いてないは流石に無いです。やたら見られるし」

「君は珍しくブルーなのに居眠りしちゃう子だからね。私の提案で席移動したけど、クロノス先生も大変やりやすい、少なくとも居眠りは無くなったと大喜びだよ。元の席に戻りたかったら、夜更かし止めて、普通に授業受けるんだね」

少しだけ悪目立ちしてしまった。ついつい眠ってしまうのだがまさかこうなるとは。変に目立って隣の生徒にすら起こされる始末。クロノス先生やら明日香さんはこの変更に大変大喜びだ。橘先生の授業では、やたらと目立ってしまうのだ。

「今日の授業は終わり。次は閥属性の授業を行なう。ただ、閥属性は知っている者も多

いだろうし、デツキの種類も様々だ。だから、次の授業は皆でデュエル大会でもしようか。各自閥属性のデツキを自分なりに考えて作って来るように。出来ないとか、難しいって人は先生に相談に来て……来ても良いけど、順番待ちだからね」

次の授業内容を軽く話して授業は終わる。デュエル大会って言うのは、この先生が何回かやるデュエルするだけで授業時間潰すヤツ。授業の中でもダントツで楽だ。が。

「それとだ。君には期待しておこう。風属性の時も面白いデツキだった」

「普通のデツキ持っていきますよ」

「ふーん。じゃあ、できれば融合を使つて来てね」

「なんで……いやまあ、はい。融合使つてきますよ」

「任せたよ。君のデュエルは、他の生徒から見たら少し変わつてゐるから。君のデュエルで成長出来る子も居るかもしれない」

「……そうだといいですね。はあ」

この先生の授業を通してだ。少しずつ、周囲からの評価が変わつてきている。より目立つ方へと。入った頃じゃ変な騒動に絡んだりしてるが、いざ会ってみるとなんと無い空気みたいな奴。だったのに。騒動の時は隣に居るのが十代だったから、翔と同じく巻き込まれたのか。とかデュエルの勝利はマグレか。だったのに。

「アンタ、最近調子良いみたいじゃない。これも私が監視してるおかげね」

「そーですネジュンコさん。良く、見えます?」

「そりやあね。眠らなくなつて明日香さんも大喜び。猫被るのが得意なアンタに、接した人が嫌な反応する方が少ないから最近じゃ、噂話になるぐらい。橘先生の授業でやらと前でデュエルしてるじゃない。先生のお陰で、先生のお陰で! アンタのデュエルが良く見えてるにしても、見直す子も多いのよ。つていうか私にしたみたいに卑怯なデュエルしなさいよ!」

「普通に接してれば嫌な反応なんてされないにやー。覚えておけにやー」

「五月蠅い。皮一枚下はケダモノの癖に」

「それについてですがね、女子寮に居ると思うんですが存外女の人も、というか女の方がどうか。ちよいと方向性が違うだけな気がしてならないんです」

「——で、そのセリフいいながら私を見つめるって喧嘩売つてるのよね。買うわよ」

「ゆるしてにや——んごはあっ!」

すぐ手が出る族1号のジュンコパンチはブラックマジシャンの一撃に匹敵するが、2号は滅びのバーストストリームなのでなんか可愛い気がしてくる。

「ま、まあ。でも自分の話より、最近の話題は美奈さんの話が多いじゃないですか」

最近目立ってきてはいる。けど、それでも少しずつしか評価が変わらないのは、美奈さんがより目立って注目を全て持つて行っているからだ。ノーズ校のクイーンの二つ

名を引つさげて転校して来たのだから、それは目立つ訳だが。

「ふん。なによ。私はアイツの話嫌いな」

手が出る族2号である美奈さんと、ジュンコさんはすこぶる仲が悪い。とても悪い。この会話だって、美奈さんに聞かれていたら「あら、私も貴方の話嫌いなよ」とか真正面から言う子だ。嫌いって先に言ってきたのはジュンコさんなのだが、ジュンコさんの嫌い発言は転校早々タメ口で明日香様と馴れ馴れしく喋ってんじやねえよっていう所謂、嫉妬的な何かな理由で。っていうかそれだけであって欲しい。

「なにあの態度。転校早々女王様気取りで、男子もその気になっちゃってさ。面白くないわ。つい最近まで明日香様」とか言ってた奴等だと思うと虫唾が走るわ」

「あれは気取りでもなんでも無く、暴君のそれなので治らないです。男でも女でも暴君は暴君なんですよ、ほんとに。それに、男の子は結構色々反応してしまうものですから。すまないが許してくれ」

「そう。それで思い出した。アンタ、やけにアイツと仲良いわよね。どうして? ムカつかないの!?! 有り得ないと思わないの!?!」

「いやー。あれぐらいなら可愛いですよ。友達とか身内とかそれぐらいの距離になればですけどね。話せば聞くだけマシです。話すまでが大変ですが」

「ほんと。本当に。分からないわ。男って馬鹿なのね」

「男も女も、好きなもの見ると豹変しますよ。気持ち悪いぐらいに。恋とかします?」

「アンタがそんな話するの気持ち悪いから止めてくれる」

「自分でも似合わない話してると思います。立場的にも」

まあともあれ。良くも悪くも注目されるのだ。それが嫌だった。じわじわと、なにか、追い詰められてるようで。セブンスターズ、精霊、目的不明の敵。それらが来るのに合わせた様で。

「で、次の授業で使うデツキは決まってるの。闇属性の融合デツキでしょ」

「あ、聞いてましたか。悪魔族の予定でしたけど、融合なら、まあマッドキマイラとか」

「アンタの趣味、気持ち悪いわよ」

「マッドキマイラ、ぬいぐるみですよ」

「どこの世界のぬいぐるみが、あんなにデカくて、継ぎ接ぎだらけで、中からミサイル飛び出してくるのよ。それにアレも悪魔族じゃない」

「自分もここに来るまでは、どこの世界に口より先に手が出るバーサーカー女子が居るのかと思ってました。見た目は可愛いのに」

「……アンタって、すぐにそんな言葉出るわよね。でも、よりによって超変態のアンタにその言葉貰っても嬉しくない」

「自分はジュンコさんにかわいいって言われたら嬉しいですよ」

「うわっ……それは、引くわ……」

「この見た目で、カッコイイは諦める他無い。自分で言うのもなんだが可愛い系だと思います」

「見た目うんぬん言うんだったら、まずはその雑に後ろに束ねただけの髪を直さない。せっかく長いのに意味無いわよ」

「ジユンコさんは凄く決まってますからね、髪。まあ自分の事これ以上話しても面白くないでしょ」

「それもそうね。じゃあ、えっと……そうそう。次の授業、せいぜい私に当たらないようにしなさいよね。アンタにボロ勝ちして評価落としちゃうから」

「へい水属性使いのジユンコさん。ジユンコさんの慣れない闇デッキに負ける程やわくはないですよ」

「属性が変わっても、やる事は変わらないわよ」

「結界像は、みんな同じ属性だから意味無いですが？」

「……………ば、馬鹿にしないで！ 結界像に頼らなくなつて、私は強いのだよ！」

「嘘つき！ あの後からジユンコさんとしたデュエルでの決め手は大体結界像じゃないですか！」

「水属性じゃないアンタが悪いんですよ！」

「レベルも4以上だから大罪人だなんてお馬鹿！」

その後は互いを罵倒し合いながらも自分の部屋まで。現在進行形でまだ監視は続いており、今日はジュンコさんの番なのでそのままという感じ。

部屋についたら、とある万丈目的な人達によつてもたらされた数々の私物を展開する。校長から許可は得た。基本は秘密だが。監視役達には外に極力出ないために、島の外から色々取り寄せるようになった。という説明をして納得されたのでとやかく言われることも無い。

「よいしょつと」

お茶、コーヒー、お菓子、軽いおつまみ。食事の時間になればこれ以上の物が振る舞われるのだが最近では面倒くさくて部屋で済ませている。最近ではももえさんは兎も角、ジュンコさんまでも食事をここで済ませるのだから面倒倍増でお取り寄せする食べ物飲み物は常に多めだ。

「……これなに？」

「見たまんまですが」

「分からないから聞いているのよ。茶色の何が固まつてる……くさつ!？」

「クセはあるけど美味しいですよ」

「私は遠慮よ。別の無いの？」

「皆さんのお食事所に肉魚なんでもござれですけど……気まぐれで買ったドローパンがあります」

「まだそれが良い。あ、そう言えばアンタ。これ以外で最近ドローパン買った？」

「しじみパン。普通にご飯食べればよかったと思いました」

「……マシなのだと良いけど」

互いにもぐもぐしながら時間を潰しつつ雑談を続けていくと自然と話は今日の授業になり、気がつけば目の前には闇属性関連のカードを展開する事に。こつちを倒すぞと息巻いていたジュンコさんはどこに消えたのか今は熱心にカードを見つめながらアレコレと質問をしてくる。

「……って訳です」

「除外軸、なら融合主軸の相手に有利そうだしこれにした方が良いかもしれない」

「ジュンコさんは、融合に恨みでもあるんですか？」

「はあ？ 周りを見なさいよ。強い人は皆、融合を使っているわ。それを対策するのは当然でしょ」

「融合デツキより、その他のデツキの方が巻き込み事故的な感じで辛そう……あ、でもジュンコさん。除外軸闇属性は、あのカードを使わないと多分難しいですよ」

「あのカードって？」

「これ」

わざわざデュエルディスクを引つ張り出し、ソリッドヴィジョンを持ってあれを見せた。ネクロフェイス。かのガイウスさんが言うには良い奴。とてもそうは思えないが。

「きもっ！ ええ、これ使わないとダメなの？」

「効果的には。多分」

「やめようかな」

「可愛いですよ？」

「アンタの可愛いは嬉しくない。……ほんつとうに嬉しくない」

「本気で可愛いと言っている」

「あーはいはい。そうねー。かわいいわねー」

「流し始めやがったな」

話の間にネクロフェイスやダーク・ネクロフィアの素晴らしさを語りながら、結局ここでジュンコさんの閨属性デツキを調整した。終わる頃にはもう就寝時間で、出来上がったのは立派な除外ビート。嫌がらせの様に入っている一枚の手札抹殺は、デツキ的には要らないが裂け目抹殺の組み合わせで相手の戦略をズタボロにする為に入っていると思えない。

「これでよし。閨属性は基本的に墓地を使うデツキでしょ。これで除外しちゃえば有

利」

「外道なんだよなあ……と、ジュンコさんのデッキも出来たところでお時間ですので。部屋までお送りしましょうか」

「気持ち悪いわね。でも話し相手ぐらいにはなるでしょ」

「ジュンコさんは、１度ツンツンしないとダメなの？ 髪型もそういう事なの？」

「どういう意味よ」

この発言から、敵を威嚇するハリネズミのようにツンツンし始めたジュンコさんをなだめながら部屋にお送りした。見た目可愛いがあ針はとてつもなく痛いのも似ている。この前、その髪型はハリネズミ……とか言ってしまった気がするが、その時の記憶は何故か曖昧でよく覚えてない。覚えているのは、目が覚めた時に自室の天井と笑っているもえさんが普通に居たぐらいだ。

お送りした後の帰りの廊下。ふとした瞬間。本当に前触れもなくそれは後ろから迫って来た。１歩、地面をふむ音と、空気を切る音。何よりそれがこちらに向けている気という物だろうか。殺気とか言われるだろうソレを強く感じた。

「よつと」

確実に頭を狙ってきていたそれをほんの少し姿勢を下げる事で回避。ほんの少しでも大丈夫だと知っていたから。それぐらい正確にその回し蹴りは頭を捉えている。絶

対的な信頼があるとまで言っている。それぐらい、この蹴りを放った人物は力がある。

「……あのですね美奈さん。普通、それ、危ない」

振り返ると、予想通り。心底不機嫌そうな女王様がそこに居た。最近の挨拶はいつもコレで、来ると分かるから避けられる。分からなかったら即死待ったなし。ふざけんのである。

「なんで避けるわけ」

「馬鹿なの？」

「気に入らないわ。……気に入らない」

「お嬢様、前から思ってた居たのですが。他の者と私に対する態度が違いすぎませんか」

「それね。それは……貴方なら、良いと思って」

「どういう理由だ」

心底理不尽な女の子で、最近の悩みの種がやって来た。

「で、最近どうですか。ちゃんと友達と仲良くしてます？ 周りに迷惑かけてませんか。

雑に人を扱うのは他の人には止めた方が良いでしょう」

取り敢えず、立ち話もなんなので部屋に案内して適当に準備しながら話を聞く。この人は無視するのも面倒だし、話聞かないと心配な部分がかなりあるので。

「……貴方は私のしつけ係にでもなったつもりかしら？」

「まあまあ、気になるだけです。言葉に出来ないぐらい大変そうですし。何でしょうか、こう。美奈さんは凄く心配なんです」

「五月蠅いわね。爺やみたいでイライラするわ」

「おじいちゃんの気持ちに凄く分かります。とても心配だった事でしょうね。と……と。はい。これ。名前知らないですけど、美奈さんが言つてた葉っぱ使ったお茶ですよ。わざわざお取り寄せしたんです」

「言い方に品が無いわね」

「分かるならもうOKでしょう。で、クッキーが確か……この柄の箱でしたっけ？」

「名前で言ってくれる？」

「英語が書いてありまーす」

「英語じゃないわよ、それ」

「……日本語じゃない言葉でーす」

自分からすれば、謎の、謎すぎる注文の品を揃えて美奈さんの目の前に出す。因みに食べている時は幸せそうな顔をするので、本当に好きなものなんだなって言うのが分かる。本人に言うのと否定されるだろうが。

「なによ」

「いや。美味しそうな顔してますよ」

「……してない」

「ふっふー。左様ですか」

このお嬢様は、楽しい？ と聞くと、別に。 って答える人。なんでそんな面倒な性格してるのかは知らないが。

「でも、どうやって用意したのよコレ。学園側に頼めば出てくるのかしら」

「多分、そういうのは無理かと。準備してもらってる学生側が学校側の用意したものに文句を言うのは、それに文句無くこの物は良い物です。ああでも、調理場の人と仲良くなれば……いや、美奈さんは諦めて自分から貰ってください」

「どういう意味？」

「そういう意味」

正直、この人が平和に愛想よく交渉なんて無理だし、危なそうなので行くとか言ったらまず止めますが。

「まあいいわ。でも気になるわね。学園側と関係無いなら、それこそどうやって。これだけじゃない。貴方の部屋、普通の生徒部屋にないものばかりよ」

「トップシークレットです。ヒミツなのです」

「そう」

万丈目グループの名を使うことは禁じられている。当たり前だが。まあいいんだよ

物が手に入ればなんでも。

美奈さんの質問はこんな感じで言えない質問が多かったりする。けど、今日のは本当に言いづらい質問で。

「自分の事は良いじゃ無いですか、それより。今日はどんな御用で？」

「気になる事があつて。どうして貴方の部屋に毎日、明日香達が出入りしてるのかって事」

そう。コレである。

「……あー。うんうん。その、あのですね。えつとお」

言い淀む。何故なら目の前の美奈さんには言つてないからだ。タイミング逃したと言ふより、元々無かったから。コチラの性別が男という問題を。嫌な程に完璧なこの身体でその可能性を疑われたのは1人しか居ないぐらいだ。

ここで問題がある。それを言つて、この人がどういう反応をするかである。9割許さん派だろうが、この人の許さんは本気で死を覚悟する事になる。だから。

「どうしたの？」

「なんでも、無いです。はい。そう、例えば——」

どう言つたら誤魔化せる。いや誤魔化すのか。言うにしても急に言うわけには。

「——そ、そういうばですけど。美奈さんってファンクラブ出来てるじゃないですか」

「急に何？」

「いや、その。1人ぐらい良い人居ました？」

「顔の事？」

「あの、うんと。まあ。そこは大切でしょうけど」

「そもそもの話。私、男嫌いなもの」

「……おっと、その——えっ……？」

瞬間、目の前が暗転したかと思う程の衝撃が襲う。えっ。死ぬのか、自分。

言葉が続かない。息が出来ない、まずいやばい何か喋らないと。1秒でも長く。

「……お、女の子、すきー？」

やっとの思いで呼吸と共に出てきた言葉。美奈さんは心外とでも言いたげな顔。

「全然。勘違いしないで。そうじゃないけれど、単純に信用出来ないだけよ。私の中では

は少なくとも、顔の下は金か身体しか考えてない生き物なの。お父様以外はね」

「そ、そうなんですネ。……前から思ってたんですが、美奈さんって結構普通じゃない方

の人種ですよネ。お金持ちというか。そんな感じ」

「そうね。私に関して言えば、お金だけ持つてゐるが正しいわ。全部、お父様の力。だった

と思うけれど。今ではそれも無いわね」

どうかしようと思った所で、少し話題がそれたので全力でそれを拾いに行く。実際

気になる所でもある。こういう話はあんまりしない方がいい時も多いが仕方ない。

「うん？　だっただと思う、とは」

「言葉通りよ。貴方も感じた事ないかしら。元の世界……つて認識している記憶が、曖昧なの。思い出しても実感が無いのよ。ただ、思い出の品を見た時。そんな時ぐらいね。私の過去が私の物だつて思えるのは」

妙に真剣な顔つきで美奈さんは、少しだけ諦めたような笑いを作りながら言った。きつとその感覚は、特別なものでは無い気がして、それでも本人は悩んでいるんだろう。「つて、そういう話じゃないわ。私が聞きたいのは——」

「そ、そう言えばですよ！　このあと時間ありますか？　ありますよね？　ね！」

「ちよつと、急に大声出さないでくれる。まだ夜なのに……」

「夜だからこそですよ！」

あの話を広げるのも面倒だし、向こうが切り上げたのでコチラも別の手段をとる他ない。かなり無理やりだが、今日さようなら出来れば明日また同じ話をされない限りは生き残れるのだ。時間がどうしても欲しい。1日でも——

「セブンスターズの件です」

そう思った自分は、あろう事かこの件を自ら提案した。

「……どういふつもり」

「いや。そろそろ、ここら辺で相手方の1人がコロシム作ってる頃かなーと」

「タニアの事？」

セブンスターズの1人に、タニアという女が居る。あれはガイウスさんなんと同類で、精霊でありながら力を使つて現世に実体化している様な存在だ。タニアさんに至つては獣族モンスタアの筈が、擬人化している。ある意味ガイウスさんより凄い。精霊達はやる気があれば人間になれるつて事かも知れない。まあその力がタニアさん自身の物なのかは知らないけど。定期的に、そろそろタニアさんが行動を始める頃だ。あの人は何故か森の中へコロシムを作ることから始める人物。故にそこを狙つて早めに落とす為に森を散策しようと持ちかけた。

本音は、居なかった。帰ろう。遅いからまた明日。そういう流れてかそれしか無い。

「あれは害なんて無いでしょう。せいぜい何かあつても三沢が消えるだけよ」

「いや十分害ですよ？」

「結婚相手が見つかつて幸せじゃないの」

「きついつすよマジで」

「……やつぱり変ね。今の今までこういう事は一人でやってきた癖に、今更私を連れてセブンスターズ探し？」

「た、偶にはね……美奈様のお力をおろ、その、お借りしよう」と

先程からの動きで美奈さんはコチラに疑いの目をずっと向けている。やりずらい、頑張れ、頑張れ自分。取り敢えず、探してる振りして周囲に目線をそらしてこの場を繋ぐ策を――

「どうしたの」

目線の先に居た影を見つけて、足を止めた。不思議がる美奈さんを影から隠すように立つ。草木の影から姿を見せたのは女にしては出来すぎた、鍛え上げられた身体を持つ女性と、それと同じ様に筋肉の塊で出来た上半身どころか、下半身までもが際どいパンツ1枚の殆ど全裸の様な男。

どう見ても肌寒い夜には辛そうなその格好をした男は。こちらに、まるで友人にあつたかのように手を挙げ声を掛けてきた。

「おっと。客さんかい？ ターニア。コロシウムは明日作るはずだよな？」

「ああ。そうさ」

「なるほどねえ。タニア。お前は準備してろよ、俺は目的の女の子を見つけた。女の子に会うのに、隣に超絶美人さんが居たんじゃあ遠慮されちまう。お前だって、媚探し

に俺みたいなナイスガイが居ちゃあ邪魔でしようがねえだろう」

こんな偶然があるだろうか。それとも神が言い訳なんてするから罰が当たったのだと言っているのか。いや神なんて信じられない身体にはなっているが、それでもそう思った。

「こんな夜中に、どうしたのかなお嬢ちゃん達。迷子かい？」

「それはこっちの台詞ね。部外者」

「おっと、そここの長い銀髪のお嬢ちゃんは気が強いタイプか。実に綺麗な姿だ。かの破壊の女神の様に美しい。そしてえ。その前に居る小さい君。は……見るからに、お嬢ちゃんを守るナイト様かな？」

この男、話しながらも距離を詰めてくる。肉弾戦になれば圧倒的に不利なのは明白。後ろの化け物は大丈夫かも、でも最悪自分が人質役になりかねない。相手がどんな出方をするかより一層警戒しながら、最悪後ろの人が何かする時の壁ぐらいにはなる気持ちで身構えた。

「まあそんな気張らないでくれよナイト君。なにも君のお嬢様をとって食おうって訳じゃないんだ。そう、つまり君でも構わない訳さ」

思った以上に素直な目で男は、まさかとは思うが自分を、誘った？ 三角パンツ1丁のガチムチ筋肉なその見た目で学生好きは犯罪臭がというセリフは敢えて言わない事

にする。

「1000歩譲って、貴方が良い女性を探している人だとして。この状況で流石にそういう事は言わない方がいいのでは？」

「確かにそうだが、君達とそういう話が出来そうにない気がしてなあ。君だろう。あの爺さんが怒っていたぜえ。クソガキ一人に邪魔されて、セブンスターズが上手く動けなくなってるってな」

あつさりと、男が言った言葉は余りにも簡単だった。思えば当然であるその言葉。爺さんとは十中八九、セブンスターズ……三幻魔騒動を現在進行形で起こしている人の事だ。それが、自分の動きを見張っていたとは。いや心当たりはあるが、主にカミューラさんの件で。

「しかも万丈目グループとコンタクトまでとってるんだ。なーんか臭いよな。少なくとも、俺は君の為に、タニアの護衛って形でこの島に來たんだぜ？」

「おう……これは、余計な事をしたな自分！」

「念のため爺さんが手を回して万丈目グループに圧をかけたみたいだが、知らぬ存ぜぬで、爺さんも激おこだったぜ」

なんだか大層な勘違いをされている気がする。万丈目兄の件は本当に気まぐれとかのレベルだが考えても見なかった。そんな事になるとは。

万丈目グループ側は多分、自分の事なんて殆ど知らない。関係があるのは万丈目グループというより、兄の長作さんとほんのひと握りの周囲のみだろう。長作さんが自分の様な子供にデュエルを教えて貰っているなんて知られたら色々不味いらしく、この関係は基本秘密の事なのだ。

「あー……あー、謝らなきゃ……はあ」

「まあ。このまま君だけと話していてもアレだしな。自己紹介という。ここでの俺の名はコード01。長いから自分ではワンと読んでいる。とある旦那から雇われて、この島に来ている。そうだ、君みたいな鍵のデュエルを。鍵の受け渡し無く封じようとしている輩からセブンスターズを守る役目さ。だから、ナイト君はともかく。美奈ちゃん。君には関係の無い人物って事だ」

素敵なスマイルを美奈さんに向けて発射するこの男、ワンさん。受けた美奈さんは小刻みに身を震わせながら言葉を投げ返した。

「気持ち悪いわね……!」

心の底から出ている声。鳥肌が立って止まらないと言った所か。でも確かに初対面でこれは無い。

「酷いな。名前呼んだだけじゃあないか」

「……名乗ってないのに、知られていて、ちゃん付けは怒られますよ」

「おつとそうだった。悪いな。セブンスターズに対抗する7人のリストは目を通していたから、美奈ちゃんの事は知ってるんだ」

「……言えば許されるってわけでも無いです」

「そうかい？ ナイト君は手厳しいなあ」

「普通です……」

話をしている限り、この人は悪いって感じでは無い。出来ればこのまま話だけで終わりたいが、雇われた。しかもターゲットは自分。出会ってはいサヨナラなんて訳には行かない。

「さてと。自己紹介も終わったし本題といこうや。ナイト君。君はタニアを消しに来た。そうだろう。セブンスターズの1人。吸血鬼カミューラのように」

「……」

そんなつもり全く無い。けど、なんか言えない。言っても誤魔化すのか下手とか言われるだけだし言わない。

「カミューラを用意した奴が口が悪くてなあ。化け物に制御装置をつけて放した筈が、化け物も、なんと制御装置自体も消え失せたと。顔を見たが、あんな美人さんを化け物だなんて正気の沙汰じゃねえ。お前の心の方が化け物だと思ったね。ナイト君もそう思うだろう？」

「激しく同意しておきましょう。でも、消えたんじゃないですよ。勝手に何処かへ行っただけです」

「そこだよ。カミューラは消える事が出来ないはずだったんだ。言つてておぞましいんだが、デュエルで負けて消滅したなら分かる。が……そうじゃない」

制御装置。きつと幻魔の扉だろう。アレを無力化した事が本格的に目を付けられたキツカケになつてしまつたかも知れない。あの時はカミューラさんを助ける為だと先の事を考えずにやつたが、こうなると分かつていてもきつとやつただろうな。つまり、こうなる事は決まつていた。

「ナイト君がどういう方法を使つたのかは知らないが……君が動く困る爺さんが居るのよ。だから——」

「……で始末する?」

「ああ。コレでな」

構えたデュエルディスクは、異彩を放つていた。ぐにやりと歪んでいるそのディスクは、所々が黒く変色している。細かな傷から、大きな傷まで。至るところに出来ているそれは年季を感じさせた。なにか呪いでも掛かつていそうな見た目のデュエルディスクだ。そしてこれは、あの急に襲つてきた女生徒も付けていたディスク。

「このディスクは仕事用だと爺さんに渡された。俺以外も付けてるはずさ。……まあ俺

は仕事さえこなせば何でもいいんだ。始末するの？　つてのにノリで答えちゃったが、そんな大層な事はしなくてもいい。君の動きを封じるだけでいいんだ。だから、なんだ。安心してくれ」

「ふむ。だいたい察しました。俺以外も。名前からしてそうですが、他に何名か居ますね」

「……おっと。つい、うつかり」

「何名ですか。やっぱり7名？」

「そいつは教えられねえな」

「勝ったら教えて貰いましょうか」

「それも無理な相談だな」

「おや、そっちは勝った時に条件つけるのに、こっちには付けてくれないんです？」

「いやそうじゃねえ。もっと根本的な所さ」

「……というと？」

歪なディスプレイが開き、デスクをセットした目の前の男は、息を吸う様に。当然のように言う。

「俺には勝てないさ。嬢ちゃん」

「面白い、人ですね……！」

その挑発に乗るようにして、デッキをセットした自分のドロでこのデュエルは始まった。

「先攻は貰いますよ!」

「当然だぜ。女の子に先を譲らなきゃ男が廃るつてもんよ」

「なら、カードをセットしてターンエンド!」

「ほーう。譲られた先攻と見るや、俺の動きを警戒して敢えて魔法、罠のセットのみで動か。もし、サイバードラゴンみたいなカードを使うなら、確かにそれは辛い事だ。だがその読みが外れたらどうする気だ嬢ちゃん?」

「少し買いかぶり過ぎですね。けどまあ。外れたら次の手を打つしかないですよ」

「はっはー! 気に入ったぜ! 俺も同じだ。大切なのは失敗の次を打ち出せる事だ。人生の中で、失敗は無限に出来ちまう。否応なしに。だがそれと同じく成功も無限だ。手に入れたければやるしかねえ。やらなきゃ失敗も無いが、成功も無い。そんな人生も、デュエルもゴメンだぜ」

ワンさんは上機嫌に語る。内容はともかくとして、その言葉には絶対的な自身も感じられた。

「俺が召喚するのは、コイツだ。サンド・ギャンブラー!」

サンド・ギャンブラー 攻撃力300

更に召喚されたモンスターはギャンブルモンスター。確かに成功すれば大きい。だが、あまりにも不安定なそれをこのデュエルで使われる事は想定できなかった。

「おつ。それは、名前通りのギャンブルモンスター。カッコイいですね。持ち主と同じくって感じですか」

「ビストレートに打たれるのは嘘でもホントでもむず痒いもんだが、そういう所は俺は好きだぜ。俺も直球勝負……と言いたいが、少し強引なアプローチを仕掛けるぜ。フィールド魔法、エンタメデュエル！」

フィールドの発動と共に、不気味な森は見るも鮮やかな大都会の街中へ早変わり。ますます怪しいデツキに、ついつい興味が湧いて笑みをこぼしてしまう。

「おー。なんか、派手ですね」

「そうだろう。気に入ってもらえた様で何よりだ。更に、セカンド・チャンスまで発動するぜ！ このカードがある時、俺はコイントス効果を1度だけ振り直せる。じゃあ、準備も整った所で、サンド・ギャンブラーの効果！ コイントスを3回行う」

賭博師がコインを打ち上げる。落下しながら激しく回転するコインは、ぴつたり3枚とも表向きで揃った。

「げっ、マジですか……」

「ははは！ まあ焦るなよ。こういう効果だっていう見本さ。本番始めるぜ」

「本番って?」

「こういう事さ。セカンド・チャンス!」

表になっているコインを再び手の内に戻した賭博師が笑みを浮かべながら2回目のコイントス。表、裏、表とコインが順番に表示された。

「ハズレだな。次に期待だ」

「……まあ。自分の場にモンスター居ませんからね」

「おつと知ってたか。そう、サンド・ギャンブラーの効果。3枚表はサンダーボルトだ。お嬢ちゃんの場合にモンスターは居ないからたしかに意味は無い。けど発動した意味もふり直した意味もあるぜ。」

エンタメデュエルの効果発動! 特定の条件を満たしたプレイヤーは、満たした条件1つにつき1ターンの1度だけ、カードを2枚ドロースするのさ。今俺はその1つ。サイコロ、コイントスの回数が5回になった。を満たしたぜ」

カードをドロースニヤリと笑う。エンタメデュエルのフィールド効果は互いに影響する。しかし、その条件はどれも狙わなければ厳しいものだ。

「満たした条件、ですか。他はなんだっけな……」

「意外だな。分からないのか?」

「全部知ってるわけじゃないんですよ。って言うか、ほんとに色々コチラの事を知って

ますね」

「ああ。当然だな。嬢ちゃんが物知りつてのは良く知ってる。けどそれもある期間までだ。原因不明の問題発生でカメラやマイク。それらが使えなくなったらしい。……変なことを言うが、コレは嬢ちゃんと、美奈ちゃん限定で起こる事だ。はは、お嬢ちゃんは魔法使いか何かなのかい？」

「面白い冗談です。魔法なのは確かですが。で、サンド・ギャンブラーが攻撃表示ということは、攻撃するんでしょう？」

「その通り。バトルフェイズ。サンド・ギャンブラーでダイレクトアタック」

サンド・ギャンブラーがコインを弾く。それは弾丸の様に回転し、加速し、確かに自分の身体を貫いた。鈍い痛み顔が歪む。

自分 LP3700

相手の表情を見て、ワンさんは自らのデュエルディスクを見た。そしてすぐさま察したのか大丈夫かと声を掛けてくる。

「このままカードを2枚伏せてターンエンドだ。すまねえな。……が、仕事なんだ。聞いてた話とは違うがな」

デュエルディスクを睨みつける。何を言われたかは知らないが、そのデュエルディスクによってゲームが想像よりも危険な物へと変わってしまった事に苛立っているよう

にも見える。正直意外だった。本当に知らなかったのかこの人は。

「いいいえ。いい攻撃ですよホントに。けど、慣れてますから」

「慣れてるって……お前」

「さあ。終わりならさっさと続けますよ。自分のターンです」

「……ああ。そうだな。けど、1つだけ良いか？」

「聞くだけなら聞きますよ」

「俺が勝った時の条件。言っていないな」

「……言ってた気もしますが。何か付けたい条件でも？」

「勝った時って言うか、勝つ時だ。お嬢ちゃんのサレンダーで決着をつけよう。どうだ
い？」

予想外の提案。冗談かとも思ったが真剣な顔付きで言うワンさんに戸惑う。

「いや、その。良いですが。別にそうしても助かるかは不明ですよ？ そのディスクが
どんなものか知らないですし」

「そうだ。けど助かるかもしれないだろ？ どっちでも危ないなら、少しでも安全そう
な所に賭けたい。始める前にも言ったがな。始末するなんて大層な事は考えても無い
ぜ。君の動きをとめるだけで良い。そういう仕事なんだからな」

「ふむ。同意です。では、ワンさんもサレンダーで決着付けましょうか。勝つのはコチ

ラの予定です」

「……ああ。そうだな。その気じやなきやデュエルじや無いな！ 来いよ嬢ちゃん！

また伏せだけの鈍いデュエルするんじやねえぜ」

「言われずとも！ 召喚するのはマスマティシャン！」

マスマティシャン 攻撃力1500

「その効果でデッキからシャドール・リザードを墓地に。送られたリザードの効果。好きなシャドールを墓地に送れます。ビーストを墓地に」

「そして、ビーストで1枚ドローか」

「つと、知ってた。いや、ある情報ですかね。ビーストの効果で1枚ドローです」

「そうだ。卑怯だなんて言うなよ？」

「知られて当然の場所ですって、問題無いです！ バトル！ マスマティシャン

でサンド・ギャンブラーに攻撃」

魔法使いの呪文が迫る。そんな状況で、賭博師は表情を崩さず、魔法の様に手元にカップを出現させた。注目下さいとばかりにカップを頭上に投げる。3、2、1のカウントダウンでそれを放り投げると、手のひらサイズだったカップは大人より大きな筒へと変身し、更に2つに分裂。片方の筒は真正面から来る呪文を吸い込んだ。

「さあ。サンド・ギャンブラーのマジックショーだ。空っぽの2つの筒。1つの筒にな

んでもいいから物を入れると——」

「もう片方から入れたものが出てくる。っていう感じですか」

「その通り。罠カード発動。魔法の筒！ 返すぜ、マスマティシヤンの攻撃。1500ポイントのダメージだ」

魔法使いの攻撃は、魔法の筒に吸い込まれ、跳ね返された。攻撃は魔法使いを通り抜け、プレイヤーへと直撃する。

自分 LP2200

「まあ、何も無いわけではないですよね」

「おいおい、普通もつと反応するだろう？ やられたーとか。まずいとか」

「いやいや。魔法の筒が強いから入ってる。なんて言う人にも見えませんし。どんなデツキか考えて、少し面白くなってます。メイン2に入ってカードセット。ターンエンド」

「面白いか。やつば嬢ちゃんに変な奴だ。俺のターン。再びサンド・ギャンブラーの効果。そして、セカンド・チャンスで振り直す。——その前に罠も発動してな」

表、表、裏。裏、表、裏とコインが跳ねる。ワンさんの手札にはカードも加わる。そして、手元に現れた拳銃をコチラに向けて構えた。

「エンタメデュエルの効果適応もあるが、発動した永続罠、ガン・キャノン・ショット銃砲撃の効果も発動す

るぜ。コイントスをした時、表が出た回数によって効果を適応する。1回以上は500ポイントのダメージを、2回以上なら相手のカードを1枚破壊だ」

「つまり。合計1000ポイントダメージ+場のカード破壊……」

「場のカードは、2番目に伏せた魔法、罠ゾーンのカードを破壊させてもらうぜ」

自分 LP1200

「セットカードはリビングデット！ 発動してシャドール・リザードを復活。その後、リビングデットは破壊されシャドール・リザードも破壊」

「っと。確かそいつは……好きなシャドールを墓地に落とすカードか」

「落とすのは、シャドール・ドラゴン。ドラゴンは魔法、罠を破壊出来ます」

「なるほどな。だがどうする。俺のフィールドには破壊したいカードはよりどりみどりで」

「当然、銃砲撃！」

竜の影が罠を黒く染め、呑み込む。迷いなく破壊された銃砲撃にワンさんは嫌そうな顔をしている。

（エンタメデュエルじゃあ無いのか。確かにエンタメデュエルはフィールド魔法なのでサーチが出来る。だがそうだとしても銃砲撃が真っ先に選ばれたのには少しばかりの違和感がある。銃砲撃の効果を知らないって事は無いだろう。つまり、これはこのター

ン生き残る為の一手だ。このターンのみを考えた行動だ。次のターン。仕掛けてくるな、嬢ちゃんは)

エンタメデュエルの効果による手札の差、ライフのことも考えると長期戦を望む理由が無い。さっさと決めないと。

(手札の1枚は、大嵐の様な魔法、罫除去と見た。こりやあ伏せカードだけじゃあ安心出来ねえ。互いに手札の枚数は多いが、このまま長期戦になるまで長引けば、有利なのは俺。だとするとここは……)

銃砲撃を割った直後、少しだけ動きが止まったワンさんを見て唇を噛む。互いに考えているのは次のターンを見越した事。

「俺はここで、魔法カード、強欲で謙虚な壺を発動するぜ。デッキトップを3枚めくり、その中から好きな1枚を手札に加える。その代わり、このターン俺は特殊召喚出来ない」

「特殊召喚封じるカード……そんなカードが入ってるつてのは意外ですが」

「単純な問題だ。手札の質が欲しいのよ。2枚から選ぶ強欲より、3枚から選べる強欲で謙虚ってな。めくれた3枚はエンタメデュエル、キラートマト、オネストだ。オネストを手札に加えるぜ」

オネストは光属性に破格の戦闘能力を与える手札から発動するカード。サンド・ギャ

ンブラーは光属性。これで迂闊にサンド・ギャンブラーに攻撃が出来なくなった。

「オネスト。ふむ。……ギャンブルデッキかと思つてましたが」

「ん？ どういう意味だ。見ての通りだ。ギャンブルデッキさ。仕事つてのはどうしても重苦しくなつちまう。だから、まあ。遊びの心を忘れない為にこのデッキを使つてらんだよ」

「いや。まあ良いです。さあて、何もなくマスマティシヤンにサンド・ギャンブラーでぶつかつてくる——なんて事は無いでしょう？」

「そりやそうだ。手札から装備魔法。月鏡の盾！ これを装備したモンスターは、相手と戦闘する時にその攻撃力を100超える攻撃力を得る」

サンド・ギャンブラーが手元でクルクルと回すコインに月の紋章が浮かび上がる。そしてコインを握り込んだ手をマスマティシヤンに向けた。

「バトルだぜ」

弾かれたコインがマスマティシヤンの頭を貫く。

自分 LP1100

破壊された場所からは煙が上がり、1枚。裏向きのカードを映し出した。

「マスマティシヤンが戦闘破壊された時。カードを1枚ドロウします」

「OKだ。じゃあ、カードを3枚伏せる。ターンエンド」

エンタメデュエル。セカンド・チャンスに月鏡の盾。セットカード3枚。潤沢な魔法や罠でたった1枚のモンスターであるサンド・ギャンブラーを守っているワンさんのフィールド。手札には戦闘補助のオネススト。これを崩すカードは限られている。

「自分のターン！ さあ勝負です。大嵐を發動しますよ！」

巻き起こる大嵐。当然の様にワンはセットカードを發動する。

「させるかよ！ 罠カード——」

絶対に来るのは分かっていた。それに罠を合わせる。だが、こちらも發動に合わせてセットカードを發動した。

「神の宣告！」

「神の宣告！」

お互いの声が重なる。神達は互いの力で相殺され、呼び出した者に対価を支払わせるだけで消えてしまう。残るは嵐。フィールドの、全ての魔法と罠を吹き飛ばす。

自分 LP550

ワン LP2000

静かになったフィールドで、先に口を開いたのはワンさんだった。

「月鏡の盾には効果がある。破壊された時にライフを500支払い、墓地のこのカードをデッキの上か下に置く。俺は下に置くぜ」

ワン LP1500

「ずつと、こうなる事を狙ってた訳か」

「サンド・ギャンブラー攻撃表示でターンを返してきましたからね。それを罠で守るデッキ。ならこうなると思いました。だから、最初のターンから伏せていた神の宣告は使えませんでしたね」

「狙い済まされた一撃ってか。俺にはどうも苦手だぜ」

「そうですかね。でもまあ。撃てば当たるって物でも無いでしょう」

「そうだな。けど、それでも。撃たなきゃ当たらねえだろ？」

「いや、ホントに……そうですね。ワンさん、かなり面白いです。格好も含めて。さて、じゃあ。ここから行きますよ」

「おう！ 全力で来い！」

「では、再びマスマティシヤンを召喚！」

マスマティシヤン 攻撃力1500

「その効果で墓地に送るのは幻獣機オライオン。オライオンは墓地に送られた時に幻獣機トークンを特殊召喚出来る効果です」

幻獣機トークン 守備力0

「更に。このオライオンは墓地から除外する事で手札の幻獣機を召喚出来ます。召喚す

るのは幻獣機メガラプター」

幻獣機メガラプター 攻撃力1900

「バトルです!」

「なるほどな! 確かにあの宣告で大嵐を通す動きまでは想定していたが、ゲームを決める動きまでは無理だったか」

「分からないですよ? さあ、マスマティシャンでサンド・ギャンブラーに攻撃です!」
「仕方ねえ。その戦闘でオネストを発動だ。攻撃モンスターは攻撃力をサンド・ギャンブラーに加える!」

サンド・ギャンブラー 攻撃力1800

再び戦うことになったサンド・ギャンブラーとマスマティシャン。結果は変わらず、サンド・ギャンブラーの攻撃でマスマティシャンが墓地に送られることに。

自分 LP250

「マスマティシャンの効果でドロ! そのままメガラプターでサンド・ギャンブラーに攻撃! これが通れば……自分は生きてますね!」

空から急降下してくる戦闘機。放つミサイルを避ける素振りも見せずに、サンド・ギャンブラーはそれを受け入れ破壊される。

ワン LP1400

ここで初めてダメージが通った。痛みを感じているはずだが、その様子は全く無いと言いつけるほどにワンさんには変化が無い。

「……ふう。危険なカードは無しと。怖かった、正直怖かったです」

「こつちの台詞だぜ。リミッター解除が来るかと思っちゃった」

「ワンさんも怖かったんですか。気が合いますね」

「はっはっは。そうだな。嬢ちゃんとは気が合う様な感じがするぜ」

戦闘が終わり互いに安堵し、互いに笑う。これが危険なゲームで無ければと思う程に2人はこのデュエルが楽しく感じていた。

「では、カードを一枚セット。ターンエンドです」

「……ここだな。ここで俺が逆転のカードを引ければ」

カードを引く。静かに素早く。そして、ワンはドロートしたカードとは別のカードに手を掛けた。

「俺が召喚するのは……伝説の賭博師のカード」

レジェンド・ギャンブラー

帽子から着ているもの、全体が黒で統一された男。このカードもまたその名の通り、ギャンブルモンスターである。

伝説の賭博師 攻撃力500

「いつもなら俺もこんなカッコイイ服着てるんだぜ？ 今は理由あってコレだよ」

「理由って、アレですか。タニアさん？」

「鋭いな。タニアに会った時だ。服装を笑われた後、男ならしつかりとしろ。いい身体も持つてるんだからと着替えさせられてコレさ。でもお嬢さんの言う事聞かないのも悪いからな」

「なるほど。それでアマゾネススタイルに……同情します」

「よしてくれ。一応俺の意思でやってるんだ。そして——今からする事も俺の意思だ。」

まずは伝説の賭博師の効果！ 3回コイントスをするぜ。その瞬間、墓地の銃砲撃の効果を使う。2回以上のコイントスを行う時に除外する事で、結果を全て表が出た事にする効果だ。3回表の伝説の賭博師は、相手フィールドのモンスターを全て破壊出来る！

伝説の賭博師が現れた銃を慣れた手つきで手に取ると、間髪入れずに引き金を引く。打ち出された銃弾が戦闘機を狙い撃つが。

「幻獣機モンスターは、自分の場にトークンが存在する限り戦闘効果での破壊を免れます。よって、破壊されるのは幻獣機トークンのみです」

デコイに阻まれ、肝心の本体へは銃撃が通らない。結果メガラプターは場に残ったまま。伝説の賭博師の攻撃力は500ポイント。メガラプターは1900。その差は1400。丁度ワンの残っているライフポイントと同じ数字。

「……そんな効果があったのか。失敗だぜこりやあ」

「サンド・ギャンブラー読みで残したんですがね」

「いやあつぱれだ。もう俺に残す道は1つしか無い。思ったよりも子供だったか、確かにセブンスターズの1人を討ち取っただけはある」

言葉と共に、伝説の賭博師は1歩1歩と進む。それは戦闘をするという事。

「悪あがき。って言われても仕方ねえな。けどよ、これが俺のデュエルなんだ」

伝説の賭博師は、コインを取り出す。手元で弾き、飛ばすその瞬間。時が止まったような感覚に陥った。

（攻撃、した。自爆特攻……なのか）

止まったと思えるほどに長く感じたのだ。走馬灯が頭をかける時の様に。

（戦闘補助？ 光属性のサンド・ギャンブラーならまだしも、闇属性の伝説の賭博師で？）

コインが回転する。近づくにつれて回転数が上がる。

（収縮みたいなカード？ いや、思い浮かばない。なんだ、何か……）

それが当たる直前まで、考えた。そして直感に従う事にした。そう。

「畏！ 和睦の使者！ このターン自分が受ける戦闘ダメージを0にし、モンスターの戦闘破壊を防ぎます」

罨を発動してそれを防ぐ。戦闘が終わり、依然として場に残る伝説の賭博師が、その背後に見える女魔導師がその正しさを証明していた。

伝説の賭博師 攻撃力2500

手札が1枚消えて、攻撃力が2000ポイント上昇している伝説の賭博師。あのまま戦闘していれば。負けていたのは……

「——やるな」

「最後に思い出しました。持つてるとは思わないですし。それって、結構なレアカードでは？」

「そうだな。超が付くレアカードで、俺の幸運の女神様さ」

「幻想の見習い魔導師。閨属性、魔法使いの戦闘時に手札から捨てる事で、戦闘する魔法使いの攻撃力を2000ポイント上昇する。初めから——ワンさんのデッキ自体が。この勝ち方を狙ったデッキ、ですか」

「ご察しの通りだ。避けられたのは、嬢ちゃんで2人目。俺の伝説の賭博師は、狙った奴は逃がさない！　んだが……俺もまだまだか。カードを1枚伏せてターンエンド。さあ、終わってないぜデュエルは」

「自分のターン。終わらせませすよ。メガラプターを生贄に、邪帝ガイウスを召喚」
見慣れたモンスターが現れる。黒い甲冑に身を包んだ存在。

邪帝ガイウス 攻撃力2400

その効果は場のカードを1枚除外する能力。ワンのセットカードが、聖なるバリアーミラーフォースーがゲームから消え去る。

「決着。ですね」

フィールドに残るのは伝説の賭博師のみ。対抗する手段は無い。けど攻撃の宣言をしない自分に、ワンはトドメを刺せと手招きする。

「つ……話が」

自分はサレンダーしろなんて言った癖に……そう言いたかったが、相手は変わらずにコチラを見つめる。真っ直ぐな瞳に目を離せなくなつた自分は、ただそこから何かを感じた。だからそのまま、ただバトルフェイズに入った。

「バトルフェイズ。邪帝ガイウスで、伝説の賭博師に攻撃」

ガイウスからの魔法攻撃が放たれる。伝説の賭博師と共にライフポイントは0に。デュエルが終わり、倒れ込むその顔は満足げな表示だった。